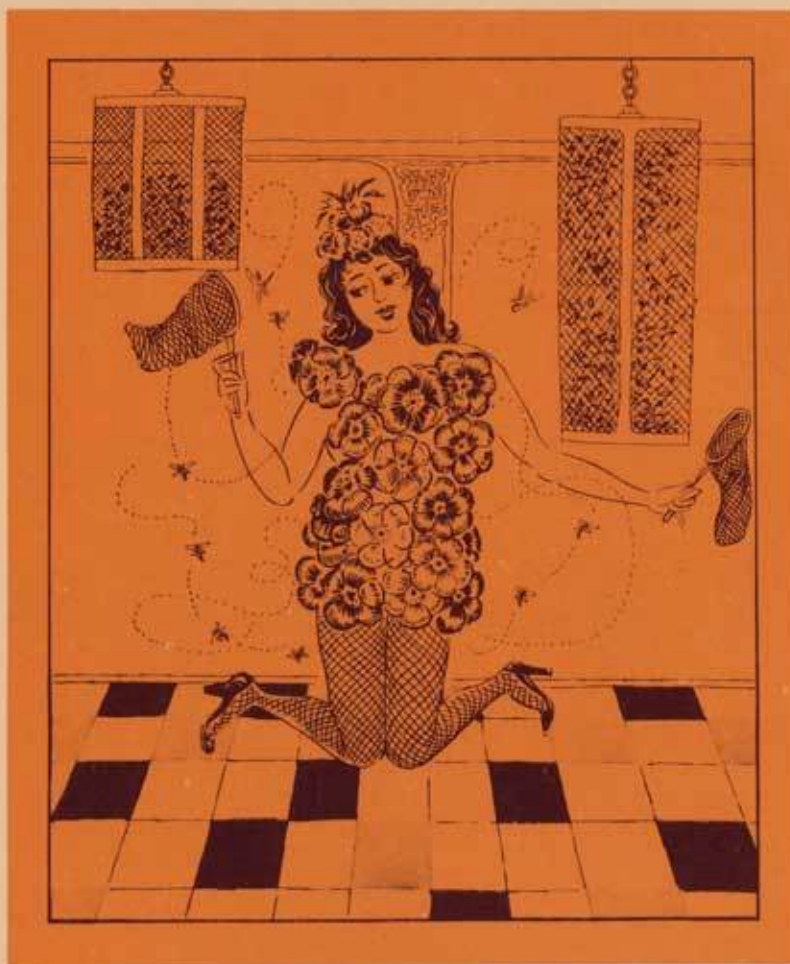


奇譚クラブ

新しい風俗文献誌



8月号

August-'68

奇譚クラブ 昭和四十三年八月号

奇譚クラブ 昭和四十三年八月号 定価三五〇円

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



定価三五〇円

8月号 Y 350

待望の特集遂に実現!

団鬼六作・長篇羞恥責小説

花と蛇

好評のS文学集大成

絶世の美女財閥遠藤家の令夫人静子が悪鬼たちの手によって誘拐される冒頭のシーンから美貌の探偵助手京子が単身敵地にのり込んで捕獲されるに至る前篇(38年8月号より連載)の発端より暴力団の本拠に妙齢の花嫁しき美女が次々と略取され、そこに展開される数々の汚辱と羞恥責の責を団鬼六先生の流暢な筆で描き尽された続篇(39年11月号より41年12月号まで)に至るまで一挙に登載。堂々四百数十頁に亘るサディズム文学の傑作を贈ります。この一冊によって「花と蛇」の書き出しから全部通して読むことが出来ます。四十年に亘って本誌に連載しSフアンに熱狂的な絶讃を浴びた小説「花と蛇」を是非お求め下さい。

団鬼六作「花と蛇」

収録内容見出し一覧

- 前篇
- 第一章 発端(静子令夫人誘拐された令夫人送られた着衣)
 - 第二章 陥穽(二度の嫌がらせ)
 - 第三章 美人探偵(落花紛々)
 - 第四章 洗腸図(強制屈伏)
 - 第五章 救援者(羞恥地獄観念の座)
 - 第六章 救援の失敗(逆転一瞬)
 - 第七章 好餌(京子の屈伏)
 - 第八章 悪魔の哄笑(毒牙は迫る)
 - 第九章 地下室(悪鬼の饗宴)
 - 第十章 翻弄(屈辱と羞恥)
 - 第十一章 蛇の執念(裸踊り)

- 第十二章 姉妹危し(屈辱の狼)
- 第十三章 調教師(遂に京子も)
- 第十四章 美津子受難(二人の)
- 第十五章 結末(美津子の屈伏)
- 第十六章 脱走の失敗(美津子の)
- 第十七章 華やかな饗宴(悪魔の)
- 第十八章 狂乱の静子夫人(鬼女の)
- 第十九章 地獄屋敷へ新顔(新たな)
- 第二十章 翻弄されるカップル(美少年と美少女)
- 第二十一章 一万円の身代金(正気づいた小夜子)
- 第二十二章 身代金奪取の失敗(小夜子の受難)
- 第二十三章 涙の宣誓文(美女と木馬)
- 第二十四章 恐怖の逆転劇(悪魔の)
- 第二十五章 狂乱の静子夫人(狂乱の)
- 第二十六章 奇妙な三々九度(鬼女の)
- 第二十七章 飼育される白い動物(美しき北者)
- 第二十八章 悪魔と悪女の悪業(恐ろしい仕事)
- 第二十九章 屈辱の地獄図(猫とねずみ)
- 第三十章 逃走の恐怖と失敗(猫とねずみ)
- 第三十一章 悪魔達の残忍な所業(朝の酒)
- 第三十二章 落花無残の修羅場(白いコンビー)
- 第三十三章 淫らな美女の調教(風の後)
- 第三十四章 さらまじいシヨ(展開)
- 第三十五章 汚水にまみれた宝石(流血)
- 第三十六章 華々しき美女の屈伏(難去り)
- 第三十七章 対峙する美女と美女(風に立つ)
- 第三十八章 あくどい陥穽(修羅図)
- 第三十九章 羞恥図絵の展開(復讐の生贄)

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第七集

山原清子 妖艶緊縛 刺青の魅力を探ぐる 写真集

頒価一部 一〇〇〇円(共) 略号「美7」

最近撮影の力作 未公開の秘蔵写真集 刺青の女王 山原清子の魅力の隅から隅までを抉り出し、その美しさを最高度に発揮した強烈な刺青女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄まじいポーズ満載)

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第八集

大塚啓子・鈴木晃子・山原清子

女斗と緊縛競艶写真特集

一部 一〇〇〇円 略号「美8」

「女性対女性」の激しい女斗美の躍動! 女性が女性を縛る緊縛プレイの写真化動きのある相互縛り場面の美しい展開

◎フアンの要望に応じて特に作成した女性対女性の女斗美、女斗場面並に女性同志の緊縛場面を若々しい三人の女性によって力いっぱい演技してもらった躍動的フォト集。

限定版 写真集 **美しき縛しめ** 第九集

山原清子 妖艶緊縛 革具に拘束される女 写真集

モデル 清楚な美女乃々子 革具の美しさを最高度に発揮した強烈な革具女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄まじいポーズ満載)

「女性刑罰拷問特集」 西洋篇

モデル 清楚な美女乃々子 革具の美しさを最高度に発揮した強烈な革具女体緊縛フォト結集版(思わず息をのむ凄まじいポーズ満載)

限定版 グラビア印刷 M 結集アルバム

M フォト・女王様に飼育される日々

頒価一部 一〇五〇円(送50円) 略号「M特」

全頁七十三葉のM傾向ばかりのグラビア写真

待望久しくして初めて刊行されたM派ばかりの限定版M写真集です。今までMモデル募集に応募してきたM男性モデルを網羅し、それらのM男性が色々の女王様に奉仕し飼育される生態のかずかずを豊富な写真資料によってマニアの

「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 極鮮明焼付)

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚	五〇〇円
十組十枚	一〇〇〇円
二十組二十枚	一八〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

- 1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
- 2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
- 3 襲う影に慄のく (佐々木真弓)
- 4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
- 5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
- 6 縛られて困るわ (金原奈加子)
- 7 私を襲わないで (左近麻里子)
- 8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
- 9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
- 10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
- 11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

- 12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
- 13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
- 14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
- 15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
- 16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
- 17 何故私を縛るの (金原奈加子)
- 18 感泣する胴縛り (ローズ秋山)
- 19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)
- 20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
- 21 足指はくの字に (佐々木真弓)
- 22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
- 23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
- 24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
- 25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
- 26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
- 27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
- 28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
- 29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
- 30 出脛を晒す縛り (佐々木真弓)
- 31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
- 32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
- 33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
- 34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
- 35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
- 36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
- 37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

- 38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
- 39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
- 40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
- 41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
- 42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
- 43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
- 44 私は縛りが好き (金原奈加子)
- 45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
- 46 麗身を横たえて (左近麻里子)
- 47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
- 48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)
- 49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
- 50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
- 51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
- 52 突き出した尻 (中河 恵子)
- 53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
- 54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)
- 55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
- 56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
- 57 海老縛りで悶 (関谷富佐子)
- 58 縛られる緊縛女 (長井葉津子)
- 59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
- 60 もう虐めないで (金原奈加子)
- 61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
- 62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
- 63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
- 64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
- 65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
- 66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
- 67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
- 68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

- 69 美体は縄に映る (中河 恵子)
- 70 遅まきき臀部晒 (左近麻里子)
- 71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
- 72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
- 73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
- 74 捧げられる女体 (中河 恵子)
- 75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
- 76 麗わしの肌を縄 (佐々木真弓)
- 77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
- 78 開股の股間縛り (大島 照代)
- 79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
- 80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
- 81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)
- 82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
- 83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
- 84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)
- 85 投げ出された裸 (金原奈加子)
- 86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
- 87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
- 88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
- 89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
- 90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
- 91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
- 92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
- 93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
- 94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
- 95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
- 96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
- 97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
- 98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
- 99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
- 100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

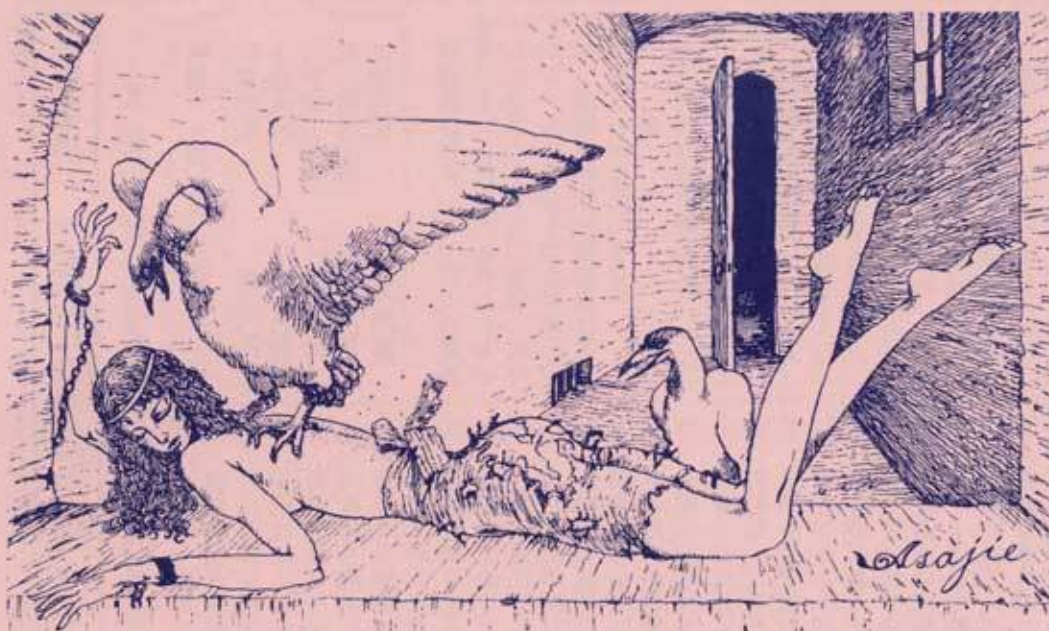
奇譚クラブ

△第三卷第九号・通刊第二四三号△

(昭和四十三年) 八月号 目次

〈本文〉

本誌自粛の徹底	編集部	(9)
SMカメラ・ハント	辻村	降
『魔子の呻く夜』	奇藤	夜居
晴雨の家	黒井	珍平
SMきれぎれ帖	香川	泳三
読切Fストーリー	陸月笛一郎	
「白い陶器」	白鳥	大蔵
随想「人形の家」	原	砂土
連載時代伝奇小説 緋縮緬地獄 (第四回)	田代	俊夫
吹寄せSMアラレ	佐藤	正俊
漫談千一夜物語 「薔薇と蜜蜂」	斎藤	夜居
云いたい放題 「わが不満」	丸鬼土	佐渡
探奇考料 「観相学極秘伝色相相法」	沢瀉	しの
惨酷人間の世界		
懸賞入選作品 理恵女献身 (第四回)		



奇クサロン

編集部構成 (233)

私は何を望むか	天道	公平
サロン楽我記 (第五十回)	辻村	隆
旧新ませたアンバランスの味	マニア	天狗
イメージ画「耐久力テスト」	春川	ナミオ
偏執の思い出	頼野	史郎
告白「独りだけのカン腸ブレイ」	大川	恵子
イメージ画「間者発見」	新井	伸治
ある休日「縄の下着」	安井	喜久子
短歌「陶酔」	高村	初子
「俺にも一言」所感	太田	三郎
山上提案への批判	原	砂土
編集部だより	編	集
僕のイメージ画集「無題」	室井	亜砂路
緊縛と妊婦の資料提供	木戸	悦子
「Mの歌」腎下にあえぐ	並川	新一
イメージ画「香水原料採取機」	MUTSU	三郎
発見「妻との会話」	小谷	三郎
奇クに思う「ないものねだり」	牧	十郎
映画通信「極秘女拷問」	沢瀉	しの
イメージ画「私のベット」	柿	比良
映画の女相撲に思う	雄松	比良
イメージ画「優勝決定戦」	T	生
カメラ・ハントに望む	花見	京太
イメージ画「へんな強盗」	菊地	明彦
「流腸レポ」瞑想	菊地	明彦
「プレイ随想」責め具	早木	夢二
笹船は帆を降ろせ	和	恵
SMマンガ「駄目ねえ」	萩野	和
「羨しいわね」	九美	淳

告白 私と浣腸

訪欧土産 青い星 (SILVIA)	中野	昭子
濡れにぞ濡れし 勝手な話	佐野	寿
懸賞入選作品 「偉魔羅木縁起」	芳野	眉美
飲み食ベシリーズ M的飲食物考現学	深井	春朗
浄瑠璃と切腹の美学	津川	博
映画ハント痴人の愛	中康	弘通
創作「ぶるう・すたあ」	久保正	登志
かずひこのノート	花影	叢
鬼六談義 「残酷な話」	とやま	かずひこ
あぶ・らぶす・こんと	団	鬼六
女武者討死ストーリー 「女賤ガ岳」	水沢	登
妻を縛らせるの記	川上	米子
美人モデル募集読者コンテスト中間発表	風流極道軒	
浣腸実験委員の報告	立川	令子
続・Mの歌 「鏡の中のおんな」	井風呂	秋於
連載小説 「花と蛇」 (続編第四十五回)	団	鬼六
ある狂執者の犯罪 「水蜜桃」	佐原陽	一郎
読者通信	編集部	選
(目次カット「レダとS白鳥」)	室井	亜砂路

☆新しい女性の華麗な責めフォト紹介

最近の誌上を賑わした美しい女性達の惚々とする素晴らしい緊縛体と責めの喘ぐ悦びムード溢れる映画紙焼付の極めて鮮明なる写真をマニアのために提供します。

全裸後手柔肌縛り

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 四〇〇円
垢ぬけした近代的フェイスイスを保持し、伸びやかな全裸の肢体に、後手の縄目がむごたらしく絡む。

乳房強烈膨隆責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 四〇〇円
すべすべとした丸味を持つ乳房を上下左右から締め上げてむくむくと盛り上げた後手縛りの全裸。

海老責めに苦悶す

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 四〇〇円
長身の柔軟な肢体は、無防備な裸身によって重ね餅となり、顔で仰ぐ身を晒したまま美貌の顔で仰ぐ。

全裸の全身を晒す

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 四〇〇円
高々と後手を背中に掲げて縛られた均整のとれた裸身は、その全身を晒して惚々とする眺めだ。

煙草責めに喘ぐ女

大手札二枚 一組 略号 三〇〇円
佐々木真弓 略号 三〇〇円
身動きの出来ない後手縛りで美しい裸身を曝した女に火のついた煙草をくわえさせて責める。

麗姿に映える光彩

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 四〇〇円
強烈なトップライトに浮かび上がった縛られた全裸身は、素晴らしい美しさで輝くように映えている。

臀部強調後手縛り

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 四〇〇円
笑窪をもった豊かな臀部をこれみよがしに突き出させられて後手縛りの女体は、いたくはにかむ。

羞恥に悶える全裸

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 四〇〇円
膝頭が口に届くまで二つ折りに縛られた女体は、その無防備を羞らって足指先をくの字に曲げる。

ホステスの緊縛体

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 四〇〇円
全裸で後手に縛られた女体を晒してホステス稼業の微笑を洩らした美しい表情と肢体を捧げる。

二つ折りで責める

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
佐々木真弓 略号 四〇〇円
後手縛りの縄と膝頭とを連絡して二つ折りとした女体の流し目の表情と反りかえった足指の表情。

脈打つ全裸臨月腹

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 四〇〇円
月満ちた便々たる妊婦腹が麻縄できつく締め上げられて怒張した血管がドキドキと脈打っている。

革紐の臨月股間縛

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 四〇〇円
まんまるく膨れ上がった臨月腹の中央を皮紐が股間縛りとなつて締めつける臨月妊婦責めの醍醐味。

猿轡の臨月妊婦腹

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
中河恵子 略号 四〇〇円
豆絞りの猿轡を噛まされた臨月の妊婦は、厳しい麻縄縛りで大きく喘ぎつつ被虐の境地に浸る。

卓上の股間しばり

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 四〇〇円
テーブルの上に置かれた股間縛りの人形は、どのような動いても豊満な臀部をさらけ出すのだ。

羞恥の足挙げ責め

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 四〇〇円
豆絞りの猿轡を柱に縛られ

た女体は固く閉じた足首を縄で柱に吊り上げられて羞恥に悶える。

悦虐責めの終着駅

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 四〇〇円
身動き出来ない後手縛りで両足の首には、それぞれ縄を掛けられて思いきり左右に引っ張ってさんざんにいたぶられた挙句の果て。

片足挙げで鞭打ち

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 四〇〇円
片足を張り裂けるばかりに引き上げてムチで責めた新しいフォト。

柔肌に答は弾ける

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
関谷富佐子 略号 四〇〇円
真白い柔肌に実際に力まかせにムチを揮って、その時の全身の表情をストロボにてキャッチした。

あぐら縛りで観賞

大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 四〇〇円
鬼六先生の趣向で全裸の麻里子をアグラに坐らせて縛りあげた鬼六対談の際のプレイフォト。

対談用に縛られる

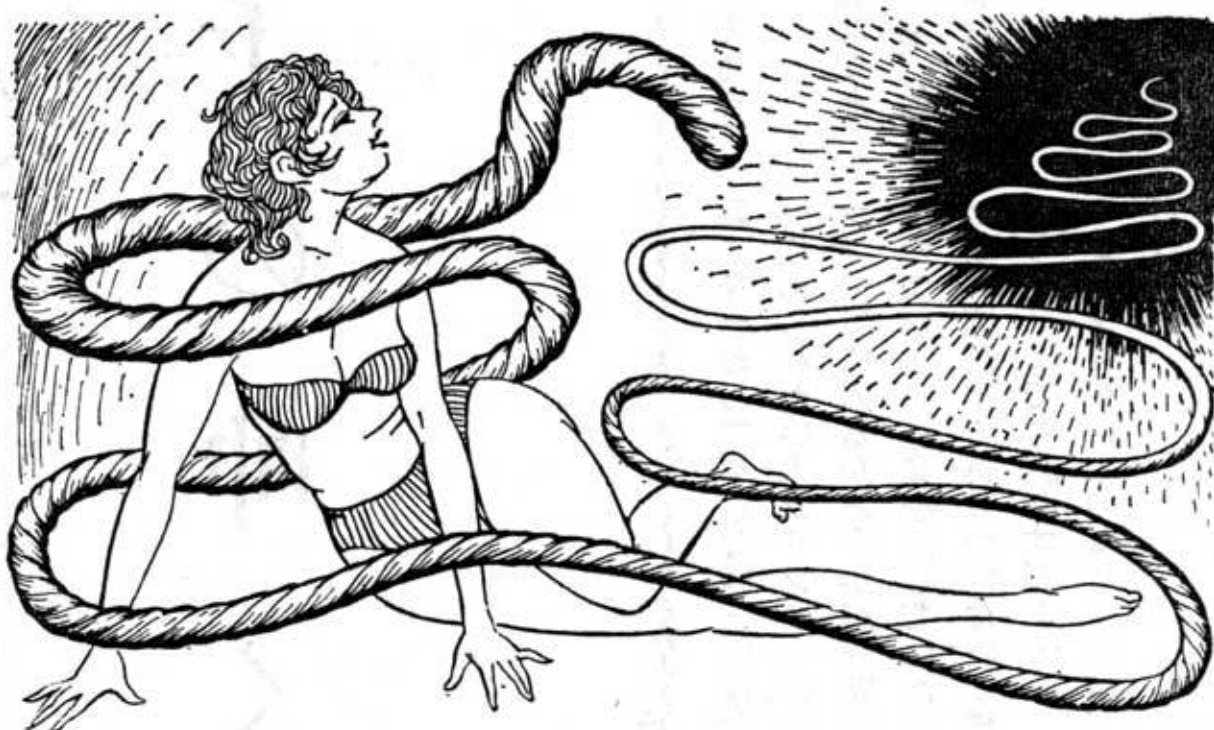
大手札三枚 一組 略号 四〇〇円
左近麻里子 略号 四〇〇円
二者対談のあとで二人によって縛られる左近嬢の肢体をスナップした珍しい緊縛フォト。

◎お申込みは大阪阿倍野局私書箱第十四号箕田京二宛へ願います。

奇 譚 ク ラ ブ

昭和 43 年 8 月 号

(1968年・8月号<第22巻第9号・通刊第243号>)



本誌自粛の徹底

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺戟の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。

S M カメラ・ハント
―― 薊魔子の巻 ――

魔子の呻く夜

辻村 隆

「マコ無性に虐めたくて仕方ないの。先生そんな人いない？」

会うなり、のつけから、こんな物騒なことを平然と言う。レストランの二階特別室。最初の呼び名がくせになって、マコの場合、私を辻村さんとおじさんとも呼ばず、先生という。悪い気もしないが、尻こそばゆいところもある。何しろエリートを以て任じているから、このレストランにしても、わざわざサービス料のいる二階へ上る。古い交際だから私はかなり彼女の性格は知っている。兎も角

調子を合わせてやらないといけない。

「虐められたい人はワンサといるさ。しかしマコの気に入るかどうかが問題だ。マコのようにむつかしい注文を出していたら、そうそうMの人間だって寄りつけない。誰でもよかつたら明日にでも紹介するよ」

「ロマンズグレーのおじさんが、いいんだけどなあ」

「お金があって、身だしなみがよくて」

「マコの奴隷になってくれる人」

「生憎だよ、私ならどう？」

「ダメ。あんなムサクルシイ、ズボン下はいてたらあかんワ」

マコは洋画かぶれしているのだ。冬でも色もののパンティ一枚とか、スカットしたメンズウェアのウインドウから抜け出したような下着をつけていないと、気にいらならしい。私もその点、落第であったが、縛ってやるつもりでかかって、いつもMにされてしまふ。それが自称、魔子の妖しい魅力なんだろう。マコだけじゃ名前だけで、苗字は何というのと聞いてやったら、暫らく考えてか



ら、

「そうね、どうしよう。緑魔子もあるし、三条魔子もあるし、そうだとワタシの苗字のインシャルがAだから、花の名前をつけて、あざみマコってどう？」

「ピッタリだ。正に鬼薙ってところだ」

つい調子にのっていったら、抓られた。

本名はマサコであるが、彼女自身サを抜いてマコと呼んで貰いたがる。それで薙（あざみ）マコと命名した次第。いかにもマコらしい感じが出ていて妙だ。

「語呂もいいわ。どう、いいでしょう。私、気に入っちゃった」

と一人で喜こんでいる。

か相手にしなくても不自由していないんですよ」

「ああ、全然、不自由していないね」

「憎らしい、判っきり仰有るのネ。エチケツト知らないの」

「到ってバーバリストだからね。しかしマコがその気になれば、話は別だ。何しろ三年間お預けをくっているからね」

「先生はSMのプレイのオーソリテイでしょう。だから先生に頼めば、虐めてほしい希望者あるかと思って」

「虐めたいのはワンサと知っているがね、少々お門違いだよ」

しかしウラ若い妙麗の、抜群の美女の紅唇

「それで、私をわざわざ呼び出したのは、その虐めて欲しいという希望者を提供してくれっていうこと？」

「そうよ、センセエに余り用はないの」

「判っきり、してやがる。一度、思いきり虐めたくなつたよ、マコを——」

から、SMプレイなんて言葉が飛び出すと、妙に心楽しい弾んだ気持ちになってくる。同好のよしみという処か。何でも知ろう、聞こうという、彼女のどん欲なまでの知識欲をいいことに、プレイ用語を一通り教えてやり、百聞は一見にしかずと、ホテルへ誘って、実地指導してやったら、すっかり乗ってきたのだから、面白い娘もいるものだ。

或いはMになり、Sになって、微にいり細にわたって、誇張をふくめて実技とくると、愉快きわまりなしである。いう通りに縛られSの場に於ては、私にハルンを浴びせ、馬乗りになり、顔を圧迫して得々としていた。SMめいた本も読んでいて、彼女それでひとかどの「通」になったつもりでいる。恰度、大学に在校当時だから、彼女の将来や、時限を考えて、フオトは遠慮し、単なるプレイに終っていたのであった。彼女の実社会の実験のつもりから、私も約束上、箕田編集長にも連絡して、Mの男性を数人紹介してやったが、彼女の高望みが禍してか余り長続きしない。東京のY氏が比較的マコとの交渉が長かったが、マコの要求も、形を変えた一種のS的な潜在の現われではなかったであろうか。

つかず離れずの、偶にお互い気が向けば会

うという三年がつづいていたのであった。

「それでマコ、急に又、どうして虐めたくなつたの？ 何かあったんだね」

「生理的要求よ、ひとつはネ。も一つは現在シケているから。そして最後の一つは、パパと喧嘩して家を飛び出しちゃったからなの。」

ムシャクシャしているから、パーアッと何かでそのムシャクシャを発散したいのよ。分ってくれる？」

「あーあ、どうも手に負えぬ、じゃじゃ馬娘であるぞヨ」

「じゃじゃ馬馴らしは、先生おてのものでしょ。馴らしてみる？」

「馴らしてみたいね。雁字搦目に縛り上げて悲鳴もあげられぬよう猿轡をはめて、マコのお尻ピシピシ叩いたらスツとするだろうな」

「いいわ、やらしたげる。その代り、そのあとで先生をワタシの奴隷にして、思いきり虐めて差し上げる交換条件ならね」

「又、前みたいに、私の責める方が三分で、あとの七分は私を虐める方へ廻るつもり」

「五分五分でもいいわ」

「よしッ、条件を呑もう。早速ゆくか」

「ダメ。残念乍ら只今アンネ期間中」

「ウソツケ、そんな顔じゃない」

「ワタシ、アンネ中は異常に気持が昂ぶるのよ。先生、呼び出したのもヒョットしたら、それでかも知れないわ」

「じゃあ仕方ない。泣き泣き帰るとするか」
「先生の条件のむ代り、Mの男性つれてきてね。きつとよ」

「ああ、よしよし。いい人があればね」
マコに手玉に取られている様で、中ッ腹で席を立つ。

「あさってでアンネ終り。だから三日後の、この時間、この場所で、いい？」

「分るものか」

「イヤーン、怒っちゃ。いうこときくわ」

「きつとだな」

「ウン」

「じゃあ、カメラ・ハント書くからな。マコの希望を入れて、三年間、我慢してきたんだから。私が紹介した山本章が、あっさりマコのこと書いてしまったよ。私は約束守って書かなかったけど」

「あの時、そんなカメラ・ルポを書く人なんて知らなかったもの。あとで文句云うつもりだったのに、その後、あの人ウンともスンともいって来ないわ」

「相変らず、新しい人をせっせと撮っている

よ」

「山本さん、紳士でおとなしそうに見えていたけど案外、人って見掛けによらないのネ。飽き性なのかしら。その点、先生は見掛けはドン・ファンみたいだけど、何処か誠実なところあるわヨ。ワタシに褒めてもらっても仕方ないでしょうけど」

「しかし、山本章もカメラ・ルポに出したマコの写真、全然顔が分らなかったよ」

「当り前よ。判っきり出していたら断然抗議するわ。だってワタシに無断であんなこと書いたんですもの。悪く書いてなかったけど」

「彼とも時々会うけど、何かいうことでもあれば伝えておこうか」

「いいわ、今更。でも本当はもう一度会ってみたい気もするわネ。あの人Sオンリイかと思ったら、M気もチョッピリあるのよ。知らないでしょ、そんなこと。少し虐めて差し上げたの。かなりハッスルしててよ」

「マコに虐められたら誰だってハッスルするさ、ホラ、例のあのプレイされたら……」

「いわないで、エッチ！」

「ホホウ、いったね。エッチでない男がいたらお眼にかかりたいね。男なんて、環境と相手次第で、すべてエッチになる要素をもって



いるんだ。エッチを發揮出来ない男なんて、オトコじゃないね、私にいわせれば」

ズケズケとこんなくだらないハナシが出来るから、マコと一緒にいる時は何となく心優しいのだ。私もマコも、お互いにズケズケと喋べり、言いたい放題をいっても、三年間という歳月が、すっかりお互いを知り尽していたのである。

甘えたり、無理をいったり、イッパシSの女王ぶったりするのが、奇妙に私には嬉しいのだった。マコを縛ったこともあり、縛られたこともあり、プレイを通して、相手の体の隅々まで知っている仲である。そろそろ忘れかけた頃に、何となく掛けてくるマコの電話

が、呼出しが、私にとっては忙中閑の、一服の清涼剤にもなっていた。我儘ばかりにっている癖に、妙に憎めなかった。私の正体を知り乍ら交際し、それでいて自分自身のこととは書かせなかったのである。

魔子のことは、既に過去数回、楽我記でも書き、彼女自身も私の奨めで、短い呼び掛けを書いたりした。それでいて誰も魔子の顔を知らない。正体も知らない——この私も。山本章氏が、私に魔子のカメラ・ルポを書きたいという諒解を求めてきた時も、私はマコとの約束上、眼隠しで顔は伏せておく様にたのんだのである。

女子大生だったあの当時の魔子も、今は大卒を卒業している。何をして、どうやって生活しているのかという事も知らない。考えてみれば、謎に包まれた女性だった。唯、彼女が京都のかなり上流家庭の娘である事だけは想像出来た。私を先生と呼ぶのも、一つは彼女の賢明さが、そう呼ばしめたのであろう。何かの折、彼女の家へ電話する時、お手伝さ

んが出て、お嬢さまに伝えて参りますと云う。私は彼女の家には於ては、何かの先生になっていたのである。それが、家を出る口実となつて使われていたのだ。

先生——。その言葉は何と都合のよい響きをもっていることだろう。

何ぞ知らん、その先生が、マコにSの味を覚えさせ、Mの性格を綿々と教えているのだから世話はない。

マコは私の「カメラ・ハント」をよく読んで知っていた。何処で買うのか、何処で読むのか、それも云わない。或いは「カメラ・ハント」を読む事は、自分の行状が記事にされないかどうかを確かめるだけのことであつたかも知れないが——。

現実に戻ろう。エッチ談義迄話したつけ。

「本当に書く気？ ワタシのこと」

「ああ、書きたいね。三年間、我慢してきたが、ウズウズしている」

「いいわ、書いても。でも余り正直に本当のこと何もかも書かないでね」

「勿論だとも、安心していいよ」

「もし、それでワタシのフォトが出て、何かあった時、責任もってくれはる？」

「持つとも。何でも持つよ」



「カロラ」

「こわいなあ、免許取り立てなんだから」

「大丈夫。もう六千キロ走って、無事故よ」

「それくらいで事故があったら堪らない。仕方ない生命保険でもかけてくるか」

私達は河原町で別れた。

× ×

「車何処に置いてあるの？」

「四条河原町の高島屋の駐車場」

「ウン、ここから近くていいや」

「買物はいくらでもいいのよ。魔子のために先生、何か買ってえ」

「高い駐車料につくよ。仕方ない、ロープ二

三本と浣腸器でも買うとするか」

「イヤーン、ばか。イヤリングぐらいで我慢しとくわ」

五月初旬の週日、背広姿ではジットリと汗ばむ陽気。カロラの助手席に坐って運命をマコに託す。案外ばかにしたものでない。

混雑する河原町を巧みに縫って、五条通りへ出る。

「センサー、何処へゆきましょう？」

「ああ、どこでもいいよ」

「琵琶湖一周しようか。月の出峠辺りの眺め素晴らしいわよ。ガソリン代出してくれなんてミミッチいこといわないから……」

「プレイどうなるの？」

「あら、するつもり」

「だから、遥々とやってきた」

「あの時はそんな気持になってたけど、今はモヤモヤが晴れて、スウツとした気持。やっぱりやるのね」

「やっぱりとはひどい。今日は雁字搦目に縛り上げて、ヒイヒイ泣かせてやるつもりでしたのさ」

「張切りすぎると糖尿によくないわよ。まあいいわ。じゃあ覚悟をきめたって。それでセンサー約束通りのMの人誰かいてはったの」

「ああ、いてはった。三重県松坂の住人で自動車会社の重役さん。電話したら、すぐにでも虐めてほしいそうさ。マコの家へ電話するよう伝えておいたよ」

車は山料から大津へ向っている。

「どんなことしたら喜ぶ人？」

「手錠をはめて、首輪をはめ、犬の様に扱ってほしいそうさ。マコの味付けしたものをシヤブリたいんだって」

「いいわ、清水の舞台から飛び降りちゃおうと。本当いうとね、毎月毎月、先生のハント読んできるとね、ワタシもその仲間に入れて欲しくなってきたの。自分のことを読むの楽しいものだわ。どんな風に書かれたかってね」

「じゃあ、きめた。三日目にここで会おう。

古いフオトもあるけど、三日後のプレイの分を使おう。いいね。その時になって泣くなよ」

「ああ、泣かない、泣かない」

「今日は兎も角、帰るよ。仕事も放ったままだから」

「今度来る時、電車でおいでなさいよ。ワタシの車で運転して差し上げますわ」

「買ったの？」

「それから——」

「のみたいって……」

「いいわ、差上げる。その外は？」

「顔にお尻をのせてギューギュー虐めて欲しいって」

「得意中の得意よ。何ならクリップや針も使ってあげてサービスしてあげる」

「その言葉きいたら随喜の涙を流すよ」

「あーあ、縛られると思うとウンザリするなあ。いっそセンサーいじめたげましようか」

「今日はその反対の約束、観念して私にくられてしまえ」

S 気八分にM 気チョッピリのマコにとっては、これからのプレイは大いに心が重い様子である。ホテルへ入ってから出たとこ勝負で又ぞろ私がM化されるかも知れぬが、その時はその時のことだ。マコの術中に陥らぬよう、うまくリードしないとイケない。

「そうだわ、雄琴の、どこか温泉へゆきましようか。U 閣のレークサイドホテルの方なんか素晴らしいですよ」

「ああ、いいよ。すぐだろう」

「三十分ぐらいかしら」

「予約なしでゆけるかね」

「今、午後三時に少し前だから、夕食をたべ

て夜帰ればいいのよ。週日だから大丈夫よ」

「何なら泊ってゆくか」

「又、不良なことという。ダメよ帰らなくちゃワタシのおうちが、とてもきびしい、きびしい」

「何でもいいから、やってくれ」

サングラスの眸が、いたずらっぽく笑って



いる。半袖の真赤なセーターに、白いミニスカートのいで立ちは颯爽たるもの。無難作にウェーブさせた豊かな黒髪をヘヤバンドで押さえている。時速七十キロぐらいで国道一六号線を快適に飛ばしてゆくマコのポーズは現代娘の象徴である。このじゃじゃ馬娘を縛って思い切り虐める時の、じーんと痺れるような快楽を想像して、私の胸は急速に弾んでゆく。さりげなく雄琴温泉を指定したが、彼女には、既に計算された行動のように思われた。市井のアベックホテルを忌避して、湖畔のいで湯を選ぶあたり、やはりマコにはセンサーがあった。しかし私の懐は、又ぞろ予算オーバーで、しばらくはしめり勝ちになることであろう。

× × ×

「ああ、いいお湯。先生、早くつかっていらっしやいよ」

硝子障子を開くと、じかにびわ湖の波がヒタヒタと打ち寄せている。湖上を渡る薫風がじっとり汗ばんだ肌に快い。

マコは温泉のネームの入った浴衣をぎこちなく着込んで、ブラシで髪を梳いていた。

「お化粧直すから早く入っていらっしやい。一緒に入ってくると思ったのに」



「ウン、入り損ねてしまった」

温泉の女中さんに交渉している間にささとマコは一人で大浴場へ行ってきたらしい。

家族風呂も備わった部屋だが、湯の溢れる大浴槽がお気に召したのか。未練がましく、

「この部屋の風呂へ一緒に入るつもりだったのに——」

「こんなチツポケな家族風呂なら、ワタシのお家の方が大きいくらいだわ。やはり温泉は大きなお風呂へ入らなくちゃ意味ないわ」

味もそっけもない返事をする、三面鏡を開いて腰を据える。私は、その湯上りのほてった肌に、しばらく見とれていた。

「いやよ先生、女の化粧なんかみているものじゃないわ。さあ早く入っていらっしゃい」

すべてリードしているとマコの気嫌がよいのであった。時間や予算の面などは勿論、私の考慮なども全然無視してしまって、自分のしたいように振舞うのである。M男性許りを相手にしているSの女王振りが、いつしかすっかり板についてしまっている。それを教え込んだ私自身すら、マコのペースにはまり込んでいるのだった。男性を日頃、奴隷視していると、こうしたプレイを前提とした時にはすぐその嬌慢さが顔を出すものとみえる。所詮はSの持味をすっかり身につけた女性の、

それはいかにも自然な態度であった。私の思惑なんかでんで念頭にはないらしい様子であった。

私は苦笑して、やおら立ち上る。まるで追い出されるみたいな恰好だ。

過去、プレイの時はいつも一緒に入浴し、背を洗ってやる時もあるし、浴場内でのプレイもしばしばの仲である。その馴々しさが、

反ってマコを気尽に振舞わせたのかも知れない。

湖をへだてて、近江富士と称される三上山をのぞむ景観は素晴らしかった。眼下にまで陽の光に映えたさざなみが、金波、銀波となってくだけていた。未だこの辺りはビワ湖のほんの尻尾の辺りである。左手に霞むびわ湖大橋の彼方には、洋々たる大湖が果てしもなく広がっている。ひろびろとした湯槽にひたって、のびのびと手足を伸ばす。週日と時間が早いのか、大浴場は私一人で勿体ない程であった。マコの運転でかなり緊張した肩の凝りが、やんわりとほぐれる思いである。

浴用のため加熱したアルカリ泉は、時々思いついたように痛む私の神経痛などにも効果があるらしいとのことであった。

冬ならば鴨スキ、夏ならば鮎カキなど有名なこのいで湯の里も、新緑の候の今、湖魚の料理に頼るしかなかった。

食事は午後六時に頼んであるので、それまで二時間以上、たつぷりとプレイの時間がある。今日のこの願ってもないチャンスに、私はマコとのプレイの構想をあれこれ頭に描いてみたい。オーソドックスな緊縛ならフオートはとらないが、過去数回、重ねている。マ

コの気の変らないうちに素晴らしいプレイフ
オトをものにしなければならぬ。一度マコ
を吊ってみたいと思うが、このホテルの部屋
の構造も、例にもれずそれにはふさわしくな
かった。縄は三本許り準備してきたが、それ
だけである。ローソクや浣腸器も思ったが
それは到底マコが許容しそうにないので、荷
物になるので持参しなかったのである。フオ
ト用の体裁だけの緊縛では面白くない。多少
時間をかけても、本縛りに縛り上げて、この
際マコの被虐の想念を燃え上らさねば、わざ
わざ湖畔のいで湯に足を運んだ甲斐がないと
いうものである。遮二無二目的に向って邁進
しなければ、男がスタルといった悲愴な気持
にかり立てられる。

部屋に戻るとマコの姿が見当らなかった。

キョロキョロしている私の肩を、

「ワッ！」

叩いた背の手に、振返ると、私は思わず呀
っと息をのむ思いであった。

この日のプレイのために、わざわざ持参し
たのであろうか、肌にピッタリと吸いつくよ
うに寸法の合った、バレーなどの踊り子のつ
ける黒の肌着一枚きりで、すくくとポーズを
つくって立っていた。いずれ何か名前がある

のだろうが、この海水着に似た下着の名称を
私は寡聞にして知らない。素肌にじかに着け
たのかパンティのふくらみもなく、股は切れ
上り、バストは形よく盛り上って、心をそそ
るような膨らみを示していた。自からの女体
を、最も美しく見せるコツを彼女は心得てい
る様であった。

シナをつくると、ニッと彼女は妖精に似た
媚笑を私に送った。

「どう、似合う？」

「ウン、素晴らしい」

マコは一寸首をかしげて、両手をうなじに
やってポーズをとり、形をかえて胸で手を組
んで見る。左中指の真珠の指輪が白く鈍く光
る。

一変してコケティッシュになった魔子に、

私は眩しい視線を送った。

「バレーのおけいこ着よ」

「そうだろうね、やっとなるの？」

「週に二回レッスンがあるの。余りうまくな
らないけど」

「発表会には何を描いても飛んでゆくよ」

「マコ下手だぞうって、前の席から弥次るん
でしょ」

「この姿に普通はタイツを穿くんだろう？」

「そうよ。幾らなんでもこれじゃねえ、透け
て見えるもの。アア、本当に見えてるの？」
私の視線がデルタに走ったものだから、あ
わてて彼女は両手で押さえた。黒に黒――。
何が見えるものか。しかし、全裸より反って
羞恥があった。

「約束通り、縛って……少々きつてもいい
わ」

「この上から？」

「そうよ」

「ハダカにならないの？」

「いずれなるわよ。私、この姿で縛られたフ
オト欲しいの。今度会う時までには作っておい
てね。さあ、はやく」

せかされて私は、あわてて靴からゾロゾロ
とロープをとり出す。何もかもすべて、マコ
の意志通りに動いている有様であった。

「じゃあ、最初は前手縛りでゆくよ」

「いいから、いいから。口上抜きで早く縛っ
ちゃいな」

他人事のようにマコはいつて突っ立ってい
る。縛るのを請求された娘は稀だ。近來この
娘ぐらいだろうか。何もかも積極的な、彼女
の性格が現われている。立膝のポーズで膝の
上の両手を組ませると、先ず両手を縛って、

その縄で膝ごとぐるぐる巻きに縛り上げる。別の縄で、二の腕をしめてウエストに巻く。緊縛と呼べない縛り方であったが、一風変わったポーズが出来上がった。

「先生、この頃よく慌てる。とり損なっているから、落着いて美しくとってね。モデルの方は大協力しているんだから」

嬌慢な言葉を吐いて、ケロツとしているのだ。腹の立つようなことをいわれても、私は何故かマコが憎めない。

「ああ、充分落ち着いて撮るよ」

×接点を確かめ、露出計で計算し、絞り8シャッター60分の1のストロボ装填を終ってカメラを構える。刹那、マコの表情に哀愁が翳った。心得た表情の変化であった。この縛り方の背後は全然出鱈目だから、私は主に前回より、角度を変えて数枚うつす。過去、縛ったことはあっても、絶対フोटを撮らせなかった彼女の、被縛の最初の幕開きであった。私は早々にこれを解く。Sづいて来た今、時機到来と許り、早くも次のポーズにかかるうとしている。

「もう少しきつくても平気よ。手加減しなくてもいいのよ。どちらにしたって、あとでウンと虐めさしてもらいますから。お返しは多

い方がいいわ。さあ、早くやって」

背後に迫ると、心得てマコは深々と両手を腰の辺りで組んで交叉させた。手首のかなり深い処で縛り結び終ると、別の縄で二の腕をしめ上げて胸にかけ、腰に廻してゆく。手首の縄をとり上げて、二の腕の縄で一ひねりして肩を通して前面へ——。捻じ、よじり、締め、着々と緊縛がつづく。私が日頃よく縛るいわば辻村式の緊縛の典型的なものであったが、白い縄が踊り着の黒に映えて縄目は一入鮮かであった。

双丘の谷間に黒着はびったりと吸い込まれたかたちよい白い臀部がムッチリと盛り上って

眼に痛い。

「未だ？」

「もう終り。終わったよ」

「随分きつく縛ったものね。身動き出来ないわ。三面鏡、開いて下さらない」

「見るの？」

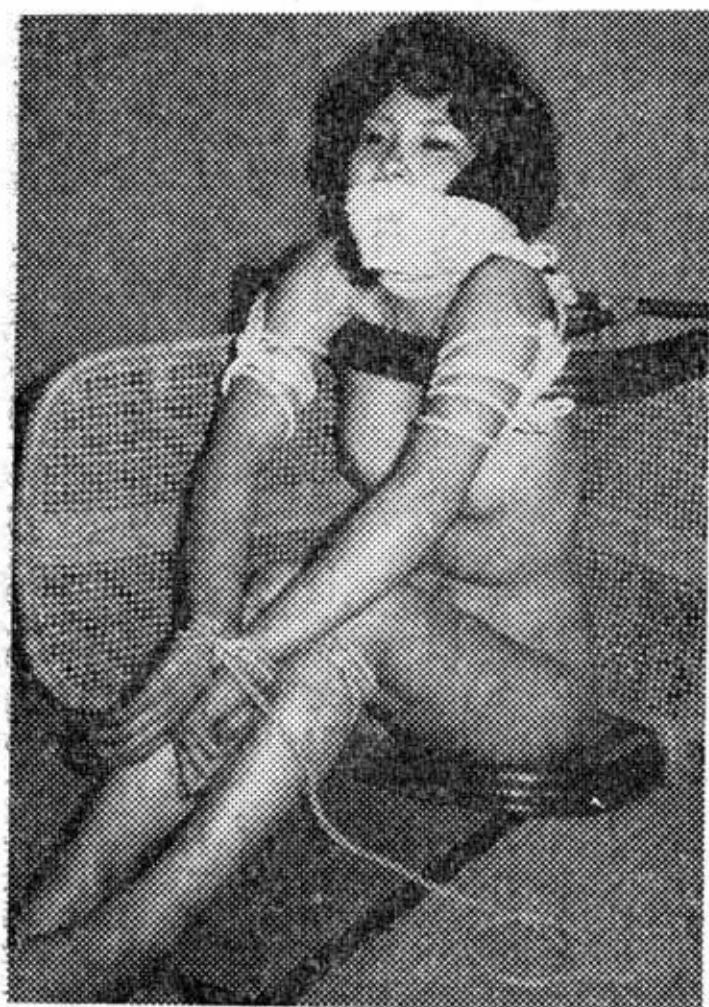
「ええ、見たいわ、先生の縛り方を——」

一種のナルシズムであろうか。緊縛の自分に自己陶醉を覚えた声であった。

「案外、いかすわね」

「気に入った？」

「ウン、フोट絶対ほしい。とり損なっちゃダメよ、先生」



蹲踞のポーズ、立ったバックスタイル、膝立ての姿、それらのすべてに、卑らしさは微塵もなかった。緊縛姿をマコは見事に芸術化していた。ポーズのひとつひとつに、彼女の細やかな配慮が感じられる。

力むでもなく、さりとして羞恥極まる感情もなく、マコはこの緊縛を楽しむかの様に、淡々と次々ポーズを変えていった。同じ緊縛なのに、つられて私は思

わずファイルムの枚数を徒らに殖やしていた。もう十枚以上も撮っている。緊縛は同じでもその一枚一枚に、異ったマコの表情とポーズがあった。理智的で聡明な彼女の、弛まぬ魅惑のひとつときであろうか。

「そろそろ、縛り方を変えたらどう」

マコから催促されて、あわてて私は緊縛を逆の順序でといて行く。すべてがマコの意志通り動いているのが癪だが、姿勢如何とも覆がえせぬ、毅然たる態度の彼女である。Sの女性を緊縛すると、すべては女性の意志の尽に動かされることを私はじみじみと知った。柔らかい四肢は屈伸も撓やかに、よく屈折し弯曲する。背後で両手をぐっと深く組むと、手首が、彼女の脇腹に届くほどの柔軟さである。それ故に、両手の縛りは、脛と手首のほぼ中央辺りで縛ることになる。肥満の女性なら到底なし得ない技であろう。一本の縄を、胸、腹、腿と交叉させて、足らなくなると、繋いで、脚首まで、きっちり縛り上げる。均整のとれた女体は撓やかにくねり、立ちポーズで微かに揺れる。そっと体を抱えて、壁に添わせて腰を落とさせて、両脚を伸長させる。あらぬ方へ視線を転じて、マコはこの緊縛を甘受していた。次々と矢継早に縛り方を

変えていったが、時間にして十五分少しの経過にすぎない。協力的であるだけに、縛り方に対して、マコは流石に一言も挟まなかった。むしろ手際よく、順次縛り方を変えてゆく私に、讃嘆めいた眼の色があった。私は燃えてきた。Sの血がたぎり始めた。この踊り着をむしりにとってみたい衝動にかられた。撮り終って、やや暫くの間、私は無言の儘、壁に凭れているマコをへいげいししていた。

「もういいのでしょ」

「ああ、いいよ。マコちゃん、私が何を考えているか分る？」

「フフ、分るわよ。脱がして裸体にしたいのでしょ」

「おや、読心術を知っているのかな」

「先生の顔に書いてあるわよ。眼が血走っているわ。ホホ、これは冗談だけど」

「脱ぐ？ それとも脱がしてやろうか」

「いいわ、脱がして……。でもピッタリと体に合わせて作ったのだから、無理しちゃ破れるわよ」

「いささか素直になったね」

「じゃあ、噛みついて差し上げましょか」

「怖い——」

私は縄を解き終ると、まるでこれれものを

扱うように、そろそろと踊り着を肩から外し始めた。その手をマコ自身の白い指が助ける。憶する気色もなく、全裸がスックと私の正面に立つ。

「すこし疲れた。一寸、一服させてね。先生本番はこれからなんでしょ」

「ああ、その通り」

彼女は窓際の廊下においてある籐椅子に眼をつけると、命令調で、

「センセエ、あの籐椅子ここへ持ってきてえー。坐りたいのよ」

「ああ、よしよし」

まるで甘い自分を齒痒く思い乍ら、私は易々として彼女の言いなりに、籐椅子を座敷の中へ運び込む。

彼女は裸の儘、音も立てず坐り込む。

かもしかのように、ほっそりとして、そのくせ固くしまった脚線が、泉のかげを蔽ってピッタリと作為もなく足裏に包み込んでしまふ。ひじについて、彼女の表情は自然に戻った。夢みるような、何かを考え込むような、うつろめいた瞳は、みるでもなく、さりとして見ぬでもなく、私の挙措を見守っていた。とれといわれてもとれない、極く自然なポーズをとって、マコは憂いをかけさせたように、

何に思いを馳せるのか、沈んだ眸になった。

藤椅子に憩う裸女のポーズは、さながら、一幅の絵であった。乳首はポツリと固く、小さくピンク色に光っていた。美容体操とバレーによって培われた女体は、一分のぜい肉もなくコリコリと引き締り、白い肌は眩しいほどに光り輝いていた。

「まあ、こんなヌード撮ったりして……」

ストロボの光で、マコの表情は、一瞬こわばる。思索に耽る彼女の、この天衣無縫の姿に思わずカメラを構えて光を走らせたのであった。マコの表情は再び物憂げなかげらいの顔に戻った。私は縫れた縄を捌きながら、彼女の変化を窺っている。変り易い女心。機嫌をとりつつプレイする私も、いささかシンドイ。

「縛らないの？」

マコはポツリと思い出したように言った。

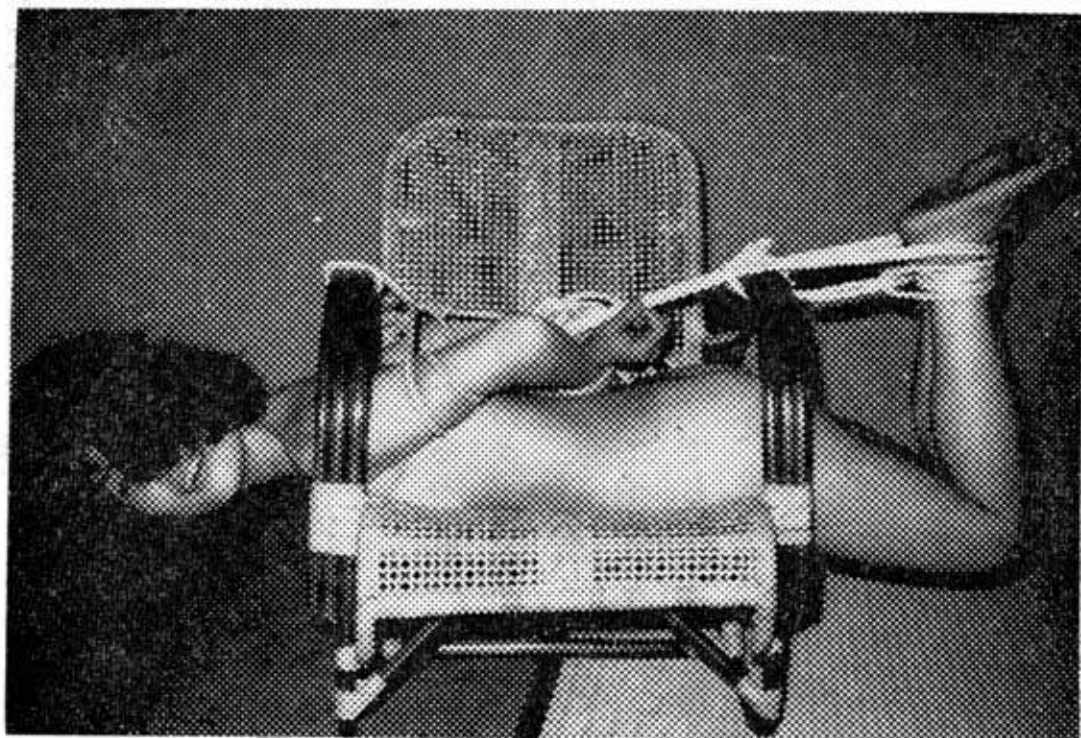
「いいの？　じゃあ、その藤椅子を使ってみよう」

私はマコを抱くようにして立ち上らせ、藤椅子を横にする。

「その肘掛けに上半身、入れてくれない？」

「さあ入るかしら、こう？」

もぐるようにして彼女は上半身を藤椅子の



肘掛けにくぐらせて首だけ出した。

「ウン、そうだ。両手をあげて、胸から上を出せないかなあ」

「ややこしい注文——。じゃあ、もう一度やってみるわ」

再び首をちぎめて体を抜きとると、改めて両手を高々と差し上げて胸から上を伸びをす

る様にして押し出す。撓やかで柔軟だから出来ることであった。両手の甲を合わせてかたく縛ると、ぐいと引っ張り気味にして揃えた膝下で結び合わせてしまう。肘掛けが、まるで胸枷のようになって圧迫し、マコは少し前かがみになって苦しそうだ。私は容赦なく彼女の二の腕を縛って肘掛けと縛り合わせる。首を数巻きして、息詰まらない程度までしめ藤椅子の脚につなぐ。びくとも身動き出来ぬ緊縛に、マコの表情は歪む。

「苦しいかい？」

「苦しいわ、胸がつまって」

「この椅子を立ててやろうか」

「ダメ、のどがしまって死んでしまうわ」

事実、彼女は苦しげに喘いでいた。激しいSの情欲が音を立てて私の体内をかけ廻り始めた。私は部屋の片隅の袋の中から白布を取り出してきて、尚も首縄の上から猿轡をかませた。ムムと呻いて、マコの頬は盛り上り、可愛い胸のふくらみは、うねり出した。

肘掛を握ると、マコの姿態を見つめながら徐々に椅子の背当てを下にして倒してゆく。二の腕の縛りが、肘掛との摩擦できしみ、マコは猿轡の奥で激しい悲鳴を挙げた。腕がねじれているのだ。あわてて元通りに返す。く



ぐもり声が洩れて、マコは解いてくれと叫んでいる。私の手は縄にあわただしく走る。

「イタイ、イタイ。先生、ひどい」

「よしよし、御免。すぐ解くから」

「人間並みに扱ってほしいわ。でないと、もう協力しないことよ」

横倒しが、余程痛かったのか、マコはやや怒りのこもった眼ざしで私を睨んだ。

「もうしない。でも凄く迫力あったもんだから、つい……」

「あんなこと云って。人の体だと思って……」

マコは、しきりに二の腕をさすっていた。

私は籐椅子を起して、次の緊縛図に思い耽っていた。

「今度は、この肘掛けを体ごと潜り抜けてみてくれないか」

「又、きついことするの?」

「いや、一寸」

私は言葉を濁す。もう怒って、やらないのかと思ったら案外素直に膝をつくと、体を潜り込ませ始める。スルスルと女体は肘掛の右から左へはまり込んでしまう。肩から上が出て、マコの首はガクリと垂れ、双丘の辺り、恰度そのところで腿がおちて、膝をタタミにつけている。私は両手を把ると背で合わせて縛り、二の腕を引き絞って肘掛に繋いだ。両足首を縛り合わせると、ぐいと引いて膝を折って、肘掛けにつなぐ。更に別の縄で、もう一度、足首にかけて引っ張るようにして両手とつなぐ。マコの両足は完全に浮き上る。胸が椅子で圧迫されるのか、苦悶のかけが流れた。籐椅子は女体の重みで、キュッキュツときしみ、マコの顔を豊かな黒髪が、すっかり蔽い

つくしていた。

「先生、悪魔的なコト考えるのネ。どの縛り方も苦しいもの許りだわ」

「うんと虐めるといっただろ。だから、激しいやつをやったのさ。一寸顔を挙げて御覧」

「こう。ああ、しんどい」

マコは顔を振って黒髪を払いのけ乍ら、鎌首をもたげるように、ぐいと首を立てた。

「早くしてエー——」

その瞬間、パチリ。まるで笑っている様であった。真白い歯並びのよい皓歯が光った。

このポーズ、むき出しになった双つの丘を鞭打てば、マコにどんな反応が起るだろうか——。彼女は未だ、一生懸命に顔をもち上げていた。しばし私はこの緊縛に、われにもあらず見とれていたのである。

ガクリと顔が落ちる。限度がきたのであるうか。足の指がピクピク反ってケイレンしていた。私はマコに分らぬよう、そっとバンド代りに、浴衣の細帯を二つ折りすると、パシリと試みにおしりに一打ちくれてみた。

「あッ、イタ……」

グエツとのけぞって、マコは大仰に体をゆする。椅子のきしみが激しく、ミシミシと揺れる。

「痛い？」

「という程でもないけど、びっくりしたわ。それより、オッパイと下腹が押さえつけられていたい」

「あと、二分間、その儘にしているんだよ」

「ウン、意地悪——」

「意地悪は嬉しいね。ウヒヒヒヒ」

そんなコマソンあったっけ。観念してマコはじっと耐えて、声を殺していた。

「まだ……」

「まだまだ、まだよ」

「カンニンして」

「降参か？」

「ウン、コーサン」

「縛りは序の口だぞ。もっと縛ってやる」

「……………」

私は返事のないマコの体を解き始める。

「覚えていらっしゃい。あとでオカエシどっさりして差し上げるから」

大きくベツと舌を出して、マコは腕をさすった。すっかりプレイの雰囲気溶け込んでいた。縛られること、縛ること、責められること、虐めること。SとMの両面から、マコはプレイの感覚を掴み、観念を悟ろうとしているかに見えた。嫌悪すべき行為、いやなプ

レイなら、マコの性質として、とっくに席を蹴立てているに違いなかった。今、現存する

マコは、私というS性の人間に奉仕しようとする、ややM性を帯びた女に変貌していたのだ。次々と続くプレイに、文句をいいながらも、易々として身を委ねているのは、微妙な女心の変化としかいい様がなかった。はっきり虐めることが好きだと断言していながら、強烈な緊縛に、あえて協力しているその心境は、或いは私というS性の人間を追求してみようという、マコ一流の探究心の現われであるかも知れなかった。事実、何のかのいい乍らも、こうして協力するマコの態度は、私にとっては予想外の収獲であり、喜びであった。先刻の、撫でるような腰帯の一発にして、その試みに対して、マコは敢えて非を唱えなかったのも、私の意を強くさせる要素となっていた様である。

「マコさむいわ、ちょっと」

湯上りの熱気もさめたのか、マコの体に鳥肌が立っていた。五月の季節は、暖房、冷房のいらぬ快適の候とはいえ、それは所詮、着衣の上での話。かなり長く裸体を曝していたマコにとっては、徐々に冷えを感じる季節であった。

「黒い踊り着をつけるかい？」

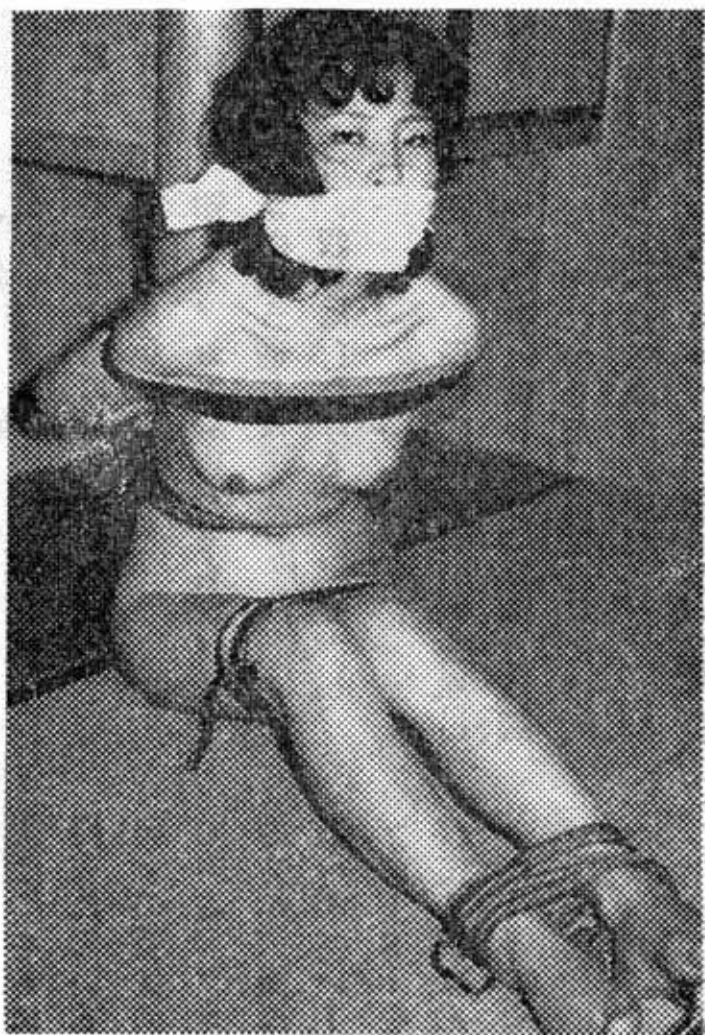
「大層だわ。未だとるの？」

「ウン、もう少しね」

「じゃあ、シュミーズを着るわ。いいでしょう」

この際、いけないともいえない。私はうなづく。マコの纏ったシュミーズは黒で、レースのシシュウがしてあるデラックスなものだった。私達の下着をとや角いうだけあって、彼女自身が身につける下着は、流石にアカ抜けていた。下穿きはつけていない。全裸に黒の、しかもすけて見えるこのシュミーズのスタイルも、好奇をそそるに充分の姿であった。再び籐椅子に坐ってもらう。このシュミーズ一枚、さして体をあたためてくれまいが、冷めたい籐椅子にじかに、肌をふれることだけは防ぐことが出来た。それだけでも彼女は気分的に仄かな温かみを感じたのかも知れない。

首縄をかけ、両手を肘掛けにのせさせて、肘掛けと一緒に縛り合わせてしまう。かなり乱暴な縛り方であった。ついで両脚も籐椅子の脚に左右それぞれ開かせて足首で縛る。ミニのめくれ上ったシュミーズが蔽いようもなく下腹部を露出させていた。カメラを撮りお



えて、私の悪戯心がもくもくと燃え上ってくる。

私は彼女の猿轡を外した。この状態において、彼女と言葉上での嗜虐を試みようとしたのだ。なるべくSの女王の自尊心を傷つけるような言葉を選ぶのだ。

「マコの、この曝し者の浅ましい姿を、かつてのM族の、マコが散々いじめたYや、HやKの各氏に見せてやったらどう思うだろうね」「イーだ、ワタし平気よ。いくらでも見せてやるわ」

負け惜しみが仲々強い。

「剃ってやろうか——。さばさばして気持ちい

いよ」

「イヤッ、変なことばかりいって。お風呂へゆけないわ」

「関谷富佐子夫人も、田宮寿子夫人も、安井喜久子夫人もお綺麗だよ」

「みんな夫婦プレイの奥さん許りね。私にもいい旦那さん見つかったら、先生の手を借りないでそうしてもらおうわ」

マコは睨んだ。その眼の艶なこと——。

「記念にもらっとくよ」

「あッ、痛いッ、バカバカバカ」

藤椅子がはげしくきしむ。太腿はピクピクとケイレンした。

「もう解いて——矢張り寒くなったわ」

「一緒にお風呂へつかろうか。先程、家族風呂のお湯を出しておいたから、もういい頃合だ。しかし私は暑い。ホラ汗をかいている」「そらセンセイは浴衣の下に未だ下着つけているんだもの、バタバタすれば暑い筈だわ。

ハダカだと、そうはゆかないわ。そう先生も一層のこと、ハダカになって撮りなさいよ。

わたし見て上げるから」

妖しい眼付で、マコはニタツと笑った。その刹那、ふてぶてしい、男心をとろかさずにはおかぬような、魔ものめいた眼の光がキラリと流れる。この瞳の魔力で、M族の男共は忽ちにして骨抜きにされ、ヘナヘナとなってしまうのであろうか。事実、私にしてからがマコのその魅惑の前に、フラフラッと傾斜しかけた。Sに徹するつもりが、スルリと体をかかわされてMにされてしまうのは、いつもこういう時であった。

「マコの前でハダカになるなんて、何だか羞かしいや。照れるなあ」

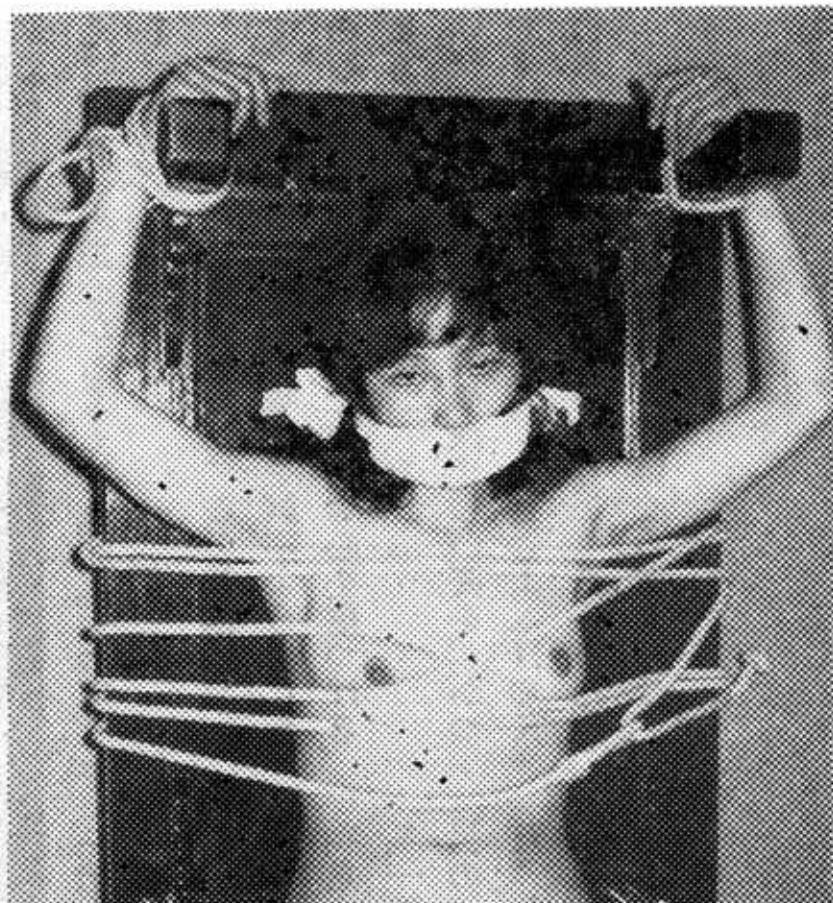
「女のワタシがハダカでいるのよ。今は一寸着ているけどさ。プレイの大先生が何いつてるの。それともそんなに貪弱？」

ドキリとする言葉を吐いて、マコは私を射すくめるようにみつめる。

私の旗色がわるい。兎も角、話題をそらすべきだ。

「まあ、お湯につかって暖まりなさいよ。先程ガランをひねっておいたから、もう湯が溢れているかも知れない」

家族風呂の扉を開くと、濛々と湯気が部屋に押し出されてきて、白く霞む。勢いよくガランから熱湯が迸ばしり出ている。



びて、私の腕を掴む。

「一緒に入ってエ——」

ざぶりとつかると、ざーっと大量の湯が溢れて流し場は一瞬、洪水になった。

狭い浴槽内で、ピタリと肌が合う。

私はいつしか、心から愛情をこめてひきしまったマコの体を強く抱きしめていた。

× × ×

流し場で、私の首を太腿に強く挟み込んで鼻をつまんで口をあけさせ、トロリと唾液を流し込んだマコが、床柱を背にして、ホテル備付の腰紐で軽く

縛られている。私はその前に立ちほだかり、彼女の要請の俛、ハダカの姿でカメラを構えている。フオートプレイより、お遊びのプレイ

の方が、濃厚になりつつある気配だった。携帯バイブレーターをとり出す。弾丸型のバイブレーターをひねると、電池の働きで、震動が起る。ほんのりと桃色に染まった全身に、未だうっすらと湯気が立ち昇り、仄かなローションの匂いが、マコのうなじや頬から流れた。

鋭敏な胸の突起にパイプが触れると、ピク

りと体がよろめいてゆらぐ。

猿轡の奥から嘆息の呻きが洩れ、快楽の響きを誘って、いつしか身悶えを始めている。

マコの表情は硬ばり、この悦楽の屈辱を抑制しようとするのが歴々と窺われた。

しかし女体はその歓喜に、表情とハラハラにのたうち出していた。

「やめて……いやッ、やめてえ」

それは愉悦すまいとする、女の切ない、心にもない制止のこえであった。自由に動ける程度の、やわらかい縛りが、悶えに尚更効果をうみ、振りしぼるような声でマコは喘ぎながら、止めてくれと叫んでいた。やめて反って恨まれるかも知れないが、この被虐の身で悦楽を覚えることは、マコの怜情が許さなかったのかも知れない。ウッスラひたいの汗がマコの心の葛藤を鮮かに語っていた。

「イヤッ先生——、マコ変な気分になってくるじゃないの。知らない、知らない……」

愉悦に悶えかけた、己れ自身のあられなさを羞じるかのように、マコは大仰に身をくねってみせた。

戯むれの愉しいひとときからさめて、眼を外に転じた時、湖畔は紅に染まって、やがて入陽の、その落ちかねるしばしの赤さが、カ

私はマコを押すようにして湯船へ誘う。

「背を流してやろうか」

「知らん、知らん。お世辞いうてもダメ」

「あとでマコの言う通りなるよ」

「センセエ、奴隷にしたげる」

「いいよ」

大急ぎで脱いで、湯気の籠る狭い家族風呂に飛込む。マコの姿は濛々と立つ湯煙りに隠されて、さだかでなかった。近視の私には尚更見分けのつきかねる湯煙の中だった。

湯気の中から、ニユッと、白いかいながの

ッと湖面を鮮かに照らし、小波は七彩を帯びてキラキラと輝き、美しく照り映えていた。残照はあかく、この近江に素晴らしき景観と抜群の美女とに囲まれた私は、正にこの世の幸せの極みともいえた。

身をくねらすマコの眸に、しっとりとしたうるおいを私は見た。それは、今のプレイの反応が、Sになり切ろうとする心の窓を開き、鎧する女体の武装を脱ぎ去ろうとする、女性本来の、女らしさに目ざめかけた何よりのしるしであつたに違ひなかつた。

快楽を求めようとする行為が、マコの場合いつも能動的であつたが、受身の場合、心とはウラハラに女体が承知しなかつたのかも知れない。爛熟し、既に女に目ざめているマコが、女らしさに触れた時、与えられる快楽の歓びを知るよりも、Sの女王をもって自から任ずる彼女にとって、真に異性から愛される必須条件になることを彼女自身、気付かねばならなかつた。Mの男は、マコを愛する前に己れのM性をみたす奴隷でありたかつたに過ぎないのだ。マコ自身、男性すべてを蔑視と軽侮の眼で見ても、それはM性の男を喜ばせ、彼女の自尊心をたかめるだけで、決してマコのプラスにはならないことを、私はこ

の際、思い知らせてやりたかつた。いずれ真の幸福を掴もうとする時に、マコのS女王の自尊心が、その障害となることは火をみるよりもあきらかである。お節介にもそんなマコの将来を考えず、現在の時点に於て、享楽に身をゆだねるならば、それはそれでいいのであるが、可愛い愛すべき悪女だけに、何とかマコに、私のハイド氏でない、今一つの間としての誠心を伝えたく思ったのだった。そうした殊勝なことを考える癖に、一方では、私のハイド氏が、しきりにけしかけていた。もっとやれ、もっとやれと。

(アンタはん、何をマジメに考えてるのやか——。もっと不マジメにやれ——)

そこで私は、断固、マコの女性本能をめざめさせつつ、もっとマジメにプレイに邁進することに、咄嗟の腹をきめたのである。(ああ、何て勝手きわる男なんだろう。辻村隆って奴は——)

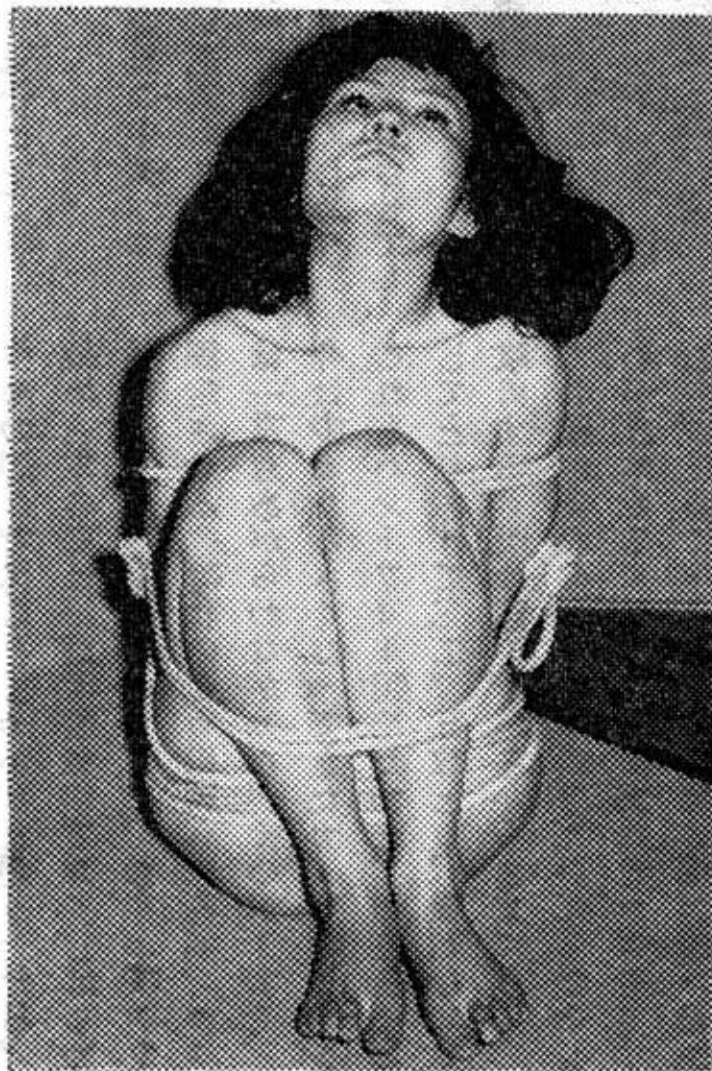
快楽を中断されたマコはそれを自分で求めながら、

不満げな、ぼんやりした顔付で私のピースをプカプカと吐き出していた。(吸えもしないくせに、ひとかど悪女振るスタイルの典型的なものだ)

私は部屋の中央のテーブルを壁際に立ててみた。ここへ縛りつけるためである。無言でマコを手招く。浴衣をバラリと落して、彼女はノロノロと立ち上って近づく。

「両手でテーブルの足を抱えて、そこへ坐って御覧」

いわれる通り、マコは形よい足を揃えて、冷たいヒンヤリした、テーブルの裏を背につける。一本の縄で彼女の左右の手をテーブル

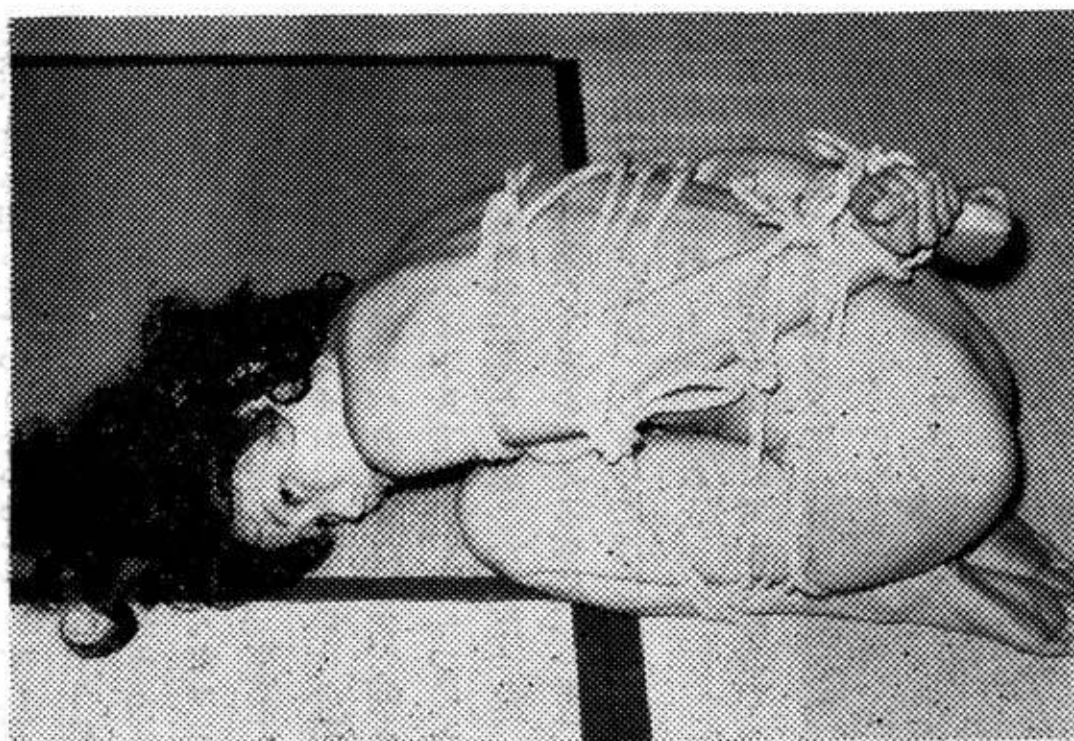


の足に縛りつける。他の一本で胸から腹にかけてぐるぐる巻き、乳房で8の字に交錯させる。腰帯で、太腿を机の脚にしっかりと固着させる。半開きの開股ポーズをとって、マコは私の為すが儘に身を任せていた。反逆的な勝気な瞳の色は消えて、両眼はしっとりうるんで、心なしか、この被虐の態勢のあとに訪ずれる何かを、待ち望んでいるようであった。

真正面から全貌をとっても、恐らく下半身カットせざるを得ないポーズであった。このカットの中味に向って、私の例の軽便パイプは活躍し、猿轡の奥で、マコは絶えだえの快楽の本音を吐きつづけていた。先刻の様に、やめてと叫ばぬ処に、マコの変化があった。この卓上のさらしものに、しばし私は全精力を傾注して、微妙に推移し、反転してゆく変化をみつめていた。

白い肌は、汗ばみと共に仄かに燃えて桃色づき、パッチリと私を凝視していた瞳が、いつしか瞼を合わせて閉じられていた。眉根のたてじわは快楽の証左をありありと示し、うずく如く身を慄わせていたのである。

こうなれば既にマコは私の掌中にあった。手を変え品を変えて、プレイに激しく徹してゆくべき時期は熟していた。



パイプを投げ出すと、素早く縄をといてゆく。

マコを引き曳るようにして座敷の中央へつれてくると、腰を落させて両足を揃えさす。最早、易々諾々と、マコはすべて私のなすが儘になっている。縄を胸に二重に強くしめつけて、両脚の太腿をびたりと胸に密着させて

すねの辺りで体ごとしっかりと縛り上げる。

他の一本の縄は、両手を後手で強くしばり太腿に三重、四重に巻きつけて、後手の縛りを固定させる。荷物のように縛られる間、マコは一言もあがらなかつた。そのポーズで、今は少々うるさくなってきたカメラの仕事をこれもハントフォト用のためと、氣をとり直してとりあげて、二、三枚とり、横倒しに足蹴にする。両の踵の下があからさまに開く。二の腕が痛むのか、マコのひたいに苦渋のしわが数本走る。ついで横に倒れたマコをうつぶせに正座に坐らせる。すねの縄が喰い込む苦しさを、マコは無言でこらえている。倒れて乱れた黒髪が、マコの頬を埋めていた。

犇々と縛った縄は、この連繋動作にもゆるまず、尚更に締めつけていくようであった。

カメラを投げ捨てるようにして、ハダカのは私はマコに近寄る。苦しげにうつぶせるマコの縛られた縄目の背に、どっかと七五キロの体重をおろす。

「ウウッ。く、くるしい。フン、フン、ウーッ」

数度腰を揺ると、女体はミシミシと音を立てて、きしんでいるかの様に思われた。

吐く息もたえだえに、マコは呻き、喘ぎ、

悶えていた。

体をのせた後、藻と乱れた黒髪を掴んで、ぐいと顔を上げさせる。眼は吊り上って、苦悶の表情が、齒を喰い縛らせていた。そこにはSの女王として日頃君臨する彼女の、あの嬌慢と自尊は、ひとかけらもなく影をひそめ被虐の苦悶にのたうち悶える、女の本能がにじみ出ていた。

私は全身全霊、サジストの本性剥き出しの嗜虐の鬼と化していた。

「どうだ、苦しいか」

「く、くるしい」

私はパツと髪を離す。足蹴にしてゴロリと転ばす。後手が下になって重心がかかり、痛さで身をよじる。両足を握って、片手でバシリバシリと二、三度、むき出したおシリを平手打ちしてやる。

「痛い」

「少し……」

「もっと虐めてくれと云えッ」

「……」

「早く云え」

「いや——」

「強情な……。いわないの？」

「……」

パイと横を向く。ムラムラツとこみ上げる嗜虐の怒り。私はズボンからバンドを引き抜いてくると、一曳して、パシリとマコの尻を叩いた。

「ヒエーッ、いたい、いたい」

ごろごろ反転して、マコは絶叫に近い悲鳴をあげる。私のバンドは、更にもう一鞭うなる。

「ウワァーッ、いたい、やめて……あッ、あッ」

「いじめて欲しいといえ」

「いじめてほ……」

あとは声にならず、やむなく蚊のなく様な声がとぎれる。

私はやっとな縄をときにかかる。解いた刹那マコは、パツと私の手を脱して逃れようとした。その手をぐっと掴んで引き戻す。

「イヤッ、もうイヤ」

しきりに首を振るマコを引きずるようにして床柱のそばへつれてくると、有無を云わせず捻じ上げるようにして、床柱の背に両手を廻して、早縄で素早くしばる。二の腕に深々と縄が喰い込むぐらに強くしめて、手首でとめる。両脚をバタバタさせるのをやっとな押さえつけて、どうやら縄を巻きつける。

「恨めしそうな顔をするな」

「先生、ひどい——」

「これが最後だ」

「もうぶたないで——マコ泣いちゃう」

「いや、ぶってやる」

「イヤーン、ほんまにカンニン。カンニンしとくれやす」

真剣なのか、ヒョコッと思いがけぬ京都弁が飛び出す。当然のこと、マコは生粋の京女なのだから。

鞭打ちは、真実こたえたらしく、マコは情ない悲壮な顔になってベソをかいた。

「思いきりぶってやるからな」

「いや、いや。ほんまにやめて……。でないと今度からセンスのいうときけしまへん」

「ああ、きいてもらわなくていいよ。私は鞭打ちをしたいのだ」

「センス、プレイにしとくれやす。ほんまに痛かったら、ウチ（わたし）といわない」ええことあらへん」

マコは本音を吐いた。私の心がニヤリと快哉を叫ぶ。

「ほんなら、じんわりやってやろう」

「撫でるくらいなら」

「こうか……」

私は、わざとバンドでスツとマコの体を下



から上へ撫でる。

「もうちょっとぐらいいいわ」

手加減して、ごく軽く打つ。ウツと耐えてそれでもマコの眉がよった。

捕えた鼠を颯り、もてあそぶ猫の気持か。

私はマコの肌をあちこち、バンドで撫でさするように、さっさと軽く叩いた。

「この程度なら、いいの」

「まあね、でも、もう一寸きつくても……」

「よしッ」

私は頭上でヒュルヒュル弾みをつけて、バンドを旋回させる。途端にマコの顔に恐怖が漲ぎった。

「怖い、やめて、やめて。カンニン」

× × ×

私の尻は、真赤に腫れ上って、条々たる痕跡がどす赤く色づいているかと思われた。

激しい疼痛をこらえ、呻きを殺しながら、

私はマコのなすが俤になっていた。眼隠しの全裸の体では、転がされて一体どの様な扱いを受けているか、それもモウロウとしていた。

しっぺ返しは激しく強烈で、日頃になく、痛みを伴っていた。(これでもか、これでもか)と息を切らして叫ぶマコの声が、私の耳

朶を悲壮にうった。

夕食後、この湖畔の宿を出て、一路京へ飛

ばしたマコが車を止めた処は平安神宮に近いデラックスなホテルの駐車場であった。マコの瞳は黒々と妖しく濡れていた。

「もう一度よ、センス、いいでしょう」

昼間のプレイでかなり疲労していたが、女性にさそれわて拒めず、私はうなずく。この彼女が愛するホテルのSの間で、マコが希むことは分っ

ていた。それをあえて拒めぬところに私の弱さがあった。マコの血は無性に燃えたぎっているのかも知れなかった。

果して……。いつになくマコの要求は激しかった。私の縄を自らとり出して、私を後手に縛ると、首に縄をつけて風呂場へ引きずっていった。マコの生温かい銀色の女液が、私の頭部からサンサンと降りそそがれた。眼に耳に鼻に、マコの媚めいた女液は浸透していった。

馬乗り、首を股に挟んでしめ上げ、そして息もつまる程に、マコの体がデンと私の顔にのり、ゆすりにゆすり、押しつけて来た。マコは喘いでいる。私の体はいよいよ萎縮する許りである。腹立たしくマコは私に眼隠しして、いつもはやったことのない鞭打ちを始めたのだ。M族なら随喜の涙を流すマコの数々の行為が、私にとっては苦痛であった。バイブレーターが私の体の一部に響いた。そして私はあっけなく昇天していた。

書きたくない被虐のひとつときであったが、私は駆け足でマコとの結末だけをつけた。もしこれが、マコの奴隷志望の人なら、このホテルでの一時間半のプレイだけで、優に四、五十枚の原稿をものにするかも知れないであ

ろう。私にとって、被虐の経験はあくまで蛇足に過ぎない。私の眼隠しを解いたマコは晴ればれとした妖しい笑顔で、私の心の奥をよみとろうとするかの様に、裸で縛られた私をえんこら抱き起して顔を近づけてきた。

「センセー、ワタシの奴隷よ」

「うん、そうだ」

「ハイ、そうですといいなさい」

すっかり主客転倒である。彼女の意志によって唇が合わされ、意志によって離された。その挙句、ベッドに傲然と腰を降ろすマコの前で、犬のように平伏しながら、私はマコの言う通りの舌の作業を延々とつづけさせられたのである。魔子の呻く夜は、暗いこの部屋の、妖しい雰囲気の中でつくられてゆくのであった。私の心はいつしかMに傾むいていった。

×

×

×

【伝言板】○分譲品目録は作成が大変遅れておりますが予約お申し込み下さった方には出来次第間違いなく発送申し上げます。○分譲品のお申し込みは大阪阿倍野郵便局私書箱第14号箕田京二宛に願います。○従来本誌上に広告しておりました代理分譲品は、ここ二年乃至三年ぐらい以前のもは在庫

カラーは京の夜更けを巧みに車を抜いて走る。女豹は車でなくマコその人であった。ぐったりとなった私。

「センセエ、ロマンスグレーのMの紹介を忘れないでね」

「未だ虐め足りないの？」

「センセだから遠慮しちゃった」

「あれで……」

「もの足りなかったでしょう」

「どう致しまして」

「もう少し念入りにしなきゃ」

「ずい分ご丁寧だったが……」

「序の口よ」

「怖いよ、マコが」

「バンドでぶったのは、お昼の御礼よ」

「お礼まいりの方がひどい。未だヒリヒリする」

「ワタシ、あんなに次々縛られたの生れて始

しておりますから未入手の方はお申し込み下さい。○尚御注文はすべて△略号▽にてお願い致します。○切手代用にての御送金も結構ですが高額切手や紙に貼りつけたものはお断りいたします。○本誌旧号の在庫は漸次減少しておりますから、御希望の方はお早目にお願います。第二希望品がございましたら、お書き添え下されば幸いです。

めてよ。カメラ・ハントの女の人の縛りなんか、今日のにくらべたら問題にならないわ」「とてもとても。未だ逆吊りや、海老責め、吊責めをやっていない」

「やる気」

「勿論さ、この次」

「その代り、お礼まいりは覚悟の上よ」

「ああ、SとSとS同志。それがどちらもMにならなけりゃならないこの辛さ。というところかね」

「先生、好きよ——」

正面を向いた俤、マコは判っきりという。

「私もだ。憎めないという事は好きということかね」

京都駅前、午後十時半。うかうかすると最終にのりおかれてしまう。

私が降りたあと、ドアは激しくしまる。さっと手を振ったのが見えたが、忽ち急旋向して、車はタクシーの流れにもぐり込んだ。

月が高い。私はヒリつく尻の辺りをそとなでて、鞆を抱え直した。

東男に京女というが、京女にもマコの如き女性のあることを私は誰かに訴えたかった。構内を甘い夜風が吹き抜けていった。



晴 雨 の 家

齋 藤 夜 居

私はたった一度だけだが、伊藤晴雨の家を訪問したことがある。

夜だったので、玄関の戸を叩く前に、殊更にたたきのセメントで靴音を高くたたてた。それだけで、座敷犬を飼っているのだろう、もう家の中からけたたましく吠え立てるのが聞える。アノ訪問者を苛立たせ、気を腐らせる実に嫌やな吠え方で、赤子の火のつくような泣声も嫌やなものだが、座敷犬の鳴声というものも凄まじいものだ。此処の家の人、他人を寄せつけたくなくて、極度に警戒して暮していることが分る。それでも、私はこの家の

ひとに、是非会わなければならぬ用件があった。本来は、此処には旧門下のI老人が先達で一緒に来る予定だったが、突然老人が行くのを渋ってしまったのである。その理由については、いまだに私は疑問を感じているし推察できる原因も調べてあるが、今は書くべき事柄ではない。

その晩――昭和四十一年三月七日だと記憶しているが、前年四十年暮に、豊島書房から刊行の拙著『伝奇伊藤晴雨』の製本が出来上ってから四カ月経っており、伊藤晴雨がこの家で没してより四年四カ月の歳月が流れて

いた。春とは云ってもまだ名のみで、私は風邪気味のところだったが、もうこれ以上訪問を延引することができず、急に思い立って、突然に晴雨の家を訪ねて来たのだが、気分は落ちつかぬし、寒さが背筋にぞくぞくと沁みこむやらで、自著一冊と晴雨翁の霊前に供える果物籠の重い風呂敷包をぶら下げ、しばらくは戸惑うたままの気持であった。初めてこの家の前に立っているのだが、この場所と地理は、もう既にイメージの世界では幾回となく往復しているので、わかり過ぎる位にハッキリしているばかりではなく、むしろ懐旧の

念すらあるのだった。其処には、ほんとうに私の想像通りの△現実▽が存在しているだけだった。もう伊藤晴雨はいないとわかり切っているのだが……。最前みた古ぼけた表札には、伊藤菊（晴雨の長女）と書いてあった。私は、この菊女に初対面の挨拶をしなければならぬことを思うと気が重くなってきた。

それは、最前タクシーで駒込病院前で下りてからもそうだったが、実は家を出る時から……というよりもっと前、自著の製本が出来上った頃から、気持が重苦しくなっていたのである。私の描いた晴雨像というのは、あくまでも文献の世界を渉猟した果てに浮かび出たものであって、それだけのもので組立てたものだった。古い門下の方ふたりと風俗研究の面で旧識のあった三四人の方々にもお会いし訊ねる所もあったが、それよりも当然しなければならぬことは、先ず、ご遺族を訪ねお聞きしなければならぬ事柄が多くあったのに、私は自分で考えた晴雨像が崩れ去るのを恐れる余り、今まで面会を避けて来たのであった。

私は、伊藤晴雨には会っていない——。伝記というものは、その人物に会わなければ書けない、と云うものではない。むしろ、私の

場合には過去に会っていなかったからこそ書くことができた。若し会っていたら、きっと書かなかったであろう。「きみ、晴雨は一冊の本にする程の人物じゃないよ」とか「一体あんた、晴雨さんをどれだけ、知ってるのかい」などと直接、言われた方々すらあった。

昔から、伝記は作者だ、と云われる位に強く書き手の個性があらわれるのだとされていく。凡庸の著述家に偉人が書けたら、これは飛んだお笑い草というもので、だから私が書いたものには伝奇という題名を用い、伊藤晴雨における奇を伝える、ことを主眼にまとめ上げたものであって、一代記でも伝記でもなかったのである。こう云ってしまうと、詭弁を弄すると思われるかも知れないが、真実じぶんではそうだと信じているのだから、どうかその点を笑わないで欲しいものだ——。私は伝奇作者として書いたのだから、晴雨の真像を伝える筆を持たなかったのだ。また△縛り▽以外の晴雨からは、今もこれから先の時代でも、何を求めるのだと云いたい。風俗野史の著者としての業績だったら、もう立派な再刻書も発行され、考証も綿密に行なわれているのだから……。だが、話の順序の後先が逆になってもいけない。とにかく、その晩

私はいまは亡き晴雨の家の前に立っていた。本当は此処に来ることも、此処のひとに会うこともしたくなかった。それ程に考える程に気分は益々重苦しく、緊張の度を増していたのである。

やがて玄関の戸が開いて、犬の鳴声は一そう激しくわめき立て、薄暗い室内の様子も、すぐ眼に入った。犬は右手の土間か物置場にいるが、姿を見せないで吠えているだけだった。座敷飼いの高級な犬ではなくて、老犬のようにも思われる。若し、晴雨在世中からの飼犬だったら、そのよく吠えることを（褒めてやらなければいけない）忠実な番犬だ——「どなたですか？……」

と、若い娘さんの声である。丸々と肥っていて赤いセーターがはち切れそうである。無邪気な表情であったことが、私の張りつめた気持をほぐして呉れた。この娘さんが菊女の養女であることを直感した。

「あの、晴雨先生のお宅は、こちらで御座いますね」

「ハイ、そうです。でも、お爺ちゃんはまだ四年前に亡くなりました」

「はあ、」と云うと、私は危く（それは知って居ります）と云いそうになり、急におかし

帳 ね ぎ

平 珍

さがこみ上げて来た。つまり、何もかも知ってるくせにという、自分の道化じみた心に対してであった。ほぼ晴雨の生涯に関する事蹟を書いたのだから、聞くだけやばな事柄はたずねるべきではない。

娘さんは続けて、ハッキリした口調で、声も大きかった。

「母は外に只今出て居りますので、まだ帰りません……」

私は、この可憐な晴雨の孫娘に対して、自著のことをどう説明すべきか、まよってしまっ

た。「そうですか、それはお母さんが居られなくて残念ですが、実は……」と、まるで鉄砲玉

を乱射するように急に喋り出した。私は、晴雨先生のことを一冊の本に書きました。それで此処に持参いたし、でき得ればお位牌にお線香を上げさせて頂きたいと思い、突然に夜分に参上した訳です。この本は、全部いままでに先生がお書きになったものから材料を集めたものですから、その点をお母さんがお帰りになったらよく説明して下さい。これはどうか先生のご霊前にお供え下さい——と。大要そうした意味のことを、くり返し、三回ほど同じ話をした。そして果物籠を置くと、すぐに辞去して表に出たのだった。暗い夜空を仰いで、始めてホッと一息つくことができた。

「魔女狩りについて」

最近ギリシャ、ローマと並行して中世ヨーロッパにも魅かれています。そして何時か魔女狩りについて書いた時、現代人の感じで、わり切って終っていた事を知りました。

人間の本质は「あそび」にあると推理した「ホモ・ルーデンス」で有名な、ホイジンガの名著「中世の秋」（中央公論・世界の名著55、堀出氏訳）91頁から。

裁判ということを考える時、何か私達は臆

私が説明している間、私の額からも、汗が流れていた。私はきつと随分真剣に喋っていたのであろう……菊女にあの娘さんが、一体どのように伝えるだろうか？ それは分らない。

歩いている中に、走馬燈のように伊藤晴雨の生涯を思いうかべることができた。総てが過ぎ去ったことを知った。私はやっと胸の重荷を下ろし、この時初めて、稀代の人物の死を実感することができた。

〔カット写真Ⅱ伊藤晴雨著「責の話」(昭和4・9) 坂本篤刊。附録写真より〕

病になり動揺する。そう言った感覚は、いっさい中世人には欠けている。……後期中世の司法の残酷さが私達をおどろかすのは、その病的倒錯によってではない。その残酷さのうちに、民衆のいづくものじみた、いささか遅鈍な喜び、その残酷さをつつむ陽気なお祭りさわぎによってである。モンスの町の人々は、ある盗賊の首領を、あまりにも高すぎる値段だと言うのに、あえて買いつけたが、それと言うのも、その男を八裂きにして楽しむ

S M き れ

黒 井

うとしての事であった。民衆は、死んだ聖者の屍をたとえよみがえったとしても、こうも喜ばないだろうと思われる程喜び楽しんだ。とこれはモリネの証言である」と。

これでK・セリグマンの「魔法」（その正体と歴史）の中の魔女狩りの様子が、少し判りました。

いざ火刑の時、貴婦人達は、江戸時代の歌舞伎見物にでも行くように着かざり、町中から人が集り、屋台がはられ、物売りがあつまり、一日中つづく間、人々は、それを眺め乍らのんだり食ったりしたと言うのですが、現代の野球か闘牛位のつもりなのでしょう。

ホイジンガーによれば、（イタリアルネット・サンスをもって時代を区切り、中世を暗黒と見た「ブルックハルト」への挑戦の書としてホイジンガーは「中世の秋」を書いているのですが）

中世は暗黒どころか、見る目もまばゆい、美しくも、怪奇な一大絵巻が見事に描かれています。

「好色の魂」

野坂昭如氏が、書いた「好色の魂」（新潮社）をよみ。（この人の最高作品は、私は「エロ事師たち」だと思っています。直木賞受賞作品以上に好い）

一九六五年八月号の「奇ク」に、久我庄一氏の書かれた、「人間・梅原北明伝」をくべつづよみました。久我氏は冒頭に「如何に無害なもので法で禁止する時、大方の人はそれを悪いことだと思う」サマセット・モーム——とあり。いかに悪法でも法は法であります。したがわねばなりません（これはテレビで聞いた故池田首相のお言葉）この頃白ポストを取ってしまえとか、勇しい発言を奇クで見受けますが、私は東京都青少年育成条例に間一髪之差で、警察官の書店への立入

り・権を東京都議会が（公明党の中間案で）何とか食い止めた事を、重大な事だと思っています。もしこの一項目が入っていたらと想像してみてください。

話が外れました。野坂氏はこの小説の主人公、貝原北辰（梅原北明）を書くについて、久我氏や斎藤氏のものも参考にされたと思いますが、むしろ、出版史上の大反骨漢の一生よりも、戦後の晩年の、みじめな姿にライトをあてて、何かを語ろうとしているらしく、

「久我氏の文では——それはようやく「出版の自由」の曙光見出す前夜、惜しくも巨星落ちるが如くたおる。時、昭和21年4月5日なりきとし作者注青山倭文二の「異端者の生涯」

「野坂氏の方は、兄にあてる手紙の彼の姿は幽鬼の如く、雑誌再刊をすすめにきた人に、

「僕の考えてるのは実は釣りの雑誌なんだ」

「釣？ 駄目だよ、こういう戦国乱世の世、

しかも言論の自由はアメリカさんが保証して

るんだから、ぐっと刺戟の強いのをね」ぼく

は釣りがいいと思うね。エロはつまらんよ」

「こりゃまた異なることを、斯界にかくれもな

きその道の大家が、なにをおっしゃる。敗戦

ばけですかな？」こういう風雲児は、戦前の

はげしい法の壁あってこそ生命力が湧いたの

か。枯木の倒れる如く、釣り竿をみがきつつ死んで行く。これはあくまで野坂氏の小説故本の事はわかりませんが「エロ事師たち」のスブやんの如く、どこかペーソスあり、物のあわれを西鶴風にこなす野坂氏は、立派な物書きの人でありましょう。

五月六日特大号 平凡パンチ

アンソ
S & Mの世界（今やS Mの時代、現代社会はサド・マゾで動かされている。キミもS & Mには無関係ではられない。（とでかかとか大きく）——さあキミも創造的生活を送りたいのならS & M、サド・マゾの世界をチョットのぞいてみたら、でないと取り残されちゃうよ。——などと書いているが、別にショッキングとも感じない此頃。也。

あまりチマタにS Mあふれたる如くやはり「奇ク」だけがなつかしや。

「一本気のこわさ」

面白い（私にとって）一文を、見つけました。次の文を、「不健全」とか、「アブノーマル」とか、現代のありさまに言葉を入れ替えて見て下さい。

詩人ハインリッヒハイネの「ドイツ古典哲学の本質」岩波文庫・青、伊東氏訳

46頁。「肉と魂」とをうまく妥協させているカトリック教会の仕組をルターは正しくとらえていなかった。——ローマ法王、カトリック教会及びあくまで、あまりに一本気すぎるルター先生に対して弁護しなければならぬ。——ローマ法王レオ十世はルターより大そうかしこかった。ルターはそれを理解していなかった。

肉のよろこびをほろぼして終うというキリスト教の根本思想は人間性とひどく矛盾するので、じっさいの生活では、決して実行できないというところを。——カトリック教とはいわば神とあくまで。つまり魂と肉の間の妥協である。——それで教会は肉の喜びに都合のいいような様々の仕組を作り上げた。——きみは心のやさしいこのみにしたがうがいい。美しい少女を抱くがいい。けれども、それがはずかしい罪であることはみとめねばいかん。この罪のつぐないをせにでもいいというのは、人類には、ありがたいことであり、教会にはもうかることであった。——以上。

——かくしてルター先生はカトリックをぶちやぶり、この純心なる良風美俗の大先生ルター

——大先生の感覚は非芸術的、小市民的、ピューリタンの、アメリカ的、PTA的、母の会的、タイルバリトイレットの大変せいけつな圧力として君臨する事になる。

「ロベルトは今夜」

五月に「河出」から人間の文学「ロベルトは今夜」がでる。前に出た「ナントの勅令破棄」と、「ロベルトは今夜」の改訳と、二作品を関連させた。新作「プロンプター」も合わせるの事。S Mの神学的。「芸術とカトリック」。(夫)「プロテスタントと芸術否定」(悪の否定) (妻)の日記形式。作者は「わが隣人サド」評論(まだこれは読んだ事なし)で有名になった、クロソーフスキー(自筆の絵)がとても好い。バタイユの「エロスの涙」参照されたし。

「O嬢の物語」よりぐんと深みもあり、又魅力的。S Mの世界は現代一流。

「バルカン・クリーゲ」

「バルカン戦争」(清・正先生でない)を書店でみかけた。大変に立派な良心的「まえがき」である。バルカン・クリーゲのかくも有名なる、その有名なるカ所は(要するにはぶいた)書かなかった。なぜならば、それでは必ず発禁になるからだとの事。これについ

ていかなる批判も受けるカクゴとの事。帯には遂に完訳とうたってあるから、愛書家は「まえがき」「あとがき」をよくよむべし。

「ポケット版の色つき」

以前のポケット版の清正もの（清水正二郎氏もの）が、つぎつぎカラー版として大型ででているが、中は全く同じ。

「珍訳」

完訳とか無サクジヨ版というのが、一寸くせもので、大出版社にかえって多い。たしかに開き直られば、どこもけずってないかもしれないが、原作者が日本語を知っていたら腹を立てる事必定「はしでごはんをたべた」という一行が発禁とすると。「木を切って直

☆誌上読者コンテスト☆美人モデル募集

賞 金

一、第一席	五万円	若干名
一、第二席	参万円	若干名
一、第三席	貳万円	若干名
一、第四席	壹万円	若干名
一、第五席	五千元	若干名

要 項

一、参加者は、本誌を愛読しておられる女

性の方でしたら、学歴、年齢、未婚既婚の別は問いません。奮て御応募下さい。

一、写真選衡にパスした応募者の方全員に對して一名につき金壹万円の賞を呈し、更にその際撮影した写真を誌上に発表し、読者コンテストの投票の結果、第一席より第五席まで標記の賞金を進呈いたします。

一、応募者は、略歴に身長、体重、胸囲の概略を記載の上、手札型写真を同封してお申込み下さい。選外の際は一件書類は、返却いたします。

一、写真並に書類にて選衡にパスした方には賞金壹万円を贈呈の上、コンテストに発表の写真撮影し、コンテストの結果は追って御通知いたします。

一、写真撮影のための旅費などの費用一切は本誌にて負担いたします。

一、モデル・コンテストに對する読者の投票については、いづれ誌上に発表します。

経十五ミリ四方、高さ25センチの形のものを二本にして、それを人間の手というものの指にからめて、カホン科植物からとれた米というものをむして出来たものを人間ののどの中へ入れた」と訳せば発禁にならないかもしれないが、これが良心的完全無サクジヨ版といえましようか。実例はあまり多い。

「少年愛の美学」

かつて書いた。稲垣^{タルホ}足穂先生の少年愛の形而上学が、昨日、九八〇円の立派な本になって「少年愛の美学」という名で書店に出ました。御同慶の到り。SMの原素、A↓O↓P↓V感覚の不思議なエロティシズム哲学。

「カサノバ回想録」

最後に五月から河出で「カサノバ回想録」全六巻が出るとの事。角川文庫の「カサノバ（伝記）によれば、本物が一九六〇年（つまりほんの最近）にはじめて金庫が開かれ、何百年、ベールにつつまれていた、まぼろしの「カサノバ回想録」が姿を現わしたわけで、もし読めれば、昭和の今生れた甲斐があったというもの。

ねがわくば、又珍訳でがっかりさせないで下さい。特に当時の世相風俗を知る文献としての価値がある事は昔から知られていた由。



読切りFストーリー

白

い

陶

器

香 川 泳 三

(いざとなりや、蔵書を売ったって、なんとか返せるさ)

そんな軽い気持ちで借りた十万円の金が信平の手足を縛る結果になった。

利子が十日に一割。担保も保証人も、めんどろな印鑑証明など何もいらなにかわりに、俗にいうトイチの高利で、借金はアツというまにふくれあがり、いつのまにやら、十万円の借金が、元利合計四十三万八千円。蔵書を売ったくらいでは、到底返済できるわけがない。

『ねえ、そろそろ一応は返してちょうだいな

あたしもつごうがあるのよ』

貸すときは、無条件に十万円の札を並べた中条時子は、頭を抱える信平に、強硬に返済をせまりはじめる。

その催促も、三日に一回から、このごろでは一日に一回となり、火のついたようなきびしさに変わった。

『どうしてくれるのよ。あたしだって金のなる木を植えてあるわけじゃないのよ』

と、食いさがる。

『いいわ、返してくれないなら、あたしにも考えがある。あんたの会社へ乗り込んで、社

長に談判するから』

あきらかに、おどしだった。

信平のつとめる小っぱけな運送会社は、従業員二十人足らず、経理主任という肩書きは名ばかりで、若い女事務員と二人きりで事務いっさいをさせられる仲々の重労働だった。

ワンマン社長は、信平をドレイのようにコキつかった。そのくせ、ろくな給料はくれない。二言めには、『不満があるやつは、スグにも辞めろ』と、どなる。

そのくせ、とても気が小さい。

だから、万一、信平が高利に追いまわされ

ていることを知ったら、ただではおさまらないだろう。

『そんな、だらしないヤツに、経理など任せてはおけん！』

と、一言のもとに、首を切るだろう。

しかし、中卒という、なさけない信平の学歴では、雇ってくれるところは、ほかにはおいそれとはないだろう。

信平は妻子を抱えて失業をおそれていた。

中条時子は信平の弱点をよく知っていた。知っていたからこそ、はじめに、二つ返事で十万円を貸したのだ。

無条件とはいいが、元利が三十万円を越したとき、

『これは金融業者組合の規則だから』

と、半ば強制的に、給料受領の委任状を信平に書かせ、さらに『退職金受領委任状』という、タイプ印書の書類にも署名捺印させ、印鑑証明まで三通もとらせ、実印までも、『預かる』という名目で、おさえられ、手も足もでないのだった。

(一)

利子は、夜さえ明ければ加算されてゆく。とうとう五十万円を軽く越した。

十日めには、利子だけでも五万円をヤリクリしなければならぬ。

なんだかんだで、いままでに、もう、おくれながらも、利子だけでも、三十万円は払った。

しかし、借金は、かさむばかり。

とうとう中条時子は、おそれていた、会社まで電話をかけてくるようになった。

さすがに、電話では、あまり強硬なことはいわないが、

『いま社長さん、いるんでしょ』

と、遠まわしに、おどかす。

金策のできるあいだは、まだよかった。

蔵書売り、カメラも質入れし、友人から五千円、一万円と、血のするような借金を重ねて、中条時子のもとへ、セッセとアリのように、運んだ。

けれど、吸血鬼のように中条時子は、ゆるしてはくれなかった。

まるで、ドロ沼のなかに足をつっ込んだも同然で、仕事の手につかなかった。

そんなある日、また中条時子から電話がかかった。

でも、その電話は、いつもの調子とはちがいに、声までやさしかった。

とにかく、こんや、相談があるから、八時キツカリに家までくるように、あなたのためには、けっしてわるい話ではないから、と、中条時子は、くどく念をおした。

(二)

八時きっかりに、信平は、中条時子のマンションを訪れた。

彼女は、このマンションを事務所にして、あくどい高利貸しに精をだす。年令は、三十才というが、独身のためか、若く見えた。

応接室に使われている、豪華な六畳間のソファにかけると、中条時子は器用に、シェーカーを振り、カクテルをだしてくれた。

18金製の、すばらしいシェーカーだが、これだって、貸金のカタに、さる洋酒店の主人から、まきあげた品なのだった。

『どおお？ 信平くん。わたしね、ちょっとまとまった金があるのよ。それで、三日以内に、お貸ししたものの、耳をそろえて、返してもらいたい』

といった。ネチネチとせまる口調だった。

中条時子は、信平が訪れるまでに、かなりガラスの数を重ねたらしく、からだを包むガウンを、うるさそうに、はだけて言った。

太りぎみの、映画女優にしてもおかしくな
いような中条時子の、からだを目のまえにつ
きつけられて、信平は眼のやりばに困った。
年令は、三つも年下なのに、中条時子は、
事業家肌で、迫力がある。

私だから、どんな恰好をしてもかまわない
だろうが、ドッカとデラックスなベッドにお
とこのようにあぐらをかいて、ガウンを羽織
っただけの、肌をピンクに染めたその恰好は
凄艶だった。

『で、ねえ、相談というのは、こんなことな
のよ』

といいながら、もう一杯、グラスにカクテ
ルをついでくれながら、これみよがしに、坐
りかたを代えて、大胆に両足を信平にむけて
八の字に開いた。

(四)

いまのあなたにや、さかさに振っても、五
万円の金策もむずかしからう。あたしも、無
理に返せとはいわない。そのかわり、あたし
が、あなたの希望を聞きいれて、貸したも
のは当分待ってあげるのだから、あなたも、
あたしのたのみはきいてちょうだい。

中条時子はそういいながら、スラリとベッ

ドのうえに立ち上がった。

そして、両手を腰にあて、ソファにかしこ
まる信平を、豪然と上から見おろした。

信平の顔は、ちょうど中条時子の膝小僧の
高さにある。

もしも中条時子が、フイと気をかえて膝小
僧で信平の顔を叩いたら、どうなるだろう。
鼻血をだして、その場に、倒れるしかないだ
ろう。

信平の顔のまえで、すばらしい外国産の香
水が、つよくにおう。

中条時子は、有名な香水マニアで、風呂を
つけたあとは、おしげなく、ふんだんに、
からだじゅうに香水をふりまく。そのすばら
しい芳香は、このマンションを訪れる、すべ
ての男性のたましいをうばうのだった。

誰でも、この夜の信平のように、目のまえ
に、食べてしまいたくなるような膝小僧をつ
きつけられ、心にしみるような香水をかがさ
れると、それだけで中条時子の足もとにひれ
伏したくなった。中条時子のもつ妖しいまで
に甘美な体臭がそうさせるのだ。

(五)

信平は、しだいに、その妖しい体臭のとり

こになっていく。

その、きれいな膝小僧で、ちからいっぱい
にけられ、その場に、その足の下にひれ伏し
てみたいと思った。

命ぜられたら、どんなことでも、やっての
けられるだろう。

あらゆる屈伏、あらゆる仕置に耐えてみた
と思った。

そんなことで、中条時子が満足し、心証を
よくして、きびしい借金の催促を、ゆるめて
くれたら、どんなに助かるだろう。

『ねえ、信平。わたしが、いまなにを考えて
いるかわかるかい』

なまえを呼びすてにされても、腹が立たな
い。

こんな、すばらしい女性になら、呼びすて
などは平気だ。

いや、それ以上に、ひどい目にあわされて
も、がまんできるだろう。そのために、女神
のごきげんが、取りむすべられるならば。

そこまで考え至ったとき、信平のからだの
なかには、心から女神を崇拜する心が固まっ
ていた。だから、

『おまえのからだを担保にとるよ』

と、宣言されても、不服はなかった。

「どんなことが待っているのかは、わからないが、おのれの血のかよった肉体を、『物』にみたてて、それを担保にとられ、おそろく命ぜられるだろう。つらいしごとにいっさいの自由をうばわれ、過酷な牛馬以下の扱いにも不平を申し立てないどころか、あべこべに担保として、じゅうぶんお役に立てられるよう、つとめなければいけない、と決心した。」

(六)

『いいね、おまえは、担保なんだから、人間の扱いはしてやらないよ』

中条時子は、眉もうごかさずに宣言した。担保にとられ、人間扱いはされなくなる。そんなことに、抵抗を感じるどころか、あべこべに、妙な喜悅を感じるのだった。

担保という条件は、こうだった。

これから会社の仕事を終ったら、毎日、このマンションへ顔をだし、雑用いっさいを、やること。

このマンションにいるあいだは、人間でなく、中条時子の所有物となること。したがって、精神的、肉体的に、どんな残酷な目に会わされても、不平を述べることは許されず、万一反抗をしたときは、いやおう

なく、会社の社長に、莫大な借金の取り立てがなされること。

そのかわり、向う三カ月、忠実に担保としての役目を果たしたら、たまった利子は棒引きいっさいの条件は直ちに水に流されること。とりあえず、こんやから利子だけはゆるしてやる……。

大体そんな約束をさせられ、担保としての生活は、そのときから始められたのだった。

『まあ、ウチにいるあいだのお前の立場は、あたしのスリッパか、そこにあるくずかごと同じでいどと思えばいいわ。きたないものをお前の口にすてたり、いらなくなったら、すぐダスターシートにすてられたり、そんなものと思えばいいわ』

契約書にサインさせられ、居間としては、マンションの、小さな風呂場の片すみに、粗末な木製のイスを一つ与えられた。寝るのは床のうえだ。

風呂場のカーテンのむこうは、中条時子の専用のトイレ。きれいずきな中条時子は、大切な客でも絶対、他人には、このトイレを使用させず、かならず一階の、ティールームへゆかせた。

女性の客も、二、三人の特殊な人間以外に

は、このトイレの使用を許さなかった。

だから、トイレは清潔で、いつも高価な香料がにおい、一日中、ここにとじこめられていても、つらくなかった。

夜の大部分を、信平は風呂場かトイレで過ごした。

中条時子は信平を、

『お前を担保として扱い、人間とは見ないと、れいの宣言をしてからは、信平の目のまえで、平気で風呂を浴び、さらに、奥まったカーテンのむこうでの用事も、平然と目の前で行なった。

まったく恥じらいがなかった。

こんな日が経ち、中条時子という女神の、日常生活のうらがわを、毎日見せつけられるうちに、そんなことが、ちっとも不自然とも秘密とも恥ずかしいとも思えなくなっていた。

中条時子が、おごそかに宣言したとおりに信平は、マンションにいるあいだじゅう、しだいに自分というものが、牛か馬か、あるいは、中条時子の古スリッパか、はき古した沓下同様に思えてきた。しかし朝になれば、会社へ追いやられ、いつもの通り働く生活だった。

(七)

そんな信平の心を、見抜いたのだろうか、中条時子が、ある日とつぜん、

『担保の体力調べをやる』
と言いだした。

犬は、着衣など着ない。おまえは、いまから犬になるのだ、と命ぜられ、犬のように背広をつけないままで、正座を命ぜられた。

首に、はばのひろい首輪をはめられ、その首輪には、太い鎖があった。

鎖は、中条時子の手のにぎられている。

それからの二時間は、完全に犬だった。

ちんちん、お手、あるけ、はしれ、寝ろ、おあずけ。女神は、おもしろそうに、ベッドに寝そべり、ウイスキーのグラスを片手に、つぎつぎと命令をくだした。

命ぜられるとおりのなれない演技を、必死に忠実につとめるのだが、ほんものの犬でない身の悲しさ、たびたび、とちった。

とちると、ようしゃなく、皮ムチがうなった。

女神は、酔うにつれて、ますます残酷に、とんでもない羞しいことまで命令して、飽きることを知らなかった。

しかしその酔いはほんものでなく、どうもつくられた酔いのようだった。

なにか、下心があって、わざと犬のまねをさせているらしかった。

でも信平は、女神の酔いが、ほんものであろうと、つくりものだろうと、そんなことはどうでもよかった。

目をうばうばかりの、残酷なかに秘められた甘美な思いに身を沈め、骨身にこたえるムチの痛さに喜悅して耐えた。

この世のものとも思えない、かずかずの羞恥の命令は担保である信平のたましいをうばい、それはいつそ歓喜だった。

しまいに女神は、スラリとベッドの上に立ちあがり、眼の高さから、ちからまかせに、ムチを振るいおろした。

高いところからふりおろされるムチは、加速が何倍にもなり、したがって、その痛さも何倍にもなって、信平の背なかで高くするどい音をたてた。

でも、その音が、いまの信平には生甲斐だった。

歯をくいしばって、耐えに耐えた。

ここで、がまんすれば、あの一生かかっても返済できそうもない、山のような借金を棒

引きしてもらえる。

そう思うと、三十回、三十五回と、くだされるムチの痛さなど、苦しくともなんともない。

しかし、心は耐えても、肉体は、そのムチの痛みに耐えられなかった。

目のまえの電気スタンドの灯が、バイオレットいろに見え、痛みがズーンと、セキズイをはしると、ついに信平は失神した。

女神は、冷ややかに、それを見おろした。

(八)

むすんだ口を、無理矢理こじあけられ、舌のうえにしたたかに、ブランデーのような水薬をおとされ、信平は意識をとりもどした。

口中のブランデーは、ふしぎな味で、舌にとけた。

それは、ひどくうまいようでもあり、またひどく、まずいようでもあった。

しかし、急速に意識をとりもどすには、たいへんな効果があったらしい。

信平は、その水薬を、もっとのみたいと思った。もっとたくさんのなら、セキズイにうけた、ひどい痛みが治りそうな気がしたからだ。ざんねんながら、その水薬は女神

だけが調剤できるのだった。

『どう？　目がさめたかい？』

頭上にさわやかな女神のみ声がきこえる。

ハイヒールの皮のにおいがつよい。

信平の耳の両がわに、ハイヒールが据えられ、声は、その上のほうからひびいた。

信平は、目がさめたとたんに、水薬の味を忘れかねて、その投与を哀願したが、これはききいれられなかった。

よほどの高貴薬のようだった。

『おまえ、仲々スタミナがあるわ。犬でいえばブルドッグか秋田犬だね』

女神は、ごきげんだった。

でも明日は、いつものとおり会社へ出なくてはならない。

会社のとくい先は決算期で、このごろはことのほか忙しいのだった。

残業をおえて、マンションにはしりかえり女神の足もとにひれ伏すのが、たいてい夜の十時。

それから、また目のまわるように、忙がい雑用が待っている。

妻子の待つ、わが家へなど帰っているひまがなかった。いまでは家出も同様だった。

心配はあっても、帰ることは許されない。

信平は、忙しくて会社に泊りこみ、と時々、自宅へ電話するのが精いっぱいだった。

(九)

会社からマンションへ、マンションから会社へ。こんな異常なコースにもなれた。

中条時子は、いつも信平の頭上の存在だった。サラリーは、とりあげられ、一円の金も自由にできない。

気がむいたときだけ、信平は居室に定められたレストルームから出ることをゆるされ、中条時子の足もとにひれ伏して、くだされる命令を待つのがあった。

ときには、とても人間として従えないような、苛酷で不潔な命令も平気でくだされた。しかし、

『マンションへきたら、おまえは人間じゃない。物体なんだよ』

と、釘をさされているので、不平や反抗は許されなかった。

反抗など、考えてもみなかった。

中条時子の足もとに身を投げ、豪華なジュータンに顔を埋め、女神の室内履きのシューズのホコリを吸っていれば、万事はすむことなのである。

つらい命令を、唯々諾々と、きき、それに服していれば、あの、身をきざみつけられるような借金の催促に追いまわされることはなかった。

中条時子の力いっぱい振りおろすムチの痛さに耐えるか、クビの心配をしいしい借金の言い訳に、苦しく不安な毎日を送るのがいいか、そのどちらかをえらぶ権利は、信平に与えられた、たったひとつの特権だった。

かれは、前者をえらんだ。

美ぼうの、残酷なご主人さまと、ひとつ屋根の下に暮せるだけでも幸福だ。

そう思うと、いっさいの苦痛が去り、もつと手ひどい目にあわされることを願った。

女神は、マンションでは、どんな用事にもみずからの手をよごすことがなかった。

そんなことは信平にやらせればよいのだ。風呂ですら、シャワーをあびたあとはタイルに正座する信平の目前に立ちはだかっていれば、それでよいのだった。

それだけで、肌は美しくなり、タオルでやさしくぬぐう仕事まで、奉仕の手が待ち構えているのだった。

金づまりを反映して、女神の事業である金融業は、とても繁盛した。

マンションで、ノウノウと遊んでいれば、金を貸してやったほうから、セッセと利子を運んでくる。

女神は満ちたりた生活に満足していた。

あそんでいても金はどんどん太っていく。

貸し先はよくえらんで、これなら大丈夫と、安心できる相手だけをえらび、確実な方法で貸しつける。

万一、支払いがとどこおるものなら、考えられるすべての手段で、借りたほうは追いまわされる。そのうえ、高利だ。

だから、いっぺんでも借りた者は、一生かかっても返せないほどに、アツという間に借金が増えてしまう。信平の二の舞いの運命だった。そのかわり利子さえ払っておれば、元金の返済は、いつまでも待ってもらえた。

しかし、それは、かえって落とし穴なのだというのに、誰も気がつかない。

元金の取り立ては寛大なかわりに、目の玉が飛びでるほどの高利が、どんどんふえ、その利子に、また利子がつくのだから、たまたまものではない。

しかし、美ぼうの中条時子が、『いいですわ、利子さえいれてくだされば、待ってあげます』

ニツコリすると、苛酷な取り立てに追いまわされた辛さも、はらだたしさも吹きとぶのだった。

(十)

信平は、女神のトイレの片すみで、大いそぎで、パンを立ち喰いしていた。

お茶などのみたくても、とんでもないことで許されなかった。

お茶どころか洗面所のコックから水を手にすくって呑むことさえ許されなかった。そんな人間並みのことなどともないゼイタクだわと、女神はいった。

でも、パンだけでは、のみこむことができない。

なにか、呑みものがほしかった。

しかたなくかれは、中条時子が腰をおろす清浄なまっ白の陶器から、すくいのみした。

ふだん、よく清めてあるし、水は底のほうから吹きあげる、水洗の水とはいえ、水道の水にはちがいないので、きたないとは思わない。

それに、あらゆるきたないことに慣れるよう、ふだん訓練されているので、そんな行為が、きたないどころか、むしろ、たのしかった。

た。

ゴクゴクと、すくいのみする水はうまく、顔面にふれる白い陶器の、ひんやりするつめたさは、なにか中条時子の素肌を思わせて、楽しかった。

とつぜん、背後のドアがあいた。

中条時子が、朝の必要を感じて、入ってきたのだ。

信平が、そそくさと、朝めしともいえないようなパンを、目を白黒させてのみくだすのを尻目に、信平のだいいじな水呑み器に、平然と腰をおろす。

中条時子は無表情に、そして完全に、信平の存在を無視した。羞かしさなど全然、感じてない様子だった。

へやのなかに、かすかな特有の臭気がただよう。

でも、黙々と信平は、パンを口に運ぶ。

中条時子は、やっと用を終ったらしく、ゆっくり立ち上がり、そのまま出ていった。そして風呂場へすがたを消し、高い水音を立てた。

信平は、こまってしまった。

さいごのパンのひとときれをのみくだすのにどうしても、せめて一とくち、水がほしいと

思う。

それは、たったいま、女神がおつかいになったところの底から、コンコンと湧いている――。

しかたがなかった。

まだ、ぬくもりがのこっていきそうな、そこから、すくい吞みした。

口のまわりを、つるりと撫でて、信平は、あわてて風呂場へはいった。

女神さまの朝風呂のお手伝いのしごとが待っているのだ。

(十一)

めずらしく、女神は、きげんよく、信平に話しかける。

一人まえに、口をきいてくれるなど、何日ぶりのことであろう。

いつもなら、せいぜい

『チッ、チッ』

と、舌でちいさい音が鳴らされ、それを命令と聞いて、すばやく動作するように命ぜられていたのだ。

『こんや、だいじなお客さまがあるの。だから、会社は早引けして』

たっぷり脂ののったせなかを、マッサージ

させながら、女神はいった。

女神は、必要がいの口はきかない。

信平を、できるだけ人間の座からひきおろすには、そんな牛か犬にたいするような態度をとるのがよいと思っている。

そんな、口かずのすくない女神が、めずらしく、対等に口をきいてくれるのは、感激だった。

『お客さまに喜んで頂くのには、おまえに、いっしょうけんめい働いてもらわなくちゃならないの。だから、すこし調教しとこうね』あわただしい出勤前のひとときにその調教が信平の全身に加えられた。

それは、いままでうけた、あらゆる屈辱に輪をかけたものだった。

正座する信平の、やわらかい膝の上に、いきなりグサリとハイヒールの、とがったヒールがのった。

つきさされるような痛さが全身にはしる。

目のまえで、女神の、よくすきとおる、うすいスカートがゆれた。

ひときわ、体臭が、つよくにおう。

『いいかい、こんやのお客さまというのは外国のジュータンを織る会社のプロダクトマネージャーなのよ。クツで踏んで、人間のから

だそっくりの、やわらかなジュータンをつくるテストの目的で、日本へきたひと』

女神は、痛烈に信平の膝を、ふみしだきながらいった。

フカフカした、毛足のながいジュータンの足ざわりに、人間の肉体そのもののタッチの味をとりいれた新製品をだしたら、と、その会社は考え、すでに多額の開発資金を投入している。

いかなる素材を用い、あらゆる高度の技術を駆使して織りだしても、あの、赤ン坊のころやさしく抱かれた、やわらかく甘く、あたたかな母親の、胸を思わせるような、なんともいえない持味のジュータンをつくることは不可能とされていた。

その業界の常識を破るため会社は、世界有数の織物王国、日本にまで、はるばるとプロダクトマネージャーを、研究に入国させたのだった。

踏んでみて、足でけってみて、それが人間の肌のタッチとまったく変りのない、ジュータンができあがったら大成功。それには、じっさいに生産担当者が、人間をつかって、まづ踏み心地を、そのみずからの脚で感じとるしかない。誰か、実験材料になってくれる人

はないだろうか。

そんな引き合いを、取引先から聞かされて、中条時子は、その話に飛びついた。

というのは、実験材料の提供者にたいする謝礼は、たいしたものではなかったが、協力にたいする報償の意味で、みごと製品が完成したら、その一手販売権は、無条件で、その提供者に贈られる、というすばらしい副賞が用意されていたのだった。

しかし、実験材料となるその人間は、ある意味で、いのちがけといわなければならなかった。

白人女性身長、体重ともに、ひとまわりも、ふたまわりも大型だ。

その、一・八メートルの身長と、八〇キロを越すみごとな巨体を、じかに膝のうえか、ばあいによっては床に寝て、おのれの背中で受けとめるだけでなく、ドシン！ ドシン！と、ちからいっぱい踏みしだかれても、文句をいえない。なにしろ、人間がジュータンのかわりになって、えんりょなくその足の下に踏まれるのだから、たいへんな難業苦行。ばあいによっては、息の根を止められ、セキズイをポキポキと、折られることだって、覚悟しなければいけない。それは一方的な受け身

のしごとだった。

でも、金もうけには飽くことを知らない中条時子は、そんな苦痛や危険は承知のうえで実験材料に信平を提供することを喜んで約束してしまったのだ。

もちろん、信平には一言の断わりもしないで。

(十二)

『心配することはないわ。万一、気絶したらあの水薬を与えてやればいいわ』

このあいだ気まぐれにムチを当ててみた。軽いあそびのつもりだったが、ついちからがはいりすぎて、とうとう信平はのびてしまった。

あのととき、これも、ほんのいたずらのつもりで与えた水薬が、思いがけなく、すばらしい効果をあらわし、たちまち信平は、よみがえったことを思いだす。

その、すばらしい水薬の正体を知っているのは、この広い世のなかに、ほんとうに、じぶんだけ。

そのことを思うと、おごる美女の自尊心はいつそう深いものになるのだった。

おもわず愉快になる心をおさえ切れず、信

平の膝のうえでリズムをとって、飛び跳ねてしまった。

するどいヒールの尖端は、ドリルのように信平の肉を刺した。

信平は、歯をくいしばった。

痛かった。しかし、ひどい痛さの底に、何か喜びがあるようで、うめきながら耐えた。

もしもここで痛さに耐えきれず、女神を膝のうえから放りだしでもしたら、たちまち契約違反。また、あの苦しい借金云いわけに血の汗を流す日がつづくことだろう。

あのおそろしさにくらべたら、キリのように膝にヒールのとがった尖端をもみこまれることくらいは、物のかずではないと思った。

あまりの痛さに、時々意識が遠ざかる。

その苦しきのなかで、しかし、よく信平は耐えた。

『よし！ よくがまんできたわ。これならだいじょうぶ。きっとプロダクトマネージャーは喜んで、実験はパスよ』

混濁する意識を必死にとりとめながら女神のうきうきする声を、うつつに聞いた。びっこをひきながら出勤への道をいそいだ。

(十三)

実験は大成功だった。

すばらしい巨体をゆさぶり、みごとなプロンドを、掻きあげ掻きあげ、プロダクトマネージャーは繰り返し繰り返し、思うぞんぶん信平の剥きだしの膝を踏みしだいた。

それは、けさ、女神から与えられた調教より、五倍も六倍も、いや、それ以上に激しいものだった。

実験の時間は約二時間。

メーターを操作する助手が、あらゆる方法でデータをとった。

プロダクトマネージャー自身は、ひとことも口をきかず、足の下に踏まえる人体のデリケートな踏み味を、しっかり脳のなかにたたみこもうとして、ちからをふりしぼってその膝を踏みしめた。

実験に立ち会った中条時子は、もしも実験台の信平が、痛みに耐えかねて気をうしないでもしたら、スグ回復させるように、と、これらの水薬を用意して、必要のときはスグ投薬できるように身がまえる。

女神が手にする容器は、高価な舶来のツボで、ふだんは信平の居室、つまりトイレに飾られてあった。そのツボに用意された水薬はツボをゆするとかすかにさざ波をたててゆれ

た。

そのたびに、かすかだけれど信平にだけはよくわかる高貴な香りが、あたりいちめんにただよった。

手ひどい実験は、成功のうちに終わった。

『オーケイデス！』

プロダクトマネージャーは、満足そうにいい、さいごにもう一度、念をいれて、グイッと信平の膝をヒールで、えぐった。

するどい痛みが脳天をつきぬけ、女神のは、またちがう白人女性の体臭が、鼻をくすぐった。

(十四)

女神の仕打ちは、日を追って残酷になるばかりだった。

それには、わけがあった。

さすがの中条時子も、ちょっとした油断から大口のコゲつきを、つくってしまった。

二千万円。この金づまりに、その打撃は大きかった。

担保にとった手形が不渡りで、銀行からつきかえされた日は、たいへんな荒れようだった。

信平には、まったく罪もないことなのに、

腹いせの仕返しはその信平に加えられた。会社を休ませられ、朝からパン一枚さえ与えてもらうことができず、もう午後の三時というのに水一杯、吞ませてもらえなかった。

でも、雑用の重労働が待っている。

信平の飢えは、絶頂に近づいていた。

食い物と名がつけばなんでも食べてみたいと、かれは思った。

女神が、日課のひるねを楽しむ、そのスキをねらって、かれは、そっと冷蔵庫のドアをあけた。

あれほど何も食べてはいけなさと嚴重に絶食を申しわたしておきながら、そのくせ冷蔵庫の中には、肉や魚や缶詰や果物が、いっぱいにつまっていた。

手をだせば届くところに、山のような食料があるのに、クラッカー一枚すら自由にできない。

たたかれたり踏みつけられたりの仕置もきついで、食料攻めは、それにおとらない苦しさを信平に与えた。

ゴクリと、のどが鳴り、つばきが舌のうえを走った。

しかし必死のおもいで、湧きあがる食欲をおさえた。

『おまえ、なにをしてるの…』

背後の、女神の、なじる声に、信平は飛びあがった。

つまみ食いをしなくてよかったと思った。

いいつけにそむいたら、いやおうなく、手ひどい仕置のムチが振りおろされることを、よく知っていた。

『いいよ、ゆるしてやる。たと好きなものをお食べ』

めずらしいことだった。

冷蔵庫など、開くことさえ許されないのにこれはどうしたことだろう。

『そう、そこに肉だんごがあるだろ。それ、とてもうまいわよ』

気味のわるいほどやさしい言葉に、信平はなみだがでそうになった。

すなおに、肉だんごを口に入れた。

(十五)

すごい痛みが、舌を、くちびるを、のどをはしりぬけた。

あまりのショックに、胸をかきむしって苦悶し、おもわずうめいた。

なにか劇薬を、吞まされた感じだった。

『フフフ……。苦しいかい、たんとおくるし

み。でも、死にやしないから安心おし』

さっきとは、うってかわった中条時子の声をききながら、しだいに意識をうしなう信平だった。

床にのびた信平の口の中に、れいの水薬がそそがれ、ようやく意識はもどった。

「やっぱし、人畜無害は、うそじゃなかったねえ」

と中条時子は、意味ありげにわらった。

女神が金を貸した先の、ある小さな製薬会社が、さいきんゴキブリ退治の新薬剤を完成した。

効果は抜群だったが、万一、人間の口に、あやまって入るようなことがあっては大変なので、人間を使って生体実験をやる必要があった。

先のジュータンの実験で成功したのに味をしめ、もういちど、その実験台に信平が使われたのだった。

これで、人畜に無害ということが証明された。

こっそり薬をいれた肉だんごを食べた信平が、意識を失ったのは、中条時子が、その薬品の分量をまちがえて、大量に投入してしまったからだった。

この画期的なゴキブリ退治薬は、人畜無害をキャッチフレーズに、近く大々的に発売されようとしていた。

これが当れば、出資金の利益配当という形で、ゴツソリ現金がはいってくる。二千万円のコゲツキなど、回収にそう日数はかからないだろう。だから中条時子は、熱心にその完成を、応援しているのだった。

こんやの信平の、いわばいのちがけの生体実験で、完全に自信がもてたので、女神は、げんきんに、ごきげんを直した。

(十六)

『そうだったね、朝から信平は何も食べてなかったんだっけねえ』

やっと思いだしてくれた。

『ごめん、ごめん、ついわすれて』

めずらしく、やさしかった。

しかし、その表情のおくには、何かの底意が感ぜられる。

信平のカンはあたった。

もっともっと、しごいて、完全に人間性をぬいてしまおうと、女神は考えている。

というのは、ジュータン会社のプロダクトマネージャーが、あの夜、徹底的に、信平を

踏みしだいて、思うぞんぶん快適なタッチをたのしんだ。それが忘れられなくて、日本にいるあいだ、信平を貸してほしいと度々いつてくるのだった。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円 (送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円 (送共)
半年分	6冊	二一〇〇円 (送共)
一年分	12冊	四二〇〇円 (送共)

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとか、こういう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御希望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時に、お手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下されるには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛表記予約購読料をお込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円(切手可)の御負担を願います。

○本誌は十月号から定価三五〇円に値上げになりましたので、予約購読料は三月分三冊一〇五〇円、半年分六冊二一〇〇円、一年分

見返りの条件に、現在まだ日本に輸入されてないすべての製品の、一手輸入権を、中条時子に与えられるよう、本社に口をきいてやろうというのだった。

十二冊四二〇〇円になります。今後当分の間誌代の改訂はしない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細表を雑誌に添布致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたしますので御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印致しますから継続お申込み願います。継続のお申込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになれる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。ば、当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間です。その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

それを扱えば、完全に儲かることは、折紙つきだった。

日本の一流商社が目のかえて、あの手の手で手をつくしてきたが、なぜか本社はいままでもO・Kをためらった。

それを、無名の中条時子が無条件であっさり、横取りできそうな状況なのだ。

手ばなすにや惜しい信平だけど、一手輸入権の魅力の前には、おしんでいられない。

永久に、渡してしまうわけではないので、先方の注文を、ききいれておくのが賢明だと判断した。

しかし、かんじんの信平が、万が一にもこちらの手からはなれ、むこうにかたむいてしまったら、元も子もなくすることになる。

なにしろ、相手は、ありあまる資力にモノを言わせ、二〇〇万円ちかい信平の借金など二つ返事で肩代りするだろう。

金でしげばれないとなったら、ほかのことできつく、つないでおくしかない、考えた末、いいことを思いついた。

『そうだ。いいモノあげよう』

女神は信平の顔をのぞきこんで、妖しい笑顔を見せた。

つよい体臭が、におった。

このさい徹底的に、ホネぬきにしてやるには、思いきって手ひどい目にあわせ、その強烈な味のまえにひれ伏させるにかぎる、と思う。

のこされた、たったひとつの切り札を、女神はにぎっている。

さいわい信平の飢えは頂点に達していた。

コンディションは、上々だった。

気はすすまないけど、こんやこそ、目をつぶって決行してやろう。信平の飢餓につけてんでやろうー。

『さ、さ、ついで！』

女神は、つとめて陽気に信平に命令するとレストルームのドアを排した。

そこには、純白の陶器が、女神の鎮座をしずかに待っていたー。

静寂なときが流れた。

信平は、石のように動かなかった。

つよいショックに、たましいをうばわれたらしかった。

しかし、満足そうに、ほほえみをうかべ、しきりに、のどぼとけを、はげしく上下に動かしていた。

女神のすがたは、とっくに消えていた。そ

のほうがよかった。

つよいショックは、かれのいっさいの思考力をうばい、もう、どんなことがあっても、絶対に女神さまと、はなれられないと思う。

たとえば、踏みにじられ、けとばされ、ひどい薬などを口中に投げられるような残酷な扱いをうけようとも、もはや、このマンションから出てゆきたくない。

目前に、白い陶器が、厳然と据えられている。

生命をもたない、この白い陶器さえ女神さまの専用品で、他人は絶対に使用をゆるされてないと思うと、これが神聖な女神さまの分身に思え、信平は陶器にむかって合掌するのだった。

けられても踏まれても、どんな残酷な命令にも喜々としてしたが、生涯このレストルームから出てゆくまいと心にちかった。

正座から身を倒し、タイルを這い、白い陶器に近よって、かれは涙をながして、その肌をさすった。

やさしい手ざわりに、やがて、ぬくもりさえさしてきたような気がする。

女神さまは、いつも使用後、いきおいよく素足でペダルをけて、はげしい音をたてて

水を流すことを思いだした。

信平は、おのれのひたいを、そのペダルに押しあてて、下へおした。顔でペダルを操作した。

はげしい水音がした。

陶器とは思えない、まるで生きものみたいな震動が顔につたわる。

おそろおそろ白いフタを開き、中をのぞいてみた。

はげしい水に押しながされて、何も見えはしない。でも、少量がこびりついていた。

しかし、敏感な信平の嗅覚は、そこに、かすかに、女神さまの体臭をかぎあてた。

『ヨシ、ヨシ、信平や、仲よくしよう』

物いわぬ陶器と、わかっていながら、そのくせ、水の音のなかに、かれは陶器のひとりごとを聞いた。

いまは、その白い陶器がうらやましかったなになげなく振りまわす信平の手が、偶然フタにふれた。気づかずに、奥のほうをのぞきこむ信平の後頭部に、たおれかかったフタがガツン！ とはげしく当たった。はずみで信平の上半身は、陶器の底にのめりこみ、はげしい水流が、ふたたび気をうしなった信平の顔を、いきおいよく叩いた。 (おわり)

随 想

人 形 の 家

睦 月 笛 一 郎

「人形の家」といってもイプセンの名作ではない。四月も末のある日、新聞のテレビ欄を讀んでいると、NHKの金曜番組「現代の映像」で、七十二才の老いた母親が、脳性小児麻痺の三十二になるわが子のために、自分の衣裳を潰して作った等身大の人形を幾十となく部屋一杯に飾っている記録が眼についた。

私は愚かにも、機能が麻痺し、生ける屍となった息子に寄せる不憫の念が、盲愛と化して、現在の不幸を否定するあまり、可憐だった幼年時代の追憶が昂じ、憑かれたように幼児か嬰兒の人形を作り、本当の赤ん坊のようににせさせとおしめを取替えている老婆の狂気を想像し、期待した。

しかし、満足に口も利けず、俯伏になったままの吾が子の、枕元に置かれたウエディングドレスの人形は、せめても人形との模疑結婚によって、ママゴト遊びに似た儚ない夢を満たそうとする母親の切ない願いを、其処に見せられた。老婆にとっては、人形におんあの息を吹き込みたい想いだったろうか。別の

人妻姿の人形は、稚拙な乳児を胸に抱いていた。全体の内容は、同じ脳性麻痺の子供を持つグループが此の患者に海を見せてやる善意がテーマであった。其処には、ヨーロッパに見られる乾いた大陸的な風土。世間と隔絶した厚い壁の密室。幾世霜に亘る異種族の攻伐による黒い血の混交が、隠湿な狂気と青い復讐を生むのとは、較べ物にならぬ日本人の柔和な淡白さがあった。勿論、私の愚かしい好奇心を満たす片鱗すら見出だせなかった。

ヨーロッパでは、特にラテン系の民族に多い例だが、わが子に対する溺愛がいつ迄も嬰兒のまままで置きたい願望となつて、密室に閉じ込めて外界との接触を断つた母親がいた。青年になつても赤ん坊の衣裳を着けさせ、同じ床に添寝をし襁褓の世話をして過ごし、発見された時には、青年は脚が萎えて這う事が精一杯だった例や、フランスに多いが、男児を幼年期から女装をさせ女として育てたのがナルシズムに移行したり、女装愛好者となつて終生を過ごす著名人がいたり、又母親が折

角育てた愛息を他人に奪われたくないという心理から、妻を迎えてやる事を拒み、性を知り猛り狂う息子に我が身を与えていた近親相姦の例もあると聞く。

極端なのは、知能の低いわが子に花嫁を与えるために、母親が男装して売春婦を誘拐して来て同衾させたが、息子が不能者と知るや女を裸にして革紐で緊縛し、昏倒する迄鞭打ちを繰返して遂に死に至らしめ、其のあけく死骸に自分の衣裳を着せ、濃い化粧をほどこして同室に置いていたという例もある。

外国の文献で知る革具等は革製品そのものが国民の生活に溶け込んでいるため、貞操帯や責具も非常に精巧でサジストやマゾヒストを満足させるものであった。日本ではサジスティックな夫婦プレイも外国のように酷薄で隠湿な苦悩の探究が見られないのは、先程も言ったような日本人の体質の故だろうか。

一つだけ不思議に思うのは、小児願望も、ゴムフェチも世界に共通のものだが、ゴムのオムツカバーを利用するプレイは外国に例が無いように感じられることだ。

ゴムフェチはぬめぬめとしたゴムの感触を感じる時、気の遠く成る程の陶酔に誘われるという。ましてオムツカバーを装着した陶酔感は最高のようだ。ゴムや浣腸小説は最近不毛のようだ。孤独の楽しみに耽溺している為かとも考えられるが、諸氏の執筆を望む。

連載 時代伝奇小説

緋縮緬地獄

ひ ちり めん じ ごく

(第四回)

白鳥大蔵

△死神浪人△

「こ、殺しやがれ。おれも立花屋の久六だ。一度死んだら二度とは死なねえ。さあ、すっぱりと殺してくれえッ」

額からあぶら汗を流しながら、久六がわめいている。

わめいている、というよりは、うめいてい

るのだ。ふてぶてしいあから顔が、さすがに血の気を失って蒼白になっている。

寺尾半九郎のために、右腕のつけねから、叩ッ斬られた、その傷あとが、がまんのならないほど痛むのだ。

大津屋出入りの医師、玉井忠庵の応急の手当てによって、かろうじて一命をとりとめた久六であった。

忠庵の手当てが、もう半刻も遅れたら、出



血のひどさのために、久六のいのちは無くなっていたであろう。

大津屋彦兵衛としても、いま久六の息の根をとめることはできない。

彦兵衛の娘のお絹とお雪が、久六の手によって、どこかへ幽閉されているのだ。

久六を殺してしまったら、二人の娘の行方がわからなくなる。憎い男だが、なんとしてでも、久六の生命は助けねばならない。

久六のほうでも、彦兵衛が自分を殺せないことは、百も承知だ。

おれを殺したら、お絹とお雪の姉妹の居所は、永久にわからなくなるぞ、と深傷にうめきながらも、逆に脅している。

「くそッ、殺しやがれッ、おれはいままで、やりてえことはみんなやってきて、もう娑婆には未練のねえ男だ。てめえらに殺されたって、化けて出ねえから安心しろッ」

間断なく襲ってくる傷の痛みに、ヤケになっている久六だった。

ここは橋場の真崎稻荷裏にある、大津屋彦兵衛の別宅。

別宅というより、彦兵衛の隠れ家とよんだほうが適當であろう。

日頃は、浪人者の寺尾半九郎を、この隠れ家に住まわせてある。つまり半九郎は、大津屋の用心棒である。

表むきは廻米問屋だが、裏へまわると巧妙な抜け荷買いをやって、巨額の利益を得ている大津屋彦兵衛としては、どうしても、こういう腕のたつ用心棒が必要である。

以前は、西国筋のさる大名に仕えて、かなりの身分にあった侍らしいが、どういわけか脱藩して江戸へ出、こうして大津屋の別宅

で、毎日酒をくらいながら、ごろごろしている。

その半九郎が、視線をじろりと久六の顔の上に落として、おそろしく非情なことをつぶやいた。

「そうか。そんなに死にたいのか。そうだろうな。そんな片輪になつては、このさき、生きていくにも不便でしょうがあるまい。よし、望みどおりに、ひと思いに首をはねてやろう。そのほうが、かえって慈悲というものだろう」

冗談ではないぞ、という証拠に、半九郎は大刀を手もとに引き寄せる。

ひきつったような顔になる久六へ、こんどは大津屋彦兵衛が、

「久六さんとやら、これもみんな自業自得というものだ。どうか迷わず成仏しておくんなさいよ」

至極まじめに言ったものだ。

さすがの久六も、これにはおどろいた。

「ま、ま、待ってくれ。それじゃ、て、てめえら、おれを本気で殺そうってえのか。べらぼうめ。おれを斬ったら、大津屋の二人の娘の居所はわからなくなるぜ」

傷の痛みに顔をしかめながら、吠えるよう

にいった。これが、いまの久六に残された、たった一枚の切り札だ。

「久六さん」

にやりと、余裕のある、むしろ温厚な笑顔をみせて、彦兵衛がいった。

「多田薬師の境内で、お前さんと一緒にいたお人、どうやらお前さんのお身内らしいが、その人をうまく捕まえたのね、なにもお前さんをわずらわさなくとも、その人の口から娘たちの居所を、教えてもらうことにしましたよ」

ぐうッと、息をのみこむようにして、久六は沈黙した。

源次め、くそッ、捕まりやがったのか、ドジな野郎だ。

腹のなかで舌うちして、久六はまた、傷の痛みにうめいた。

「そういうわけだ。お前か、あっちの男か、白状したほうの命は助けてやろう。強情を押し通したほうを、斬る」

半九郎が、左手に持ちかえた大刀の鐔もとを、右手で軽く叩いて脅した。

「ま、待ってくれ。そうか、源次のやつが捕まったとなっちゃ、仕方がねえ。おれがしゃべらなくても、あいつが吐いちゃうにちげえ

ねえ……。言う、言うから待ってくれッ」

久六は、せっぱつまった声でうめいた。

なにしろ、この半九郎には、出会った瞬間いきなり片腕を斬り落とされている。

短気で兇暴な浪人者だ。久六にとって、半九郎の顔が、死神同然に見えるのも無理はない。

「そうか、早く言え。おれは人一倍気がみじかいんだ。早くいわねえと叩ッ斬るぞ」

半九郎の大刀が、すうッと鞘走って、白く光るつめたい刃が、久六の頬をたたいた。

「言う、言う、ま、待ってくれッ」

久六は、悲鳴のような声をあげた。

半九郎と彦兵衛が、そのとき、ちらりと視線をかわした。

源次を捕まえたというのは、嘘であった。

久六をだまして、娘の隠し場所を吐かせるための、ちょっとした計略だった。

いつもなら、こんな罠にうかうかとはまる男ではないが、深傷にうめいて錯乱気味の久六は、まんまとそれに引っかかったのだ。

そのころ――

その二人の娘が監禁されている立花屋の別邸の地下部屋では、さらに妖しくも華麗な、極彩色の絵巻がくりひろげられていた。

お京と源次、八木沢左内とお絹、そして、

お仙とお雪が、それぞれの部屋で、汗みどろの闘争に没頭していたのだ。

お京の縄を解いた、まむしの源次は、もう一度、この若い女拘摸のからだを、たっぷりと楽しんだ。

野獣のように強靱な肉体をもつ源次は、疲れというものを知らない。

お京は自分でもおどろくほどの激しい声をあげてうめき、源次の肩に爪の跡を残した。

はじめのうちは、芝居で声をだしていたのだが、そのうちにからだの芯の芯からほとばしり出た本気の声で、さすがの源次もあきれかえったくらいだった。

「ねえ、これから、どうするのさあ」

と汗で襟首にねばりついたおくれ毛をかきあげながら、お京は、とろんとした目で、源次をみあげた。

この男の、まむしのような根性はぞっとするほど嫌いだ、不死身のようなからだは、嫌いではない。

「どうするって、なにがだ？」

帯をしめなおしながら、源次がきき返す。

「あの助平役人とお仙姐御のことさ。久六親分が死んだいまとなつては、あのままにして

おくこともできないだろう？」

「あわてるな、お京。これからの手筈は、おれの胸三寸に、ちゃんとできあがっているのさ。まあ、見ている。まず、銀三に、あのキツネ役人を片づけさせるんだ」

底光りする目でせせら笑いながら、源次がいった。その源次の額にも、お京との情痴の汗がにじんでいる。

△縄のこぶ▽

お絹を自分の罠の中にがっちりとはめこんで、八木沢左内は飽くことを知らずもてあそんだ。

針のように細い目が、いっそう細くなり、その目の下に、醜い小皺がうす黒く寄っていた。眉毛のうすいことが、この男の容貌を、いかにも不潔な感じにしている。

お絹はいま、夜具の上に身を投げだしていた。縄は解かれていて、お絹の足もとに、蛇のようにとぐろを巻いていた。

左脚をわずかに折り、右脚はかるくのぼして、両手は、うつ伏せにした顔の下においた無防備な、そして可憐な姿であった。

行燈の灯が、お絹のなだらかな起伏を、し

らじらと浮かびあがらせていた。

幾度か汗をかき、それが乾き、また汗に濡れて、肌はかなり濃い男と女のおいをただよわせていた。

悪徳役人八木沢左内は、細い目をうっとりとして、自分の汗のしみこんだ、その白いからだを眺めているのだ。

まぎれもなく、生娘のからだであり、反応であった。左内は満足した。

お絹の白い背面を眺めながら、ゆっくりと煙草を吸い、休息しているうちに、左内の身の内から、また、むずむずするものがうごめきだしてきた。

十分に満足して、からだも疲れているくせに、左内の官能はまた意地汚なく、いぶりだしてくるのだ。

煙草盆の上にきせるを置くと、左内は縄をつかんで立ちあがった。そろそろとお絹の背後に近寄る。

白い肩に手をかけて、無理やりにひき起した。

「ゆ、ゆるして……」

と、お絹は口のなかであえいだが、左内の耳にはきこえない。やっと半身を起こしたお絹の両腕を、舌なめずりしながら背後へまわ

し、手首をかさねておいて、ひしひしと縛りあげるのだ。

縄じりで、ときおりお絹の肩のあたりを、ぴしゃりと叩く。十九歳の素肌の反応をたのしんでいるのだ。

お絹は、ほとんど抵抗しなかった。抵抗する気力も体力も使い果たしていた。左内のさばく縄に、ただ縛られていくだけだった。

半分死んだようなそのお絹のからだを、左内はじっくりと舌の上でなにかを味わうように縛りあげていくのだ。

心身の激しい疲労にぐったりとなっていないが、気絶しているわけではない。

その証拠に、左内の手がきわどい所に触れると、お絹は小さな唇をひらいて、

「ああ……」

というあえぎをもらし、眉と眉のあいだに皺を寄せるのだ。

可憐な左右の手首を、ひとつに重ねて縛りあげると、その縄を上の方へひっぱるように吊って、力をこめたまま、こんどは胸の前へまわしていく。

縛るのが商売の町奉行所同心だが、罪人を縛るときの感触とは、まったく違うのだ。

お絹の胸の、とくにやわらかい部分へ縄を

くいこませるとき、頭のうしろへ血が集まって、すうっと気の遠くなるような恍惚感に襲われる。左内は、この一瞬を、いままでに、いくど夢にみたことか。

夢ではなく、いま実際に、お絹の肌身に、じかに手を触れながら、ひしひしと縄をかけているのだ。

「お絹、お前はもう、おれの女房になったんだ。いいか、お前は今夜から、この八木沢左内の嫁になったんだ」

胸にくいこませた縄を、改めてひきしぼるようにしながら、左内はお絹の耳もとにささやいた。ついでに、桜色の愛らしい耳たぶをかるく噛む。

お絹は、ハッとよみがえったように、

「いや、いやですッ……」

低いが、感情のこもった声でさげんだ。首を、はっきりと左右にふった。

「お前は、おれの嫁になったんだ。おれのこととを、これから、旦那さまと呼ぶのだ」

左内は、なぶるように耳たぶを噛んで、なおも執拗にささやく。お絹の恐怖に青ざめた顔をみるのが、楽しくてたまらないのだ。

「いやですッ」

憎悪のこもった声で、うめくようにお絹は

いった。せいっぱいの抵抗だった。

「ふふ、ふふふ……」

と、左内は、いかにもうれしそうに齒をむきだして笑った。

「いくら強情を張っても、もうお前は、おれのものだ。旦那さまと言わせてやる。どうしても言わないというのなら、こうしてやる」
胸に三巻きまわして縛りあげた縄を、左右の乳房のまん中から、垂直におろし、入念にしがいて食いこませてから、背後へまわし、さらに上へとしぼりあげた。

たて縛りにしたのだ。それも、ぎりぎりと力をこめて。

前面から下へおろし、中央を一直線に責めてから背後へまわす、たて縛りである。この縄のかけ方も、前から左内が夢みていたものであった。

「うッ、くくく……」

お絹は、たちまち腹を前に折って、その屈辱の縄目に泣いた。

みしみしと音をたてるような強烈さで食いこんでくるたて縄の、容赦のない苛酷な攻撃だった。足の指さきが、風に吹かれる木の葉のようにけいれんした。

お絹は知らなかったが、縄の要所々々には

数個のこぶが作られてあったのだ。そして、そのこぶは、なんの遠慮もなく、めりこんできたのである。お絹の脳天にまで、そのこぶによる屈辱の痛みが突きあがってきた。

「むッ、むッむッむッ……」

お絹は、血のどろどろに唇を噛みしめた。左内が背後で縄をひきしぼるたびに、微妙で柔軟な神経が、チリチリと悲鳴をあげる。お絹の下顎がけいれんをはじめ、唇の端から、よだれが流れはじめた。

「ふふふ……どうだ、お絹、おれの嫁になるか。おれを旦那さまと呼んで服従するか」

左内の目が、またよく光る針のように細く「さあ、立って歩け。その恰好で、部屋の中をぐるぐる歩くのだ。歩かないと、もっと痛い目にあわせるぞ」

左内の右手に握りなおされた縄じりに、力がこもった。それを、左右にゆさぶった。

縄のこぶが陥没するほどの痛烈なゆさぶりに、お絹はもう強情を張ることができずに、うしろ手の不自由なからだで、よろよろと膝から立ちあがった。

「歩けッ」

ぴしりッと、縄じりの鞭が、お絹の白いまるい尻に鳴った。

「う、うううう……」

思わずこぼれでようとする泣き声を、齒の奥で噛みしめながら、お絹は左足から前に出した。

せまい部屋の中を、夜具につまづきながら一步一步、お絹は歩きはじめるのだ。

犬のように、みじめな姿だった。いや、犬よりも浅ましい恰好だった。どうしても前に屈んで、内股になる。

なかなか、足が前に進まないのだ。たて縄のこぶの部分が、なさけ容赦なくこすれる。

足をとめると、左内の縄の鞭が、また、ぴしりッと尻に巻きつくようにして鳴るのだ。

もう乾ききって出ないはずのお絹の目からまた新しい涙がこぼれた。

からだの内側のどこから、汗がにじみ出てきて、足が動かなくなる。しかし、左内の叱咤をおそれて、お絹は必死に歩いた。股縄をはさんでの、みじめなよちよち歩きを続けるのだ。

ひとまわりすると、お絹は耐えきれずに、うずくまってしまった。からだの中心が、火のように熱い。

「どうした、立て、もっと歩くんだ」

左内が、縄じりをひっぱって、子供が縄と

びをするときにように、左右にふりながらいった。

「も、もう、かんにんして……」

縄のこぶが、こすれるのだ。

屈辱のために、お絹の全身が桃色に染まっていた。

それは、痛々しい光景にはちがいがなかったが、一歩離れた他人の目からみると、妙に美しい、なまめかしい眺めでもあった。

白い綿のようにうずくまったまま、お絹は声をあげて泣きだしていた。とめどもなく涙があふれた。お絹が肩を波打たせるたびに、その尾のようにのびている縄が、生き物のようにふるえた。

△まむしの奸策▽

「おい、銀三、おめえ、お絹をどう思う？」

と、まむしの源次が、相手の腹の底まで探ぐるような目つきでいった。

「お絹って、あの大津屋の娘の？」

いきなりきかれて、銀三はとまどった顔つきで、源次とお京をみくらべた。

親分の久六が、大津屋との取引きのために出かけたあと、この花屋敷の留守番のかたち

で居残っていた銀三を、源次のいいつけで、お京が迎えに行ったのだ。

縄を解かれているお京を見て、銀三は不審を抱いたが、源次が呼んでるよと言われて、お京ともども、この地下部屋におりてきたのだ。

「そうだ、姉娘のお絹だ。どう思う？」

「どう思うって……」

銀三も、相手の腹のなかを探ぐる。まむしと異名をとる兄貴分の源次のいうことだ。うっかり相槌もうてない。

「好きか、嫌いかときいているんだ」

じれったそうに、源次はいった。

「好きも嫌いもありゃしねえ。お絹は八木沢の旦那がしっかりかかえて、厠へ立つ間も離しやしねえじゃねえか」

「大津屋の姉妹をひっさらってきたときのお前の顔色を、おれはちゃんと覚えているぜ。」

ことに、姉のほうのお絹を、この地下部屋にひきたててきたときのお前の目つきをな」

源次は、にやりと笑った。

「兄貴、な、なにをいうんだ、おれは、なにも、あの娘を……」

「いいんだよ。かくさなくなたっていい。男が女を好きになる。かたわでもねえ限り、あた

りめえのことだ。ましてお絹は江戸でも指折りの器量よしだからな。おめえが惚れて悪いわけはねえ……」

「……………」

「おい、銀三、おめえに、あのお絹をくれてやる。あのまっ白いからだを、存分に抱くがいいぜ」

ずばりと、源次がいった。

「なんだって？」

「お絹を、あのキツネ面の同心のおもちゃにさせておくのは惜しいと言ってるんだ。おれたちをこき使いやがって、裏でうめえ汁を吸うのは、いつでも親分とあのキツネ面だ。このへんでひとつ、礼をさせてもらおうじゃねえか」

「し、しかし、八木沢の旦那と、うちの親分とは、切っても切れねえ……」

「おっと待った。その親分も、もうこの世にはいねえ。いまごろはもう、三途の川を渡りきったところだぜ」

「えッ？」

銀三はおどろいて、源次の顔をみつめた。源次は平然と、銀三の顔を見返している。

嘘ではないらしい、と銀三は腹のなかでつぶやいた。こんな嘘は、ついたところで、す

ぐばれる。

すぐばれるような嘘をつく男でないことを銀三はよく知っている。

「大津屋の用心棒に、おッそろしく腕の立つ浪人者が居てな、さすがの親分も、肩口からぱっさりだ。おれもあぶねえところを、命から逃げ帰ってきたというわけだ」

「ふうむ……」

銀三は首をひねった。

やっぱり本当なんだ。本当に親分は殺されたらしい。

銀三の脳裡にすぐ浮かぶのは、親分の久六が殺されたとなると、この立花屋の縄張りはどうなるか、ということだ。

久六の片腕と自他ともに認じている源次が跡目を狙っているにちげえねえ。源次兄哥には、その実力もある……

ここは一番、考えどころだぞ、と銀三は思案した。

いつかは源次を倒してやる。だが、いまのところ、源次はおれより腕も頭も上だ。

あせっちゃいけねえ。

せいては、ことを仕損ずる……と銀三は用心ぶかく自戒した。

いまは源次のいうとおりに動いて、源次の

やり方をそれとなく監視しているのだ。そのうちに、いくら油断のない男でも、隙ができるだろう。

銀三は、図太くかまえて、笑顔をみせた。

「兄貴、わかったよ。八木沢左内は、おれが殺る。その褒美として、おれはお絹のからだをもらうぜ」

「さすがは銀三だ。のみこみが早いぜ。いいってことよ。うまくいったら、お絹はお前にやる。あの助平役人め、いまごろは精気を使い果たして、ふらふらになっているにちげえねえ。やるなら、いまだぜ。なに、いくら相手が侍でも、油断をみすませば、仕事はかんたんさ。掏摸だって人殺しだって、やる時のコツは同じだ」

顔色も変えずに、源次はいった。

「しかし、兄貴、役人殺しとなると、罪は重いぜ」

「ヘッ、役人どころか、あんな極悪人、早くばらしちまったほうが、天下のご政道のためだ。死骸は裏庭の井戸の中へ投げこんでしまえば、未来永劫わかりっこねえよ。八丁堀の悪徳同心、八木沢左内は煙りとなってこの世から消えちまうんだ。あとの立花屋の縄張りには、おれとお前のものだ」

「よし、やる。やるぜ、兄貴」
銀三は、決心した。

△羞恥の対面▽

せまい部屋の中を、うしろ手たて縄のまま、ぐるぐると数度まわらせた後、左内はお絹を床柱に縛りつけた。

うしろ手のまま、そして、たて縄をくいこませたままだった。その無残で弱々しい姿のお絹を、床柱へ立たせたまま、ぎりぎりと縛りつけたのだ。

お絹の全身を下から仰いで、とっくりともう一度味わうためだった。立たせたまま柱へ縛りつけられ、背面は見えなくとも、前面はすみからすみまで眺められる。

「も、もう、ゆるして……」

糸のように可憐な声をだして、お絹は哀願した。

たて縄は身を裂かれるほど恥ずかしく、苦しかった。お絹は、手足のない虫のように身を揉んだ。足を固くよじり合わせた。

いくらよじっても、たて縄のきびしさからは、どうしても逃がれられない。

左内がべつの縄を持ってきて、お絹の胸を

柱ごとぐるぐる巻きにしてしまったので、いくら身を揉んでも、肩や胸の肉がわずかにふるえるだけだった。

縄は腹部にもぎりぎり巻かれて、お絹の愛らしい臍のあたりは、ひょうたんのようにくびれた。

「あ、あ、あ……」

と、お絹は顎をふるわせ、苦しげな声をあげた。

このお侍は、どこまで私を責めなぶるのだろう。私は、なんの罪があつて、このお侍にこんなにいじめられなければならないのだろう。いくら考えても、お絹にはわからない。

お絹を床柱に、立ったままで縛りつけた左内は、やっとお絹から離れて、さすがに疲れた物腰で、乱れた夜具の上に寝ころがった。

このとき、久六のめかけのお仙が、お雪をひきつれて、この部屋の板襖を、ふらりとあけた。

「あらあら、旦那、なんですねえ、そんなところに寝そべて……」

お仙は、入ってくるそうそう、嬌声をあげた。それがつかしいのは、酔っているせいだろう。この女は、いつでも酒に酔っている。

「お仙か。おれはいささか疲れた。いま、ひ

と休みというところだ」

濁っただるそうな目で、左内は腹這いになったままお仙を見あげたが、お仙のうしろにいるお雪の、ぞっとするほど痛々しい半裸の姿をみると、むっくりと半身を起こした。

お雪の鬚の根はがっくりとくずれ、腰のまわりには、わずかに緋縮緬のものをまとっただけのしどけない姿だった。その裸の上半身には、乱暴な縄をかけてあつて、両手は背後に縛りあげられている。

縄はうす汚れた細引きで、それがいつそうお雪の純白の皮膚と対照して、痛々しくみえるのだ。

不器用にかけられた縄目のあいだから、まだ完全にふくらみきらない十六歳の乳房が、しばらくするように突き出している。

そのお雪の縄じりを、お仙がしっかりと握っているのだ。酔っているくせに、これだけは離せないという手つきだった。

お雪の顔色は、紙のように白く、血の気を失っていた。

「だいぶ可愛がったようだな、お仙。こんな小娘になにをしたか知らねえが、お前もたいした女だなあ」

お雪の顔色をみながら、左内はあきれたよ

うにいった。

「なに言ってるんですよう、旦那。旦那のほうこそ、だいじな花嫁さんを、あんな床柱に縛りつけたままで、自分は布団の上に寝そべているなんて、こりゃあ一体、どうしたわけなんですよ」

どうしたわけなんですよ、ときかなくても、この部屋で左内とお絹のあいだに、いまままで何があつたか、どんなことがおこつたか百も承知、二百も合点のお仙なのだ。

「ところでお仙、この部屋へなんの用事できた？」

「なにね、このお雪が、姉さん姉さんといって、あんまり泣きわめくので、お絹の顔をひと目みせてやろうと思つて、お邪魔にあがつたんですよ」

「そうか、お前も親切な女だな。それじゃ、存分に姉妹の対面をさせるがいいや」

左内は、お仙の腹のなかを、すぐに読んでやりとする。

姉妹にとって、これはなんという苛酷な、羞恥に満ちた対面だったろう。

お雪は顔をあげ、よろめく足を一步前に踏みだしながら、

「おねえさん……」

と、あえぐようにいった。哀感をいっばい瞳にたたえて、いまにも泣きだしそうな声音だった。

が、お絹は、ハッとおびえたように身をすくませた。恥ずかしいのだ。とても妹に見せられる姿態ではないのだ。

しかし、いくら身を縮めても、妹の目からこの締めあげられた姿体をおおい隠すことはむずかしいのだ。

「くくく……」

と、お絹は、のどの奥で泣いた。

あまりのなげなさに、お絹は我慢できずに嗚咽をもらした。

どうして妹の前に、このような屈辱の姿をさらさなければならぬのか。

お絹の頬に、涙がこぼれた。涙は、あとからあとから湧きだして、お絹の顔をぬらしはじめる。

ああ、なんという恥ずかしいことか。おぞましい凌辱をさんざんにうけて、男の汗と脂を吸いこんだこの肌を、妹の前にさらさなければならぬとは……。

左内が、ぐいと鎌首をもたげて言った。

「お絹、顔をあげろ。そして、お雪に言え。

私はこの左内さまの嫁になりました。しあわ

せでございます、と」

左内は、うすい唇を、へらへらとひらいて笑った。下品なキツネ面が、いっそう卑しくなった。

お絹は両肩を固くすばめて、顔を伏せた。

涙が、顎のさきから乳房の上にしたたり落ちた。乱れて半面におおいかぶさった髪の毛が、黒い波のようにふるえている。

左内の言葉の意味と、お絹の反応をみて、妹は敏感にさとした。

「おねえさん！」

妹の声に、お絹はさらに身を縮めた。しかし、いまのお絹は、妹の視線からどこも隠すことはできない。両腕は背後に、固く縛りあげられている身だ。

お絹は、お雪の視線から目をそらし、肩の肉に顎をうずめるようにして、足をよじり合わせるばかりだった。

お雪の顔が、強い悲しみにゆがんだ。

姉の身にふりかかっている運命に、気を失いそうになる。

なぜ、なぜ自分たち姉妹は、こんなひどい目にあわなければならぬのか。お雪は、いくら考えても、わからないのだ。

お雪のからだも、お仙のためにさんざんな

ぶりものにされている。

しかし、お雪の場合、相手は女だ。そこに多少の救いがあった。姉の場合、救いというものが全くないのだ。お絹は、完全に踏みにじられてしまったのだ。

「お絹、女になったしあわせな顔を、妹によく見せてやれ」

左内が、うっとりした顔でいった。しあわせなのは、この悪徳役人のほうなのだ。

「おねえさん……」

たまりかねて、悲痛な声で呼びかけると、お雪は一步でも姉のそばへ近寄ろうと、足に力をこめた。

が、お仙にすかさず縄じりをひかれ、胸からぐいとのけぞった。からだが安定を失ってお雪はたわいもなくよろけると、左内の寝そべっている顔の前へ、片膝をついた。緋縮緬の裾が、大きく割れる。割れてもうしろ手に縛られている身では、もとへ戻すことはできない。

左内の右手が、ひょいとのびて、縄目のあいだからとびだしているお雪の小さな乳首をつまんだ。

「ひいッ！」

と、お雪は黄色い声をあげて、胸をひねっ

た。その声の激しさに、思わず姉は顔をあげた。

左内に、胸の小さな先端をひねりあげられている妹の無残な姿をみて、お絹は思わず声をかけた。

「お雪ちゃん！」

しかし、お雪は左内の執拗な攻撃に、顔面をひきつけて苦悶し、姉と顔を合わせることはできない。

源次からの命令をうけた銀三が、この部屋の板襖を、無言のまま、するりとあけて立ち上がったのは、ちょうどこのときだった。

左内が、役人の目つきになって、この不意の闖入者を、すばやく見とがめた。

「なんだ、銀三、ここはお前らの入ってくる所じゃねえ。むこうへ行ってる！」

傲慢な口ぶりで、ののしるように言った。

自分は権力者だという意識が、常にこの男にはある。

掏摸の元締と手を組んで、不正な快楽をむさぼっている最中にも、自分は役人だという特権意識は忘れない。掏摸の子分の銀三の存在なんか、左内の目からみれば、自分に快楽を奉仕する道具としかみえない。

それは、お仙とて同じことだ。自分は親分

の情婦だという頭がある。久六の子分は、自分にとっても子分だという考えでいる。

銀三の身辺からただよう不穏な気配に気づかず、お仙は癪症にいった。

「妙な真似をすると、親分にいつけるよ。

いいかい、この部屋はね、お前たちが入れない部屋なんだよ。八木沢の旦那にご無礼じゃないか。さあ、出ていくんだ。出ていかないと承知しないよ！」

銀三にとって、お仙とお雪が、この部屋にすることは計算外だった。

しかし銀三は、自分の身内からあふれ出る殺気をおさえきれなかった。

「なにを言やがる。江戸市中の悪党を取り締まる役人が、掏摸の親分と結託しての悪事ざんまい。てめえもこのへんが年貢のおさめどきと観念しろい！」

懷中からいきなりあいくちを引き抜くと、半身を起こした左内の胸板に、力いっぱい突き立てた。まったくの不意うちに、

「ぐわッ」

と、左内が声をあげた。

避ける余裕はない。あいくちの刃は、三寸ほども、左内の心の臓に突き刺さったのだ。

鬼同心とおそれられている左内だが、ひと

たまりもなかった。両手で虚空をつかみ一度は立ちあがったものの、すぐに膝をついてくずれ落ちた。

「あ、あ、あ……」

と、思いもよらぬ事態に、お仙は腰をぬかし、瞬間、啞になった。

「いままで、おれたちを馬鹿にしてさんざんこき使い、自分たちばかり楽しんできやがった罰だ。ざまァみろ！」

銀三は蒼白になり、肩で息をはずませながらいった。

「ぎ、ぎ、銀三。お、お前ってひとは……」

のどをしゃくりあげながら、お仙がどなった。尻でうしろへいざりながら、襖口から廊下へ逃げようとした。

銀三は、すばやく廊下を背にし、襖口に立ちはだかった。

「うるせえ、静かにしろ。だまらねえと、おめえもあの世に送ってやるぜ！」

銀三は、大声をあげて威嚇した。

お仙の顔が脅えて醜くひきつった。

銀三の大声をききつけた源次が、あわてて廊下をやってきた。

「どうした、銀三、ばかに騒々しいじゃねえか」

いいながら、源次はすばやく室内を見まわした。そして、事の成りゆきを見てとった。うまくいったな、と源次は腹の中でつぶやいた。

左内は、胸をあいくちで刺されたまま、仰向きに夜具の上にひっくり返っている。

あのあいくちをいま引っこぬくと、この部屋が血の海になるな、と源次は計算した。血だらけになっては、あとの始末が面倒だ。あのまま、井戸の中へ投げこんでやろう。

「兄貴、ついでに、このお仙も殺っちまおうじゃねえか」

興奮した馬のような顔になって、銀三がいった。銀三にとって、人殺しは初めてであった。興奮して赤くなったり、青くなったりしている。

「待て。あわてることはねえ。これだけの女だ。下総あたりの宿場女郎に叩き売っても、四両や五両にはならあ」

と、源次は、こんな場合でも、損得の勘定は忘れない。

「源次さん、た、たすけておくれよ。あ、あたしゃ、命が惜しいようッ」

お仙は泣き声をあげて、源次の足もとにとりすがった。

そのお仙の胸を、どんと足で蹴とばし、「うるせえ。おい銀三、この女を縛りあげてさるぐつわでも噛ませておけ」

と、源次がいった。

「げ、げ、源次、お前まで、あたしを裏切るのかい。あたしを裏切ったら、どうなるか、お前たち知ってるだろう。あたしには、親分がついているんだよッ」

お仙は、這いまわって逃げながら叫んだ。

「わかってらあ。けどな、いまからこの立花屋の親分は、この源次さまだ。よくおぼえておけッ」

源次は、お仙の顔を大きく一発張りどばしてどなり返した。

銀三が、お絹を床柱に縛りつけてある縄を解いた。

そして、その縄で、お仙をうしろ手に縛りあげるのだ。お仙は、ひえッと悲鳴をあげ、「ち、ちくしょう、あ、あたしを、どうしようっていうんだいッ！」

あばれまわったが、源次にもう一発なぐりとばされると、ひっくり返って気絶した。

無抵抗になったお仙を、銀三は雑作もなく縛りあげる。

縛りあげたお仙を、ごろりと乱暴にころが

しておいてから、銀三はふりかえって、お絹の裸身へ、ぎらぎら光る目をやった。

「兄貴、この娘は、たしかに、おれがもらってもいいんだろうな？」

「いいともさ、約束だからな」

源次がこたえた。

床柱からは解放されたものの、お絹はまだうしろ手に縛りあげられたままだ。お絹もお雪も、目の前で突然おこった凄惨な人殺しにいまにも気絶しそうな顔色になっている。お絹は床柱のそばにうずくまって、貝のように身を伏せているのだ。

銀三は、そのお絹の縄じりを、貴重なものでも扱うようにひろいあげた。

「こい、こんどは、おれが可愛がってやる」そして、お絹をこの部屋の外へ引き立てていくのだ。

「銀三、どこへ行く？」

と、源次がきいた。

「おれのだいじな女房だ。上へ行って着物をきせ、紅白粉をつけさせるんだ」

銀三の表情も声音もうわずっている。

それもいいだろう、と源次は思った。

初めての人殺しで興奮した神経をしずめるには、女を抱くのが一番だ。

お絹は身をよじり、眉を寄せて、そのおぞましい感触を耐えている。齒の根が、カチカ

「お、お絹、可愛がつてやるぜ」

すでに、左内のために汚されているとはい

▽賞金△

入選作品	一席	1篇	五万円	10篇
入選作品	二席	1篇	三万円	10篇
入選作品	三席	1篇	一万円	10篇
入選作品	四席	1篇	五千円	20篇

▽内 容△

一、特異な風俗文献誌を標榜する本誌の内容にふさわしい力作を、読む雑誌としての新しい脱皮を企図する本誌の内容充実のため、広く読者の間から懸賞募集いたします。

一、S並にMは勿論のこと、各種各様のフェッッシュ一般、女性切腹、男性切腹、男女性譚美、女相撲、女斗美、生首狂崇、変装、妊婦嗜好、見世物奇態珍聞、奇習珍奇風俗、風俗文献紹介、同性愛、アブラブ等をはじめとして、その他古今東西に亘る特異風俗に関する題材を広くとりあげて下さい。

一、広範囲に大いに新分野の開拓による力作を歓迎します。特に従前本誌にて余り扱っていない分野の傑作をお待ちします。

▽規定△

一、形式は創作、小説、読物などのフィクションも結構です。し、又自らの体験による告白や手記、見聞記、実見談でも結構です。更に論説、意見、エッセイ、感想、手紙、随筆、シナリオ、戯曲などで、如何なる形式でも最もお得意のものをを選び下さい。

一、応募作品は、すべて未発表の自作の作品に限ります。作品の中に引用部分があれば、その出処（作者、書名など）を明記願います。以上の二枚は四百字詰原稿用紙換算にて三十枚の原稿用紙まで。必ず二百字詰又は四百字詰の締切日は、毎月十五日。入選作品は順次、次の誌上に発表いたします。他の一般原稿と区別するため、第一頁に「懸賞」又は「お書き下さい」とご投稿の原稿で返戻の必要のあるものは、送料の封の上、その旨添記して下さい。返信料同封の送付先は、大阪市住吉郵便局私書函第41号、暁出版株式会社、奇ク編集部懸賞原稿募集係宛。必ず郵送（第一種郵便）によつて下さい。直接の訪問は固くお断りいたします。す。下さい。採否は誌上発表を以てご承知願います。

たまらなくなった銀三は、お絹の背後から

羽がいじめに抱きついた。

「ひいッ」

と、お絹は悲鳴をあげる。肩をふって身悶えしたが、夢中になった銀三は離れない。

「おねえさんッ」

と、お雪が声をあげて姉のあとを追おうとしたが、その縄じりは、源次の手でしっかりつかまれていた。

「銀三」そんな廊下の途中で、ががつする
んじゃねえや。早く上へつれて行け。もうそ
の女はお前のものなんだ。布団の敷いてある
部屋で、ゆっくりと抱いてやれ」
と、源次が舌うちしていった。

しかし、このとき、親分の久六の白状によつて、大津屋の娘二人を助けるために、用心棒の寺尾半九郎が、この花屋敷の門際まで駆けつけてきているのを、銀三も源次も知らなかった……。



吹寄せ S M アラレ

原

砂

土

S M 拾遺

平凡パンチの五月六日号に「パンチアートギャラリ―」と題して、七人の女優や歌手の「女のコがいちばんキレイにみえるとき」の図が夫々一頁二頁大に描かれている。カラー刷りである。内藤洋子のそれは、奇クの或る種のマニアを飲ばせること確実だと思う。全裸に乗馬靴（らしい）の洋子嬢がまたがっている素晴らしい場面なのだ。乗馬マニアの方の一見をおすすめする次第である。

この平凡パンチ誌は同号で「クールでショッキングな新感覚 S & M の世界」と題して六頁に亘って S M に就いて書いている。「時代は進んでいる。今や S & M の時代。サド、マ

ゾ。現代社会は、サド、マゾで動かされている。キミも S & M には、無関係ではいられない。新しい、クールな S & M とは何か？」と大層仰々しい前置で始めている。

「なめるノかじれノ」「小便を飲めノ」「ムチ打てノ」「拷問しろノ」「イレズミをしろノ」「オナンをしろノ」と景氣の良い文句で S M の説明をしている。そして「S & M は創造的」と言って、グラフィック・デザイナーの高木祥子嬢が語っているが、これは S M のデザイン化を語るに尽きて、その高木嬢が S M をプレイするの否かは、別に読みとれない。言葉として S M を用いて、子供達の関心をひこうとする六頁と感じた。

このテの週刊誌の限界と生命力の弱さを感じ

じさせる特集であると感じ、S & M を八方破れの何の深みもなく、仰々しく取扱わねばならないとき雑誌はすでに終焉に至っているのではないかと思うばかりである。S M を子供の遊戯にもちこむのは危険であると思う。S M の取扱い方には、大人向けの重厚さを要するのが、雑誌編集の責任者の良識ではないだろうか。奇クの今日までの経歴に伺うことのできる、深海の流れのような大人のムードが大切なのではないかと思うのである。

「話の特集」誌の五月号に、原由貴子氏その他の、浣腸マニアの方々の飲びそうな題の文章がある。「ブリキのおまるにまたがりて」文章を追って言葉を拾う。「くそったれ!」「おケツ!」「おケツに入らずんば虎児を得

ず」「自分のおケツを気にしながら」「おケツはやめてちょうだい」「小児病患者め」長新太と云う人の「悪口バンザイ!」という文章です。「」内の文句は私の言葉ではありません。誤解なきように。

奇ク六月号で痛く私の胸を打ったのは園部まり氏の「私の夢」であった。浣腸マニアの園部氏の詩に託するところが切ない。そして憎い。彼女はの中で「私、Sなのかしら、それともMなのかしら」といつている。SとMが同居しているのが分る。SMは同居して在り、正常と異常は、正しくはSMによって区別できない。正常人はSM双方を属性として持っている。持っていてこそ正常人なのだと思う。彼女の文章は読む者をして心情を想わせて切ない。又、憎い。いい詩だと私は感動する。

河野多恵子という作家を或る著名な作家はマゾ的な作家だと評している。作品の内容がマゾヒズム的であるということらしい。彼女の作品に「美少女」という題のものがある。これなどはまさしくマゾ的である。主人公の女性と同じ職場の一人の男に係わる。その男と女主人公は特に恋愛関係にあるでもなく、それでいて無関心というのでもない。男は働

きながら、夜勉強している。主人公は、男の妹が上京したりすると、その妹を案内したりして世話する。半ば暗黙の了解の上に立って男が志を遂げたとき、主人公は結婚できるかに思われる筋の追い方で話は進行していく。中学生だった、かつて自分が案内したりしたことのある男の妹が成長したところ主人公は男と、男が妹だと称する女性と三人で会する。

主人公は、男の称する妹が、かつて自分の見知っていた妹とは思われないほど美しく成長しているのに驚く。その妹は、少女っぽく、そして妙令に相応しい清潔な美しさであどけない明るさを持っていた。そして、主人公の前で妹らしく振舞っていた。男はやがて経理関係の国家試験に合格する。主人公は、いよいよ彼から求婚があるものと考ええる。彼女はとうに、婚期を逸した年令に達してもいた。彼女は地味に、彼につくしてきたのだった。或る日、男から郵便物が主人公の許に届く。結婚の記念写真だった。男の隣には、いつか妹だ、といっていた、あの美少女の顔があった。概ね以上のような筋である。「美少女」はそれが美しければ美しいほどマゾ的性格を強くする。

かつて、奇ク誌上で団鬼六氏の随稿の中に

ある中小企業の借金の弁済不能に乗じて、貸金のかた替りか、期限の延長かのために、金融者が、相手の妻の身体を以てしたという、話があった。この話などは、人生の経済的社会的苛酷さと男と女の世界のエロティシズムを織りまぜて、合わせて、人間のこころの裏哀しさを強烈に感じさせる話であった。随分前の奇クの中で読んだのであるが、そのころ私は学生であったし、団氏の文章の旨さもあって、人生の何かも感じさせられ非常に感動的だったことを憶い出す。中小企業主の妻は美人であったし女盛りの身体つきであった。

私は、社会と人生を考えると、殊に現代日本の経済社会の裡に、男の生き方を教えられると共に、女に対する男の在り方の現実的正当性を感じることができるようになった。ところで、団氏のこの話によく似た筋の小説を他で見かけた。婦人生活という雑誌の一九六六年十一月号に立松由記夫という人の「秘められた醜聞」という作品が、載っている。この作品がよく似ているのだ。二五才の女主人公は弟と二人で生活している。彼女は弟の母代りを物心共に努めている。彼女には愛人がいる。そして結婚を迫られている。そんなとき、弟が勤め先の不動産屋の金を持ち逃げ

する。その主人は二十万円の金を払ってく
れなければ、警察に訴えるという。彼女は弁
償することを約する、が返せる当てはない。
期限が来たとき不動産の主人はいう、「あん
たが犠牲になるんですな」「あんたの弟思い
には負けた。借用証を書きなさい。但し、月
五万円ずつ払っていただきます。方法は、わ
たしと月に五回会って貰うこと、それならい
いでしょう」後は絶望的な破局に至るという
ことになっている。映画「人類学入門」の中
で、気の狂った女が、大声で歌っていた「お
とおんなどとはりしごと……」を想い、
鉄格子にはりついて叫ぶように歌いながら、
歌った後で大粒の涙を止めどなく落していた
あのシーンが思い出される。実に、この世は
男と女の絡みあいのようなものです。

S M 的 ヒューマニズム

愛の大型おむつ

毎日黙々と二十数人

島田療育園に針の奉仕

これは大見出しで、朝日新聞の昨年十一月
一日附に載った記事の活字の写しである。重
症心身障害児のためにおむつが足りずに困っ
ているのに対して、都内の小母さん達が奉仕

を買って出たという報道の一端である。おむ
つという文字でドキリとするようになったこ
とは習い性とはいえ空怖しい気がする。いわ
ゆる浣腸マニアはおむつの文字に弱い。その
性癖を、小児症とか心身障害児並みと称され
ようと仕方ないじゃないのである。

水城由紀子、原由貴子、園部まり各女人の
文章による告白に接してよりこの方、それに
応じるかのように同好の群に進展したことは
我が事ながら如何である。女人の魅力にとり
つかれて、それに相応しい存在となろうとす
ることは、かなりマゾヒズム的であろう。
しかし、それが悪しきこととはいえない。サ
ドもマゾも双方を容認してこそ近代文化を撰
取したものといえるのではなからうか。人間
行為の不合理性は、社会的文化的諸種の歴史
に省みるも、つまるところは、解放の非連続
的連続ではなかったか。

私は、花と蛇の作者、団氏に於てさえも、
サドとマゾの混合的存在を感じる。又、奇ク
のヒーロー的人物、辻村御大にも同様のこと
を感じる。そして、双方に、好人物を感じる
のである。それでいいのだ。奇クとは所詮、
そんな雑誌なのだ。いい雑誌だと思う。

藤井重夫に「佳人」という佳作がある。こ

れは、かつて日活で「芦川いづみ」の演じる
ヒロインを主役にして映画化されたのだが、
その中で、悲運の彼女は、ある旅館のバカ息
子の嫁となり、身障の身を以て嫁して、夫の
要求に応える方途もなく、夫のサディスティ
ックな責を受ける。床を並べた夫婦の部屋に
情婦を連れ込んで、妻によく見ることを命じ
て、情婦と戯れるのである。この作品は、映
画、小説共に反響を呼んだのであるが、泣い
た多数の人々は、マゾヒズム的である。概ね
お涙頂戴のものは、人間の深奥にあるマゾヒ
ズムを呼び喚すのではないか。

私の友人に D・T という、日本主義者がい
る。彼は、フランクルの「夜と霧」を読ん
でしみじみと、しかも断言的に、人間は思いつ
くことは何でもやるものだ、といった。その
彼氏、妻帯してからというもの、人物が変っ
たように寛大になり、さる日、私と対した折
に、妻とのプレイを口に出させた。肩に跡が
残るのが、翌日、知人にみとがめられないか
と気にかかるのかといった。独身にて、多分に
観念的遊戯者たる私をうらやませる。

私の親友に T・N という男がいる。この男
はまさに T N 火薬のような男で身辺の者をし
て「あいつは何をやり出すかわからない」と言

わせるような男だが、一般人は彼のことを男らしい男と評するが、私の知る限り、極めてマゾ的傾向を帯びている。彼は、R・Nと称する女人に心を寄せていくせに、言い寄ることを世評に従って男らしくやることをしない。そして私に語るには、女に惚れるのは、マゾ的であってこそ男らしいのだという。そのくせ、R・Nには身も心も捧げつくして、女人の思うままになり、私の前で、愛の不条理を泣くのである。私は、その態度にいら立って、サディスティックに、そんなに好きなのなら、勇気を出してアタックしろ、さもなければ石原慎太郎や、三島由紀夫の上には出れないぞ、というが彼は、しかし、しかしを連発して言う。石原も三島も、君の言うようにサディスティックじゃないよ。二人共女人に対してはマゾ的じゃないか。だから俺も二人に劣ってはいないよ。三島はミッチーにふられたし、石原は手前の奥方を大切にしないで、小説に於ける思想と実相とは異っているじゃないか。やはり、彼は依然として、R・N女史を慕って止まぬ現況ではある。その証拠に、彼は、つい先頃、R・N女史の勤務先に電話をして、R・N女史は未だ独身かと問うた。そして、未だ未婚ですよと交換台女史

にいわれてひどく安堵して、私に喜悅して語った。いわく、天は我が心を守り給えるなりと。私は、彼の生き方をバカげているとは思わない。マゾ的ではあるが、しかし、S Mの同居は、決して誤りではないし、世間に迷惑を及ぼしている訳でもないからである。私はT・Nをやはり親友として尊びたい。たとえばマゾ的であっても、反面のS的なものが対社会的に生かされれば、T N火薬は人数のために少しは貢献し得ると思うからである。親友のために、R・N女史を神の如く崇め、慕う彼の心情が、神なるものの力によって守護されることを祈りたいのである。願わくばR・N女史よ、T・Nの心を汲むことをなし給え。

私の知る婦人で某女は年増に属する年令であるが、私はその人に朝日新聞の「明るい社会賞」を贈りたいような業績を持つと思ひ、実質を重じる限り、朝日が取り上げないことを不思議に思うほどである。私は、その人のことを手帳のTEL欄に、バターフィールド^{エイト}と仮称している。四畳半で、明日を生きぬくための施術をして下さるのである。私に対しては、(この点が文献的価値を持つのであるが)この物価高の時勢に、三〇〇円で術を

施して下さるのだ。今どき、トルコでも四五枚の聖徳太子が要るのに、硬貨を、一二三とこぼせば、回数如何を問題外にして下さるのである。笑い話のようであるが、実話なのだ。色々変った施術方として頂ける。まさに現代の神様のような人である。別段、恋愛をして云々ではなく、サツと行ってパツとぬいで、——である。そこへ行っての帰り、街に行き交う野郎の欲求不満の冴えない顔を見ては、哀れむのである。サド的快感を覚える訳である。

私の知る人で、これは女性であるが、ある日ある時、葉書をくれた。この女性は非常に人生の智にたけた人だが、私と接するのに、一度も素直であつたことはない。私が長文の手紙を送ったときなど、次に会ったとき、あんな長文を草するには随分時間が掛かったでしょうとか、郵券が余計に必要だったでしょうとか、皮肉る。こちらが心をこめて一心に訴えるのを皆目無視して、そして憎いことにはその後、ニヤリと笑うのである。そんな女史であるからサディスティックに私をイタブル。葉書の件でも例に洩れず、私の宛名を、原砂渡と書いていた。しかし、このサディスティックな女性が、文面では、「仕事は苦し

いですが、身のひきしまるような快感を覚えます」と極めてマゾヒズム的なことをいつているのだ。SとMの同居を感じて、愛しく思いうめのない存在なのだ。

さる私の知る女人は「神とは恋人のことを言うのよ、だから神が代ることもあるのよ」と極めて実存主義に近く、かつ妥当なことを言った人があるが、遠藤周作という作家は、神が存在するのなら何故信者の受難の場に神力を発揮すべく姿を現わし、発言しないのか何故神は沈黙するのか、と問い続けている。氏の生涯に亘るであろう課題には、新興宗教の多数の信者は、興味を示さないだろうと思う。彼らは信じた限り疑われないからである。これは信ずる者こそ救われる式の公式で、狂信者の強みであろう。しかし、この狂心が怖しいのだ。新興宗教の信者達は、大先生を崇めて、かつてのナチスドイツでのヒトラーへの盲信的服従と同じ狂信性を帯びているからだ。これは人智の退却を意味している。E・フロムの忠告は、彼等狂信の徒には、通用しない。彼等には、我が現行憲法の世界有数の地位も、この憲法の有難さも分っていないのだから困るのである。彼等の服従はまさしくマゾヒズムの偏向的顕在化であって、教育

の真なるもの不在の日本にあって、次代を担うものの課題なのである。いかにしてそのような狂信者群を生ぜずに、自律の国民を創るかということが。SとMとは共に共棲して、相互的に顕在して抑制を可能にすることによるし、自律が保てるのである。奇クの賢明なる読者には、この点からも人類文化への洞察の正しさとヒューマニズムの正当な自覚に目覚めた人々として同慶に堪えないのである。さて、神を質して苦悩する遠藤氏は、聴くところによれば、女性を言葉でもって、エクスタシーに達しさせるとのことである。彼は女人と共に歩行して、何事かを喋っているが、同行の女人が、突然、坐り込むというのである。氏の弁舌が、女人をして、昂ぶらせて、性の極致へと導くというのである。一匹の野郎としてうらやむ限りであるが、この話を基にして、私の体験を語れば、私は女性と対して、時折不思議に思うのは、コーヒーを飲みながら話していると、「ちょっと失礼、トイレはどちらかしら」とくる。私はしばし女人を待ちながら、今ごろ個室でパンティを下したかな、と想像する。このようなことがしばしば実験されれば、私の推理は異常に働きはじめる。さては、この手は一の作戦か、

と。定かでないが、神妙に女と男の対話の途中で、トイレに行き、そして、カンノン様に接しようとする女性の心理と生理はいかなるものでありましょうか。ある刻など、双方が沈黙して凝視し合って、女性の方が眼をうるませてきて、そして、トイレに赴き、暫し十分ばかり、戻られないということもありました。

私の知る女性で、大変あけっぱろげな性格の人があり、下着の話まで自由にする人がありますが、その女性、「私はナイロンパンティは穿かないの。ナイロンは通気性がないので、蒸れて気持ちが悪いのよ。だからモメンのものしか穿かないの」と仰言る。そして、パンティは肌にピッタリとして引き締まっているという。私が、ブリーフは女性のパンティのようで嫌いだ、というと、「あら、ピッタリ引きしまっていないじゃない」と来た。その女性「男のモノはグロテスクで、ちっとも可愛くない」という。これでは男としての私の立場がないので「女の方がグロテスクだ」と強弁したが、内心はカンノン様の方が美しいやネ、である。それでも、男は頬張らねばならない「しかし、貴女の見たグロテスクなもの、で男性一般を、グロテスクと称するのは誤り

だ。この僕のモノまでグロテスクといわれては困る」といった。グロテスクとみなされては女性の全員に劣等感を持たなくてはならないこととなる。俺は、俺の息子を誇りたいのだ。彼女は女らしく静かにいった。「女性の奥ゆかしいのよ」成程、おくゆかしいことであろうと、私は納得してみせた。現代の女性性は強くなりましたネ。これも人権の拡張の

実証として喜ばなくてはなりません。団氏がアングラについて語っておられましたが、このアングラという最近のブーム状況は団氏の取扱われた演劇の領域においてはやはり下火となりましたが、歌の方ではアングラレコードが受けて、既成の権威的レコード会社並びに作詞作曲の人々もアングラに食われてしまった恰好です。

☆奇クサロン ☆原稿募集

一、大好評の『奇クサロン』の掲載に適した短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもので、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、S M 時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員に対して編集部作成のフォトを贈呈いたします。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に対しましては

枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、安井喜久子夫人が夫婦プレイの緊縛アイデアを募っておられますから、同好の方は御遠慮なく編集部気付にて御投稿下さい。投稿者全員に対して喜久子夫人のプレイフォトを贈呈いたします。アイデアの参考には、四月号の「安井喜久子夫人を訪ねて」／S M 一〇〇問／をお読み下さい。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映画スチール、イラスト、漫画などに対し、少しでも応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に対しましては、出来るだけ高価に購入したいと思しますので、お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を附してお申込み下されば、折返しお返事を申し上げます。

本来、アングラは、アンダー・グラウンドと称するのが正称であって、地下運動、又はレジスタンスの活動に、由来するものではないでしょうか。少くとも歌についてだけ抵抗者群の勝利だといっていいのではないかと思います。そして、既にアングラレコード及びその歌い手達はアングラではなく、陽の当る場所を堂々とノシ歩いています。これはいいことだと思います。

歴史の進展とは、このようなことのくり返しによって、遂げられていくのではないのでしょうか。暗い時代を堪えて、冬から春に向かうように、正しいもの、伸びるものは伸びるのだという確信こそ人類の希望のように思えます。奇クの歴史も、人類文化の歴史に相応し、弾圧にあい、控え目に控え目に生命を持続しながら、尚、多数の支持者を持ち、今日あるとき、愛読する者は、奇クのよりよく陽の当る時を信じて、讃えたいと思うのです。「新しい文献誌」は後年「古くて尚新しい文献誌」として、文献的価値を持ち、歴史学の一端に文献としての価値を誇るようになるかと確信します。

ヒューマンなるものよ、ヒューマニズムを信頼せよ。

漫談——一夜物語

薔薇と蜜蜂

(8)

第四章 うでくらべ

田代俊夫

28

その日の夕方、予定の時刻よりやや遅れて
ゴールデン・バットの一味は本拠へ帰還して
きました。

「開け、大根！」

たちまち、神秘的光景が眼前に現われ、紅
さそりは、あっと息を吞みました。

前衛美術です。ああ、造形美をその極限ま
で追求する弟子瓦流オブジェではありません
か。入口に故・ボンヘッドの首が安置され、
うらめしそうな眼付きで睨んでいるのです。
その安置台はストライクの尻です。ぎっちり

と後手に縛られ猿ぐつわをかまされたストラ
イクは、あろうことか恥しらずにも毛むじや
らけの臀部を入口に向けて突き出し、中空に
突き上げています。その難しい姿勢の詳細は
第24節のメロンのそれと同じですから参照し
て下さい。

礼儀知らずのストライクの上方に、ボンヘ
ッドの首なし屍体が両股を開いたY字型に天
井からぶら下っています。肉屋の冷蔵庫に見
られる逆吊りといえましょう。

これぞ不吉の象徴でなくして何であろう。
たちまち上を下への大騒動となりました。コ
シマ・キイ婆さんは地下の土牢に監禁されて

います。そこに閉じこめたはずのメロンは、
むろんいない。財宝室の宝物は無事だったが
嫉妬旋風の荒狂ったとみられる女首領室の被
害は甚大の一語に尽きます。時価数億の高価
な宝石類はごっそりと跡形もなく、デヨー
ル本店別誂えの豪華なドレスは、ずたずたに
引裂かれ、紅さそりご自慢の大三面鏡は、め
ちゃくちゃに破壊されております。おまけに
光輝あるGB団の団旗は灰燼と化し、女首領
秘蔵の黄金造りの太刀も持ち去られているの
です。

会議室の入口に丁重な文面の紙切れが貼り
つけてありました。

○
親愛なるゴールデン・バット団首領紅さそり殿、並びに団員諸紳士方にお知らせします。メロンはわたしの大切な主人ですから返してもらいます。長い間本当にありがとうございました。尚、ささやかなお礼のしるしとして、つたない生花を展示しておきましたのでよろしく御賞翫下さい。

○月△日

メロンの正妻 サファイヤ

各位

○

「追伸」として、SM夫妻の行先が図入りで記してある。

真相が明らかとなりました。感謝状まで受取ったにもかかわらず、紅さそりは頭髪を逆立て毗を決して激怒しました。

団員諸先生もかんかんです。それぞれ被害があるのだから無理ありません。

「あ、おれのギターがない！」

「畜生！ スゴロクを持って行きやがった」スリイアウトとナックルがケチくさいことを言って逃亡者に怒りをぶつけます。ピンチヒッターも沈痛な表情です。

「どうしたい、兄貴。金目のものでもパクラ

れたんか？」

「いや、わしのは、金目のものより大事な学術論文の草稿が……」

事の次第をストライクとコシマ・キイより聞くと、紅さそりは直ちに全員出動命令を発しました。不埒きわるまる両名を追跡し、何が何でも逮捕せねばならぬ。かくして、紅さそり以下八名の団員は手に手に武器を携え馬に打ち跨ると、全員疾風のごとく駆け出してきました。

いよいよ、凄惨熾烈な女のいくさは必至の状況となつてまいりました。

一方、一頭の馬に相乗したメロンとサファイヤは、森を抜け砂漠を駆けて、休みなく馬を走らせました。だが、相乗りだから速度はあまり出ない。そのうえ、腹に一物ある女騎乗者は、わざとゆっくり馬を進ませるので

前節で大言壮語して赤恥をかいだメロンは最初のうちおとなしく女房の後に坐っていたものの、馬の速度があまりに遅いので、いらしてきました。

「おい、もっと速くしろったら。こんなものろ運転じゃあ、すぐに追手に摑まっちゃうじゃないか」

「そんなこといったってこれ以上の速度は、あなたには無理です。すぐ音をあげるに決つてゐるんだから」

体力の限界を一方的に認定されて、メロンは不愉快至極です。この際、細君のやさしい思いやりなど有難迷惑だとはかり、お菓子を買ってもらえなかったダダッ子よろしく尚も運行速度のアップを迫ります。

「大丈夫だっていつてゐるだろう。弱音をはいたりするもんか。だからもっと早くしてよ。ねえサファイヤ、ねえったらねえ。：おい、聞えないのか！」

突然、その願いは容れられました。とたんに、メロンは悲鳴を挙げてサファイヤの腰にしがみつきました。徐行運転が一気に加速され、最高速度に変わったからです。もうもうたる砂煙を巻上げ、相乗りの馬は無人の砂漠をフルスピードで疾走します。

どんどんと、はずみをつけて激しく上下にあおられ、左右への横ぶれがまたひどい。今にも振落されそうで、騎乗者たる細君の身体にすがりつくだけで精一杯のメロンです。

「わっ、わわわ……落ちるよ、落っこちちゃうよう……ひゃー……」

「あなたの御命令に従つてゐるんですからね、

わたしは」

やさしいママは委細かまわず全力疾走を続けます。ダダッ子に身のほどを弁えさせるにはこの方法が一番いい。容赦なく風は顔に当り呼吸も苦しく、休まない振動は疲労を一層増す。

「お、お願い、お願いだから、もう少しゆっくり……」

「何いってんの。追手に攔まるじゃありませんか」

今度は御命令に従わない。

かくて十数分、この調子で全速運転を継続していくと、それまで後からピーチクさえずっていた小鳥のメロンは、声も出なくなりました。これくらいでよかろうと、速度を落し後を振り向いてみると、あわれ、加速命令者は真青な顔を背中に押しつけ、口をパクパクやっています。ハアハアと苦しうにあえぎ完全にあごを出した状態です。サファイヤはくすくす笑って、

「それごらん。生意気なことを言うからですよ。……どう、またさっきのように走らせましょうか。御命令とあれば、わたしは何時間でも平気だけど」

と、前半でやりこめ、真中からかい、最

後は再び従順ぶりを装いました。メロンは慌てて首を振ります。バテてしまって口をきく元氣ありません。

こんなわけで、追跡者を気にしながらも、また元の速度に戻りました。

やがて日が沈み月が昇って、砂漠に夜がやってきました。きらめく星空の下、旅の駱駝ならぬ夜逃げの馬が月明りに白く映える砂漠を、ゆっくりゆっくり駆けて行くのでした。

地球の自転に伴ない、また朝がくる。東の空が白みかけるころ、二人を乗せた馬は、とある小さなオアシスに到着しました。花は咲き木々は青々と茂って、清らかな泉のこんこんと湧き出づるといふ、どこにでもあるようなごく平凡なオアシスです。

馬と亭主に、休息を与えねばなりません。一晩中、馬の背に揺られつづけたメロンは、すっかりグロッキーになって一人ではとても馬から下りられないほど、疲れきっていたのでした。木立の中の柔らかい草むらの上に寝かせてやると、たわいなくも、ぐったりと死んだように眠りこけてしまいます。

やれやれ、この調子じゃ昼頃まで起きそうにないし、連中との一戦は避けられそうもないわ。行先の地図を残してきたから、いずれ

わたし達に追いつくにちがいない。なに、わざとそう仕向けたんだから、用意はちゃんとできてるんだ。さてと、今日はちょっとばかり忙しいことになるわね。少し休息して、体力を養っておかなくっちゃ。サファイヤはそう考え、メロンの傍に添寝して、しばらく仮眠をとることにしました。

東の空が薔薇色に染まり、真赤な太陽が昇りはじめると、果して、地平線に砂塵が巻き上り、みるまに一团の人馬が地響をたてて近づいてきました。紅さそりの一隊です。馬蹄の響きに目を醒まし、さっとはね起きたサファイヤは、素早く戦闘準備を整えます。亭主はとみれば、相も交らず眠りこけ、呑気そうに鼻から提灯、白河夜舟の真最中です。そのまま寝させておくわけにいかぬから、身体を揺さぶり叩き起す。

「あなた、ちょっと起きなさい。連中やってきましたよ」

寝呆け眼をこすって身を起すと、すでにサファイヤは武具甲冑に身を固め、勇ましい女武者のいでたちです。

「ほら、あそこをご覧なさい。もうすぐここへ到着するわ」

指さすかなたに目をやると、なるほど人馬

の一隊が、猛烈な勢いで迫ってくるのが分ります。九両編成の特急です。途中ノンストップの猛スピードで飛ばして、間もなく鈍行列車に追いつく気配濃厚です。

「わッ、大変だ。とうとう来た。どうしようばく、どうしよう……」

恒例には従わねばならんとばかり、メロンは早速、肝を潰し、わなわな震え出す。腰も抜けているらしい。

「いつまでもグウスカ寝てるから、こうなるのよ。わたしがこうしてここに居るというのに、何故震えたりするんです！」

「でも、向うは大勢だし……」

「そう？　じゃ、加勢して下さるわね、あなたも」

バケツリレーくらいなら可能だが、生憎と防災訓練ではありません。今の場合、メロンが何の役にも立たないのは先刻承知の上なのですが、怯えようがオーバーなので、からかっているのです。

「加、加勢って、一体、何を……」

「冗談よ。いいからおとなしく、どこかその辺に隠れてなさい」

ところがこの夫君、案の定、早々と腰が抜けていて動けない。止んぬるかなという表情

で苦笑いしたサファイヤは、足はありながら歩行困難のメロンを抱き上げて、適当な場所を物色します。腰抜けの亭主は細君の腕の中で、がたがた震えている。

「まあ、何て意気地のない！　あなた、なんですか。あなたはもっと勇敢なはずよ。しっかりなさい。腰を抜かすなんていつもは一度だってないじゃありませんか！」

亭主の弱腰を叱責する細君ですが、とにかく敵は間近に迫っている。ぐずぐずしてはいられません。

うまい具合に、葉の茂った一本の大樹が目に入る。何本も枝分けして、しかも曲りくねっている絶好の大木です。そこで、メロンをその木の枝に押し上げました。

「木登り得意なんですよ？　ここなら安心だから、早くてっぺんまで登ってわたしのすることを見学してなさい。葉の茂みから顔を出しちゃだめよ。分った？」

「はい——」

弱虫の亭主を安全な場所に隠匿してから、さっと馬に打ち跨り、オアシスの入口まで駆けていきました。そこで敵軍を迎え撃とうという作戦です。腰に太刀を佩き、槍を小脇にかかえる。敵は多勢だから、予備用として、

刀、槍、各二本を用意しておく。全部、洞窟の武器庫から失敬してきたものばかりです。当然、使い捨てにして惜しいものはありません。

世紀の対決は、刻一刻と近づいています。この一戦、両軍とも絶対に負けられない心意気は当然ですが、運命の神、果していずれに味方するや。いや、運命の神以上の絶対者が一人いる。さて、その人はだれでしょう。考案時間は三十秒です。

午前八時、陽はすでに高く、その照りつける光線は砂を熱していた。気温三十九度、湿度十％、南の風、風力ゼロ、気圧は記録紙が破れていて不明である。

両軍まず対峙すること、その間、約五十メートルとみえた。かたや、紅さそり他八名の猛者。こなた、サファイヤただ一騎である。息づまる睨み合い数秒、とつぜん銀鈴を振る妙声が砂漠の風に乗った。

「皆さまあ、本日はようこそ当地へお越し下さいました。ひとまずオアシスの野天風呂にて旅の疲れを癒されてはいかがでございませ……」

一瞬、氣勢をそがれたGB軍は、しかしすぐ闘志をかきたてた。

「おい、サファイヤとかいう、はねっかえりの小娘は、あれかい」

「へ、へい、左様で」

紅さそりの質問に答えるのは、むろんストライクである。

「元姫君だなんて大嘘さ。大方、バスガイドでもやってたんだろ」

「いや、全くで。……でもゾクゾクするなあ、あのセクシーボイス」

「感心してる場合じゃない！ 恥をそそぐチャンスを与えてやるよ、ストライク。ひとつ走り行ってブチ殺しておしまい。……メロンの方はつまんで持つといいで。絶対に殺すんじゃないよ、いいかい」

この時、彼は急に腹痛を覚えた。だが女首領にどなられて勇を振り起し、女騎手目がけて殺到した。

「やい、スベタ。昨日は不覚をとったが、今日は許さぬ。おのれ、よくも……」

「おや、ストライクさんだね。お帰り、お帰り、返り討ちに合うだけだよ」

善意でさとされ、彼の病状は急激に悪化し腹痛は耐えがたいものとなった。そして味方

の陣地へ帰ると、痛みはあとかたもなく消え去ったのである。

「どうもいかん。わしは美しい娘を殺せんわい」

紅さそりは憫笑した。

「弱虫め。なんだいバスガイドの一人ぐらいわたしが行って叩き殺してやる」

この時とばかりに、ごますりスライダーが勿体ぶってすすみ出て、オーバーなしぐさで紅さそりを押し止める。

「お待ち下さい、おかしら。おかしらともあらうお方があんな小娘を相手にしては、おかしらの勇名に傷が付きまます。ここは一つ、それがしにお任せを」

スライダーは大刀を振りかざして、サファイヤに立ち向った。彼は己れの力を過信したのである。

「いで、このスライダー様の腕前を見せてくれん。しれ者、覚悟！」

「小物は相手にしたくないね」

「何を無礼な！」

カッと乾いた音がして、パツとばかりに火花が散る。二合、三合、二つの剣が舞う。だがいかんせん実力に大差あり。必死に打ち振うスライダーの変化剣をしばらくあしらって

いたサファイヤは、機を見てさっと水平切り至極あっさりと、スライダーの首は胴とおさらばした。それに気づかず、尚も大刀を振り上げ打ちかかろうとしたとき、彼は己のすでに死したることを自覚したのである。ハイ、一丁上り、二十五円です。

女剣士は息一つ乱れない。

「うぬっ、ますます以て許せぬ。わしが血祭にしてやる」

次に繰り出したのが槍の名手ナックルであった。身長七尺五寸、槍の長さ五メートルという非常識な男である。尻ひっぱたかれた馬の方が、ふうふういっている。

たちまち激しい死闘が始まった。突けばかわし、また突き出せば跳ねあげて、両者秘術を尽しての応戦である。この男は、ホンの少々ばかり手強い。十合、二十合と続く。

「オヤマア、案外におやりになるじゃないのひげのおっさん」

「だまれ、小娘！」

正面から突き合えば長びくとみたサファイヤは、十八番の馬術の妙を発揮して相手の背後に回ろうと、ぐるぐる馬の円走運動を行なう。負けじとナックル、同じく馬首をめぐらせ対抗したが、その小回り不得手な鈍重な動

きは致命的であった。サファイヤは、だっと斜め後方から突込み、必殺の槍を繰り出せば体をかわし損ねたナックル、肩を突き破られ重心を失って、砂煙をたてて落馬した。素早く駆け寄ったサファイヤ、目にも止まらぬ早さで喉もと目がけてブスリと一突き、あわれ名手ナックルも昆虫採集式に刺し止められてしまった。鮮血たちまち迸り熱砂を赤く染める。そこでサファイヤは崩れた態勢を立て直し、しばし呼吸を整える。

豪勇ナックルを失い、やや意気消沈したGB団であったが、

「かくなれば、わしの番だ。五分であの世行きにしてくれようぞ」

と、憤怒の念もすさまじく出陣してきたのがスクイズである。この男は分銅つきのくさり鎖を自由自在に駆使し、宝蔵院流の始祖ともいえる。

すばやくサファイヤはスpearの槍を取って身構えた。

「お前も地獄へ行きたい組だね」

「しゃらくせい。吠え面かかせてやるから覚悟しろ！」

槍の穂先が閃いた瞬間、機敏に体をかわしたスクイズはさっと分銅を投げつけた。がら

がらと音を立て、蛇のように巻きつく。してやったりとスクイズ、

「わはは……おれ様の腕前はこんなものさ。恐れ入ったか、ねこば娘」

スクイズは徐々に鎖を引きしぼり、その名のごとく絞り出しにかかった。手許の鎌で女剣士の首をチョン切るつもりである。だが油断大敵、今一息というところでサファイヤは槍を放す。スクイズは大きくよろめく。これぞ好機、腰の偃月刀を引き抜いたサファイヤは、飛燕のごとく走り寄り、真向微塵の唐竹割り。血煙噴出してスクイズは、あえなき最期をとげた。

「はい、お次の方どうぞ」

残る団員は四名となった。ここで、憤怒の形相もものすごく、鼻から火花を噴き出して突進してきたのが、スリイアウトであった。

彼は二刀流の達人である。

「やあやあ、と、遠からん者は、お、音に聞け。ち、近くば、よ、寄って目にも見よ。われこそは、その名も高き……」

「高いのは声だね。レディの前だよ。ひげぐらい剃って出ておいで！」

「うるせえ、白豚！」

スリイアウトは二本の太刀を水車よろしく

振り回して打ちかかってきた。サファイヤは一本の剣で受け止める。丁丁発止、丁発止、チャリン、チャラチャラ、チンジャラチンジャラ。火花が散って気温を上げる。

「やい、こら、おれのギターを返せ！」

「子供のしたことは子供にお云い。責任は持てないね」

スリイアウトは、ますます怒って打ってくる。こやつ、なかなか剛の者と思われた。

「おれ様と十合以上、切り結ぶとは敵ながら天晴れじゃ。賞めてつかわずぞ、メンタ」

「おだまり、たわし。……お前、その腕でいくら貰ってるんだい」

「職務給ともで七万二千八百円さ。団一番の高給取りなんだぞ」

「ふん、シケた会社じゃないの。わたしの家来になれば十五万ほど出してやるよ」

「や、それはありが……、あわわ、何をほざくか！ 今度、組合を作ってベースアップを交渉するんだ」

思わず本心を露呈したスリイアウトは大慌て、決意も新たに猛然と打ち込んだ。またしばし死闘が続く。だが低賃金のせい、スリイアウトの面上にはようやく疲労の色がみえた。受太刀となった相手に女剣士は激しく攻

めかかる。形勢は大きく傾いた。

これはかなわじと馬首をめぐらし後を見せ
て逃げ出そうとしたが、そうはさせじとサフ
アイヤは鋭く追いつめ襲いかかった。辛うじ
て受け止めた小太刀は、打込む女戦士の豪力
に負けて宙に飛んだ。あっと怯むところ、第
二弾がその肩口に直撃し、右腕を根元から切
り落す。ものすごい悲鳴と噴き出す鮮血、こ
れでツウアウトになった。あとは簡単、さっ
と近づき、白刃閃く袈裟がけが彼の胴体をス
パッと斜めに切断した。かくて、あえなくチ
ェンジとはなったのである。

女剣豪は声高らかに叫んだ。

「時間がかかって仕様がないうね、頁数がもっ
たいないじゃないか。まとめて面倒みてやる
から、馬鹿面揃えてくるがよい」

GB団は敗色濃厚、残る団員わずかに三名
である。副首領こと泥鰌ひげのリリーフ、出
っ歯のブルペン、そして金縁眼鏡のピンチヒ
ッターいずれも技倆はかなり落ちるようだ。
一騎打ちに到底無理だから、敵の好意に甘え
時間の節約を兼ねて三名一緒にくつわを並べ
て攻めこんだ。リリーフは剣、ブルペンとピ
ンチは槍である。尚、女首領が一向出馬しな
いようであるが、大将同士の決戦はいつも最

後と相場が決っている。とすれば、この三匹
の雑魚の運命は、すでに定まったといってよ
い。

「ピンチヒッター君、キミはですね、前から
行くとしてですよ、ボクはでしゅね、後から
攻めて……」

「ほんならリリーフさん、あんた横から突っ
こみなはれ」

三者会談がまとまり、四つどもえの混戦が
始まった。いかに雑魚退治とはいえ、三人を
相手ではなかなか骨が折れる。サファイヤは
右手に槍を構え、左手に太刀を持って、変則
二本流で応戦した。そんなことは不可能だと
難詰してもそれを立証する方法があるまい。

激闘数分、首尾よく女剣士の背後に回った
ブルペンは前方で闘うピンチヒッターとしめ
し合わせ、前後から挟撃して、かけ声もろと
も槍を突き出した。危うしサファイヤ。だが
百戦錬磨の女剣士はこれを予期していた。馬
も一緒に横っ飛び、二本の穂先は互いに味方
の胸を刺し貫いた。つまり同士打ちの風変わり
な田楽刺しが完成したのである。金縁眼鏡と
出っ歯は互いの心臓を突き破り、馬上にて即
死をとげた。サファイヤは稲刈の要領で簡単
に両名の首を刈り取った。

仰天したのはリリーフである。とても勝て
る相手ではない。戦意喪失、周章狼狽して逃
げ出そうとした。

「お待ち、九番バッター！」

追いつがったサファイヤは手にした大業物
を振りかざし、後から一刀のもとにリリーフ
の首を撥ねた。

ここにGB団は女首領一人を残して壊滅し
た。時に午時十時。急病のため不戦敗の止む
なきに至ったストライクの姿は、かき消すご
とく消えている。おそらく肛門科病院へ入院
したものと思われる。

かくて、待望の一騎打ちとなりました。手
下全員を眼前に斬殺、刺殺された女首領の怒
りは筆舌に尽くしがたいものがあります。そ
のうえ、生捕った若いツバメを元の鞘に取り
戻され、宝石香水、根こそぎ盗まれているの
ですから、その心境は充分理解できるところ
です。一方サファイヤとて思いは同じ。専属
契約の亭主を何カ月も無断使用した張本人を
前にして一段と激しい闘志を燃やしました。
長さ五尺の大偃月刀を振りかざし、紅さそ
りは殺到しました。濃い栗色の髪は風になび

き、憤怒の形相は、その女豹のごとき美貌に一層の凄味を添えます。予備の刀剣を使い果したサファイヤは、黄金造りの華麗な業物をすらりと引き抜きました。敵将、紅さそりの秘蔵していた太刀です。第27節で失敬した名刀です。きれいにセットして捲き上げた金髪が陽光に柔らかく輝く。両者の間隔は約五メートルと迫り、そこでしばし睨み合いが続きました。

「ふふん、お前がサファイヤか。何だい、まるで小便臭い小娘じゃないか。おしめは毎日取換えてるんだろうね」

「まあ、まるっきり豚とゴリラの合の子じゃないの。どう見ても、やり手ばあの御面相だね、お前は」

まず悪口の応酬から始まる。どちらも容貌に自信があるとみえ、何を措いても顔のけなし合いです。

「そう簡単には殺さないよ。生捕って、一寸刻み五分刻み、蛇の生殺しにしてやるから覚悟おし」

「それは、こっちの言うことさ。目玉をくり抜き、鳥の餌にするからね。降参するなら今のうちだよ」

両人しばし口汚く罵り合っていました、

こんなことで勝負のつくわけはありません。頃合いを計って、紅さそりが必殺の気合いをこめて打ってかかりました。カッと火花が飛び、いよいよ大一番の開幕です。たちまち十合、二十合、一升二斗三石と、打ち込めば受け止め、突けばかわし、また振り下ろせば跳ね上げて二人のアマゾン剣技と馬術の秘術をつくし、全力をふり絞って壮烈な死闘を続けました。さすがに女首領は強い。だがサファイヤも一歩も譲りません。きらめく剣の舞いに舌が援軍を繰り出します。

「この豚娘！ 美容院ばかり行くよりも、減食するのが先決だよ。分ったかい、水ぶくれ！」

「おだまり、ガスタンク！ 他人の亭主に色目を使わず、後妻の口でも探すんだね。口惜しかったらブウとお願い！」

まるで裏長屋のおカミさん同士のけんかです。紅さそりが首領の威厳と矜持などそっちのけで露骨な罵詈雑言を浴びせると、サファイヤとて負けず劣らず、元姫君の高貴さと上品さとを質に入れ、口汚くやり返します。メロンはオアシスの木のとっぺんにいるはずだから、何を言っても聞える心配はない。教育ママ的貞淑ぶりは暫時、廃業のようです。

ところで肝心の剣技の方であるが、両者の技倆伯仲して容易に勝敗の帰趨が明らかとなりません。延々二時間を過ぎて中天の太陽は正午を示しました。だが両アマゾンの戦意はいささかも衰退することなく、憎しみの念は更につのるばかり、休戦協定締結の可能性は絶無です。一人の女を争う場合を恋の鞘当てというのなら、二人とも女ですから鞘の当てようもなく、争いは起りません。だが因果なことに、そこへ収める刀剣が一本しかないのです。妥協の余地もないのです。

剣技では長引くとみた二人は、刀を捨てて槍術の試合を始めました。馬上での突き合いは一進一退の状態が続く、これもなかなかの好勝負です。死力を尽くし精根こめた数十合突いたり刺したり外したりとやるうちに、ようやく技倆差が現われてきました。もともと紅さそり、剣に比較して槍はあまり得意ではありません。そのうえ（？）、両人とも槍術のスパーリングパートナーが同じですから、約三カ月と二年という修練期間のハンディがついています。

サファイヤの必殺の一撃が紅さそりの肩口の皮膚をかすめました。態勢大きく崩れ、慌てて立て直そうとしたとき第二弾が襲う。辛

うじて身をかわしたが、その拍子に重心を失ない、砂煙を立てて落馬しました。さっと駆け寄り狙いすました串刺し団子、紅さそり危うしとみえたが、ここで勝負決まれば観客から文句の出るは必定です。手先狂って砂地にブスリと穂先が突き刺さる。必死の紅さそり瞬間、槍柄を掴んで引っぱると、サファイヤまた堪らず、もんどり打って落馬です。

かくなれば素手で戦う他はない。待望の女レスリングが始まります。こうでなければなりません。肉弾相撃つ白兵戦の展開です。がっきと組合った両者、たちまち得意の寝技に移行して、熱砂の上を組んずほぐれつ、上になり下になって、ごろんごろんと転がっていきます。レスリングとはいえ、その実質は殺し合いに他ならぬから、試合のルールなど、むろん守りません。女性軍の得意とする髪の毛み合いでサファイヤの折角のセットも台なしになる。拳打ち、噛付き、肘鉄等の反則もレフリー不在をいいことにして、公然と遠慮なく応酬しあいます。急所蹴りもむろんやるが、これはあまり効果がない。両者砂まみれで争っているうちに、果して徐々に着衣がはだけ、白く引締った肌が剥き出しになってきました。

「くたばっちまえ、この淫売！」
「何をほざくのさ、この女術！」

格闘が熾烈さを増すにつれ、言論戦も質が低下して泥試合の様相を呈します。最初、オアシスの入口あたりで開始された肉弾戦は、上になり下になって動き回るうちに、熱砂と直射日光を避けるつもりか、次第にオアシスの中に試合場を移転させて、涼しい木陰で争うようになりました。だが、熱源は太陽のみではなく、すべて筋肉運動は熱を発散させるために、二人とも一向、涼しくありません。

ざぼーん、と水音が発し、水煙が飛散しました。うまい具合に、オアシスには池があったのです。取っくみ合いがもつれるうちに、サファイヤと紅さそりは池中に転落したのでした。今後は、水中レスリングの沈め合いです。しかし、無重力状態では身体の動きがにぶくなり、水深も浅く到底所期の目的を達成できそうにありません。すぐ池の中から這い出して地上戦を再開する運びとなりました。

ところで、メロン君どこに隠れているかというと、実はこの池の水際にある百日紅の大木の枝に身を潜めていたのです。てっぺんまでよじ登って、葉の茂みから細君の力戦ぶりをがたがた震えながら眺めていました。敵軍

の首が飛ぶたびに、思わず目をふさぎ、枝にしがみつく。地上二十メートルの高さで気絶などすれば大変だからです。おっかなびくりに観戦するうちに、戦局の推移につれて手下どもは全滅し大将同士の一騎打ちとなりました。剣技、槍術に続いて砂上レスリングが始まり、揉み合う二つの女体がごろごろと回転しつつ、自分の方へ近づいてくる。灯台下暗し、やがて自分が身を隠す木の真下まで転がってきたとき、枝張り葉の茂みに邪魔されて、何も見えなくなっていました。心配だから枝を伝わって下へ降りてくる途中、水音を聞いて水中戦の開始を知りました。尚も降りると、眼下に視界が開けて、サファイヤと紅さそりの組打ちの状態がはっきりと手にとるように分ります。地上約三メートル、丁度その高さで親幹が地面と平行に伸びています。その太い幹に跨って、メロンは白熱の女レスリングを観戦しはじめました。

みると、今しも池中から這い上ったばかり全身はぐっしり濡れて、悩ましくも美しい女体曲線がすっかり浮き出し、正に絶景の眺めです。上半身の肌衣はずたずたに裂け、豊かな胸の双丘がこぼれ落ち、まくれ上った裾から真白な腿があらわに覗きます。舌戦もま

き、憤怒の形相は、その女豹のごとき美貌に一層の凄味を添えます。予備の刀剣を使い果したサファイヤは、黄金造りの華麗な業物をすらりと引き抜きました。敵将、紅さそりの秘蔵していた太刀です。第27節で失敬した名刀です。きれいにセットして捲き上げた金髪が陽光に柔らかく輝く。両者の間隔は約五メートルと迫り、そこでしばし睨み合いが続きました。

「ふふん、お前がサファイヤか。何だい、まるで小便臭い小娘じゃないか。おしめは毎日取換えてるんだろうね」

「まあ、まるっきり豚とゴリラの合の子じゃないの。どう見ても、やり手ばあの御面相だね、お前は」

まず悪口の応酬から始まる。どちらも容貌に自信があるとみえ、何を措いても顔のけなし合いです。

「そう簡単には殺さないよ。生捕って、一寸刻み五分刻み、蛇の生殺しにしてやるから覚悟おし」

「それは、こっちの言うことさ。目玉をくり抜き、鳥の餌にするからね。降参するなら今のうちだよ」

両人しばし口汚く罵り合っていました、

こんなことで勝負のつくわけはありません。頃合いを計って、紅さそりが必殺の気合いをこめて打ってかかりました。カッと火花が飛び、いよいよ大一番の開幕です。たちまち十合、二十合、一升二斗三石と、打ち込めば受け止め、突けばかわし、また振り下ろせば跳ね上げて二人のアマゾン剣技と馬術の秘術をつくし、全力をふり絞って壮烈な死闘を続けました。さすがに女首領は強い。だがサファイヤも一歩も譲りません。きらめく剣の舞いに舌が援軍を繰り出します。

「この豚娘！ 美容院ばかり行くよりも、減食するのが先決だよ。分ったかい、水ぶくれ！」

「おだまり、ガスタンク！ 他人の亭主に色目を使わず、後妻の口でも探すんだね。口惜しかったらブウとお願い！」

まるで裏長屋のおカミさん同士のけんかです。紅さそりが首領の威厳と矜持などそっちのけで露骨な罵詈雑言を浴びせると、サファイヤとて負けず劣らず、元姫君の高貴さと上品さとを質に入れ、口汚くやり返します。メロンはオアシスの木のとっぺんにいるはずだから、何を言っても聞える心配はない。教育ママ的貞淑ぶりは暫時、廃業のようです。

ところで肝心の剣技の方であるが、両者の技倆伯仲して容易に勝敗の帰趨が明らかとなりません。延々二時間を過ぎて中天の太陽は正午を示しました。だが両アマゾンの戦意はいささかも衰退することなく、憎しみの念は更につのるばかり、休戦協定締結の可能性は絶無です。一人の女を争う場合を恋の鞘当てというのなら、二人とも女ですから鞘の当てようもなく、争いは起りません。だが因果なことに、そこへ収める刀剣が一本しかないのです。妥協の余地もないのです。

剣技では長引くとみた二人は、刀を捨てて槍術の試合を始めました。馬上での突き合いは一進一退の状態が続く、これもなかなかの好勝負です。死力を尽くし精根こめた数十合突いたり刺したり外したりとやるうちに、ようやく技倆差が現われてきました。もともと紅さそり、剣に比較して槍はあまり得意ではありません。そのうえ（？）、両人とも槍術のスパリーングパートナーが同じですから、約三カ月と二年という修練期間のハンディがついています。

サファイヤの必殺の一撃が紅さそりの肩口の皮膚をかすめました。態勢大きく崩れ、慌てて立て直そうとしたとき第二弾が襲う。辛

うじて身をかわしたが、その拍子に重心を失ない、砂煙を立てて落馬しました。さっと駆け寄り狙いすました串刺し団子、紅さそり危うしとみえたが、ここで勝負決まれば観客から文句の出るは必定です。手先狂って砂地にブスリと穂先が突き刺さる。必死の紅さそり瞬間、槍柄を掴んで引っぱると、サファイヤまた堪らず、もんどり打って落馬です。

かくなれば素手で戦う他はない。待望の女レスリングが始まります。こうでなければなりません。肉弾相撃つ白兵戦の展開です。がっつきと組合った両者、たちまち得意の寝技に移行して、熱砂の上を組んずほぐれつ、上になり下になって、ごろんごろんと転がっていきます。レスリングとはいえ、その実質は殺し合いに他ならぬから、試合のルールなど、むろん守りません。女性軍の得意とする髪のかみ合いでサファイヤの折角のセットも台なしになる。拳打ち、噛付き、肘鉄等の反則もレフリー不在をいいことにして、公然と遠慮なく応酬しあいます。急所蹴りもむろんやるが、これはあまり効果がない。両者砂まみれで争っているうちに、果して徐々に着衣がはだけ、白く引締った肌が剥き出しになってきました。

「くたばっちまえ、この淫売！」
「何をほざくのさ、この女術！」

格闘が熾烈さを増すにつれ、言論戦も質が低下して泥試合の様相を呈します。最初、オアシスの入口あたりで開始された肉弾戦は、上になり下になって動き回るうちに、熱砂と直射日光を避けるつもりか、次第にオアシスの中に試合場を移転させて、涼しい木陰で争うようになりました。だが、熱源は太陽のみではなく、すべて筋肉運動は熱を発散させるために、二人とも一向、涼しくなりません。

ざぼーん、と水音が発し、水煙が飛散しました。うまい具合に、オアシスには池があったのです。取っくみ合いがもつれるうちに、サファイヤと紅さそりは池中に転落したのでした。今後は、水中レスリングの沈め合いです。しかし、無重力状態では身体の動きがにぶくなり、水深も浅く到底所期の目的を達成できそうにありません。すぐ池の中から這い出して地上戦を再開する運びとなりました。

ところで、メロン君どこに隠れているかというと、実はこの池の水際にある百日紅の大木の枝に身を潜めていたのです。てっぺんまでよじ登って、葉の茂みから細君の力戦ぶりをがたがた震えながら眺めていました。敵軍

の首が飛ぶたびに、思わず目をふさぎ、枝にしがみつく。地上二十メートルの高さで気絶などすれば大変だからです。おっかなびっくりで観戦するうちに、戦局の推移につれて手下どもは全滅し大将同士の一騎打ちとなりました。剣技、槍術に続いて砂上レスリングが始まり、揉み合う二つの女体がごろごろと回転しつつ、自分の方へ近づいてくる。灯台下暗し、やがて自分が身を隠す木の真下まで転がってきたとき、枝張り葉の茂みに邪魔されて、何も見えなくなってしまいました。心配だから枝を伝わって下へ降りてくる途中、水音を聞いて水中戦の開始を知りました。尚も降りると、眼下に視界が開けて、サファイヤと紅さそりの組打ちの状態がはっきりと手にとるように分ります。地上約三メートル、丁度その高さで親幹が地面と平行に伸びています。その太い幹に跨って、メロンは白熱の女レスリングを観戦しはじめました。

みると、今しも池中から這い上ったばかり全身はぐっしり濡れて、悩ましくも美しい女体曲線がすっかり浮き出し、正に絶景の眺めです。上半身の肌衣はずたずたに裂け、豊かな胸の双丘がこぼれ落ち、まくれ上った裾から真白な腿があらわに覗きます。舌戦もま

た盛ん、

「宝石泥棒！」

「亭主泥棒！」

と、はしたなく罵りあって、上になり下になつての大格闘です。両者ともいづれ劣らぬキングサイズグラマーだから、実に見ごたえのある好カードといえる。メロンは自分の立場も失念して、女房と馴染の女との大一番を無料の特等席で悦に入つて観察します。とても嬉しそうな顔付で、鼻の下はすっかり伸びきっている。刀の切合いや槍の突き合いは恐ろしくてとても見ていられないが、こんな試合なら大歓迎です。

さて、熱戦はようやく終盤に入りました。

昼食抜きで朝から休憩時間もなく死闘を続けてきたのですから無理ありません。吐く息も苦しげに技もにぶってくる。夜の戦争とは反対に、とにかく相手を押さえこみ、膝下に組伏せねばなりません。

上になつたサファイヤが、必死に首を絞める。だが押さえ込みが不充分です。両脚を素早く相手の腰に巻きつけた紅さそりは、そこで満身の力をこめて下から強烈な胴絞めに入る。これが決まれば助からない。万力の締付けにさすが強靱なサファイヤも呻きました。

たちまち顔面は真赤となり、やがて蒼白に交じりました。頃合いを計り、反動つけて腰を跳ね上げ反転させ逆に上になって押さえ込む。紅さそり明らかに優勢です。胴絞めたままサファイヤの首を絞める。不利な体勢にあえぎながら、サファイヤも懸命の襟絞めで対抗しました。両腕を自由にさせておくとうるさい。紅さそりは巻きつけた脚を解き、豊臀をぐいとにじり上らせてサファイヤの胸を踏み敷き馬乗りになると、その両膝で敵の両腕を完全に制し、しっかりと組敷いてしまいました。この押さえ込みは完璧です。

「もうこっちのものさ。どうだい、小娘、何とか言ってみな」

乱れた金髪をわし掴みにして、弾みをつけサファイヤの頭を地面に叩きつけ、失神させようとするのですが、砂地だから、そう簡単にはいきません。そこで再度、首絞めにかかります。

「降参するなら、命だけは助けてやるよ。もっとも、目玉はくり抜かせて頂くがね。……どうなんだ、え、はっきり返事おし！」

「く、くそ！ だれが降参なんか……」

必死に頭を振り、むき出しの脚をばたつかせて、何とか跳ね返そうと死力を振り絞るサ

ファイヤですが、敵の重圧は次第に苦しさを増し呼吸も困難となっていました。

「宝石もメロンも取り返してやるよ。その代り、お前は地獄行きさ。口惜しいだろうね」

紅さそりは勝ち誇って嘲笑います。枝の上のメロンは青くなりました。女房が絶対絶命のピンチでも、弱虫で非力だから何の手助けもできないのです。もうろうとなつて、昏迷の世界に踏み込もうとした刹那、木の上から心配そうに覗いているメロンの顔がサファイヤの目に映じました。自分が負けたら、可愛い亭主は憎い女のものになる！

カッと頭に血が昇り、サファイヤは死物狂いに暴れました。紅さそりは、せせら笑う。

「往生際が悪いね、……小娘、覚悟！」

腰の短刀を逆手に引き抜き、喉笛目がけて柄も通れと突き刺す。ざくり。刃先はわずか一ミリの狂いで砂地にめり込みました。紅さそりは慢心して、止めを刺す時期を少し早まったのです。残念、仕損じたかと、慌てて地面から引き抜き第二弾を加えようとしたとき身体が平衡が崩れました。瞬間、踏敷かれた腕が自由になる。夢中で砂を掴んだサファイヤは、今しも短刀を突き刺さんとする敵の顔面に叩きつけました。

「うわっ、ぶぶぶ、むむ……」

砂が目に入り、何も見えなくなる。目潰しを食った紅さそりは、瞬間な術を失いました。そのあごを痛烈無比のアップercutが直撃します。ぐらり、紅さそりの大柄な体躯がよろめき、その隙にサファイヤは素早く身体を跳ね起し、死地を脱しました。

にわか盲の紅さそりの戦力は半減です。恐ろしい形相で掴みかかってくる出鼻、その鳩尾へ肘鉄砲が物の見事に命中し、紅さそりはぐくんと膝をつきました。次の瞬間、必殺の膝蹴りがその顔面に炸裂する。鮮血が迸り紅さそりは地面に横転しました。そこをニードロップが急襲する。形勢は完全に逆転。

やっと目が明いたものの、痛撃を受けた紅さそりは、しばらく立ち上れません。急いでは事を仕損ずる。慎重なサファイヤは、さっきの失敗に懲りて直ぐには押さえこみにいかず起き上れない紅さそりの足首を掴んでのローポート。まずこれで徹底的に痛めつける。

脚をもぎ取られそうな痛みに、紅さそりは悲鳴を上げてのたうちまわりましたが、少しも容赦せず両脚とも骨折寸前まで責めつける。これを念入りにやっておかないと、紅さそりの得意技、胴絞めで再度逆転されるおそれがある。

とことんまで責め抜き痛めつけて、必殺の決め技、逆海老固めに入りました。もう絶体に逃げられない。タッグマッチではないので反則に出て助けしてくれるパートナーがおりません。弓状に撓った紅さそりの長身は、息もできない激痛に硬直し、顔中油汗を滲ませて呻き、砂を噛みました。

「背骨をへし折ってやろうか、やり手婆あ！……それ、こうして……」

「う、うっ、うう……ま、まいった、まいった。降参、降参するっ！」

最後の勝利は、ついにサファイヤの手中に帰しました。背骨と脚の関節を痛めて、紅さそりは呻きながら長々と、地面に伸びています。もはや、戦う体力も気力も尽き果て、完全に虚脱状態にある紅さそりです。サファイヤは敗残の女首領の脇腹を蹴りつけ仰向けに返すと、土足で喉笛を踏みにじります。

「口ほどにもないじゃないの、スベタ！ さっきの自慢はどうしたのさ。え」

勝誇ったサファイヤもまた、砂と水と汗で全身どろどろです。むき出しになった双の乳房が大きく息づいています。乳白色のアイスクリームの上に桃色のさくらんぼが打震えるさまは、まことにえも言われぬ状景です。

やおらサファイヤは、どすんと紅さそりの胸に馬乗りに跨りました。どっしりと美臀を据えて、磐石の組敷き態勢をとる。先程とは正反対です。そして、紅さそりから奪った短刀をその喉もとに突きつける。

「覚悟はできているだろうね、パン助」

いさぎよく刑に服するかと思いきや、紅さそりは急に取乱して頬の筋肉をわなわなと。

「ま、待って、待っておくれ……」

「自分だけ助かろうとは横着すぎるよ」

鋭い切先で鼻の頭をちくちくとつつく。砂を掴んで顔中にふりかける。女だからというので、化粧直しをしてやっているつもりでしょう。乱暴な美容師の手にかかって、妖艶な野性的美貌はかたなしです。

「わ、むむっ……お姫さま、どうか、どうかお慈悲をもって……」

と、ひたすら命乞いの一手です。

「わたしは捕虜を殺したりしないから、安心おし。罪の償いをして充分反省すれば許してやるよ。分ったね」

サファイヤは意外にも極めて寛大な態度を示しました。その心境、あるいは勝者の奢りと同性へのよしみによると思われるですが、問題は罪の償いということです。

云 いた い 放 題 ・ ・ ・ ・

わ が 不 満



..... 佐 藤 正 俊

マザーコンプレックス

人の心には、神と悪魔とが同居しうるものか。凶悪殺人犯とて、その精神構造が完全に狂わなければ、母への愛、郷土へのなつかしさは湧く。事実、多くの犯罪人は、逃亡しても自分の故郷近くで逮捕されている。

私は、性を汚れたものとみなすある宗教の教えにはついて行けないし、自分がそこまで偽善家ぶるつもりも毛頭ない。

私は自分の思うままに行動したい。一定の社会生活の中の法に依る規律と、法に依らぬ不文律とがあるが、それを犯す気もないし、その勇気もない。

私の性向は、軽度のサジズムと極く軽度のマゾヒズムを持つ。対象としては、私は今を盛りの十代や二十代の女性には興味を示さない。少年時代、と言っても、十五才の時からほとんど母と過ごす日のなかった私のマザーコンプレックスが、今この方面に出ているのかも知れない。

私自身は、この性向を単に自分の過去の経歴からくるもの、と見ているが、実際そういう四十代の女性と交際すれば、金持の有閑マダム気取りでこづかいを稼ぐ……世間

はそう見るかも知れないし、相手の女性にしても、金で若いつばめ……と見られかねない。太宰治を読み、机竜之介や眠狂四郎のような大衆小説のヒーローのニヒリズムに酔う私も、現実には気の弱い、自称フェミニストにすぎない。

それにしても私の、四十代、五十代の女性への憧れはやはり「異常」なのだろうか？

そして、それは単に少年時代に女と過ごす日の少なかった反動。それだけであろうか？ 私は、四十代、五十代の女性の胸に抱かれたい。私とて二十四才の青年である。処女の持つ美しさを知らぬ訳ではない。女そのものを知らぬと言って信用される年でもない。

私は他の奇ク投稿者の様に、思いのままペンを運べる方ではないので、言いたい事の半分も書けないが、それでも二、三行書いては考え、考えては又書いていくのである。

奇クは不特定多数の読者の、「声なき声」を反映してか、私の好みのフォトは掲載しない。もっとも、大多数の人にとって四、五十代のモデルより、二十代のモデルの方が目映りも良いであろう。私もそれは理解できる。ミニスカート、ヌードダンサー、それは若い人のものである。四、五十才の女性がそれを

やれば色気狂いである。

しかし、奇クは四、五十代の女性モデルは使わない（又、居ないであろうか）が、老女のヌードや男性ヌードを、汚らしいと見るならば反論する。

そもそも「美」の定義とは何ぞや。「美」の観点とは何ぞや。

もし男性ヌードを否定するとすれば、ロダンの「考える人」、ギリシャ彫刻は何になるのか。もし、四十才の女性のヌードに芸術性がないならば……いや、ないかも知れぬ。だからこそ、私は魅かれるのだ。四十代の女性それは私にとっては、黄昏の夕映えの美しさである。悲しい美しさである。

晩秋の公孫樹の葉の美……私は人間にもそれを求める。それが、四、五十代の女性である。反論されるかも知れぬ。緊縛写真一枚撮った事のない青二才の迷論かも知れぬ。

マゾヒズム

毎号奇ク読者欄はパートナーを求める人であふれている。「女王様……云々」「貴女をいじめてあげます……云々」「下着……云々」etc.

マゾヒズムというけれど、先輩諸氏には失

礼乍らどの程度の忍耐力が有るのだろうか？

私自身、軽度のM感覚はあるが、とても打たれたり、蹴られたり、便器にさせられたりなどしたらたまらない。それとも、プレイである以上、それは、一プロセス（ある目的への）として、その真似だけをするのであろうか？ もし、平気でそのような行為、本気で相手に苦痛を与え、又与えられて喜ぶようなら、私はついて行けない。

ゲイボーイ

場末の三流映画館で「続・世界残酷物語」を見た。その中に出てくるゲイボーイ、正確

にはゲイオジサンなのだが、これぞ正にグロテスクの見本。ゲイも十代の内は、何とかごまかせても、本質的に女になりきれぬと年を経て醜くなるらしい。いつか、日本のゲイボーイ五、六人とムシ風呂の中で逢った事があるが、私の胸毛に魅かれたのか、ジロジロ見る奴、そばに寄ってくる奴、で薄気味悪くなった。しかし、私の友人のK氏によると、ゲイでも一流のゲイは女以上に女らしいと礼讃する。ゲイにも一流二流があるのか、と思っただが、K氏の言によると、そのゲイ（以後「彼女」と呼ぶ）氏は、先天的なものと、後天

的なもの相まってそうだったという。先天的とは肉体の、いや身体の小柄な事。色白、目の大きいこと。首の細い事。後天的とは男兄弟の末っ子で、女の子扱いで育てられた事等である。乳首こそ男性のそれであるが、堂々と乳房もあり、ウエストも8の字にしまり正に「女」そのものであるという。彼女（？）は決して自分を「あたし」としか言わないそうである。中途半端なゲイ修業などは止した方がいいとの見本かも知れぬ。K氏は私にホモの気があると勝手に決め込んで、彼女に逢わせるから……と言う。しかし、これだけではどうも二の足を踏む。

同じ「続・世界……」の中で、ゲイとは関係ないが、中南米か何処かのカーニバルの乱痴気騒ぎの中で、パレードの車から次々と女性が強引に引きずり降ろされ路上で数十人の青年から、衣服をはぎとられるシーンがあった。正統奇ク派（？）の人にとっては、縛りシーンはなくとも一見に価すると思う。もともと古い映画なので、次は何処でやるか解らない。それとも先刻、観賞済みか……。

団鬼六映画

団鬼六先生原作の「肉魔」を見た。私は余

りピンク映画を見る方ではないが、団先生の作品は何本か見ている。「肉魔」「柔肌しぐれ(サブタイトルに花と蛇よりとある)」その他の映画はタイトルを忘れてしまった。

ついでにつけ加えておくと、私がピンク映画を見るのは東京の下町、両国劇場である。

さて肉魔という映画だが、早い話が、大学を辞めた弟とヤクザの兄貴とが女を犯し、縛り責める事に感激をおぼえるが、ヤクザの兄は人妻をネタに身代金要求をする。そして刑事に捕われる……それだけのストーリーである。勿論、団先生の映画であるから見せ場は十分にある。

団先生の作品は見るものの側に立って製作されているが、少し不満な点もある。弱輩の私がこんな事を申しあげられる資格はないのだが、あえて言わせてもらうなら、全体として団映画は一つの固定されたワクの中から出ている。登場人物にしてもニヒルな悪役の男性スター、いや俳優と言おう。そして多分にSの傾向のある悪役である。それと大家の令夫人、令嬢。早い話がこれだけである。S Mシーンもほとんどが立ち縛り。全裸に近い立ち縛りだけの様である。団映画の全作品を見た訳ではないので、はつきりこうだと断定

は下せないがマンネリとも言える。六五年八月号の奇々、鬼六談義「映画、花と蛇」の中で団先生は、「この種の映画で一番がまんのならないのは、何か人生を語ろうとして下手くそにあがいている代物である。(中略)スチールを見て入場する客の要求するものは、官能の満足なのだ。官能映画なら官能映画に徹すべきであり、五社の手がけえぬ娯楽作品官能作品に懸命になるべきだ(後略)」と述べておられる。正にその通りである。しかし観客はエゴイストである。場末のストリップを見た後の言い知れぬ空虚感を知っている。

この種の映画、特にS・M映画でも観客は劇中人物に憧れ乍らも、現実の世界に、現実の我に帰る時、痛烈な自意識が湧いてくる。

「自分は今何をしたのか? 何の為にこの映画を見たのか?」という、自己への疑問である。何ら意義づけすることのない、するにもできない映画……。

その意味では、団先生のお説には反対である。官能映画とは言っても、出演する俳優さんは温泉宿のブルー・フィルものの俳優とは違う。彼らなりに、彼女達なりに観客に奉仕してくれていると思う。只、単に官能のみを追求するとすれば、俳優さんにとってもやり

きれぬ気がするのではなからうか?

何故ならば「性」は人間の、芸術、その他のジャンルに於ても永遠のテーマである。

古今東西、幾多の哲学者が、宗教家が、芸術家が、「性」のテーマに取り組み、いまだ明確にそのテーマに解答を下し得ない。ピンク映画関係者にその答えを期待するというのではない。団映画もその意味では価値のあるものではないか。くり返して言うようであるが、官能作品に徹するならそれもまたそれで良し。

団先生の作品を、私如きものがどうのこうのいう筋ではないが、現在のマンネリズムを打破して戴きたい。常にSは男、Mは女でなくとも、女のSが出てきてもよさそうだし、登場人物も上流階級の女性ばかりでなく、下町のおかみさん、団地の人妻、女教師、そういった階層の人間葛藤を描写してもよいのではないかと思う。

迷言多々失礼。若し小生の論に御不満の向きは、誌上に於て(この拙文が載ればの話ですが)どうぞ。小生、甘んじて、先輩諸氏の御叱りも受ける覚悟です。

探

奇

考

料

『観相学極秘伝色情相法』を読む

斎

藤

夜

居

陰相（いんそう）について。

戦後、復員してきて間もない頃。あの頃は
何も特別に目的もないのに、飢えては街を彷徨
したものである。それは私ばかりではなかつ
た。きまった仕事が無かったし、腹がへる
し、とても部屋の中にジツとしていることな
ど出来なかった時代で、その日も早朝から、
大手町の進駐軍のモータープールに行き、ト
ラックの泥落しなどしながら、あやしい英語
をあやつり、GIをだまし、鐘詰や洋モクや
チョコレートをしめて来ようと、寝ぼけ眼
で家を飛び出し、駅のホームで電車を待って
いた。すると、間がわるいことにもうすぐ電

車がくるというのに、猛然と便意を催してく
るのであった。弱ったことになったが、これ
ばかりは意志の力でも精神力でもどうにも
ならない。当時、その駅のトイレは乗車ホー
ムの外れの先端にあり、勿論駅改札の出入口
にもあったが、其処まで行く間が待てなかつ
たので、その私が目指して行ったのは乗客用
ではなくて、駅職員専用の、ホーム突端から
石段を降りた小屋のような建物であった（こ
の稿を書くために、最近久しぶりにこの駅に
下りたが、その小屋掛の建物はなかった）。
木造だが、鉄路の砂利石と同じく赤錆色をし
て、コンクリートの小便所のほかに、大便所

は一つきりなかった。すぐに這入ったが、牢
獄のような小さな窓があって、真夏の強烈な
朝の光線が、みがかれた金属板の反射光のよ
うに、鋭くリアルに射し込んで、その光りの
角度の、加減でもあろうか……平素はじめじ
めとした陰湿幽暗であるべき筈の糞壺が、隅
から隅まで照らし出されて、正に隠るべき
所あらざるべしともいうべき景状であって、
私は何気なくズボンのバンドをゆるめ乍ら、
下を覗いた時、その時の驚愕を今も忘れ得な
いのである。糞尿の異臭フンポンたるなかに
真っ赤な生血が一面に流れて、その上に落花
のように真っ白い脱脂綿が散乱しているのだ

あった。いわずと知れた女性生理のメンストルエーションが排泄されたものであることは直ぐに判然とする知識はあったが、あまりの凄まじさに胆をつぶした。まるで殺人事件の現場を見るようで、気味悪るさに胸がどきどき高鳴り、さすがに更にその上にじぶんの大小便をたれ流すことは躊躇せざるを得なかったばかりか、人間の肉体と精神から既に離脱した排泄物のくせにしゃがって、尊いスピリットの無いものが混交しようとするようで、浅間しくもあり、血という神聖な液体を糞尿だけがす行為をおこなおうとする恐怖感も手伝ったりして、切迫した事情ではあったがどうしても屈めない（女性をはずかしめる、強姦する）みたいで、とにかく参ったと云うよりこの時の気持は表現できない。然し、それは一瞬の思考であって、すぐにそれこそ本当の糞度胸をきめると、用便を果たした——。もう糞と経血との妖婚を眺める勇氣もなくなつて、便所の小窓から見あげた青空は実にきれいで（あの頃の東京の空は美しかった！）遠い樹木の影も新鮮であるのに、ああ私は何の因果でこうまで明らさまに女性の肉の生理を見てしまったのだらう。如何にも間抜けで不運であった。崇物症における糞便心酔者（スカトロジイ）に

類する傾向があったなら狂喜すべき場面であつたろうに……。只々人間という肉体の持つ生理が時と場所をえらばない必然と悲哀をかんじ、緊張した排便欲求から解放された清々しさと安静とのうちで、しばらく尚まとまりのつかない想念に耽っていたが、おそらくは早朝に会社勤めに行く若い女性が残して行つたその生々しい経血は、私がやむを得ずこのトイレに飛び込んだように、同じくどうにもならない生理の排泄行為だったのではあろうけれども、大小便と経血は人体の排泄物だがその性質を異にする。不愉快きわまることではあったが、それを見て異様な性慾的な感情に支配されたとしても、仕方がない話だ。これはやはり見てはならない△相△に属する事柄であつたから、其処からは健康な思想を汲みとることはどうしてもできない。元来、異性の性器にかんすることは、何事にもよらず私たちに常の関心事であるから、生きている限り——人間は神を思ふぬ日があつても、性を思ふぬ日はない——。だが、排泄された結果からは、糞尿に性別を明らかにするものは無いが、メンストルエーションは女性のものであり、ザーメンは男性のものだという区別は医者でなくても可能である。ところが、経

血も精液も、共にそれを他人が見たという場合には、それは異常な時である……。

私はこの時はまだ若かつたので、その現象に圧倒されて、通俗小説によくある用語ではないが、見る・べからざるものを見た、という後悔のみ先立ち、それが△罪△に価するか否やに思いが及ばなかったけれど、一つの動機として窃視症への誘因となる場合は考えられ得ると今は思う。所で本章では観相学上における△陰相△に関する秘文献について述べるのが目的であるが、その書誌や内容の解題を離れ過ぎるようだが、その前に、もう少し臭い話を続けさせて下さい。

扨て、又してもお便所の話で恐縮だが、この話は今から五年前の夏のことであつた。あの晩、私は第三冊目の私家版の原稿の清書が終つたので、国電赤羽駅から徒歩で十五分程かかる頼みつけの孔版印刷所に出掛けた。この時は駅の改札口を出てからだったが、急に、それこそ今迄は何の気配もなかったのに一刻一秒の猶予もできない程に、キリキリと下っ腹が痛み出し、便意を催して来て、二三歩あるいているうちに額からはあぶら汗がにじみ出し、まるで引き吊られているような苦しみだった。家を出る時に飲んだ冷しビール

と、さかなに食べた章魚のあしが原因らしい——。とにかく、先ずトイレだ。直ぐに思い浮かんだのは、駅外の北側、集荷所の附近にある公衆便所の事だった。それから其処迄の数十歩の距離が実にもどかしい。息が苦しくなり、もうダメになりそうだった。やっこのことで暗い公衆便所に入り戸をあけ、大急ぎで用便をすませた時は、思わずホッと安堵した気持ちで、うす暗い中で精神も非常に安静して、最前迄の暴風雨に打ちのめされたような生理的的痛苦からも救われて、何かに感謝の念を捧げたい程の気持ちさえ湧いて来たりした。まったく、人間なんて勝手なものだとも思ったが、まさか途上でそのような事態になるとは考えていなかった。で懷紙の用意などしていなかった。一難去って又一難！ というところ。この駅の附近は柄が悪い場所だから、足許にはガサガサと先人の残して行った競馬やスポーツ新聞で用を足した残りがあからそれでも千切って……とも考えたが、最前の切ばつまった気分なら兎も角、こう落ちついてしまうと、どうもそれはできない。第一得体の知れない他人のキタナイ尻を拭いた新聞紙の残りなんか気味が悪いし、ウツカリ手でも出そうものなら何がついているか分りはせ

ぬ。暗いせまくるしい中で屈んだまま色々と思案していた。用便中もしっかり抱いていた風呂敷包の中は、これから孔版堂の主人に鉄筆を依頼する二百数十枚の原稿が入っているから、これなら二三枚つかっても、自分で書いたものだし、まだ記憶が薄れていないからあとで思い出して新たに書けば良いのだからそう少し硬い紙だが仕方がないと思った。その時である。すぐ眼の前に、今迄気がつかなかったが、ぼうと白いかたまりみたいなモノが眼についた……手に取ると、それは軟かな、然かも相当量の、三四十枚はたしかにあった。御婦人用トイレ紙であるばかりか、プーンと香水のいいにおい！ 香水入りのカミに更に愛用の香水をふりかけてあることは、匂いのつよいことでも知れる。私の入る前にたしなみのよい婦人が用達していったのだろう。恐らくは余りこのような公衆便所に入ることは予期しない程に、つましやかな美しい女性だったと想像できる。何故なら、その便の大小を知らないけれど、用意のカミで拭き清めると、その残りを此処に惜し気なく捨てて立去ったことはケチな女じゃできない。彼女も亦やはり私と同じように万止むを得ざる人体生理の必然たる排泄作用のため此処に

入ったのであろうが、何となく奥床しく潔きよい感じを受けたのである。勿論、私は有難くそのカミを使用させて頂いたばかりか、この時数年来あたまの片隅にこびりついて離れなかった、戦後のある日の朝みてしまった糞尿の上に更にたれ流されたメンストルエイションの鮮烈なる印象のことも連想されて、私は八卦も占易も相学をも、その何たるかを知らないけれども、必ずや陰相Vというものがあって、隠れて見ざる相でありながら、大きく人間の運命性格を支配するものがあるのではないか？ 陰相は発見のチャンスをつかむことは難しいが、一度現象に直面する時には、人間の赤裸々なる真相を観破できるのではないかと考えた。

私はその晩用件をすますと、叙上の如きことを孔版堂の老人と語り合ったのである。すると老人は非常に私の観察をおもしろがってそこまで考える方ならば、あとで珍本を一冊進呈いたしましょう、必ず参考になるものです。が、その前にこれをご覧なさいと、刊年不詳の和綴本で『人相独稽古』（坤）とあるものを取り出し、あなたが直感された陰相ということとは昔から謂われていることで、例えばこれは観相の俗書ですが、肛門相のこと

にも触れています。尻の穴は八角をもっとも貴相としているし、六角は諸侯に列する相で四角や三角は平民の相だと書いてありますが何を根拠にしているか。また、肛門に毛が無い者は貧苦する、毛沢山なるは無病息災だとあるのは健康状態や生育過程をいう意味でも首肯できますが、さらに便相や尿相というのもあって、大便秘結をおそくてゆるやかなるが寿あって財あつまり、早くて急なるは下賤だとしている。特に、速やかで細いのは天相だとされているのです。また、太くてもちぎれちぎれなのは凶相。それならば、便相における最良なものと云うと、糞は長大で、たれるに従ってだんだんに帯を重ねるが如きがよく、富貴寿共に長しと信じられているのです。尚、便相のうち最凶なるものは、固くて太い場合なのです——。尿相のことは、その放水状態が、珠をそそぐが如きを貴相としています。分り易くこれを説明すると、尿道の先端から真珠のくび飾りを放出するように見えるのが最良だということです。太くて真直ぐなのは下賤。また、雫（しずく）がたれるように、タラタラッとたれるのは貧寒。太くて音高く、まるで滝の様にジャアジャアたれるのも賤しい。

最も良しとするのは、ゆるやかで、はらはらとして、末にきて地につく寸前に流れが別れるのが良いとされています。そして男でも女でも、糞尿をする時に、早く行き早くたれるのは富貴の生活をしていても、その心は賤しく、財あっても人格ゼロ、だと云われています。また更に心得べきことは、危急の場合でも小便をして泡が多く立つ時には生命は保証されると伝えられて居り、尚、のりものに乗る前には男女共に必ず小便をした方が無事である場合にも泡立ちよければ、旅先で害を受けない……とか。それから、勿論男女共陰部の相というのがあって、毛相、茎相、のう相、陰門相などからも吉凶判断をすることができるとです。詳しいことはこの書に記載されていますから、お帰りになってからお読みになって下さい。これは昭和初年頃わたくしが中司哲巖先生に頼まれて謄写版印刷で八十冊ほど刷ったものでした。観相上の下がかったことを云う場合の易者の種本で、その後現在まで写本や、ノートで伝えられて来ています。相学関係者にはめずらしいものではありませんが、一般の方々には珍本かも知れませんが——とも云った。

私は兼々この孔版堂の老人も一種の曲者だ

とは感じていたが、はしなくもその博識の片鱗に触れたばかりか、奇しくも珍書一卷をさずかる事ができた。その後、それが機縁で相学とか運命論的な著述や記事を少し漁ったが黄石文書刊行会（昭和8）のものだとか、竹下天水氏の『女性観破術』（大正11）や、田口二州氏の『肉体に観る性的魅力』（昭和35）や、高木彬光氏の神がかったような『占い人生論』（昭和36）まで読み、風俗雑誌記事からも乳房や性毛や外陰部などを相学的に分析したものをも探し出して読んだし、高橋鉄氏の『りんが・よに』（昭和31）も精読。附録の図鑑も入手することができ、大分勉強が進み、風呂屋へ行っても他の浴客の陰茎と鼻柱との関係をさりげなく観察したりするクセがついてしまった。然しながらそうした中にも常に気がかりだったのは、例の秘伝の一卷でいつまでも私人の筐底に秘めて置くよりも、多くの同好者たちの為に、詳細に解題発表する折はないかと考えていたから、愈々今回こに本誌を通じて各位の清読を待つことが出来たことをよろこびとする次第である。大変に長々と、前置きして、ご寛容に甘え過ぎた——。

観相学極秘伝色情相法之部 中司哲巖述

孔版八十一頁。表題は「観相」全とのみあり、一頁分約四十字詰十三行、ザラ紙に印刷された粗末なもの。表紙は改装されたもので書影は省略した。内容は左記の如く大別三項目に分れている。

序。「夫れ太古濛々煙として万有無なり。

忽然として混沌の一氣あり、則ち別して二となり、二天地神のみを生ず。男神□ちて曰く、吾れに陽の余れるものあり、女神答へて曰く、吾れに陰の欠く所あり。之を合せ見んとて鵲鵲に習ひ、天の逆鋒を以て青海原を探り給へば、その快美言ふべからず。忽ちにして女神孕み、月満ち児を生む、かくして、児女孫々群を成す。天神七代地神五代の間、男女神互に陰陽を拝し和合快樂の根となす。又儀礼を紊ることなし。」

目次。**婦人篇** 一、顔面と陰部との比較。

二、長核に就て。三、婦人齒牙と脛との関係。四、特種構造の陰部。五、陰毛の種類六、陰毛の生へ方。七、無毛症。八、陰部の位置大小広狭。九、鬚。十、婦人の乳房と眼との関係。十一、交接に際して感泣する癖。十二、古書にある秘伝**男性篇** 一、男根の大小、長短、怒張。二、男根の色、

睪丸、其他。

色情相法極秘伝

一、私通の

相、色難。二、羞紅（処女性を失った時の相）三、姦通の相。四、素行不良の相。

五、春情満つるの相。六、昨夜交接したる確証。七、桜樹の恋の神秘。九、陰部に於ける黒子。十、不倫の相。十一、陰毛、月

信、発生期。十二、早婚と晩婚。十三、陰

臭治療法。十四、相手に疾患の惧れある際

十五、顔面に傷痕ある者。十六、妊娠法。

十七、避妊法。十八、局部を戯弄する癖。

十九、妻が姦通する場合、原因。二十、姦通の実在数。二十一、癩癩に就て。二十二

臍に就て。二十三、婦人上厠に就て。

——以上——

各細目の記述法は精粗まちまちとなつており、二行きり書いていない項目もあり、一項

目について数ページに亘る場合もある。先ず相法を述べ、次に実験談・体験談を加えたり

している、分り易く説得力のある文体で、事柄に対する信疑の程は保証の限りに非ずだが

テーマが風変わりだけに、読物として考えても面白いものである。

顔面と陰部との関係 婦人の顔面が大きく

平たいものは陰部も大きくて平たい。顔面小さく狭いものは陰部も又小さく狭い。顔面が

横に広いのは陰部も横巾が広く、顔面が細長

ければ陰部も細長い。面部に肉が豊満であ

れば、陰部の肉が頗る豊満で盛り上った如くな

って居り、面部の肉が痩せているものは、陰

部の肉も痩せている。頬が下膨れのした顔面

の者は陰部も下膨れして下半分の肉が豊

満であるばかりか、常に左右両方の大小陰唇

が、歩行や起居の際に絶えず擦れ合っている

結果、自然に快感をかんじ、その為常に湿潤

して乾くことがない。そんな訳で、この

相貌の婦人は晩年に至るも尚お情念が旺んで

ある。陰部はからだの中央に具備すべきもの

であつて、左右何れに偏することを許さない

若し陰部が左右何れかに偏しているものは、

晩年の勢運甚だ凶となっている。

長核に就て 鼻の肉が剣の峰の如く尖つて

長く、人中（鼻と口との中間、縦に細長い溝）

の下端が発言に際して豆の如く尖る者、のど

骨が高い者等は、必ず陰部に於ける核が長い。

これは身体を中心が全部高いからである。また、人中の下端が尖らず平らかになつて居る者は小核である。すべて婦人は直立して外から核が見えないのが良い。これが飛び出して居って、外から見えるのは配偶者及び児女に對する運が凶である。陰核長大なるものは、

早熟であり淫蕩な女に多い。

婦人歯牙と膺との関係 上下の歯が細密で白く美しく、恰も瓢の種子を並べた如くに出て来ている婦人の膺内は、必ずその構造が精緻を極めており、交接に際して快感を感じしめることが多い。

特種構造の陰部 顔面下半部の肉が豊満で肥大せる婦人は、その局部に於ける下半部の肉が潤沢であることは先きに記したが、その最も著しいものに至ると、陰門の左右少し下側、つまり膺口の両側斜下に恰も吊し柿の如き余分の肉を持っている。その大きさはその人によって大小の差はあるが、一般にはこの肉のない婦人が多く、これがある者は百人中一、二名に過ぎない。そして特に雄大なものを有する婦人は数百人中に一人位である。

某遊廓にこの特種構造の娼妓がいることを、其処を受持の警察医が或る会合の席で喋ったところから、大きな評判となり、おかげでその娼妓は一時に客が増加し、応接に困ったと云う話がある位だ。すべて男女が交接した時下側には隙を生ずるものだが、この肉のある者は隙を生ずることなく、よくその下部を補って快感を添える。

陰毛の種類 相学では陰毛は其の人の配偶

関係、児女の有無、児孝に関する運勢を見る所である。これらの運勢を鑑定するには顔面や手よりも、陰毛の方が余程確実なる断案に達することが出来る。けだしこの部はその方面の本部であるから、確実であるのは理の当然である。古書に云う、漢の高祖の母は陰毛の長さ二尺あり、貴將を生むと。陰毛は長いのを尊び、短いのは下賤である。また全然毛のないのは無毛症というて甚だしく不吉の相である。多くは長命し難いが、若し長命の場合であっても性格は頑固であって夫を剋すと云われている。古より長毛の婦人は何れも高貴によって貴子を産む。漢呂太后は錦色の美毛だったので錦糸妃という名があった。楊貴妃も又錦色の美毛があり、引けば二尺に余り放てば縮んで宝珠の玉の如くであった。遂に帝王の寵を専らにした。我国では、常盤御前の開の深さは八寸、陰毛一尺七寸だったと伝えられている。近代では海軍大将伯爵某の母親も稀に見る長毛であったことは鹿児島地方に於て有名である。次に、陰毛の色に就いて述べると、前記の如く錦色で光っておれば最上であるが、恐らく幾十万人に一人という比率であろう。次に良いのは赤毛で、赤色で長いのは何万人に一人の割合である。但し赤色

を有する婦人には多淫なるものが多い。結婚も一回では完了しない。以上の錦毛・赤毛の二種は局部の構造及び交接の動作も拔群だとされている。次は黒色の陰毛で、これは普通で最も多い色であって、百人中の九十五人まではこれだ。所謂、可もなく不可もなく、平々凡々の一生を送る婦人である。黒色の場合も短いよりは、長いほうが運勢は良いとされている。次は灰色、灰色の陰毛を有する婦人はやや低能で、将来必らず大難を受けるべき不吉の相であるが、然しこの色を有する婦人は甚だ稀れである。「例。ある所にこの色の毛を有する女があつて、呉服問屋に女中奉公していたが、三十五六になつても結婚もしないでいたが、やや低能な女であつたから、周囲の多数の男たちの為に弄ばれて、いつしか陰毛が灰色であることを発見され、それが評判になつていた。後には或る男のために欺かれ、貯金・衣類その他僅かばかりの全財産を剥ぎ取られ、自殺しかけたことがあつた」所が、灰色より更に悪いのは白色性毛で、相学の上からいうと諸種の危難が漸次近づきつつある不吉きわる色である。故に四十を過ぎないのにこの凶色あるものは、必ず大難を受けるを免かれない。但し晩年になつて上下共

に白毛は差支えない。实例として、明治四十三年頃に大阪市北野町東之町にあった養子が養母を強姦致死せしめた事件で、その女は二十三才頃から陰毛が灰色となり、次第に白色を増し、当時四十三才で真白だったということを書いてある。また、昔明智光秀の母が年若くして陰毛白し、後光秀の為に怨死す。古今皆かくの如し、とも云っている。

陰毛の生え方 陰毛の生え方は男女共に三角形になって居り、臍から三四寸位下って上巾が広く、下に向って狭く、恰も三味線の撥を立てた様な恰好の生え方が良い。臍に達するまで昇り形に生えているのは下賤である又、婦人にして陰毛が肛門の周囲に生えているのは、側毛というて甚だしい下賤の相である。陰毛は巻き込んで、渦のようになって、玉の如くなり三角形を成すのが上相にして貴児を生む。賤相なるは上に向って尖り粗薄であり、子孫繁栄しないと云われている。〔例著者はある時、某遊廓の娼妓が自己の陰毛を自慢して、山形に剃って富士山の形を作り、客に見せて喜んでゐるのを見て、不吉の行為として種々将来を戒しめて置いたが、数年後聞く所に抛れば、彼女は或る事情があつて海に投じて自殺したという。彼女の如きは黒色

の毛が草の如く。短粗に生えているだけだった。陰毛は凡て短粗なるものは不可である〕
無毛症 無毛症の婦人は、百人に一人か二人位の割合に存在するものであるが、甚だ不吉な相であつて、此種の女は多く長命しないものである。若し長命すれば甚しく愚鈍であり、夫を剋し、児孝を受け得ない。医学上からは無毛症でも何ら差支えないと云われているが、それは男女が交接するに差支えがないということ、運勢の上より見れば相当重大なる関係がある。

陰部の位置、大小、広狭 婦人の陰部の恰好は、口の恰好と甚だ深い関係を持つて居り口の大きく広いものは陰門も大きく広く、口の小さく狭いものは陰門も又小さい。従つて陰門の余りに大きく広いものはとかく夫に対して不満を抱き、物足らぬ感じであり、それに反して余りにも狭く小さい場合にも何かと是非が多く、それはそれで不満が絶えないものである。次に位置であるが、婦人の口の両端が吊り上り、中央が垂れているものは、陰部が高付きであるから、交接に際して好都合である。反対に口の中央が高く両端が下がつて所謂へ字形のものは局部が低く、不便であり下品である。凡て婦人は老年になると口

の両端が下つてしまうもので、勿論そうなれば、陰部は下に垂れて締りがなくなつてしまふ。女陰相を大別して謂えば、上付きは配偶の縁も良好であるが、下付きは配偶の運悪しく、勢い児女の縁も拙いものが多い。(註。以下図入で細く類別されているが、大要のみ摘録することにした)。

口大なるは歌唱に適し、技芸に長じ良なるも、甚だしく大なるは夫を剋し、口説多く常に不満を洩す。下唇若しくは下あごが突出し俗にいう「受け口」「さより口」の婦人は局部の下側に肉が突出し、交接に際して能く締抱する機能はあるが、平素に於て嫉妬心強くまた理屈を言う癖があるから、夫及び児女に対する運が凶い。上唇が突き出し、下唇が甚しく引込んでゐるものは、局部も下向きになつて居り不便である。若しこの種の女にして額が凸なるものは、交接に際して局部の直ぐ上の骨が邪魔になつて、抱擁がしっくりしないから、僅かに局部のみ接合して快を得るより外はない。唇の厚いものは腔浅く、唇垂るものは下門垂れて低し、唇の薄いものは陰門薄く長し。両観骨(頬のうえ)の色の赤いものは下門に臭気あり、紫色のものは悪臭治し難しとされている。唇の色紅美なるものは

晩年に至るも性力衰えず、唇色早く枯るるものは同時に生機を失う。色難の相というのは男の場合は左眼が小さく、婦人にあっては左眼が大なる場合で、近く色難を受く、また家庭内に義理関係生じ易し、ということになっている。

古書にある秘伝 古相書にある秘伝は、昔から觀相家の何人も秘密主義を守り決して公開しないから、その真を伝えたものは甚だ稀であるが、予が所蔵する秘書の一部を複写すれば左の如くである。原書は秘伝のことであるから隱語が使つてある。——として大要今迄に述べたと同じような事柄が「女陰の伝」として記してある。

男根の大小、長短、怒張 男根は勿論大なるものを良しとする。余りに短小なるは、男根としての価値がない。これは交接に際して男女双方が快感を感じる機関であるから甚だしく小さくては快感を催す事が浅くて駄目である。普通は長さ四寸を適度とする。余りに過大で、六七寸以上になるものは良くない。かかる者は性格がグチ深く、大声で多弁饒舌し、又他人の忠告を容れる雅量に乏しい。龟头は大きくてよく肉の張れるのが良い。龟头は男根中で最も大切であつて、胴体は如何に

大きくても、龟头の細く尖っているものはその価値を半減する。男根の甚しく短小なるものは一生の運勢が決して發達しない。但し、青壯年時代にはよく男根が發達して居たものが、老年になつて萎縮した場合はその限りに非ずである。然らば、特別に長いのはどうかと云うに、これまた不吉の相であつて、必ず身分不相応の希望を抱いて失敗し、且つ長命しないといわれている。男根は怒張して上に反るのが良い。昔から大なる成功者はことごとく男根がよく反つて龟头が高く、腹部に着く位に成つていた。又、男根は皺が多く、平素は軟小、怒張して硬大するのが良い。平素より長大にして怒張するも、その差無きものは一生成功しないのみならず、兒女すくなく兒孝を受けることができない。更に平素より胴が横様に曲むものがあるが、これは甚だしく不倫の相としてゐる。又男根に黒子のあるのも不倫の相である。

男根の色、睪丸其他 古書に曰、王者の龟头を玉珠と呼ぶ、長さ四寸を大上とす、色白きこと玉の如く、赤きこと鶏冠の如く、堅く恰好宜しきを貴相とす。色黒きは愚にして貧賤なれど、美しく艶あつて黒光りするものは良しとされている。青色、白色は多病、青白

色は短命。黄色なるものは淫蕩である。皮寬く龟头に被れるものは性格だらしく、就中怒張するも皮を脱せず、女と交接し機局に至るも尚皮を被るものは短命下賤、大事業を企て得ず、一生他人の奴となつて暮す。陰のうは色黒く堅く皺寄りて垂れざるものは吉、色赤く黄にしてゆるく胆を掛くるが如きは精すなく短命なり、色白くしてゆるきものは多病である。男根は長さと丸さが等しいのが良く、故に長さを四寸とすれば周囲も四寸あるを良しとされている。

昨夜交接したるの相 昨夜交接したるものは、眼瞳必ず散大し、眼光薄く光る。その度数少きものは平素と異ならないが、回数が多い場合には甚だしい兆候を呈す。

局部を戲弄する癖 夫婦同衾して妻の局部を戲弄する時は、妻においては或いは頭痛、或は眩暈を感じ、若し妊娠中であれば産は必ず重く、或いは胎児が死産したり母胎に故障を生ずる。畸型児を産んだ女性を見るに夫がこの癖を持つていて、常に局部にその証形を印している（必ずその附近に紫痕を印す）として、この癖が甚だしくなる時は変態性となり普通の交接では満足しなくなつてしまふ。

上廁に就て 上廁（便所に行くこと）に際

して長時間を要するものは、性格気ままにし
て、婦人は必ず私に嫁す。患者にして廁に入
る長時間を要せば生命長からず、健者にして
この癖あるは性格必ず暗陰なり。また、前方
に寄りて用足すものは、性格が几帳面であり
後方に寄りてするものは、性格が必ずだらし
がなく、義理を弁えず、世間の障りとなるだ
ろう。

以上で「色情相法」の概略を述べることが
できた。次に少し気付いた事柄を附記する。

『弁蒙相法』のうち乳房の相について――。

「婦人の乳首の小さいのは子が無い。また、
乳頭の色白きものは子育ち難し。婦人にして
乳房に、毛が沢山生えているのは子無しであ

る。若し生んでもその子は短命である。乳房
は仰向くが如きが貴相である。乳首の色は紅
黒なれば子息が多い。」とあり、『神相極秘
詳解』には、「婦人の足至って小なるものは
陰門かえって大」とか、『南北相法』には、
「陰部に黒子ある婦人は必ず夫婦の縁交る、
子の縁薄くして、色情深し」などと記載され
ていた。断片的ではあるが、観相学の書には
何れも陰相については少しずつ触れているよ
うである。また、運勢や吉凶判断とは関係な
いが、『稀書』第三号（昭和27・3）に「全
盛七婦久腎」という江戸末期の艶本の全文複
刻が出ているが、『佳開十八品』と題して左
の如く女陰相を品等類別している。ご参考ま
でに掲げて置く。

蛸開（たこつび）。新開（処女なり）。毛
深開。土器開（かわらけ）。上付開。下付
開。茄子開（なすびかい、ぼぼの肉あまり
て外にたれる）。二生開（ふたなりかい、
核長）。鴨味開（これはぼぼの品にあらず
いと同志の交わりをいう）。酒開（女に
酒をのませて犯す）。炬燵開（こたつに久
しくあたたまりたるは暖かくて味よし）。
湯開（湯上りなり）。淫乱開（たれにても
させるなり）。買色開（女郎のぼぼなり）。
香開（頬の赤きもの必ずくさし）。印籠開
（いんろうかい、しまり加減よし）。赤開
（赤貝の如く、味よし）。毛開（けぶかと
は別なり、ふちよりまわりにかけて生え、
毛切れのおそれあり）。

惨酷人間の世界

丸 鬼 土 佐 渡

小森白監督の「極秘女拷問」は日本拷問刑
罰史以来久しぶりの傑作といえると思う。谷
ナオミ主演で、小生が前から望んでいた責め
られ方をしていてうれしかった。内容は明治

四年に起った参議、広沢直臣惨殺事件の実話
をもとにしたことは明らかである。その事件
の内容を、名和弓雄著「拷問刑罰史」からひ
ろってみると――広沢参議暗殺の最有力容疑

者は、同夜、参議と寢所を共にした愛妾、福
井かねという美貌の女性だった。厳しく取調
べ、連日連夜問いつめても自白がとれないの
で、妊娠中であるにもかかわらず、拷問にか
けることになった。ところがかねは、あらゆ
る拷問にかけられても、どうしても口を割ら
なかった。明治四年正月から、明治八年七月
までの四年七カ月の間、拷問の全課程を数十
回くりかえし、相当手荒く責められたが自白
せず、遂に証拠不十分として釈放された、と

のことである。

こういう内容のものだから谷ナオミも様々な拷問を受ける。まず取調べ室から悲鳴が聞こえてくる。天井から後手吊りに責めたてられている最中だ。大きな乳房も美しい大腿もむき出しでふるえている。吊るされたまま鞭打たれ、こづかれているためにぐるぐると回転する。

次の逆さ吊りは足首を縛って天井の滑車で吊りあげられる。そして鞭うたれる。

次は三角木馬責めだったがちょっと変わった鉄の馬だった。ナオミが天井にうしろ手で吊るしあげられ、徐々に降す。ナオミは足をばたつかせ、のがれようとするが、二人の男が左右からその足をつかんでまたがらす。鋭点に到達するとナオミは悲鳴をあげて苦しむ。やがて血がふき出し、白い脚をつたって流れはじめる。

次は両足首をロープで夫々縛って「もっと開け」という命令で開股責めにする。その間も責め棒が襲う。カラーで、青く赤く、鞭や棒で責められた跡がリアルに出ていた。

次はあぐら縛りである。あぐら、後手縛りで坐っている。ナオミを突くと横におしにこるげる。これはトリックなしの本格的な責めで、横倒しのまま無惨に鞭うたれる。

次は最も惨酷でリアルな責め場となる。ナオミが天井から逆さ吊りにされ、彼女の足首

を縛ってあるロープを滑車であげ下げすることによって、真下にあるタライの水につけられたり、引上げられたりする。ふさふさとたれ下がった髪もろとも、三秒位顔を水につけられ、その回数が十回以上くりかえされる。かなり本格的な責めといえる。

その他、大月麗子が尻打ち責めや猿轡をかまされ犯されそうになる場面。矢島弘、冬木京二が強烈に責められる場面がある。

外国雑誌の中には、すばらしいのがある。

「Ultra」(Vol. 2 No. 2)には、全裸にむかれた女が、十字架の前で鞭うたれてうちふしているもの。全裸で十字架にはりつけられている写真があったし、「Beau」三月号には、ドラキユラ映画で全裸にしたグラマー女性を拷問柱に縛りつけ、鞭うつシーンが出ていた。

昨年後半から本年はじめまで続けて発行された「エロスの歴史」及び「エロス絵画集」(大場正史氏等訳)には、エロチックなシーンやS・M場面が少なからずある。

いろいろな男女の生態やフェラチオの図。

「肉体の衛生」といって剃毛や浣腸したりしている図。サドの「ジュリエット」の挿絵多数。女の逆海老吊り、女の両手吊り尻鞭打ち女の大字礫、妊婦の上下からのハチ合わせ等は既に見たものだが、初見のものには女の乳房吊り、男の急所吊り、女の手錠吊り、鞭

打ち、男の釣針吊りと、その前の女の全裸縛り、女の後手縛り、逆さ吊りなどがある。

「ジュノーの拷問」は女の両手を高くかかげて縛り、両足は鉄敷に固定され、鞭打ちを暗示しているもの。女を木に縛りつけて、宗教の名のもとに行われるサディスティックな行為。大字で逆さ縛りにされ鋸でひかれていく「聖メダルトの殉難」。モリスのサド侯爵の前に両手首両足首を一しよにして縛られて転がされている女を描いた「神の如き侯爵」。いろいろな姿態で大理石に縛りつけられた女を見ているサディスティックな女の図。

半裸の貴族女性が、左手を後手に縛られて右手にフェンシングをもって決闘する図。色々なレスピアン図。同性愛とSとMと貞操帯とを一度にあらわした二人の女が鎖と貞操帯で拘束されているフランス写真。女が男を責めるマゾ場面。乳房その他に刺青をした女の写真。死体愛好症の絵。女が女を責めるサディズム(これは多数出ていた)。女同志で殺し合いをさせる「女ドレイの魂」の挿絵。女を大字に宙吊りにしておいて鞭打ち、針を何本もさして喜ぶ婦人達の図等々興味深い。「エロスの歴史」(6)にはこの他に、女のある部分で体温を計っている図や、トルコの拷問で女が乳房責めにあっている図。圧搾の拷問にあって乳房をおしつぶされ、悲鳴をあげている婦人の写真等がある。

懸賞入選作品

(五回分割連載第四回)

創作

理 恵 女 献 身



「りえ女、生れ故郷の牢に

収容され、領内廻りの上

七日の晒し刑を課せられ

処刑申渡しを受けること」

沢 潟 し の

夜になって男牢の方で何やら声がすると思
っていると、役人があたしの牢の前を通り過
ぎ、やがて女牢で泣声が上がった。男牢では何
かくどくどかきくどくように言う声がしてい
る。お婆さんは、あたしのそばにスーッと寄
って来て耳元に口を寄せ、
「明日はあ、久しぶりにい、お仕置があるち
ゆうこってえ、内々に知らされたもんですで

え、みなあ、泣いとるんですわあ」
と、ささやく。いくら覚悟していても、い
よいよ明日お仕置を受けるときまったら、や
はりいても立ってもいられない、辛い思いで
しょう。
「明日はあ、縛り首ばっかりらしゅうござん
すでえ、ゆるりとご覧なはりましょう」
縄つきの籠の鳥で、牢の真ん前がお仕置場

なんだから、いやでも見ているより仕方がな
い。けども、この先一と月近くの間、三、
四日毎に斬り首を見せられるとは……。とん
だ伏兵があらわれたもの。自分がお仕置され
る時だけは、何とか余り見苦しくないように
つとめられるつもりでいるけど、人の分まで
落ちついて見物できるかどうかということに
なると、われながら心許ない。

子供の頃に聞き覚えのある長月寺の鐘の音が遠く聞えて、卯の刻だと思ふ間もなく、庭先に人足がきて忙しそうに立ち働いている。朝食は、あたしとお婆さんの分はいつもの通りきたけど、両隣の牢の方はいつものように騒がしくならず、何となくひっそりしている。お婆さんが、

「今日お仕置になる罪人には水を下さるだけだが、引き廻しになる者には食べさせて下さる」

と教えて下さる。

もう四半時で辰の刻と思う頃、役人や足輕が入ってきて、男牢の方で名前を呼んで引き出している様子。小声で指図していなさる声がして、お縄をかけているらしかったが、戸をあけたてする音がして、そのざわめきも静かになると、役人達はあたしの牢の前を通って女牢の方へ行く。

女の取り乱して泣きわめいているのを叱ったりなだめたりしていたが、やがて牢の前を女の罪人が引き立てられていく。最初は二十七、八の女で、荒縄で縛られ首うなだれて後からこづかれて行く。続いてきたのは十ぐらいの子供で、可哀想に同じように荒縄で縛られ、すごすごと引き立てられて行く。お婆さ

んは、半年ほど前に火つけをしてお仕置になった者の縁座だと、教えてくれる。今の子供の外にも、向うの平牢の囚女に預けられている三つか四つの子供もいるという。御法だからお仕置はまぬがれないらしい。

しばらくすると、お仕置場では床几を並べたり手桶に水を満たしたり、人足や足輕が動きまわって場所をととのえていたが、間もなく検視の役人が見えて床几に着かれ、打ち役は刀を抜いて所定の場所に立つ。

向うから面紙をつけられた罪人を、人足どもが引き立ててくる。顔は見えないけど紙の上から罪の字の焼印が半分見えていて、男だけれどあたしと同じように長ゆもじをつけさせられている。人足が三、四人がかりで血穴の前に引きすえたと思ったのと、バスツと音がして血しぶきが上ったのと、どちらが先だかわからないほどの早技。きちんと坐らせて襟を引き下げ、肩を出させてから首をさしのべさせて、それから刀をかまえて……というように、いつかあたしが江戸でお仕置に立ち合った時のことを考えていたので、余りのお仕置の早さに、あたしは思わず胸がドキンとして膝がガクガクする。とり乱さずに、ちゃんと見とどけて上げましょう。

首のなくなった胴が俯伏せに延びて、まだ血が走っている。血が細くなると、そのまま足を持ってこっちの方へ引きずってくる。別の人足が湯もじを剥いで、庇の下あたりに転がしておく。次は女で、引き据えられるけど首を縮めているらしく、打ち役が何か言うのと、縄とりが後手の腕をねじ上げるようにして身体を前に出させるので、足を押さえられたまま腰を浮かして前にのめりそうになり、思わず首を延ばしたところで見事に首が落ち胴はそのまま首の後を追うようにのめって倒れる。直ぐに首が拾い上げられ検視の役人に見せ、向うの築地の際へ持って行く。胴は裸にして転がされる。あたしは始めの中は恐くて目をそらしていたけど、慣れるとそれほどきく。人間も首が落ちれば、後はお魚と同じようなもの。

着物を着た女の罪人が子供を抱いてくる。三つぐらいの幼児で、ちゃんと縄でくくられて面紙もつけられている。血穴の前でなく、試し斬りの台の上に俯伏せにおくと、間髪を入れず刀がひらめいて首が落ちる。続いて女の子供が、ちゃんと自分で歩いてきて血穴の前で首を斬られる。お見事。

次に女の囚人が赤ん坊を抱いてくる。まだ生れて半年かそのらの幼児がお仕置を受けるのを、とてもじっと見ていられない。けれども幼児は首斬り台の上で、何ということなく果てる。

検視の役人が床几を立たれる。お仕置はおしまいらしい。首のない罪人のなきがらは牢の軒先近く、あたしの牢の前から五間ぐらいのところに、後手にくくられたまま丸裸にされて、肩口をこちらに向け一列に並べられ、斬口からはまだ血が流れている。首は向うの塀際に、男は元結を切られ、女も髪をとかれて、さんばら髪になって転がっている。役人と人足たちが去って行くと、急にあたりが静かになり、お仕置を見ていたあたしはぐったりとして、お布団にもぐり込む。

一眠りして起きると、斬骸には大分、蠅がむらがっている。お婆さんは、斬骸は明日の朝までこのまま置かれて、明朝お仕置場へ運んで捨てられると言う。今夜はお通夜か。

酉の刻近くになってからまた、役向の人達がきて罪人を引き込む。見ると、面紙なしのままなので血だらけの地面やお仕置殻を辛そうに見ている。一日中、町中を引き廻されて取り乱す気力もなくなってしまうらしい。

役人の前に立たせると湯もじを剥ぎ、裸にしてから試し斬りの土壇の上に俯伏せに寝かされ左右の腋の下に杭を一本ずつ打ち込んで、首と両足首に縄を結びつけられている。生胴斬りだ。首と足の縄の先に人足がつくと、若い侍が二人、刀を抜いて前に立ち、二人ともに刀を振りかぶると、先ず胴の方の人が打ち下す。大して音を立てずに足縄とりが尻餅をついた手前に、腰から下の身体が転がる。続いて首を斬られて向うへ転げ、壇の上には後手に縛られた胸のところだけが残って血を吹いている。検視役が立って行かれて前後の斬口を一々しらべては、それぞれの打ち役に何か言われ、打ち役はしきりにうなずいて一礼して下って行く。役人が去ると、人足は杭を引き抜いて胸と腰から下の部分をこっちへ、首は塀の方へ転がす。

お婆さんは死骸を見るのが辛いらしく、奥の方ばかり向いて、こそこそしている。あたしだって死骸と並んで暮すのが好きなわけじゃあないけれども、ご同輩だと思っからそれほど気にもならないけれど、お婆さんは永牢者で生きてられるから、よけいお仕置を見るのがいやなのでしょう。しかし十幾人もの人達が次々に斬られるのを見た後で、あたしも

お仕置をされた人々と同じ姿をさせられて、同じ重罪人の牢屋に入れられているのは、いつかあの人たちと同じような定めにしたがわねばならない身の上だということをあらためて思い知らされる。その上、あの人達はまだ人間らしく面紙をあてられて、お仕着せを着用したままきちんと坐って首を打たれたのに引きかえ、あたしは広場の高い枠に張られたまま、鳥か魚でも料理するようにひどくされて、非人どもの気の向くままに生殺しで、ご見物衆に見ていただかねば、いけないのだから殿様のご錠とはいいいながら大変なお役をお受けしてしまったもの。

ふと、あたしは目が覚める。むーっと、いやな臭いがする。あたしが、この牢へ入れられた時、何か変な臭いがあると思ったけど今やとわかった。お仕置された死骸の臭いだったのだ。牢の格子の間から、月明りに死骸の転っているのが見える。夜が明けると、この死骸は海岸のお仕置場へ運ばれて、骨になるまで放っておかれるらしい。あたしもいつか、そこでお仕置をされお取り捨てになる定めだから、もう一度お目にかかれるでしょう。その時にはどんなに変っていなさるやら。そんなことを考えていると、いやな臭いのしは

じめたお斬殺も他人のようにには思えなくなってくる。お奉公する身には、犬も朋輩、鷹も朋輩といわれるが、お仕置をされる者は死骸も朋輩か。

朝、格子の外から差し入れて下さる柄杓二杯の水を手を受けて口をそそぎ顔を洗うのも大分、上手になった。普通なら何でもないことも、縄つきの身にはなかなかやりにくいことが多い。江戸でお厩に入れられていたときは、畜生並の丸裸で過したから、今のようには湯もじをつけさせていただければ、まだましでしょう。けれども用を足すときには苦勞する。この牢は、細長い穴を掘っており、その上にべったり尻をつけて用を足さねばならないので、湯もじ一枚でも身にまわっているとは邪魔になって困ってしまう。

並の囚人は、手拭いや紙など日用品を多少いただけるが、あたしのような重罪人は、何一ついただけないので、あたしにつきあわされているお婆さんは不自由だ不自由だと、何かにつけて愚痴をこぼしている。あたしが、江戸のお厩にいた時のことを、お婆さんに話したら、そんな悪いことをした人間とは身分が違うんだと、お婆さんは威ばっている。けれどもお婆さんは若い時から身持が悪くて間男

狂いにうつつを抜かし、とうとう奴に下げられたのに、その上、廓を逃げ出して永の入牢になってしまったと、身の上話を聞かせてくれた後なんだから、あたしはあきれて物もいえない。いっそのこと、あたしは御殿様に頼まれて藩のためにお重役の方々の身代りでお仕置を受けるのですよ、と言ってやったら、さぞせいせいするだろうと思うけど、そうもいかない立場だから仕方がない。

己の刻を過ぎた頃、人足がきてかき縄をつけた天秤棒に斬り殻を引っかけて運んでいき首は俵に入れる。外には牛車が待っているそう。

午の刻を過ぎてから牢役人がきて、男牢の罪人を引き出して行く。半時ほどして帰ってくると、今度は女の罪人が連れて行かれる。

お風呂だという。夕方近くになり、あたしたちの番となり「二人、出ませい」と牢役人と言われ、くぐり戸が開く。お婆さんに教わった通り、牢を出ると直ぐ土間に坐り、手首を後に重ねてくぐられてから引き立てられる。歩きながら見ると、この牢屋は大きな建物の中に別々に三つ並べて作っており、牢の間に話は聞いた樽が並んでいるし、後も三尺ぐらい明けてあり、牢の床の下も見通しにでき

ている。牢の外に出ると西日がまぶしい。あたしの後からくるお婆さんは、腰縄だけで手はくぐられず、草履もちゃんと履いている。

なるほど身分が違います。お婆さんは埋門から出て行くが、あたしは建物の裏手へ連れて行かれる。見ると三方が格子作りの一間四方ほどの小屋があつてくぐり戸から入る。中は石畳になっていて、寛から水が落ちていく。

牢役人の上役らしい人がくると、あたしの湯もじはとかれて、水のかかるところに坐らされて縄つきのまま二人がかりで洗い始められる。水は余り冷たくはないけれど乱暴に洗われるので、こそばゆいのと痛いので困ってしまう。今少し静かに洗って下さってもよさそうなもの。一通り洗われると、今度は足を持って逆さにされる。そして洗うのはそっちのけで、三人とも下品なことを言いながら、あたしの身体にいたずらする。三方、格子で外からもよく見えるので余りひどいことはできないけど、あたしが罪人で縛られているのをよいことにしておもちゃにしている。罪人をいじめるのは、よっぽど面白いものらしい。大体あたし自身、身におぼえがあるんだから仕方がない。

あれは、いつ頃だったっけ。もう四、五年前になるはずだけど、たしか秋口だった、縛り首になった女の介添え役を勤めたのは。

罪人はお端女だったけど大層気の強い女で同輩と口論して相手をかんざしで刺し殺してしまった。御屋敷内でも、廊下か自分の部屋か何かだったら、女でもその品によっては扇子腹か常の打ち首で済むはずだったのに、お三の間へ用事できてそこで争いを起し、相手を殺したのだから、お場所柄をわきまえず、不敬の至り」という一条がついて縛り首にきまつた。けれども他意があつてやったわけではないし、殿様の「誰か介添えについて世話して仕わせ」との御諒があつたけど、さて、その行き手がいない。皆、何のかんのと口実を作つて自分の部屋に引込んだまま出てこない。とうとう殿様がご立腹なされたので、あたしは普断別式だの帯刀御免とかいって威ばつていた手前、仕方がないから「あたくしに、そのお役目を勤めさせていただきとうござりまする」と

と引き受けてしまった。

本人は先に下屋敷に送られていたけれど、身一つで行っているからと思つて、あたしの部屋の者で二十年ほど前に別式で奉公して

いた人についていて、こういうことにくわしい老女に、供の頭になつてもらつた。

先ず着るもののことをお役向に聞きにやると「打ち首とは品変り、御検視、罪人とも常のままにてかまいません」といわれてきた。しかし、あたしが介添役として出役する以上「左様でござりまするか」と聞いておくわけにも行かないから、大急ぎで白木綿の単衣と下の物を作らせた。同役以上なら羽二重にしようと思つたけれど、端女だからと思つて木綿で仕立てさせたのが、ちよつと気になつたので、あたしは間着に白無垢を重ねて着ておいた。

色々な準備をしていたので申の刻を大分過ぎて夕暮れ近くになつて、お下屋敷に着いて見ると、案の定、とき髪の襦袢姿のままお蔵に入られて、しょんぼり坐つていたっけ。早速、あたしは、

「お預りいたします」

と言つて女部屋に連れてきて風呂に入らせ髪も洗わせた。その間に老女に相談すると、「打ち首や縛り首になる女の髪は、襟足を耳のあたりまで剃り上げ、鬘髻を出さない梳き髪のような毛卷きに結わせ、化粧は許されれば全身にさせるものでございます」と言う。

そこで女が風呂から上ると、そのまま連れてこさせて、若い者にいいつけて襟足をすっかり剃らせた上、化粧のさまたげになるからといつて身体の毛を全部、剃り落させてしまつた。女は覚悟をきめていたらしく、されるがままになつていたようだ。

「お願いがあります」と言うので、立て廻しておいた屏風の中に入つて見ると、女は顔を赤くしながら、

「お仕置をうけた時、粗相をしないように、当てさせていただきとうございます」

と言う。あたしはまた、老女に聞くと「それは縫付けてしまふにかぎります」と言つてけろりとしている。あたしは、どうしようかと思案していると、本人が「お願いします」と言うので「よいようにしてやつて下され」とあたしは屏風の外へ出てしまつた。

老女は若い者に言いつけて、蒲団針と紅のとじ糸、それに小さなヤットコを持ってこさせると「少々痛いぞえ」ときめつけておいてから縫い始めた。

やがて終つたらしく「それでは化粧をしてやつて下され」と言いながら老女が屏風の外に出てきた。あたしは少女に化粧道具を持たせて、一緒に手伝つて顔から指の爪先、足の

裏まで真白に塗り上げてやった。とじつけたところは、本のとじ糸と同じような縫い方でしっかり縫いつけてあり、白塗りの肌に紅のとじ糸がきれいだった。

どういうわけか、あたしも面白くなってきた。

「切腹の折には、おくびの脛が開かぬよう縫い合わせてから、お検視の前に出すとのことじゃ、そなたも今の中に縫ってつかわそうか」と言う。

「よろしくおねがい申します」

と答えたので、先ず着物を着せることにして用意のものをだしてみようと、生木綿で仕立ててあるのが何とも見すばらしく見えるので、肌着だけ用意のものを着せておいて、あたしは立ち上り帯をとき、間着の白無垢を脱いで着せかけてやった。当人はすっかり感激して、

「ご恩は死後までも忘れませぬ」

と、頭を下げる。

羽二重の小袖に荒縄を帯の代りに巻かせて一度、縁先に連れて行き、目付組の小者に荒縄で後手に縛らせた。それからまた、屏風囲いの中に連れ戻して、今度はあたしも手を貸して脛を絹糸で縫い合わせていった。両腕は

落花に結わえてあるから暴れる心配はないので丁寧に縫ってやったけど、いくら覚悟していても痛いものは痛いと思えて、針を通すたびに肩をぎくりとさせるのが、抑えているあたしには妙に心地よいので「ついでに口も縫ってつかわします」と申しつけてやった。そして蒲団針にとじ糸を通して縫いつけにかかったけれど、針を口唇に突き通すのに随分力があるので驚いてしまう。老女がヤットコを渡してくれたので、ヤットコで針をはさんで上下の口唇を指でつまんでぐっと通し、針先をまた、ヤットコでつまんで引き抜き、糸を引きしめながらとじつけていった。

縫い終わってから、お白粉のはげたところを塗り直し、口唇も脛も真白く塗りつぶしてしまふと、のっぺらぼうの変な顔になってしまったけど、

「よい姿になりましたぞえ。心安くお仕置を受くるがよい」

と言いながら、直ぐ引き立てて縁から庭に下ろし、小者に縄尻を渡したけれど、後から見ると荷造りした荷物が歩いているようで、おかしかった。あたしが少し離れてついて行くと、平らなところをひどくよろけながら歩くので驚いた。縛られている上に俄めく

らなのだから、今から思うと当り前の話だけど、あの時は取り乱しているのだろうと思っておかしかった。お馬場の先の空地には、粗殻を厚く敷いて仮のお仕置場ができていて、粗の手前に一鍬掘った窪みのところに膝頭がかかるように坐らされた。いくら縛り首でも筵ぐらい敷いてあるだろうと思っていたけれど、何もない本当の土下座で、バサツと音がして首が落とされ、それだけだった。あたしはそうそうに逃げるようにして部屋に戻ったけど、夕飯はまるっきり食べる気にならないで、お茶ばかりガブガブ飲んでいた。ところが戌の刻ごろになると老女が「斬り殻の身づくろいをしておりなさいませ」と言い出した。こんな夜更けに恐いことだと思ったけれど、先例を持ち出して「ぜひ、しておやりなさい」と言うので、恐いもの見たさ半分に老女と一しょに提灯を下げて出かけた。さっきの場所へ行ってみると首は見当らず、血を含んだ粗が黒く見え、驚いたことに胴が松の大枝に、足首に綱をつけて逆吊りにされていた。老女は平気な顔で「血をとったのでございます」と言う。人を縛るのに使う細引を染めるのだそう。とにかく、もうご用済みだから、懐剣を抜いて綱を切って落し、二人

で初めきれいなところへ運んだその重さ……。あたしは裾を合わせて綱を短かく切ったもので膝をくくってやった。老女は斬り口を見て「見事なお腕前でございます。この斬り殻は明日、試し斬りにされるから、今の中に肩口も縫い合わせてやりましょう」と言いながら、懷から針と糸を出す。あたしも釣りに込まれて提灯のあかりをたよりに、そりかえって開いている胸と背中を皮を引きよせ縫いにかかった。始めてみると気味の悪いのも忘れて、首の骨の品定めなどしながら、ぐいぐい糸を引いて切口を内へ巻きこむように丁寧にくけて、その上をまたお白粉で塗りつぶした。老女もあたしも血だらけになったので、お湯殿の外で着物を脱いでお風呂に入った。すっかり髪まで洗ってから、新しいものを着て、部屋に戻っていただいたお茶漬のおいしかったこと。

明け方、うとうととただけで殆んど寝つかれなかったけれど、朝になるとすっかりよい気分になったので、若侍が試し斬りをしているところを見物に行った。

正式の御様物の時には女など近よることもできないけど、今日のは斬り殻は女だから表向きのお試しではないので、あたしも見るこ

とができた。こんな大勢の侍たちの目に晒されるのでは、すっかり身づくろいをさせておいて本当によかったと思う。すでに胸のところから二つに斬られていたが、今度は下半身を縦割りにするのだそう。吊り下げた両足が左右に分れて大きくゆれたのは見事なものだ。昨日、血を搾った斬り殻なので斬っても血が流れないのは、具合のよいものと思う。

どうもあの時から、あたしもお仕置好きの仲間入りをしてしまったらしい。罪人にお縄をかけさせたり、痛みを堪えて肩を震わせている女の臉や口唇に針を突き通す時の、身体の中がぞくぞくするような不思議に快い気持は、今でも覚えています。

こうして、あたしをおもちやにしている人も、あの時のあたしと同じように楽しんでいくのでしよう。それでもどうやら気がすんだらしく立たして下さる。後手にくくられた縄が水を吸って締まり、きつく、強く洗われたところが、ひりひりする。身体は拭いては下さらずに引き出される。

たとえ、どうされても取り乱さずに甘受する覚悟でいるから、裸のままだが、あたしはしゃんとして歩く。冷えきった身体に、外の生暖かい風が心地よい。

外鞘に入って、せっかく身体を洗ってもらったのに、汚れると思ったけど、土間に坐って、お縄をかけかえていただく。また、小手許しにしていたいて牢に入る。お婆さんはまだいないし、正面きって坐るのは、やっぱり面はゆいので、半分右に受けて坐る。

また候、畜生姿で過すのかと思っていると、お婆さんが機嫌のよい顔で戻ってくる。平罪人は本当のお風呂に入れるのか、顔を上気させて、洗いたての着物を着て牢に帰ってくると、懷からたたんだ物を出して見せる。あたしの分らしい。立ち上って巻いてもらうと、やっぱりホツとする。しかし、この湯もじは洗ってはあつたけれど、あちこちに随分ひどいシミが残っている。前のもそうだったけれども、ようやく今になってわかった。あたしが着せられている、このひとや湯もじは、お仕置の斬り殻から剥ぎとった、本当の死刑衣でした。前のお仕置から十日余りも経ったのに、その後お仕置はなく、中庭はひっそりしたままだ。しかしよく考えてみれば、いくら大身でも同じ藩内で三日にあげず、首を斬っていては、人の種がつきてしまうでしょう。おすてさんが話して下さったのは、お江戸の話らしい。あたしもあの頃は夢中だったから、この

藩内のこのように、思い込んでしまっていた。

朝飯の後、久しぶりに七郎どのが入ってこられ、

「りえ、出ませいっ」

と、呼び出される。あたしが、くぐり戸を出ると、お縄をはずされ、例の血縄で今までとは違った手のこんだ結び方にされる。手伝いの足輕が、

「珍しいお縄でございますな」

と聞くと、七郎どのは足輕よりもあたしに聞かせるように言われる。

「今日から晒しだが、串刺し者の晒縄というのは当藩の縄術にはないのだ。だから、これは磔者の真の晒縄だ」

「さようでございますか。永年ご奉公いたして参りましたが、始めて拝見いたします」

「そうだろう。ふだん磔者にかけているのは草の縄だからな。こんな縄をかける罪人は、めったに出るものではない」

なお七郎どのは足輕に色々説明しながら、左右の結び目がきちんと揃うように丁寧に結えられる。

お縄がすむと、両足を前に出さされて足枷がとりつけられる。お縄の時と違って左右別

々のを、かすがい止めにしてとりつけてから立たせて下さる。歩こうとすると、枷と枷とが打ちつけて転びそうになるので、あらためて両足を左右に広げて、すり足でそろりそりと歩く。木戸口を出ると番がおいでであり、その上に立膝して尻を下ろす。

七郎どのと侍二人に足輕五、六人、それに人足が二十人ほどで列を組んで、お城の方へ向う。町並みは昔の通りのように見えるけれど、もう二十年も以前の、子供の頃みたつきりだから、なつかしいより珍しい。

道中で見た町々と比べても大分、家並みがいよい。大手へ出ずに廻り道をして行く。行列が通り過ぎると家の中から人々がとび出してくて、何かささやきながら見送っている。行列は足早やに乾御門の方へ行く。お堀の橋を渡って門を入ると、また木戸をくぐり、狭い通路をぬけると番が下りる。あたしは立たされて横手のくぐり戸から引きこまれ、七郎どのは向うへ行かれる。

中に入ると御吟味所で、砂利を敷きつめた白州になっており、あたしは縁先から一間ほど手前の砂利の上に引き据えられる。足枷があるので正座はできないから、右膝をついて左膝を立てたまま、右の枷の上に腰を下ろす

と、膝が割れて見つともないけれど、世話をして下さる足輕は、そんなことにはかまわず後に下って控えるので、あたしも裾のことは気にしないことにして軽く頭を下げている。

間もなくお役の方々が出座されると「頭を上げい」と言われるので、あたしはきつと上座を見上げると、袴姿の面々がズラリと居流れて、少し下ったところに、七郎どのもおられる。

こういう席では、殿方の袴姿はとても立派に見える。あたしは、ずっと江戸の奥向で育ったから、国元のお役人は名前も知らないし第一、こんな罪人のことなど何役が扱うのかも知らない。

正面のご奉行らしい人が、奉書を取り上げて開かれるので、平伏はできないからなるべく深く頭を下げる。

「去る三月、永暇申しつけられ候、元女小姓りえ、其方儀、身分柄をもわきまえず、不敬の働きをいたし候段、重々不届至極につき重き罪科仰せつけらるるにより、七カ村晒しの上、国中引き渡し申しつくる」

「はあ」と、あたしは答えたが、われながら声が上ずっている。皆様が一斉に立って行かれるところを見ると、お仕置の申し渡しは

晒が済んでかららしい。あたしは引き立てられ立ち上ると、足軽たちに回りを囲まれて歩かされて行く。

御門を出て橋を渡ると、牛車が一台とまっている。そばまで歩いて行くと、人足たちがあたしを抱き上げて車に乗せる。車の台の真中に柱が一本立っていて、その柱に立ったまま後向きにつながれ、首筋のところと手首の一方所を柱に結えつけられるので、少し反り身になったまま動けなくなる。

しばらくして乗馬の役人や、幟や木の札を持った人足がきて、列を作って出発する。紙の幟には平仮名で「くしざし」とだけ大きく書いてあり、先頭に立って行く。その後には木の札が続き、これには、あたしの名前や罪状がくわしく書いてあるらしい。車の囲りには足軽がついて、乗馬の役人は少し後からくる。行列は町を通り抜けて山手の方へ行く。人足たちが附近に触れて歩くものだから、人々が走り寄ってくるし、子供たちは牛車の後からゾロゾロとついてくる。なるほど上手くできている。あたしは後向きに引かれて行くので、見物人たちに真ともに顔を合わせ、どちらを向いても見物人からは顔をそらすことはできない。

田畑で働いていた百姓たちも、手をとめて道端に出てきて見物する。男は大抵だまって見ているが、女たちは「売女、人非人、畜生極道者！」などと、知っている限りの悪口を聞こえよがしに言いながら、憎々しげに見つめているし、子供たちはワイワイ喧ぎながら車の後へついてくる。

先に行く木の札には大分ことこまかく、あたしの犯した罪状を書いてあるらしい。とにかく、あたしは極悪非道の逆罪人の筈だから仕方がない。

三里ほどもきて、お城の天主閣がずっと遠くなり、岡の向うがわに隠れてしまうと、村の中へ入る。

あたしは、お女中の内でも特別で、七つでお城に上ったきり、母様には二度とお目にかからないが、お亡くなりになったと聞かされたし、父様には江戸へ上る前、ちょっと殿中でお目もじして「わが家はないものと思え」と言われたのが最後で、江戸へ上ってから手紙一本書くことも許されなかったから生れ故郷といっても、どこが何村で、御領内がどのくらいあるものやら皆目、見当もつかない。村を出外ずれたあたりで、牛車は道からそれて止まる。お晒場らしい。足軽が牛車の上

へ上って、あたしを柱から解くと、数人の人足に抱えられて晒し台の上に乗せられる。人の肩ぐらゐの高さに板が二枚並べてあり、その上に左右の足を別々に乗せ、間に立っている柱に身体を括られる。三寸ほどの板が一尺ぐらゐ間をあけて並んでいるだけだから、膝を割って足枷の間にお尻を乗せなければならぬ。人足が後から、あたしの湯もじの裾を引いてお尻を出し「糞でも何でも勝手にしな」と言ってお向うへ行く。

そういうことを、わざわざ大きな声で言わなくても、よくわかっております。そうでなくとも今朝はまた、薬湯をたっぷり飲まされているんだから……

集ってきた見物人たちも、ぽつぽつ散らばって行く。

お江戸でも屋敷の外へは、めったに出なかつたけれど、お晒しと引き廻しは、江戸育ちの端女に頼んで内緒で見物に連れて行ってもらったことがあったけ。

「今日は、お晒しがあります」

と、どこかで聞いてきてくれたので、あたしは髪を結い直し、着物も端女のを借りて門札だけは仕方がないから、あたしのを使って

二人で見物に行った。

四つ谷のお見附のところに縄囲いがしてあり、その中にまだ若い女が、やつれて坐っていた。十月というのに素肌のまま後手にくられて、あきらめ切った様子で俯向いていたけれど、あたしは悪事のむくい、よい気味だと思ひながらよく見てやった。

木の札にお家流の達筆で罪状が書いてあるのを、供の者に読んでやったけど、浪人の女房で夫の浮気をねたんで、相手の女の家に火をつけたので、火あぶりに行くと書いてあった。

お仕置のもようも見物したかったけれど聞くとところによると大分、遠くなので、ちょっと抜け出して行くというわけにもいかないから、あきらめた。

それから引き廻しは、ご用で出たときに行き当った。あたしが供の者に文箱を持たせて歩いて見ると、見すばらしい行列が見えてきて、供の者が「横丁にお入り下さい」と言うので聞いて見ると、お引き廻しだというから横丁へ入るどころか、乗り出すようにして供の者にたしなめられたが、そのまま見物してしまった。罪人は男三人に女一人で、裸馬に乗せられてきた。

一人の男は町人風のなりをしていたけど、他の罪人は、めしうど着の布子で、荒縄でいかめしく縛られて馬に跨らされていた。女の札には「不義を犯したかどにより、引き廻しの上、死罪」と書いてあった。

花恥かしい盛りの若い女が、みすばらしい男仕立の古布子一枚着せられて、しかも馬にまともに跨がられ、太腿も露わな姿で町中を引かれて行くのは、罪のむくいとはいえ、如何にも憐れな姿でした。

あたしは乗馬を大分やっていて、普断は袴をはいて本乗りしていたけど、人前に出る時には打ち乗りだった。あたしは帯刀を許され別式とか何とかいわれていたけど、やはり女が人前で馬に跨るのは、はしたないと思っていた。しかし今のこの姿はまた、変れば変わるもの。あたしは物心ついて以来の御殿育ちで人一倍きびしくしつけられてきたのに、こともあろうに生れ故郷で、こんな姿を晒されている。

日が落ちるのを合図に晒台から下ろされ、車に乗せられて村の代官所へ運ばれる。こんなところにも、牢がつくってあるのに感心する。小さな土間の、一畳ぐらいしかない牢で

格子も一重だけど、入口のそばの外から見えるところにあって、ふだんはだれを入れて置くのかしら。けれど入口の錠前の錆び加減から、もう幾年も使ったことがなかったに違いない。

庭先に焚火をして、今夜は寝ずの番がつくらしい。それでは、あたしは縄目の身ながらゆるりと休ませていただきます。

夜が明けると、本道様が脈をとりに来て、食事の後には薬湯を飲ましていただく。匂いの様子では人参が入っているらしい。庭先に荷駄鞍をつけた馬がつれてこられ、人足も集まってくる。あたしは牢から引き出されると直ぐ抱えられ、馬の荷駄鞍の上に後向きに跨がられ、太腿を鞍にくくりつけられる。なるほどこうしておけば落馬の心配はないでしょう。けれども、これでは馬に乗るのではなく、積まれているのだから、馬が暴れてもどうにもならない。

門を出て、昨日の晒し場を通る。ご領内を見るのは、これが始めての最後だから、よく見せていただくと思うけど、鞍の両側の木に内股をぴったり結えつけられているだけで、鑑がないから足を垂らしたまま、力のいれようがない。木のあたるところを変えようと思

っても、くくられている上に、どこにも力のいれる場がないから、同じところがなおさら痛くなるだけで、大して重いとも思わなかった足枷の目方が腰にこたえる。串刺しの刑をうけるのだから、太腿に傷ができたからお仕置の時に見っともないでしょう。

どうやら晒し場所についたとみえて、馬から降ろして下さる。また、晒し台の上に乗せられるのかと思ったら、今日は地面の上に直かに坐らされた。

暗い中に目が覚める。これで六晩、村泊り続けたことになる。でもまあ、どここの村役のところでも、よくこんなに牢屋ができておりますこと。

しかし、どの牢屋も長らく使ったことがないとみえて、錠前が錆づいている。昨日など錠前を掛け矢でたたきこわして、やっと入口をあけたけれど代りの錠前がないので、戸前に紙で封印してすませたのには驚いた。どうやらあたしを牢に入れておくのは、夜番の人足どもが、あたしに悪さを、しないためらしい。

鞍の工合が悪いのに七郎どのが気づかれ、ぼろ布を巻かせて下さったので、昨日からは幾分楽になった。今日は馬の鞍の後輪に二尺

ばかりの柱が立っている。どんな趣向かと思っていると、正面に向けて乗せられる。襟元と手首を柱にくくられ、腰も鞍に結えられると、身体がしゃんとする。自分で手綱をとるわけではないが、後向きに乗るのは、何とも具合の悪いものだったので、よい気分になる。

七郎どのが、あたしのそばへ寄ってこられ「今日から三日間は一日中、引き渡しです」とおっしゃる。あたしは小声で

「おねがい申します」

と答える。お晒しが一日少ないようだけれどあたしは別にかまわない。

午の刻を少し過ぎた頃、河べりに出る。土手下の茶屋の見えるところで一休みになり、馬から降ろされて土手の上の松の木につながれ、人足どもは茶屋の方へ行き、役人たちはあたしを囲むように一人ずつ離れて腰を下ろして弁当を使う。罪人は二食だから、あたしは後で徳利に入れて小者が持ち歩いている薬湯を飲ませていただくだけだ。つながれたまま足を動かすと、青草が足に触れて快い。どこかで雲雀が鳴いている。向うの百姓家からは薄青い煙が流れて、牛の鳴き声が聞える。こんな景色をのんびり眺めていると、自分の

身の上のことなど忘れてしまいそうだ。

今日で六日間、ご領内を引き渡されたがどこを見てもご政道が行きとどいていて、江戸からの道中、ずっと見てきたのにくらべても田畑の出来もよいし、庶民のなりも小ざっぱりにしている。ただ囚人の扱いだけは、お江戸よりきついようだけれど、これは罪人が少なくて御役人衆がひまなせいかもしれないし、それにあたしは公方様に弓を引くような、とてもないことをしでかす重罪人だから、当然の報いなのでしょう。

そよ風に吹かれて後れ毛が目にかかるけれど、首を振っても直らない。なにしろ、おすてさんが鎌で無造作に引き切ったままだからずっと右の目の上に後れ毛が下ったきりだ。ちよっと掻き上げればよいことが、縄目をうけた身になわぬこと。両の手がこんなにも便利なものとは、ついぞ気づかなかった。横に寝て起きるのだった一苦労だ。お引き渡しになってからは、ずっと垂れ流しだから、湯もじの裾が汚れたといって切り裂かれてしまった。お牢屋を出るとき、お里婆さんが腋の下一杯に巻いてくれた長湯もじも、腹巻のようになりました。でもこれ一枚あるお蔭で、乳を晒さなくてすむから助かる。もっとも、

道端で草引きなんぞしている女たちは皆、飛白や縞の短い腰巻一枚の素肌で働いているのだから、罪人のあたしが長いものを着させていただいているのは申しわけない。着物のことは忘れていましょう。

足輕が小者を連れてきて、薬湯を飲ませて下さる。今日は曇り空なので、ちっとも喉は渴かないけれど、これもお仕置の中だから、大きな徳利一杯の薬湯をすっかり飲み干す。

今日で三日、馬上で過ごしてご領内めぐりも一通りすんだらしい。人足どもが、今日のご牢屋泊りだといっているのが聞こえる。

やれやれ、昨日から踝のところが枷に擦れて痛くてかなわない。ゆうべ本道様が見つけて膏薬をつけて下さり、役人にも話したと見えて、今日は膝を曲げて足枷を鞍に吊って下さったけれど、やはりゆれるたびに擦れてヒリヒリする。二、三日中には、生きながら地獄の苦しみを受けて死ぬのだから、こんなことぐらいかまわないと思うけど、やっぱり痛いものは痛いんだから仕方がない。

暗くなつたので提灯をつけ、柄をあたしの胸の縄に挟んで行く。蟬の匂いが妙になつかしい。お蔭様で晒し者の役がつとまります。

かれこれ戌の刻近くになって、ようやく御

牢屋に戻る。御斬場の入口まで馬上のまま引き込まれて降ろされ、四、五人の人足に抱えられて牢に入ると、足枷を外すし江戸から着いた時と同じように、お湯で洗われる。足首の傷がしみる。行水がすむと足首に膏薬をつけて下さり、新しい湯もじをたたんだまま渡され、久しぶりに縄なしのまま牢に入る。牢内にはお里婆さんが待っていて「ご苦労様」と言ってくれる。

あたしは何だか身体中の気力が一度に抜けてしまったように思えて、ひだるいけれど、御殿女中の貫禄を見せてきちんと正座し、「お蔭をもちまして、お晒し、お引き渡しのお仕置を、とどこおりなくつとめさせていただきました。また、入牢仰せつけられました故、お里様のお手をわずらわします」

と、きっぱりお婆さんに挨拶した。それから湯もじを巻いてつけ紐をむすぶと、お婆さんは手をかして床に寝かして下さる。

夜が明けたけれど、ひだるくて枕が上らない。お婆さんが

「そのまま休んでお居なはれやあ、ようござんすでえ」

と言ってくれるので、あたしは寝ていたが本道様が牢内へきて脈をとって下さる。

一刻ばかりすると、おかゆと丸薬、薬湯などが運ばれてきた。罪人の分際でもったいなと思うけど、お仕置までは仮にお預りしている大切な身体だから、無理にすっかりいただいて、また横になると直きに眠ってしまった。

ぐっすり眠ったお蔭で、今朝はさっぱりした気分が目がさめた。どうやら昨日飲んだ丸薬は眠り薬だったらしい。それにしてもお晒しは、こんなに身体が疲れるとは思わなかった。もっともお屋敷にいるときも何かの儀式に出席すると、すっかり疲れて明くる日一日寝込んでしまったことがよくあったが、今度は七日の間、毎日気をはっていたのだから仕方がないと思う。

三日目の朝あたしは暗い中に目がさめた。ようやく、お晒し疲れもとれて身体も心もさっぱりしてよい気持。

朝食とお薬をいただくと間もなく七郎どのがこられ、牢の外へ引き出され縛られると、裏の水責場へ引き込まれる。そして石畳の上に俵の開いたのが一枚敷いてあり、あたしはその上に坐らされると、小者たちは下って七郎どのだけが残る。七郎どのは、あたしの縄をといて下さってから、あたしの前に膝をつ

かれる。

「これは内聞でございますが、りえ殿には明日、大手御門外にて、再びお晒し役をつとめていただき、明後日早朝、城内お白州において、お仕置読み渡しの上、直ちに馬上にて下のお仕置場にお送り申し上げ、かねてよりご承知の通り、串刺しにいたさるることに相定められました」

三月も前から覚悟はしていたが、改まって言い渡しを受けると、ああ、とうとう行きつくところまできたかと、急に胸がつまって言葉もでない。あたしは、やっと蚊の鳴くような情けない声で、どうにか「はい」とだけ言っ頭を下げる。七郎どの

「それ故、本日夕刻、お仕置の身仕度として上下の前歯を抜き去ります。串刺しのめしうどの定法でござりまするによって何分ご承知下さりませ」

と言われる。ほんとうは江戸にいるときに歯を抜かれる筈だったのに、歯がないと物が噛めないで身体が弱り、お仕置きの時、余り苦しまずに直ぐことされてしまうから、というわけで、なるべくお仕置間近かまで延ばされていたんだから、今日あたりが丁度よい汐時でしょう。

「重ね重ねのご配慮かたじけのう存じます。ありがたくお受け申します故、よろしくお願いいたしまする」

幼なじみの七郎どのに不愛想なものいけなと思ったのでお礼を言っ上げてみると、七郎どのほっとしたらしく、

「歯を抜きますと言葉が不自由になります。

それ故、明後日以後は、お申し渡しの折も返答は要りませぬ。ただ頭を下げるだけでよろしゅうござります。今日は夕刻までここで過ごしいただきます故お心次第にお声をお使いなされ。この牢は拷問所でござる故、どのようなお声を出されてもかまいません。りえ殿には上懸りのおたしなみがあられると承りました。どうかご存分にお楽しみ下さい」

と言うと、手を打って仲間を呼び錠をあけさせ、たばねたお縄を持って出て行かれる。

あたしは、俵の真中に楽に坐り直し、あたりを見廻すと、水責め場というだけあって恐しげな作りになっている。上の梁と後の羽目板や三方の木格子にまで、いくつも鉄の鉋がとりつけてあり、床の敷石の目地からもいくつか鉋がでている。それに床は外の地面より二尺ぐらい低くできていて、石積みになって隅に水の落口があって、木の栓がしてあるか

ら、このまま樋の水門を開けば水牢にもできるでしょう。こうしてちゃんと坐って眺めると案外、広くて江戸間の四畳半ぐらいはあらない。俵は筵にくらべると坐り心持はなかなかい。久しぶりにのんびりと外を眺めると、この御牢屋敷は山の北側に面して建てられているらしく、この水責めはその又一番奥まったあたりにあり、後は石垣で山に続いていられる。辰の刻を大分、廻った筈なのに、向うのお牢屋の屋根の半分ぐらいまでしか日が当たっていないところを見ると、この水責め場には一年中ほとんど日が射さないのだらうけれど、冬ここへ入れられたら、さぞ冷たいことでしょう。冷たい話と言え、殿様のお側に上った秋は寒くて困ったつけ。

あの年の五月の何日だったか、馬鹿に暑い日があつて、殿様の横で汗をかいていたら、「このような日には裸でいたら、さぞ清々するであろうな」

と仰せられたので、ついつりこまれて「それはよい心地でございましょう」

と答えてしまったのが、一世一代の失言で「それではりえに限り、十月末日まで衣類の着用は一切、無用にいたしてつかわす」

と仰せつけられてしまった。(未完)



告白

私 と 浣 腸

中 野 昭 子

おかしな題で申訳ありませんが、私がいくつかの体験を通じて浣腸に興味をもつに至った経緯をご報告させて頂きます。

私は病弱と云う程ではありませんが、きゃしゃな体質で幼い頃からよく病氣はいたしましたが、後で記しました高校二年のときまでは浣腸の経験はありませんでした。そのような私が浣腸に強く興味を抱いた最初の出来事について先ずお話しいたします。

第一話 お友達の浣腸

中学二年の頃です。クラスで一番美しく、成績も優秀でお金持のお嬢さんであったA子

さんは私にとってあこがれの的でした。

A子さんもあまり丈夫でなく時々病気で学校を休みましたが、或る時お友達二、三人でお見舞に行ったことがあります。

A子さんは明るくきれいな寝室でねていましたが、お母さんのお話によりますと、お腹の工合が悪かったが、今お医者さんに来て頂いたところで大分楽になったから、もう心配はないとのことでした。お茶や、お菓子のおもてなしを受け可成長い間お邪魔していましたが、途中でお手洗を借りましたところ、洗面所の傍らに浣腸器が置いてありました。し

かも今使ったばかりと云うように洗ってありました。先程のお母さんのお話から想像しますと、お医者さんが来た時にA子さんが浣腸されたに違いないと思われます。

お母さんが病状を話された時、A子さんはにかんだ様な表情を浮かべたことにも思い当ります。あの美しいA子さんが、どんな気持で浣腸されたのかと思いますと思わず顔が赤くなりました。

勿論、誰にも話はしませんでした。その後A子さんに、一層特別な関心をもつ様になり、夜寝床の中でA子さんが浣腸される姿を想像したりしたものです。

第二話 初めての体験

A子さんとはその後同じ高校に進んでから益々親しくなりましたが、高校二年の夏休にA子さんのお家に泊りがけで遊びに参りました。珍しいごちそうを沢山頂き、夜遅くまでおしゃべりをして休みましたところ、翌朝、少し熱っぽく、お腹が痛みました。

お母さんが大変心配され、直ちに医者さんが呼ばれました。

「随分お腹が張っていますね、浣腸しましょう」と云われた時には、あまりにも思いがけない出来事にすっかり慌ててしまい、

「嫌です」と云う言葉も出ず、ただ顔を真赤にしていただけで、結局浣腸を承諾したような結果になりました。

お母さんが「浣腸器はございますが、近頃あまり使わないものですから、お薬を切らしてしましまして」とおっしゃいますと、先生は「構いません、石けん水でしましょう。沢山入れた方がよく効きますから」

と云うことで準備が進められました。

三〇CCのリスリン浣腸器、洗面器に溶かした石けん水、ビニールの布等がお母さんの手で運ばれました。A子さんは別に手伝うこともなく、もじもじ乍らも心配そうにすわったまま、結局三人の前で私は恥かしい姿を見せることになりました。

お医者さんが「さあ、それでは浣腸しましょう。すぐ楽になりますから辛抱して下さいね」と云われますと、お母さんの手でポーズをとらされました。おふとんが除かれ、横向きにねますと、ネグリジェの裾が、そつとまぐられ、下着がやさしい手で引下げられました。

明るい朝の陽差しの下でと思うと恥かしさで全身を固くしたまま、目をつむっていました。

それからのことは本当に夢中でした。およそ十本位は使われたと思います。許されておトイレに行くまでの長かったこと。

それでも終わったあとはお腹も軽くなり、案外気持のよいものだった。又、A子さんと同じ浣腸器が私にも使われたことに、何かA子さんと血のつながりが出来たような気がして、非常な親しみを感じたものです。

第三話 病院での体験

高校を卒業した後、私はA子さんと同じ東京の短大に進みました。申し遅れましたが私の育った処は東海道沿線の地方都市です。

A子さんは伯父さんの家に、私は結婚して世帯をもっている兄の家に、夫々下宿して通学しておりました。

初めての夏休みが終って間もなくのことです。前の日にA子さんと映画を見に行き、終ってからいろいろと喰べて帰りましたが、翌朝いつかA子さんのところで体験したと同じようにお腹が痛みます。しばらく辛抱していましたが、義姉にすすめられて近所の内科に参りました。

食べ物や、お通じのことなど聞かれ診察を受けましたが

「便秘しているところへ、喰べ過ぎた為お腹

が張っているのだと思うが、盲腸の疑いもあるから下剤は避けて浣腸しましょう」と云うことになりました。

まさか、と思っていたことであり、恥かしくて逃げて帰りたい気持でしたが、そうも行きません。

結局、看護婦さんの手で浣腸されました。

つい立ての後の診察台で横になり、多分五〇CCだと思いますが、太い浣腸器でグリセリンを二本も注入されました。前の石けん水と異り、グリセリンの効果は強烈でした。終ったあと外のおトイレまでの廊下の長かったこと。又浣腸器を持った看護婦さんの出入から、私が浣腸されたことを知っていると思われる他の患者さんの目に閉口いたしました。

「少しは楽になりましたか。まだお腹が張るようだったら、夕方もう一度家で浣腸して下さい。それから盲腸の疑いもありますからもし痛みが激しくなったら、外科に行つて診てもらつて下さい」と云われ、帰途につきました。

第四話 お義姉さんの手で

家にもどりますと義姉が心配していろいろ尋ねましたが、恥かしいので病院でのことは黙ってねていました。

午後、義姉が病院にお薬をもらいに行きました。帰って来ますと

「昭子ちゃん、病院で浣腸したんですって。

お医者さんがもう一度した方が良いとおっしゃったから、浣腸の道具買って来たわ。でも本当に盲腸じゃないでしょうね。心配だわ、お兄さんに帰って来てもらおうかしら」

大げさにさわがれるのは嫌ですし、まして兄にまで浣腸を見られるなど、とんでもないことですので

「そんなに心配しなくても大丈夫よ。ねていれば直にようになるから」と申しますと

「そう、それでは浣腸してあげるわね。でもうまく出来るかしら。私、人にしたことないから」と云い乍らも仕度をしています。

まだ子供もない若い義姉のことですから手際よくと云うわけには参りません。

ポーズをとってから注入するまでも随分もたつきました。一度しかけてから、何か塗った方がいからと云って、コールドクリームを持って来たりします。それでもどうにか三〇CCの、グリセリン二本の注入が終わりま

と、義姉の方がおでこに汗を一杯かいていました。

私も前にされた、ことがあるけど、浣腸って嫌ね。でも病気だから仕方がないわ」等と、しきりになぐさめて呉れました。

第五話 入院

義姉の手で浣腸を受けた後大分お腹が軽くなりましたが、その晩、夜半過ぎから猛烈にお腹が痛み出しました。矢張り盲腸だったのです。夜の明けるのを待ちかねて外科の病院に運ばれました。直ちに手術です。

型通りの処置を受けて手術室に入ると、腰椎に麻酔が打たれます。注射を受け乍らこのポーズなら浣腸の方が、良いのに等と考えていました。手術は若干手遅れ気味だったせいか、思ったより長くかかりました。

激しい痛み能耐え乍ら翌日を迎えましたが夕方になってもガスが出ないため、ブジーを入れられました。仰臥したまま膝をたてて脚を上げたポーズは、女性にとって耐えられない姿ですが仕方がありません。若いお医者さんの手で太いゴム管が装着され、体外に出ている部分は洗面器の水の中に入れられていました。何度か動かしている間にガスが出たらしく、案外早く外されましたが、実に妙な、なんとも説明出来ないような気持でした。今考えると、この時からこの種のものに惹かれ

るようになったようです。

前に申しましたように手遅れ気味であった為、手術の後で腹膜炎を起し、結局三週間位入院していました。猛烈にお腹が張り毎日のように浣腸をされました。病院ではいつもイルリガートルで五〇〇CCの石けん液浣腸でしたが、私は硝子の浣腸器よりもカテーテルをつけたイルリガートルの方を好みます。大量注腸により静かに下腹の張ってくる感じを快く感じるからだと思っています。

ただ羞恥心に関しては、入院中にされる浣腸より外来でされた時の方が、ずっと強く感じます。

入院中は、排便も人の世話になっていますし、浣腸されることも予期している状態にある為かも知れません。何れにせよ羞恥心が浣腸にとって重要な要素の一つであることを考えますと、矢張り私は外来で浣腸の宣告を受け、処置を待っている間の気持、他の患者の視線を意識したり、外出着のままで、処置を受ける準備にもたつく動作等、羞恥心を強く感じる方を好みます。

つまらないことを長々と記しましたがどうかお許し下さい。



シルヴィア
(Silvia)

訪
欧
土
産

青

い

星

佐 野 寿

今回は一つ、珍しい、現代に生きている、アマゾネス組織について知るところを述べようと思う。恐らく「青い星」という、一見ロマンチックな組織が何人であるか一般の読者は多分御存じあるまい。

これは、スカンジナビアの東部からフィンランドにかけての、婦女子のみのグループで一種の陸軍の組織である。この歴史はそんなに古くはない。第一次大戦時代に出来たもので、当時は「赤い星」と呼ばれていたが、今日ではソ連の軍事新聞の名前を連想するし、まぎらわしいので一九四〇年代に「青い星」と改名された。私はフィンランドで、それとかなり詳しく観察したので、それについて少しばかり語りたい。

この組織には十六才になると自発的に加盟でき(勿論これはフィンランドに国籍を有する女子に限るが)戦争の時は男子の軍隊を積極的に援助し、多くは勇敢に、馬に乗って戦場の連絡輸送を手伝い、又平和時でも軍用犬や乗用馬の世話、及び男子に劣らぬ程馬術に及び、又一部は看護婦として陸軍病院に勤務する。

殆んど例外なく彼女等はきちんとした国防色の制服、及びネクタイをし、乗馬ズボンに長靴をはき、腕に金メッキの馬の首や犬の頭部を形どるバッジと、青い星のまわりに白く丸く縁どられたバッジをつけている。帽子は

よく米兵がかぶる軽快なものとそっくりなのを、やはり少々かたむけてかぶっている。その帽子にも青い星のバッジがついている。彼女等の多くは、白に近い金髪をボーイッシュにやや短かく刈り揃えているが、一部のものはかなり長くしていた。夏期にはよく上着をぬぎ、国防色のワイシャツに同色のネクタイを、普通金色のピンで止めている。又、冬には軍服の上から毛皮の襟のついた上質の灰白色のコートを着ているが、下半身の装いはいつも同じで、乗馬靴をはいている。

「青い星」の隊員には若いBGも多く、彼女等は昼はオフィスや銀行等で働き、夜になると制服に着換えて陸軍の馬場へ行き、そこでグループで乗馬の練習をする。時々彼女等は立派なシェパードを従えて散歩をしたり、又野外で馬に乗る時も犬をお供に従えることもある。

北欧には屋内馬場（雨天体操場の如くアーチ型、又はかまぼこ型のドームの）が、小さな町にも必ずあり、感心する程よく普及している。

特に陸軍用の馬場は、長い冬の為の暖房設備、収塵装置もあり、床は例外なく白樺のおがくずが敷いてある。入口のそばに、しゃれた木製の観覧席があり、昼間はよく陸軍や警官、又は他の乗馬クラブの男女会員が使い、午後七時頃から十時までは「青い星」のグル

ープの訓練の為に開けられる。グループの時は十六人位が一度に乗ることが出来、常歩、速歩、かけ足、又障害跳躍とあらゆる種類の仕方である。

私は個人的に「青い星」の人々と特に親しかったわけではないが、一人、きわだって長身でプラチナブロンド髪、シルヴィアという婦人がいた。シルヴィアはBGで、ヘルシンの税務局に勤め、暇な時や夜はよく彼女の愛犬「ペートル」を連れて、この陸軍馬場へ通っているのを見た。夏には、シルヴィアは水泳や水上スキーを好むので髪をうんと短くしてしまふが、秋から冬にかけては、又、長く美しいプラチナブロンドの髪にもどってしまふ。すると彼女は髪に軽くパーマネントをかけ、更に光が増して見事なヘアースタイルを再現した。長円形の爪には淡いピンクのラッカーがぬられていた。

彼女は体全体が大きく、長靴も男子のと同じ大きさで帽子の先から長靴のかかとまでパリティとして、婦人将校のようであった。愛犬の「ペートル」も美事なシェパードであったが、彼女によく慣れていて忠実な下僕になりきっていて、彼女が立ち止まるのを待ち兼ねたように、鼻をくんくんいわせながらシルヴィアの長靴をはいた足もとにもって行って、嬉しそうにしていた。ふさふさとした体毛を心地よさそうにシルヴィアの脚や腿にこすりつ

けているのを、シルヴィアは右手で首を軽く叩いてやっていた。

秋の日は短かく、もう暗くなってしまった頃に、四、五人の女子兵士が馬小屋へ近づいて行くのが暗闇の中にかすかに見えた。シルヴィアもまた馬小屋へ愛犬と一緒に消えた。マネージの天井にはまばゆいばかりに螢光灯がともる。暖房がきいてきてほんのり暖い。時計はもうすぐ七時になる事を示していた。観覧席の下段には二人の下級兵士がマネージの清掃を終えたところらしくタバコをふかしていた。

私は幸運にも、ちょうど六時から女子高校生乗馬クラブがそこを使用し、馬を連れ出す為に裏門の鍵がかかっていたので、マネージへ入ることが出来たものだから、そしらぬ顔で観覧席に腰を下して待っていた。勿論、表門は軍人かその関係者のみで外来者は入門出来ない事になっていた。「青い星」は制服さえ着ていれば女子でも通過が許されている。外は微風が吹いてはいたが、暗くひっそりとしていた。

しばらくすると多くの馬蹄の音が暗闇の中から静かに近づいて来るのを感じた。二重扉の両側の戸が開かれて、馬が通れるようになり、いよいよ「青い星」のグループが各々の馬をつれてマネージへ入って来る。皆揃って素晴らしく良い体格をした女性騎兵達で、ユニ

ホームに長靴をはいていた。皆、鞭は手にしていないが長靴のかかとは銀光りの拍車がついていた。各々が馬の手綱をとり、マネージの中央辺りに一列に馬を並べせる。勿論シルヴィアの一きわ輝く女騎手の姿も見えた。最後に馬術の指揮者が入場し、おもむろに二重扉は閉められた。

その指揮者は、三十五才位の婦人将校で、「青い星」の幹部の一人であった。右手には三メートルもある調教用の鞭を持って、一列に並んだ婦人騎兵の前面の所で立ち止る。そ



の数をかぞえると十四頭の馬がいた。各々が鞍ひもや、はみ、手綱、鐙を点検した。新しいおがくずとかいばの混った香がたじよう。婦人将校が、「乗馬！」と号令をかけると、一せいにひらりと身をひるがえし「青い星」のグループは各々の馬に跨った。「手綱をとる、右まわりで常足進め！」と号令がかかる。皆一瞬、緊張した顔付きで両脚を馬腹にあてて促すようにする。

隊列は等間隔で、大きな長方形の馬場の辺に沿って歩みはじめる。前から五人目の所にシルヴィアが、濃い栗色のサラブレッドのようなスマートな馬に跨っていた。兵隊帽の下から、美しいプラチナブロンドの髪が見える。はつらつとした四肢を伸ばし、背をまっ直ぐにし、肩の力を抜き、彼女の長い両脚は、鞍上からすっぽりと馬腹をとりかこむようにして跨っていた。

長い鞭がピシッと雷のように地面に打ちおろされる。隊列の各女騎兵は踵の拍車を垂直に馬腹に入れ、「一二、一二……」という号令に合わせて速歩に入る。隊列は軽く腰を鞍から浮かすようにしながら馬のタクトに合わせて。「巻きかえし！」の号令一下、めいめいの馬を小さく渦を描かせて器用に廻らせた。「斜め前！」の号令で、馬場の対角線に沿って隊列は進む。

列の後から二頭目の馬だけが首をひょっと上げたり、後脚で跳ねて騎手を落とそうとしたりして不従順だった。婦人将校が「拍車を後下腹部に入れて！」と命じ、若い婦人騎兵が数回長靴のかかとで蹴っても、益々馬は神経質そうに急にギャロップしたり、後脚で蹴り上げたりしたので、騎手は平静を失って泣きだしそうになった。「全員止れ！」と声高く婦人将校は命じた。「後ろから二番目の馬をここへ連れておいで」と命じ、「シルヴィア、貴女その馬を調教しておとなしくさせなさい」と云った。シルヴィアは、その若い女騎兵と馬を交換し、彼女がシルヴィアの栗毛の馬に跨った。

シルヴィアは婦人将校から長い鞭を借りると、すかさずその不従順な馬に跨って電光石火の如く馬の側腹につづけざまに拍車を突きさすようにひどく入れ、手綱をぎゅっと手前に引くや否や長い鞭をしたたかたてがみのつ

け根や首に無慈悲に打ち込んだ。シルヴィアはいやがる馬を無理にギャロップさせ、もう反抗が出来なくなる程、全速力で何回もマネージを回らせた。馬が彼女を振り落とそうとして、少しでも変な、後脚の動作をするや否や、シルヴィアは容赦なく拍車と鞭の洗礼を与え、懲らしめ抜いた。

はじめはロデオの如く暴れた馬も、この体力のある重いシルヴィアに休む間もなくギャロップを強制されたので、やや抵抗が弱まった。この機を逃がさずシルヴィアは、体重を鞍の前部に重くかけ、手綱を引きしぼったので、馬は完全に組伏せられ、降伏させられてしまった姿勢になった。馬の全身から湯気がたちこめ、泡が口ばかりでなく首筋にも生じた。先刻あれ程反抗した馬も今やシルヴィアの巨大な大腿部の下であえぐ哀れな奴隷で、体が小さくなったかのように、しぼんで見えただけで、もう負かされしなって反抗するエネルギーはなくなつて、水浴直後のように皮膚は汗で光っていた。

「もう充分だわ、許してあげるわ」とシルヴィアは呟き、手綱を長くしてやる。馬は苦しそうにあえぎ、首を下方へ伸ばし、せきごもる。下腹部は無数に拍車の痕が残り、赤い傷口さえ見られたが、これはギャロップの時、反抗したのでシルヴィアから受けた一番ひどい懲罰であった。やっとその馬は放免しても

らいシルヴィアは下馬し、もとの馬にとび乗り、しばらく今責めつけた馬を休ませてから先程の若い女騎兵に乘らせた。今度はいささかも反抗することなく至極柔順になり、筋肉も柔軟になった。シルヴィアは殆ど疲労の色もみせず額の汗をふくと、両脚で馬腹をはさみ、馬を進ませた。

以前にも不従順な馬をシルヴィアが代りに乗って調教した事があったが、この時はシルヴィアはその馬を乗り潰してしまつたので、今日は馬が潰れる以前に下馬してやつたのである。この前の馬はもっと強情な馬で、後脚で蹴るのをやめなかつたのでシルヴィアは腹をたてて長時間乗り続けていると、ひよろひよると馬体が前脚から地面にめり込むように下つていった。仲間の女子騎兵が「馬から降りて！」とヒステリックに叫んだその時、馬は力尽きて乗り潰されてしまつた。数分後に獣医が来て、早めに葡萄糖等の薬材を投与したので馬は一命をとりとめ、脚部も骨折はしていなかったが四日程休ませなくてはならなかつた。しかし、その馬も今はやっとシルヴィアの厳しく激しい調教で馴らされて従順になった。

婦人将校は下級兵士に命じて、障害台と丸太棒を取り出して組立てさせた。四回ずつ順に、婦人騎兵の隊列は次々と障害を跳躍したが、一人も落馬したり、又、丸太の横木を落

した者はなく、全員があざやかな出来ばえであつた。一メートル間隔の二重障害も勇敢に跳び越え、シルヴィアも慣れた手綱さばきで苦もなく障害を跳んだ。皆満足すべき出来ばえで、各々馬の首筋を叩いて労をねぎらつてやり、角砂糖を与えてやる。

指揮をとる婦人将校がさも嬉しげにこにこしながら言った。

「今晚は、これで練習終り。皆よくやりました。明日はグループで野外騎乗をします。リーダーはシルヴィアが先頭に乗りますから、皆もそれに従いなさい」

各々馬から降りて自分等の馬を馬小屋へ引いて行き、手綱をはずし、鞍を下して今日の労から解放して餌を与え乾草で汗をかわかせ世話をした。婦人騎兵は兵舎の食堂でコーヒーをのみ、タバコをふかして休息し、又はシャワーを浴びて汗を流し、思い思いに帰宅した。シルヴィアも愛犬を連れて自動車で帰途についた。明日は朝からシルヴィアがリーダーになつて美しい森や原野を馬で行くのである。やはり十五頭程の若いはつらつとした婦人騎兵を従えて。希望と喜びに満ちてシルヴィアは寝室へ入って行く。

フィナンランドの秋の自然は美しく、彼女等の遠乗りにも最適だ。

(写真は二葉共「青い星」の隊員)



濡れにぞ濡れし

勝手な話

芳野眉美

酒の飲みすぎでビタミンB不足となり、医者からしばらく酒を慎むようにいわれたその夜、運良く悪友からの誘いがあり、早々と店を閉めて知り合いのバーを梯子し、終着駅がお座敷で、ウイスキーの角瓶を一本あけてしまった勘定になり、これではせっかく注射をしてきたのも役に立たず、我ながら意地穢いのに呆れたものの、酒がそこにあるから飲むのでこればかりは仕方がないとあきらめた。

検番が終るすれすれに飛び込んだから、遅くなったが芸者さんも来てくれて、外の座敷

から聞こえてくる三味線も乙で、揃ってみるとなんとなくそのような雰囲気になるから妙であった。

いつものことで「先に帰るよ」とスポンサーはさっさと帰ってしまい、一人残った顔はさぞかしスケベな顔をしていたと思われる。売春防止法は芸者には適用されないのか、されるのか、そんなことは知らないが、知らなくても少しもかまわない。

顔見知りの仲居さんはもう慣れたもので、奥の座敷に用意して促してくれるから、口説

く苦勞もなく、素直に服を脱げばいいので、うしろからゆかたを着せてくれるから、うちよるせず立っていれば、自然に準備は出来てしまう。

ではお先に失礼。

それにしても、着物を脱ぐのは大変なことだ、ネ。夏のことだったが、こちらはポロシヤツ、半パンにブリーフの三点セットだけだから、脱ぐなんてものじゃないけれど、夏の着物の下に、夏ものの長じゅばん、はだじゅばん、裾よけと、よくもまあ着ていられるも

のだと呆れるぐらい。帯にしたって、帯揚げ帯締め、帯板、帯まくら、と小物の数々。腰ひもの数だけだって何本、身体に巻きつけているのやら。サラシをぎゅうきゅう締めつけているのに二度びっくり。夏でもサラシを巻くの、とストンキョウな声がでた。三点セツトはどこにあるのかわからないのに、長じゅばん一枚になるまで、着物の山とあいなつた。

きゅっきゅつと帯を解く音がなんともいえないと先輩はいうが、長じゅばんを肩にかけて、さりげなくはだじゅばんを脱ぐ光景のほうか、私は好きです。

急用があつて真夏の三時半にお座敷に呼ばれ、呼んだほうに野暮用ができて、二三時間遅れるからそれまで遊んでいるということになり、仲居さんは雨戸を閉めた。遊んでいるとは、酒を飲んでいろうということではなくて、オネンネしているということだと、やっと気がついたが、いくらなんでも早すぎる。

早すぎても、時間をつぶすのには酒よりいいのに決まっている。どういふわけか顔見知りをするほうで、一人で芸者さんや仲居さんを相手に話をするのはあまり好きではない。自分では無口のほうだと思っているが、他人

はよくしゃべる奴だと、思っているらしいから、あまり本人のいうことは、あてにならない。とにかく、寝ていれば話をしなくてもすむから楽である。せいぜい「ハッ」と息を吐くだけである。

芸者さんは若いひとより、年増のお姐さんのほうが好きなのは、こちらがサービスしなくてもすむからである。女は男にサービスされるものだという考えが間違っているのだ。女にサービスさせるほうが、楽に決まっている。従って女がリード役になってしまうが、私がM的性格だからではない。それだけ物ぐさなのである。

話は夏から春にもどるが、この夜も年増さんであった。これは非常によろしい。物ぐさな上に、ウイスキー一本をあけているのだから、とてもじゃないけどその気にならない。万事お願いします、と彼女にささやいた。あとは終るまで彼女にまかせていればいい。適当にあしらってくれて、適当に始末をしてくれるまで、気持ちよく寝ていれば一巻の終りとなる。少しもつかれない。

芸者さんに私の趣味を話したことはなかったのだが、酔いすぎていたせいとか、どうせ飲むなら、医者からとめられていない、彼女の

オサケを飲んだほうが健康上によろしいと、長じゅばん一枚の彼女にささやいた。

「それだけは許して下さい」

酔っていたから彼女との会話ははっきりとは思いつけない。まず拒絶された。当然だ。

「そんなことしたことがありません」

そうでしょう。そこをなんとか、小声でひそひそと。他の仲居さんにでも聞かれたら彼女がかわいそうである。

「顔にすわるなんて、そんなこと、とても……」

「すわらなくてもいいよ。そこに寝ていて下さればいい」

それで妥協した。

布団の上では汚すとまずい。畳なら少し汚れても、ウイスキーか水をこぼしたと思うかわからない。部屋の電気を消した。枕もと、の行灯型の電気スタンドを遠ざける。

長じゅばんの裾をはだけ、顔を寄せ、待った。無言。

いつのまにか、彼女は悶えてきた。

「できません。許して下さい」

「だめですよ」

おさえて、はなさない。静寂。

しばらくして、あたたかいものが、そう、

甘いものが、唇に感じた。のどが鳴る。が、すぐに、とまった。

「かんにんして。いかせて下さい」「だめ」

観念して、また、静かになった。暗くてよくわからない。感触だけである。彼女の口から嘆息が洩れた。唇がまた濡れる。

「もうだめ、はなして」

「有難度う」

顔を伏せて座敷を出た。部屋の電気をつける。ウイスキーを飲む。

「ほら、畳を汚してしまった」

うらめしそうに彼女がいった。お尻は丸いのだから、こればかりは仕方がない。

「だから、坐ってくれといったのですよ」

「恥ずかしくて……」

無理な注文は、拒絶するのが道理だが、彼女は奇妙な申し出にめんくらって、雰囲気にもまれてしまったのかもしれない。

「こんなこと、はじめて」

彼女を急にかかえあげた。以下略。

強奪してまで飲むのは、M派を裏切る行為であり、それではS派になってしまうが、S的性格が、女のUrineを好む心理はわからないと、誌友の一人にいわれたが、私自身も

どうなっているのか、よくわからない。女のUrineとのFetishismでしようと、わかったような顔をして答えておいたが、複雑すぎて性格を一本化するのは無理のようである。

初対面の女を口説くには、こちらの性癖を説明して、理解してもらわなければならぬし、相手が未経験であればそれだけ羞恥はつきもので、結局強奪してしまったような、ことになるケースが多いのである。誌友の紹介で、何もかも心得ていて、女王気分でコトを運ぶ女性が少ないのだからMがSみたいなことになってしまうのも、これまた仕方がないことだと思っているのである。MだMだと叫びながら、その本質は、やはり男なんだ、ナ。おや、また原稿を書いていますね、とのんべがはいってきて、常連のバーの名をいい、ホステスさんの一人と食事に行ったら、どこにでも連れてって、と彼女がいったんだそう。どこにでも、ということとは、温泉マークのことだから、喜色満面でしげこんだそうである。

ところが、彼女、着物を脱ぐと、

「縛って」

腰ひもが沢山畳に散らばっている。そいつはそんな趣味がないし、

「縛り方がわからねえものな」

「縛ってくれないと、私、駄目なの」

彼女がそういうのだから仕方がない。苦心惨憺して豊満な彼女を縛りあげた。彼女の話だと、夫の趣味で、縛ったり縛られたりしないと、夫婦生活ができなくなってしまったらしい。奇クの読者に違いない。

「離婚したのかな」

「らしいね」

「半年前からあのバーにいるのだろう」

「一言もそんな話はしなかったぜ」

「灯台下暗しだな」

とにかく色白の豊満な女性で、縛ったあとが消えていなかったというのだから、数日前にもそれらしいことをしているのに違いないのである。

「一人じゃとても縛りきれないから、今度は二人でくるといっておいた」

「俺とかい」

「うん」

「彼女、ことわるよ。あなただから、彼女も

自分の秘密をうちあげたんだよ」

「誰にもいわないで、っていつていたけど、発表してもいいわよ、ってことだからな」

「それもあるけど、二人だけの秘密にしてお

いたほうがよさそうだよ」

縛りくたびれて寝てしまい、朝方、彼女に起こされた。会社に遅れてはまずい。彼女がトイレに立ったので、

「でるのかい」

彼女をトイレならぬ浴室に連れ込み、

「みせてくれ」

素直に彼のいいなりになったのは、彼女、彼にやはり好意をいだいていたのか、M的性格が進行しているのか。両方だろう、きっと。

「ほかの女のを、はじめて飲んだ」

店に奇クがおいてあることもあり、私のをひろい読みしている影響が、こんなところに被害者をつくるとは思わなかった。

「ほかの女。じゃ、奥さんのを……」

「飲んだことあるよ」

彼は、M的性格ではない。SもMもあまり興味を持っていないし、のんべが80パーセントなのだから、この場合も、強奪したことになるわけである。

彼が来たのが遅く、定時に閉店してから、彼女のバーに二人で顔をだしたが、彼女の周囲に目に見えない壁がはりめぐらされ、彼女の態度がいつもと違って、彼をすごく意識していることがわかった。

その話には触れず、それがエチケットだと思つたし、関係のない話をして別れた。一度抱いた女を、二度目に抱くほうが、はじめよりもっとむずかしいのは、何もかもさらけだした羞恥心のせいだと思われるが、女の気持はとんとわからない。

彼女のを拝受できればよし、できなくてもまたよし、という心境は、ちと負け惜しみだが、彼女が彼に好意を持ったのだからあまり横から顔をださないほうがいいようである。

縛って、なんていう女は、小説だけの世界かと思つていたが、身近くに事件があると、現実には小説より奇なり、と陳腐な言葉が思い出されるのである。誌友の紹介は除いて、これまで関係のあった女から、そんなこと一度も、いわれたことはない。勝手に縛って強奪したことはあつても。女はどうして受動的にならなきゃならないんだろう。たまには自分の主張を強要すればいいと思うのである。

だから、私といたしましては、こちらが受動的になり、女が能動的になる女性上位をお勧めする故因なのであります。好き勝手に俺のことを自由にしていよいよ。

十日間禁酒していたので、トマトジュースなどをいただくながら、この話をきいていた

ので、ますますもってさえないことおびたらしい。十日間も禁酒したのは、この十年間なかったことで、油が切れて骨がぎしぎししているようであつた。

あまりさえないから、外人ヌードとやらを見にいったら、八百円。全ストである。

外人とはいふものの、そう称しているだけで、実は日本女性なんてことは、この世界に多いから、看板にいつわりがあつてもあまり腹も立たない。

金髪はかつらで、かつらに合せて他も金色に染めてしまふ。それで外人に化けるわけである。染めると普通の状態と少し違うからすぐわかる。といって、相違をここに書くわけにもいかない。おうたがいの方は、それぞれに独自の方法で、とくと研究するより方法はないでしょう、ネ。

いつわりの彼女だったが、ベビードールのネグリジェに、ネットのタイツが好みに一致した。乳首も小さく、あるかなきかで、少女少女したものも好みに合った。金髪をなびかせて踊る。ネットのタイツから、金色が輝く。そこしか見ていない。

彼女、私の顔をまたいで立ち、勢よく上体をうしろに反らせて、両手もステージについ

た。間隔があまりにも近すぎて、よく見えな
い。香水の匂いが美しい。彼女が近づいたか
らといって、これでは喜べない。よく見える
間隔というのがあるものだ。何事にも限度は
ある。

二人目も日本人のような顔をしていたが、
前の少女と違って、総ての金色は本人のもの
であった。とすると、混血？ じゃなく、白
系ロシアの血を引くグラマーと見たが、真偽
のことはわからない。

色の白さも日本人のとは違い、踊りの癖は
歴然とした外人風であり、これだけは看板に
いつわりなしであった。

どうせみるなら前で見ればいいものを、う
しろのエプロンステージにごちゃごちゃかた
まっているから、ごみごみしたところがきら
いな私は、いつもの通り、カブリツキで一人
で見ることになる。

だから、またまた、彼女も私の顔をまたぐ
結果になる。そのまま、しばらく動かない。

真上を見上げているのはくたびれる。する
と、彼女が何かいったのである。

「シー」

笑い声がうしろからおこり、一転して大爆
笑とあいなった。踊っていて彼女が発した言

葉は、この一語だけであった。

二曲踊って三曲目で脱ぎ始め、四曲目で全
スト、真打ちは五曲目もあるという程度が、
一人の受持ち時間なのだろうが、はじめの二
曲が馬鹿らしくて見ていられない。どっちみ
ち踊りなんて、ものじゃないのだし、はじめ
から見せてしまえば、客席はシーンとして、
雑誌を読んだり、やたらにタバコをふかした
り、寝てしまったりしやしないのである。時
間の無駄だと思ふのだが、はじめから見せて
しまつては、ストリップにならないのかな。

そんなことはない。特別出演の格上の女は
透明なパンティとか、ネットのタイツとか、
はじめから客席を静まりかえらせ、拍手が自
然に起こるように演出している。やはり努力
をしているのである。踊らなくていいから、
全裸でステージを歩いていれば、彼女の名声
はとみにあがり、収入も比例して増すといふ
ものだ。

ごてごてした似合わない舞台衣装より、あ
りふれた街着で登場し、ミニスカートにロン
グブーツなんていでたちで、レコードにあわ
せてはじめて脱ぎ始め、ステージに腰掛け
て客席に足を投げだし、極小のパンティでエ
プロンステージでも歩いていれば、かえって

客席は拍手するよ。身近かなもののほうが、
刺激は受け易い。全く舞台衣装の芸の無いこ
と。噴飯ものが多すぎる。

全ストを見に来ていて退屈しているのも馬
鹿らしいが、こんなときに限って妙なことを
考えだすものなのである。

魏志倭人伝に、

「其国本亦以男子為王任七八十年倭国乱相攻
伐歷年乃共立一女子為王名曰卑弥呼事鬼道能
惑衆年已長大無夫婿有男弟佐治国自為王以来
少有見者以婢千人自侍唯有男子一人給飲食伝
辞出入居処官室樓觀城柵嚴設常有人持兵守
衛」

邪馬台国の女王卑弥呼に夫婦無く、婢千人
を侍らし、ただ一人の男が、女王に飲食を給
し、女王の居所に出入した、というところに
M的な感覚をくすぐるのである。

松本清張の「古代史疑」によると、「鬼道に
事え、能く衆を惑わす」というところから、
卑弥呼がシャーマンだといっているが、よけ
いに神秘的で食欲をそそのめるのだが、古代史や
巫のことを調べないと書けないし、そこまで
勉強もしていないし、頭の中で空想している
にとどめるより仕方がない。

しかしながら、倭人伝と全ストとはなんの

関係もない。空想とはもともと支離滅裂なものであるらしい。

シャーマン卑弥呼のことばかり考えていたから、神託があったのか、どうかは知らないが、灯台下暗しが続いて起こったのである。

閉店してから客に誘われて、一月に二十日は御前様の梯子酒をしているから、知っているバーや飲み屋も多いのだが、その一つ、昼はOLで、パートタイム的にバーのホステスをしている子と、ボソボソと話をしていたと思し召せ。

「小説をお書きになっているのですって」

「あなたが読むような小説じゃないよ」

「読んだことありますの」

「読んだ？ 奇クを知っているの」

「ええ」

手相を観てやると古くさい手を使って、ママの手を握っているスポンサーを、ちらっと見た。奴が俺のことを話したらしい。

「じゃあ、俺が飲むこと。ウイスキーじゃないよ、飲むのが好きなことも知っているんだろね」

彼女はうなずいた。バーのトイレを指さし

「そこで飲ませてくれるか」

「だめよ」

「とにかく、誰かに飲ませたことあるの」

「一度だけ」

その相手は同棲していたことのある男らしい。奇クを彼女に見せたのもこの男である。

スポンサーがママと一緒に、ママの知っているスナックに行くとおっしゃるので、店の前で別れた。

「食事でもしますか」

「もっと飲みたいわ」

という。食事もできる、六本木の穴倉バーに。ここなら安心して話もできる。カウンターのスナックは、バーテンが話をさむからうるさくてしょうがない。

「縛られたとき、とてもこわかった」

同棲した男は、彼女の自由を奪ってから愛を披歴したらしい。

「何をされるかわからないし、何をされても縛られているから、否応無しでしょう。だから、縄で縛られると、とてもこわかったの」

縛られているうちに、縛られないとその気になれなくなった。誰でもそうなるものらしい。同棲した男に彼女は飼育されたことになった。男の緊縛趣味が昂じて、恐怖が先走り、男とわかれた。彼女の口から、こわい、という言葉が、連続して飛び出した。かなり強烈

な、露骨なことを男は彼女に強要したのに違いない。

車で彼女のアパートの近くまでおくり、帰ろうとしたが、スナック喫茶でお茶を飲んでいきたい、という。三時に近い。喫茶店は深夜族で混み、話などできなかった。

「歩こうか」

「歩きたい」

どこかで聞いたようなことをいい、アパートと反対方向に歩き始めた。人通りはほとんどない。いきなり彼女が首にすがりついた。こうなると狂暴性を発揮するのが悪い癖で、彼女の着物の衿に手をかけ、胸をかきわけ、

「好きよ」

頭を抱きしめて、彼女は譫語のようにいった。好きよ。こんな便利な言葉はない。

「アパートは昼のお仕事の人ばかりだから、男の人を連れていけないの」

ということは、旅館ならいいということである。旅館のネオンはすぐ目につく。遅かったが、あけてくれた。

「電気を消して」

帯を解く音がするが、余りにも暗すぎる。雨戸を一枚だけあけた。外のネオンの灯りで部屋が少し、ぼやっとした。

浴衣を着ようとしたのを剥ぎ取り、腰紐の長いのを選んで、彼女の両手を背中に回してねじりあげた。

「縛らないで」

縛らないで、といいながら、おとなしくなすがままにされている。縛られた経験はあるが、縛ったことはあまりない。カメラハントのように手際よくいくわけがない。もたもたしながら、手首を交錯させて、やっとオーソドックスの第一歩が完了した。彼女が少しでも抵抗したら、縛れるわけがない。

「お願い、縛らないで」

彼女の譚話は続く。膝を折って、太股と脛ら脛を合わせ、ぎりぎり巻きにする。カメラルポが頭にあったかもしれない。とにかく、露骨な恰好をさせることである。

布団に彼女を転がしておいて、電気をつけた。

「いや、消して」

縛ってしまえばこっちのものである。赤裸々な彼女の姿をゆっくり観賞する。

「消して。お願い、消して」

猿ぐつわはしていない。彼女にあまり大声を出させて、隣室の客を、驚ろかせてもまずい。彼女のいいなりに電気を消し、さて、と

考えた。

女から、顔に坐ってもらった経験は豊富だが、女の顔に坐ったことはあまりない。両手がきかないことを幸い彼女の顔に腰掛けた。

顔をそむけ、歯を食いしばり、顔だけのはかない抵抗を見せて、深い嘆息をついた。

「どうしてこんなにいじめるの」

答える必要はない。彼女を見下し、

「君が好きになったことのある男にも、こんなことをされたんだろう」

彼女をM的に飼育した男に感謝した。

「約束のものを飲ませてもらうよ」

「やめて」と彼女は叫んだ。

「それだけはいや」

緊縛された体をくねくねと動かして、逃げようとする。

「ほどいて下さい」

後手に縛られた両手首が、二人の体重を支えていられなくなったらしい。

「飲むまでほどこかない」

だが、すぐに、彼女が「あっ」と叫んだのと、「おや」と思ったのが同時であった。求める Uine ではない。

「早く、早く、ほどいて」

彼女の顔から立ち上り、電気をつけた。

「お客様か」

布団を汚したが仕方がない。酒と腰紐が、いつもより早目にお客を招いたのかも知れない。

浴室で顔を洗い、意外なものを強奪？した結果に驚いた。浴室の戸があき、

「ごめんなさい」

蚊細い声で彼女は詫びた。外が明かなくなっていた。浴槽には入らず、彼が身体を洗っているのを見て、気がついた。

「まだ終わっていない」

「——」

「いいかい」

彼女は頷いた。浴室なら、タイルを流せばきれいになる。

「四つ這いになれよ」

お座敷が四月一日、全ストが四月十六日、温泉マークが四月廿日である。

てな調子のいいことを書いてみると、六月号が贈呈されてきて、山本武男氏の「奴隷妻」の赤松に吊るした奥様が目に飛び込み、こりやすげえやと驚かされ、豪快なほうが面白いと感心するのである。

カメラハントもルポも好調だが、女を縛るのは疲れて、女にサービスしながら疲労困憊

するのだから、女に顔を、踏んづけてもらって、神酒拝受なんていう、ものぐさな私にはとてもできないことである。

津川博氏の「スカタロジに憑かれて」はそれこそ大変な作品だと思うのだが、こういった大先輩が発表してくれないと、私としても困るのである。批評家が多すぎて、発表しなからぬ人が多いのは残念なことである。私などが、この道のことデシヤバルことはないのである。誌友がふえてくると、大先輩諸氏が、いかにスサマジイ遊びをしているかがわかり、反比例して、奇クがつまらなくなってしまうという現象が起こるのも、公刊誌である以上仕方がないことなのだろうか。遊んでいる人はあまり書きたがらない。これまた真理であるらしい。

田中八郎氏の「愛する奇クよ何処へ行く」は、ごもつともな意見で、私も、面白い作品は読み、つまらなければ、辻村さんのでも、鬼六先生のも読まないほうである。それでかまわないのじゃないですか。叩かれていますうちが花で、それだけ読んで下さっていることだと、図図しく安心していきますから、御心配なく。本人よりも、夜乃探郎さんのほうが怒っているようで、彼に申し訳けなく思っている

のである。しかし、筆勢はこの頃、衰えまして。誌友がふえて、あまりにも刺激的な、露骨なSMプレイに参加していますと、誌上で発散する必要がありませんから、どうしてもおろそかになり、従って、つまらなくなります。不満や憤懣を持っていたほうが、筆勢益々盛んになりますね。年のせいかしら。奇クに掲載されない数々の作品があるように、発表出来ないこともまた多すぎるようです。

まったく奇クを読んで、腹を立てているうちが花だと思ふようになりました。腹を立てることは、マアマア主義のことなかれ主義の現代にあつては、清風に吹かれていますようにです。何もかも無視してしまうと、全然つまらない。人が憤激しているのを見るのが好きなほうですから、その意味では田中さんの文章はとても面白かった。憤激しなくなったらお終いだ。ただ気になるのは、誌上を飾る議論は、本誌に投稿している（したことのある）読者には関係あつても、大多数の奇クを買って読む人々には、なんの関係もない。従って、読む人も少ないのじゃないか、という疑問があるのですが。投稿してないただの読者だったら、私は読まないのだが、常連の一人だから目を通します。失礼のないように。

奇クに関しては、議論は、編集以前の問題だと思つてゐるのですよ。編集長が読者の声をきいて、その最大公約数で編集しているわけでしょう。読者が議論という美名のもとに編集に口だしするのはおかしいと思うのですが、暴論でしょうか。

これでおわかりのように、私は誌上の議論批評とか感想を、原則として（あいまいですが）認めておりません。無視します。

鬼六談義は団先生のお人柄がしのばれて面白いから読んでいます。（SMに関係がないと怒る人がいるかもしれないけど）

「酒場の話」の中に、

「職業が人間をつかまえて放さない」

という名文があるけれど、学生の頃、アルバイトにバーテンをしたのが、とうとうそのまま、現在に至るになつてしまったのだから我ながらうんざりすることがある。中間一年ほどサラリーマン生活をしたことがあるが、とてものこと性に合わない。

「バーテンにしては愛想が」ぜんぜんないのだけど、バーを持つとかえって自由がきなくなり、自分で自分を束縛しているような状態で、青息吐息なのである。

酒好きが、天職を選ばせたものか。嗚呼。

(懸賞入選作品)

妖奇小説

偉魔羅木縁記

染井春朗

(第一章) 月夜夢枕

数馬はぴしッ、と鞭を振った。

駿馬は更に速さを増し、月明かりに黒い影を落した並木の木立ちが、後へ、後へと飛ぶ様に遠のいてゆく。

更に一鞭！ ようやく行く手の彼方に、薄ケ原の草原が見えてきた。

数馬は、厚織り白練絹の寝衣の裾が、千切れる程に風にひるがえるのを意にも介せず、六尺豊かな逞ましい体軀を馬上にぴたと伏す様にして、急速に近づいてきた夜の草原に、

手綱捌きも鮮やかに裸馬を乗り入れた。

とたん、薄の根元から夜鳥が数羽飛び立ち鋭い啼き声を残して舞い上がっていった。晩秋の冷気をはらんだ月光を浴びながら、白衣の巨人を乗せた駿馬は、波立つような、薄の原をなおも狂った様に疾駆して行く——と見えたのに、何思ったか数馬は、不意にぐッと手綱を引いた。

「はて、此の辺りに川は無かった筈だが」

ふと呟いた言葉の通り、彼の前方二間ほどの行く手に、音もなく流れる川面が忽然と横たわっていたのである。

数馬は、油断のない眼でじっと川面を睨んで居たが、ふと顔を上げ、

「む、雨か」

今まで皎々たる月の輝やいていた空は、何時の間にか黒雲に覆われ、ぽつりぽつりと面に落ちかかる大粒の雨。数馬は馬首をめぐらせた。と、早やくも雨足が激しく成り、忽ちに篠つくばかりの大雨となった。

数馬は軽く舌打ちすると、思わず周囲を見廻したが、いずれも波うつ薄ばかり、雨を避ける樹木ひとつ近くには無かったのである。

(されば、城までひと馳け——)

咄嗟に思案を決め、大きく鞭を振り上げたが、その時、二、三町の彼方に、ぼう、と明るむ灯のある事に、ふと気付いたのである。

「おお、まさしくあれは人家の灯、ひと先ずあれに——」

数馬は灯に馬首を向けた。

間もなく、灯の近くまで駆け寄った数馬は相も変らずどしゃ降る雨の中で、ひらりと馬からとび降りたが、洩れ灯の見ゆる家の方に視線をやり、ほう、とばかり眼を見はった。

人里離れた草原の中の家ゆえ、恐らく木樵の小屋でもあらうと思つて居たのが、意外にもそれは、屋形造りの構えもいかめしい宏壮な邸であつた。

不審の念にかられながら、邸前に枝を広げた樟の根元に馬をつなぐと、冠木門をくぐり静まり返つた邸の玄関に立つた。

「頼もう——」

間もおかず邸内から返事があり、表戸が開いて姿を見せたのは、銀髪をうしろで束ね、古風な装束をまとつた小柄な老女である。

彼女は小腰をかかめると、

「お越しなされませ。先程より、お待ち申し上げて居りました」

「なに？ わたしを待つて居たと？」

「はい」

「そこ許はわたしをご存じと言われるか？」

「存じ上げて居ります。当豊後三万石のご領主、稲葉豊後守数貞様のご次男数馬様」

「おお如何にもわたしは数馬だが……」

「そんな事より、ささ、先ずはあちらに」

うす暗い玄関の中に入り敷台を上がると、老女は先に立ち板張り廊下を案内して行つたが、とある部屋の前に来ると、音も無くその部屋の板戸を開け、数馬を招じ入れた。

部屋に踏み入つたとたん、なま温い湯気が顔をうつつを感じ、審し^{いぶか}気の数馬に向い、老女はひっそりと微笑んで、

「お湯殿でござります。濡れたままではお体に毒。ざっと、ひと浴みなさりませ」

「おお、何よりのおもてなし、忝けない」

「では、ごゆるりと——」

会釈を残し、老女が部屋から出て行くと、濡れた白衣の帯を解き数馬は湯殿の板戸を開けた。

木の香がまだ匂う様な、真新しくも立派な湯殿である。四方の板壁に吊るされた唐金作りの燭台の灯が明るく映ゆる中央のあたり、満々と湯をたたえた桧の浴槽が据わり、乾いた洗い場の簀の子の上に、新しい手拭いが手

桶に添えて置いてある。

数馬は浴槽にざぶりとばかり身を沈めた。

肌まで透つた雨のために、酷く冷え切つた体を柔らかくもみほぐして呉れる様な快い湯加減であつた。

やがて数馬は、桜色に上気した裸身に湯滴をしたたらせながら、浴槽から出た。身分ある武士は、みだりに他家の湯殿で垢を流さぬが作法である。乾いた手拭いを取ると、濡れた体を拭き始めたが、明るい燭台の灯に映える肉付き豊かなその白い顔は、流石、美貌の家系として聞こえ高い稲葉家の男子らしく、眉目の秀でた中にも、凛とした気品が漂っている。

数馬は当年十九才。まだ前髪立ちの若衆であつたが、しかし、その典雅な容貌にも拘らず、その体軀の見事さは、藩内若侍の中にも比類が無かつた。

背丈は優に六尺は越すであろう。隆々と肉の盛り上がった両の肩から、胸板へかけての逞ましさ。そして、引き締まつた腰から、強靱な躍力を秘めた両下肢にいたる均齊のとれた筋肉美。しかも、持つて生れた肌の白さと肌理の細やかさが、その裸身を、あたかも刻まれた大理石像のように、滑らかな優美なも

のに見せていたのである。

だが、その厚い胸板には、剛い胸毛が渦を巻き、美貌との対比の妙をみせていた。

拭き終えた数馬は小部屋に上がった。と、

濡れた白衣は何時の間にか持ち去られ、艶やかな白羽二重の小袖に、練絹のしごきが添えて置いてあったが、彼がふと困惑の色を見せたのは、下帯が用意されてなかったからだ。

(急なこと故、揃わなんだと見みる)

数馬は苦笑し、小袖をまとうとしごきを腰に結んだが、下帯なしでは締まりが無くて頼りなかった。しかし、数馬は何喰わぬ顔をして廊下に出た。すると、うす暗い板敷きに坐して居た老女が顔を上げ、

「お湯加減は如何でありましたか」

「お蔭で生き返えった心地が致す」

「それは何より……では、此の屋形のあるじ

小夜姫様のご座所にご案内仕ります」

「なに？ 小夜姫様？ 小夜姫様とは一体、

いかなる女性にしようでござる」

「此の草原の彼方に見ゆる姫見が嶽の山領を代々、統治する金剛丸家の跡とり姫」

「金剛丸家？ はて、初めて聞く名じゃが」

「さもありましょう。由緒ある名家ではござりますが、今は訪れる人も無き落魄の身。そ

れ故、姫様には、あなた様のご来駕をいたく喜んで居られまする」

「ふーむ」

「では、こちらに」

宏壮な屋形にも拘らず、住む人は少ないと見え、何所もかしこも灯の消えた廊下をいく曲りもしたあと、ふと前方に、ぼう、と明るく灯の映えた障子が見え、老女がさらさらとそれを開けた。

すると、部屋の中央に立てられた几帳きちようの陰に、長く裾を引くきらびやかな衣装をまとった若い女人が、優雅な姿で坐って居たが、数馬の姿を眼にすると、傍に置いた燭台の灯をいきなり、ふッと吹き消した。

あたりは急に真の闇。

だが、老女はいささかも慌てた様子もなく静かに坐った気配で、

「姫様。稲葉家ご子息数馬様、これにご案内申してでござりまする」

だが、女人の返事は無く、老女は軽い衣摺れの音を残して、部屋から出て行った。不審の眸をこらしていた数馬は、ふと何かしら馥郁とした香りが漂い寄るのに気付いた。

彼はその香りを胸一杯に吸い込み、急に夢心地に誘われるのを覚えた。

「小夜姫どの、と申されるか。わたしは稲葉家の数馬と申す者、お見識りおき願いたい」

「小夜と申しまする……」

低い、だが金鈴を振る様な妙なる声。闇の中をにじり寄る気配を感じた数馬が、ごくりと唾をのみ込んだ時、彼の膝に柔らかな姫の手が置かれた。

「数馬様、今宵のお越し、小夜は嬉しく存じまする」

「突然に立ち寄り、造作をかけまする」

何故ともなく昂ぶる胸を抑えながら、数馬はやや上ずった声で言った。

「いえいえ。なれど明るい灯の下では殿方との対座が気恥かしく、思わず灯りを消した無作法、何卒お許し遊ばしませ」

「なんの、暗闇での話も風流なもの。とは言いながら、世にも麗わしい姫の顔を、灯の下で篤と拝見したい」

数馬は、灯を吹き消すまでの僅かな間に、気高いばかりに美しい姫の容姿を、脳裡にはっきりと刻み付けていたのである。

「あれ、わたくし如き山家育ちを……お戯れでありましょう」

「何を言われる。姫ほどの美貌、数馬これまで見た事がありませぬ」

「数馬さま！」

不意に小夜姫が体を投げかけて来た。

「まこと、姫を美しくいと思召して下さりま
するか」

「まことでござる。まことでござるとも」

数馬は何故ともなく朦朧としてゆく意識の
中で、呆けた様に繰り返した。

「ならば……か、数馬様……」

闇の中に、小夜姫の熱い息吹きを感じて、

数馬は我に返った。終生女体に近づいては成
らぬ——と、夢寐の間も忘れぬ己れの因果を
思い出し、つつと姫から体を離すと、

「いけませぬ、姫！ 此の数馬は、所詮は女
人を愛する資格の無い男でござる」

「まあ、何を仰せられます。数馬様の様な
立派な殿方が……分りました。数馬様は姫
がお嫌いなのでありましょう」

「そなたが嫌いなどと——何を馬鹿な」

「それなれば、小夜を抱いて下さいまし。そ
のお強い腕で力の限りお抱きなされて下さり
ませ。小夜は、あ、あなた様を、とうからお
慕い申して居りました」

「姫！」

我を忘れて姫を抱き寄せた数馬は、闇の中
に姫の唇を求めた。

「か、数馬様」

切なげに囁くと、小夜姫が片手を首に巻き
つけて来た時、数馬は再びはッとして我に返
り、さっと起ち上がると、

「なりませぬぞ、姫。それは叶わぬ事でござ
る。こ、この数馬は……」

悲痛な声音で言いかけた時、何時の間に入
って来たのか、老女の声が耳もとで、

「数馬様。そのご心配は無用になされませ」

「なに？」

「あなた様を、稲葉家の偉魔羅木若衆と世間
で呼んでいること、姫様には先刻ご承知であ
りまする」

「それをご承知ならば、もはや何も申される
な。この身は終生、女人を愛し得ぬ因果な男
でござる」

「ほほほ、そのご心配はご無用と、申し上
げたばかりではありませぬか。あなた様が、
如何に世間の噂通りであろうと、姫様には変
幻自在。あなた様をこの世の極楽にご案内致
されますわいなあ」

「な、何と言われる」

「何をおためらい遊ばします。婆の言葉が嘘
かまことか、ささ、姫」

それでも尚、半信半疑で突っ立つ数馬に近

づいた老女は、闇の中で、素早く数馬に何か
をなすり付けた。と、それは如何なる媚薬で
あったか、不意に数馬は荒れ狂う雄獅子の様
な勢いで、小夜姫に武者振りついていった。

薄ガ原にゆるく渡り行く夜風の冷氣に、数
馬はふッと我に返えった。真上には、相変ら
ず皎々とした月が冴えている。

（あッ、では、今のは夢だったのか？）

薄の根元に横たわって居た自分に気付き、
慌てて起き上がった数馬は、異状に乱
れた己れの身じまいに驚きの声をあげた。

明るい月光に照らされた、露わにむき出さ
れた彼自身の肌に、明らかに夢の名残りのも
のが見られ、しかも、わが身の周辺に点々と
落ちていく白いもの。

数馬はいまも尚、夢現の境に佇む想いでそ
の白いものを指先につまみ上げ、月光にかざ
して、ぎょッとなった。

それは明らかに獣の柔毛だったのである。

（第二章）宵闇変化

数馬は入浴していた。

夜の遠乗りから帰城した翌日の宵、稲葉城
中の宏壮な湯殿には、数馬が唯一人である。

彼は、たっぷりとした湯に首までつかると後頭部を縁にもたせ、半眼を閉じた。

すると又しても昨夜の事が思い出される。

あれは果して夢だったのだろうか。夢にしては、付着していた獣毛が奇怪であった。

しかし、そのいずれであるにしても、昨夜の夢中での歓喜は、数馬が生れて初めて味わったものであった。彼はその偉魔羅木と呼ばれる軀のゆえに、此れまで女体を知り得た事が無かったのである。

十五才の春、若い腰元を寝所に誘い込み悶絶させたのを手はじめに、それ以来、己れの異常さに気付くまでに、失望と落胆と努力を幾度くり返した事だろう。

初めの頃は、その凛とした美貌に魅かれ、噂の主だとは知りながらも、数馬の誘いのひと言で、寝所に忍んで来る女は後を断たなかったが、しかし、何時しか城中の腰元達は昼間でも数馬に寄りつかなくなった。その頃になり、ようやく己れの軀が常人と異なる事を悟り、きっぱりと女体を諦めたのである。

(じゃが、わしは、たしかに昨夜あの女と)それが例え夢の中であろうと、あの救われた思いの歓喜は何物にも代え難いものであった。——夢でもよい、獣でもよい。いま一度

あの小夜姫とかに逢いたい。——激しい思慕の念を覚えると、彼は急に生氣のみなざるのを感じた。

(小夜姫!)

数馬は尚も浴槽に浸ったまま、片手で己れを苦しめ悩ませる厄介者をひっそらえ、ざあツと湯滴を飛ばして浴槽の中に起ち、世にも稀なその怪物を見つめた。

(此のように呪われたわしを慰さめてくれる女性が、この世の中にも一人はいる!!)

それが例え獣でも良い。片輪同然の因果な身。こんなわしを受け入れ、男として愛を注いで呉れる女人ならば。と数馬は思った。ああ、小夜姫にもう一度逢いたい。

何時しか数馬は臉の裏に、薄の波の上に坐して艶然と笑みを投じている美しい小夜姫の姿を描いていた。

と、さらツと板戸が開いて、小柄な小姓の顔が覗いた。

「若様、お召替えを持参しました」

「うむ」

素早く浴槽に身を沈めた数馬は、何喰わぬ顔で返事をし、ゆっくりと振り向き、

「菊弥。背中を流して呉れい」

「はッ」

「そのままでは袴が濡れる。裸になれ」

「はッ」

菊弥と呼ばれた小姓は、手早やく衣服を脱ぐと、下帯一つになって入って来たが、まだ十三、四の少年である。洗い場の手桶に湯を汲み、糠袋と手拭いを用意すると、洗い場に膝をつき数馬が浴槽から上がるのを待った。

それを横眼で見ながら、数馬が勢い良く湯から上がった。そして、膝をついた菊弥の前に立ちはだかり、無言で彼を見おろした。

慌てて眼をそらす菊弥を、数馬は愉しそうに声をかけた。

「菊弥、わしはお前に裸になれと言った。何故に下帯を取らぬ」

「は、はい。申訳有りませぬ」

急ぎ次の間に退いたが、こん度は素ッ裸でおずおずと入って来る菊弥を見ると既に血走った眼で数馬は、にやりと笑った。と思うと不意に荒々しく菊弥を抱きかかえ、浴槽の中に躍り込んだ。

だばッ、と浴槽の湯が溢れた。

やがて、菊弥の体が桜色に上気して来ると数馬は再び洗い場にあがり、小姓を足許に横たえて膝で押さえつけた。

「あッ」

菊弥の眸に恐怖の色が走った。

「菊弥、わしが恐いか」

「は………いえ」

「恐れる事はない。今からわしが、面白い事を教えてやる」

「………」

「眼をつむれ」

主命もだしがたく、言われた通り素直に眼をつむる菊弥。

数馬はその両足を擱もうとした。とその時である。

風もないのに、壁に吊った燭の灯が瞬き、湯殿の中がふーッと薄暗くなったとみえた。たん、少し開いた高窓のあたりに、何かの姿がちらとかすめた。

数馬はぐいと天板を仰いだ。が、確かに何かが天井に向けて飛んだと見たのに、其所には何者の姿も見えない。

再び菊弥に意を傾ける様に見せながら、数馬は、秘かに手桶の中を覗いた。と、湯の表面に、ぼーッと映る白いもの。

その時、数馬の右手には素早く手拭の一端が握られていた。彼はその手拭を手桶に浸すと、右手で軽く水を切った。と、そのまま右手を高々と振り上げ、それと同時に、濡れ手

拭いが直線を描いて天板へ飛んだ。

ばしッ、と、鋭い音で天板が叩かれた。

それと殆んど同時に、浴槽の中央に飛沫が上った。

「何者！」

数馬は何時の間に握ったか、湯を捨てた手桶を武器代りに、浴槽の縁に片足かけると、はっとして浴槽の中を睨み据えた。

やがて、湯の表面が静まり、検造りの湯底がありありと見えて来たが、何者の姿をも其所に見出すことは出来なかった。

「む、奇怪な！」

尚も浴槽内を見守る数馬の体が、どうした訳か、不意にぐらりと揺れたかと思うと、そのまま洗い場に崩れていった。

どれ位経ったろうか。洗い場で自分を取り戻した数馬は、又しても己れの体に貼り付いている獣毛を見出し、啞然と成った。

（では、さい前の曲者は……）

やはり小夜姫だったのであろうか？ いやあの白々とした姿から察すると、姫に化身する獣が、その本性の姿で現れたのだらう。

数馬は急に鳥肌立つのを覚えた。だが、だが。数馬は言い様の無い複雑な思いの中で、小夜姫に対する思慕の情が高まるのを、どう

する事も出来なかった。

「姫よ、ああ……」

体内の隅々にまで、まだありありとたゆたう奇妙な感覚に身を任ねながら、数馬は呻くように呟いた。ふと気付くと菊弥は身動きすらせず、安らかな寝息を立てて眠って居た。

（第三章） 愛憎秋雨しぐれ

雲のたち込めた夜空に、一つ二つ、弱々しい光りで星が瞬いている。その下に、黒々と聳ゆるのは稲葉城であった。

その稲葉城の馬場門を通り、ひとり駿馬にまたがり、夜の遠駆けから帰城したのは数馬である。厩番に手綱を渡し、湯殿でざっと汗を流すと、己れの寝所に入った。

その凛々しい面が何時になく沈んで見えるのは、今夜も又、遠駆けしたもの、求める小夜姫に逢えなかったからである。

数馬はこの十日ばかり、毎夜、薄ヶ原に駿馬を走らせたが、あれ以来、小夜姫の姿はぶつりと見えなかった。

——姫はもう、このわしの前に二度と姿を現わさぬ積りであろうか？——そう思うと数馬は狂おしい思いに駆られるのであった。その為めか、此のところ頬の肉が落ちたのが、自

分でもよく分かるのであった。

夜も更けた為めか、主人が帰城した事を、近習達は気付かずに寝込んで居る様である。むしろそれを好い事に彼は用意されてある絹夜具に滑り込んだ。

冬も間近い夜が静かに更けていく。

と、次の部屋とを仕切る襖の向こう側で、微かに気配の動いたのを、流石、武技で鍛えた数馬の神経は見逃さなかった。彼は夜具の中でじつと氣息を整えると、

「誰じゃ」

低いが鋭い声で問うた。と、敷居際に無言で手を支えたのは、筋骨逞ましく、眉の濃い前髪立ちの小姓である。

「なんだ、右馬介うまのすけではないか」

「……」

無言でじつと見返える右馬介に、

「どうした？ その方、近頃ちと変じゃぞ」

右馬介は寢所に入ると襖を閉め、するすると数馬の枕許に近寄ると、

「若君、此の右馬介には些かも変った所は有りませぬ。変ったのは若君の方ではありませぬか」

「む……」

「変りが無いとは仰せられますまい。その証

拠にこの十日ばかり、右馬介を一度もお召出し下されませぬ」

「その様に氣を廻すな。わしはな右馬介、近ごろ疲労の氣味なのじゃ。それ故、そなたを呼ばなんだまでじゃ」

「その言い訳は通りませぬぞ。疲労の氣味の若君が、夜毎夜毎の遠駆みめは何故でござる。

若君には、何所ぞに眉目良き寵童でも見つけられたのではありませぬか」

「何を申す！ その様なつまらぬ邪推は止めにせい」

「いいえ、止めませぬ。此の右馬介は若君の寵愛を一途に守って、生涯奥方をお迎え出来ぬ若君と共に、此の身も女人に近づけず、唯々若君と共に生きる覚悟。若君も、そなたは生涯の伴侶じゃと、この右馬介に申された事よもお忘れではござりますまい」

此の右馬介は、数馬の衆道の相手として、永らく寵を受けてきた小姓である。

この時代、武家社会に於ては衆道はごくありふれた事であつたし、側妾を数多く持つ事と同様に、寵童を数多く抱えた武家や大名はそれだけ甲斐性の有る男として、むしろ誇る傾向にさえあつた。

余談であるが、その寵童にも二通りあり、

金品を以って身柄を売買される宿場女郎の様に人手から人手へと転買される寵童は、女にもしたい様な優形であつたが、己れの家来や近習の中から、武家や大名が寵童を選ぶ場合容貌が整っていると同時に、武技に秀で、筋骨逞ましい若者を選ぶ傾向にあつた事は、いざ鎌倉、と言う場合に備え、保身の知恵から出たものであつたらうか。その最たるものが信長と森蘭丸の主役であらう。

それは兎も角、寵を与えた相手から、こう詰め寄られると、流石に数馬は一言も無かつた。

自分が小夜姫の姿を求め、夜毎に薄ガ原をさまよって居る時、右馬介は此の身を一途に思つて呉れていたのだ。そう気付くと、数馬は急に右馬介が愛しくなり、ぐっと胸に迫るものを覚えた。

彼は夜具の上に身を起こし、右馬介の手を握むと、ぐいと胸に手繰り寄せながら、

「右馬介、許せよ。その代り、今宵は」

「若君！」

だが、右馬介は濃い眉をぐいと上げると、「此の右馬介は、若君の情なさけに命を賭けてござる。なれど、お義理での寵愛は受けとうはありませぬ」

「何を言う。義理か義理でないか——それ、分かるであろ」

そう言うなり、数馬は掴んでいた右馬介の手首を引寄せた。

その夜明け。

数馬はするりと夜具から抜け出ると、今ようやく明け初めた渡り廊下の方に出た。何時の間にか、外は煙る様な雨であった。

「小夜姫」

数馬は低く呟くと、其所にあった庭下駄に足を入れ、音もなく降りそそぐ小雨の中、まだ暗いとぼりの前庭の程に、静かな佇いを見せる亭の方に、憑かれた様な足どりで近づいて行った。

夜半、数馬は右馬介を相手に激情を叩きつけ合った。にも拘らず数馬は、心から満ち足りた境地に達する事は出来なかった。小夜姫との出会いにより、一度び真の恍惚を知った彼は、最早や男相手の偽りのものでは歓喜を既に感じなくなったのである。

眠れぬ夜明けの一刻を持て余まし、何となく寢室から抜け出た数馬だったが、しかし、小雨に寢衣の肩を濡らしながら、低く何かをぶつぶつと呟き、蹠跟そうろうと亭に近づく数馬の様子は、何としても異常であった。

そしてその彼の姿を、暗い渡り廊下の板戸の蔭から、右馬介がじっと見送って居た事に無論数馬は気付く筈もなかったのだ。不意に右馬介の眼が険しくなった。

数馬が巧く自分をたぶらかし、自分が寝込んでいる朝方を狙って、何者かと亭内で逢い引きするのに相違ない——と、右馬介は推量したのである。

彼は急いで庭下駄を探し、足音を忍ばせて亭の方へと近づいて行った。そして、亭に近い植込みに身を秘め、じっと聴き耳を立てた右馬介は、思いがけぬ妙なる女にょしやう姓の声を聞き、はッとなった。

「数馬様。小夜はとてもお逢いしとうございしました」

「姫。この数馬も、いかばかりそなたの事ばかり思い続けた事か」

その、歓びに震るえる数馬の声音を、右馬介は齒ぎしりする程の思いで聞いた。

「それにしても、姫、この亭内にまさかそなたが居ようとは」

「数馬様。小夜はもう、あなた様が恋しくて慕わしくて、婆やが止めるのも聞かず、危険も忘れて此の城内まで忍んで参りました」
「おお、そうであったか！ ひ、姫よ」

二人の会話はそこで切れ、その後はしんと静まった亭内に、微かにしゅッと衣摺れの音がしたのは、二人が帯を解いたのか？

右馬介は、そなたが此の数馬の唯一人の想い人ぞ——そう云ったばかりの数馬が、その舌の根も乾かぬ内に、何時の間に知り合ったかは知らぬが、あろう事か城内の亭で、と思ふと、カッと頭に血が昇るのを覚え、我れを忘れて植込から出ると、亭の内部が見える丸窓の方に、そろそろと近寄って行った。

と、その右馬介の眼に入っただのは、此の晩秋の明け方の冷氣の中で、寢衣を脱ぎ捨てた数馬の無態な姿であった。

その数馬の相手たるべき者の姿は定かでない。が、何に気付いたか、不意にぎょッとした顔付きになった右馬介は、足許から手頃な石を一つ掴みぴゅッと投げた。狙いは違わず石は目標にばしッと当たった。

「ぎゃッ！」

不意にけたたましい獣の絶叫が、亭の内部に響いた。次の瞬間、眼の前を飛鳥の様に跳躍して、植林へと逃げ込んだ白狐の姿を、右馬介はしかとその眼で見たのである。

(第四章) 乙女無慘 おとめ むざん

右馬介の妹由利は、ふと、表戸を叩く音に眼が覚めた。もう明け方であった。だが、まだ人の訪れる時刻ではない。空耳だったのか知ら……そう思い、再び眼をつむろうとした時、今度ははっきりと戸を叩く音が聞こえた。今時分に誰だろう？ 兄の右馬介が帰ったのであろうか？

今夜右馬介は宿居で城中に詰めて居る。その兄が何か急用で帰宅したのかも知れない。

だが下僕も下婢も、耳敏い老僕の嘉助までが今朝に限って起き出る気配が無かった。

由利たち兄妹の両親は既に亡く、十七才の由利と、数馬と同年の十九になる右馬介が、三人の下僕と下婢と共に、大き過ぎる程の邸内に、ひっそりと暮らして居るのである。

由利はそっと夜具から出ると、手早く寝巻の上に羽織の袖を通し、手燭を持つと、玄関に出てゆき表戸を開けた。

すると、雨に煙る明け方の薄暗の中から、ぼう、と手燭の灯に浮かび上がったのは、兄右馬介と思いきや、意外、身なりの立派な青年武士であった。

「由利どのでござるな？ 夜中に突然お騒が

せして申訳ないが、そこ許のお兄上右馬介どのの身に、思わぬ事から一大事が起き、お迎えに参った者でござる。さ、一刻も争う危急の場合じゃ。外に駕籠かごの用意がござる。其のままご同道下されい」

「げッ。兄の身に一大事とは、あの、一体どのような——」

「その様なこと、今あれこれと申す間にも、お兄上の身の上が気にかかる。訳は行けば分かること。さ、早よう駕籠に」

「は、はい、では……」

青年武士の巧みな言葉に、動顛どうてんして終った由利が、外に置かれた駕籠に言われるままに乗った事は、普段の賢い彼女からすると、いささか軽率なようであったが、しかし、若い娘の身には其れも無理からぬ事と言えよう。

それに何と言っても、その青年武士の容貌風采は非の打ちどころも無く、立派過ぎる程立派だったので、由利は初めから、彼を疑う気持など全然持たなかったのである。

やがて、次第に明けていく煙る様な雨の中を、駕籠は矢の如く走り、いつしかそれは、薄が原の草原へと近づいて行ったが、驚くべきことに、駕籠の姿が忽然と消えると、失神した由利の体を、巧みに背中に乗せて飛走す

る三匹の牡狐の姿が見られたのである。

それから少しく経った頃、由利は、生温い臭気を含んだ息吹きを顔に感じ、ふッと我に返った。と、すぐ自分の顔の上に、眉目秀麗な青年武士の顔があった。

「あ、あなたは？」

由利はとっさに今何が起きているか理解出来ず、そう呟くと、慌てて身を起こそうとしたが、その時になって、初めて自分の身に何が起きているかを覚り、愕然となった。

「お退り下さりませッ。お退き……」

だが、青年武士はうすく嘲笑うと、益々その腕に力をこめながら、

「よいか、この術が金剛丸家に伝わる『乙女泣かせ』の秘法。——ふっふっふ、もはやそなたは、我が一族のもの」

言うがいなや、青年武士は大きな掌で由利の口許をびたりと塞いだ。見る見る内に由利の顔が充血し、しばし苦悶のあがきを続けて居たが、やがて、彼女は朦朧もうろうとした世界へと落ち込んでいった。

すーッと水から浮かび上がる様に、眠りの世界からふっと我を取り戻した由利は、柔かな絹夜具に横たわる自分を見出し、はっとして起き直った。

「一体此所はどこだろう？」

そして、あの憎みても余りある青年武士はいずれに？

その時、境の襖がさらさらと開き、かの青年武士がにこやかな顔で入って来ると、静かに枕許に座り、

「由利どの、お氣が付かれたか」

「あ、あなたは——」

由利はきつとした眼で相手を睨んだ。

「どうなされた？ まだ気分がすぐれませぬか。何しろ、此の雨の中をひた走りに駕籠を急がせて、ようやく此の邸に着いた時、そこ許が駕籠の中で失神して居られるのを知った時は、流石に拙者驚ろきましたぞ。この明け方の冷気が、お体にさわったのでありましようが、とも角此の部屋にお連れ申し、お寝み頂いたのでござるが、ま、暫くはそのままお寝みなされませい。もう直ぐ女中共が、薬湯を持参致しまする程に——」

まあ、そうだったのか——と、由利はほっとして胸を撫でおろす思いであった。

さっきの事は、夢だったのであろう。それにしても、何という羞しい夢であった事か。「わたくし、ちっとも覚えては居りませぬけれど、色々とご造作を掛けまして……何と

お礼申し上げてよいやら——」

由利は礼を述べながら、この青年武士が忌わしい悪魔となっていた夢の事を思い出し、我にもなく赫くなった。

「いやいや、礼には及びませぬ。それよりも無理をなされては体に毒。間もなくそこ許のお兄上と若君が、当邸にお見えに成られる筈でござれば、それまでにもう一眠りされたがよい」

「え？ 兄上と若君が此のお邸に？ もし、兄上の一大事とやらは、どうなったのでありましようか」

「ご案じ召さるな。何も彼も万事が旨く納まりました。もう少しの心配も要りませぬ。安心してぐっすりと眠りなされ、さすれば、すっかりお元氣になられましよう」

「はい」

由利は素直に眼を閉じたが、心は冴えるばかりであった。そして、閉じた瞼の内側に、消しても払い除けても、すぐ間近くに座る青年武士の面影が浮かぶのを、どうする事も出来なかった。と、又もや先ほどの夢の事が思い出され、彼女の胸はにわかに熱くなり、耐え切れぬ程切なくなった。

(まあ、わたくしとした事が……)

首のあたりまで赫くなり、思わず夜具を引き上げた。しかし、由利は知らなかった。

先ほどの事は夢ではなく、彼の近くに居る限り、狂おしいまでの情火の炎が、何時でも必ず燃え上がる不思議な体質に変えられたのだと言う事を。そして今、由利の体内にはその血が騒ぎ始めているのだった。

その成り行きを楽しむ様に、青年武士は残忍な眼の色で、由利の様子を見守って居た。

と、不意に夜具の中の由利が喘ぎ始め、彼女の狂おしげな息使いが、ありありと洩れ聞こえるようになった時、

「由利どの、さ、起きるのだ」

青年武士の命ずる様な一言で、由利はぱっと蒲団をはね除け、ぺたっと起き直った。

「さ、帯を解いて——そうそう、次は着物を脱いで……」

赤く充血した眼を瞬きもせず、男の顔をひたと見詰める由利の様子は、もはや完全に淫獣のそれであったが、その由利に、青年武士がゆっくりと命じると、彼女は尚も男の顔を見つめたまま、術をかけられた人形の様に、ぎこちない手付きで着物を脱いでゆく。

そして、由利が総べてを脱ぎ終えた時、青年武士はすくと起った。

次の瞬間、その由利に躍りかかったのは、何んと、全身灰色の巨きな牡狐だったのである。

(第五章) 草原酸鼻 (そうげんさんび)

「若君、ではどうあっても、此の右馬介の言う事をお聞き届け頂けませぬか」

「右馬介、百万遍言った所で、その方にはこの数馬の気持は分るまい。わしは因果な片輪者だ。じゃが、その方はその気になりさえすれば、今日直ぐにでも立派な娘と祝言が出来る。はははは、白狐と知りつつ恋慕うこの数馬が、さぞや畜生にも劣る男に見えるであろう」

「何を言われます。此の右馬介は若君と一心同体、生涯女人には近づかぬと、あれ程誓言したではありませんか。この右馬介は若君の事を思えばこそこうしてお願い致すのでござる。余人は知らず、若君は歴とした稲葉家の御次男。その若君が獣と情を通じた世間に聞こえては、お家柄にもさわりましょう」

此所は城中の数馬の寢室。外はもうとつくに明け、ようやく雨のやんだ庭園の樹々に、澄んだ陽光が射し始めているのだったが、ぴたりと襖を閉め切った寢室の中で、まだ寝衣

も着替えぬ数馬の前に、ぴたりと手を支えるは右馬介であった。その右馬介に、

「右馬介！ 何を小賢しい事を吐かす。その方、わしの寵愛を奪われて、姫に悋氣^{りんき}を致しおるな。ふっふっふ。今日よりわしの偉魔羅木は、いや、此の体も此の心も、すべては小夜姫のものぞ！」

「若君ッ、これ程申し上げるに……」
吃^{きつ}として数馬を見上げた右馬介は、ぎょつとなった。数馬の様子が、普段と異なる事によろしく気付いたのである。

この所めつきり頬のこけた顔は蒼白となり赤く血走った眼尻は、こと更に吊り上がって三白眼となり、顔面が絶えず痙攣^{けいれん}している。明らかな狂相であった。

白狐の霊が取り憑き、若君の精神を狂わせ始めている——右馬介が暗胆^{あんたん}とした思いで深い溜息をついた時

「申し上げます」

隣室から近習の声があった。

「何じゃ」

「はッ。姫見嶽の山代官金剛丸家の使者と申す者、若君に御意得たいと申し、表口までまかり越して居りまする」

「なに、金剛丸家の使者と申すか」

数馬の面は急に歓びに包まれた。

「直ぐに此所へ通すが良い。いや、わしが表口まで行こう」

数馬は一刻も待ち切れぬ様子で、右馬介が止めるのも聞かず、白練絹の寝衣のまま、走り出さんばかりに渡り廊下を通り、表口の方に性急に出て行った。

「金剛丸家の使者とはその方か？」

広い玄關まで来ると、敷台の上に突っ立ったまま、数馬は、戸口に控えた眉目の秀でた青年武士に声をかけた。

「はッ、小夜姫よりの火急の使者——」

「なに、小夜姫よりとな。して、その使いの趣は？」

「されば、小夜姫には今朝がた、思いがけぬ災難にお会いなされ、もう余命いくばくも無いお体。そのいまわの際に、若君に一眼なりとお会い申し上げたいと、只管それのみ願っておいでござりまする」

「げッ。姫の命が危いと申すか！ し、して

姫は今いずれに」

「はッ、拙者がご案内致します」

「よし——急ぎ馬ひけッ」

数馬は表口警固の侍に命じ、愛馬に鞍の用意をさせると、ひらりと飛び乗り、馬場門を

向けて手馴れた手綱をぐいと引いた。

主人の異常を案じて立関口に出て来た右馬介は、騎上の数馬を見ると顔色を変え、思わず敷台から跳び降り、

「若君、若君ッ！」

声を限りに呼び止めたが、早や疾走し始めた馬上の数馬には、無論聞こえる筈もなかったのである。

× × × × ×

朝の並木道を駿馬は矢の様に走っていく。

その馬上に続けざまに鞭が振られ、白い寝衣の上に結んだ白絹のしごきの端が、白い虹の様に鮮やかにはためいた。

その駿馬の前方二間ほどの地上を、青年武士は息も乱さずに走って居たが、やがて、前方に薄が原の草原が見えた時、その姿はふつと路上から消えた。

いや、走りつつ不意に道傍の叢に向けて跳躍し、そのまま其所に身を沈ませたのであるが、その動きが瞬時の間に行われたので、数馬にはかき消すが如くに見えたのである。

だが、数馬は草原に駿馬を乗り入れ、

「姫ッ、小夜姫ッ」

声を限りに呼んだ。すると

「若君様……数馬様……」

直ぐ近くの薄の根元から、弱々しい声音で聞こえたのは、まさしく小夜姫の呼び声であった。

「おお、姫。此所であつたか。数馬が参りましたぞ」

「数馬様。お眼にかかれて嬉しゅうございませう」

薄の根元に横たわる小夜姫の姿を見出すと数馬は馬から降り、姫の体を抱き上げた。

「如何なされた、姫——」

「数馬様。姫は今朝がた、姫見嶽の岩場より落下した石に打たれ、最早やこれが最期でございます」

「おお、何たる痛ましい事を」

数馬は、小夜姫が右馬介の投じた石に急所を打たれたのだとは、今だに知らなかったのである。彼はあの時、不意に逃げ去った姫の行為を、亭に誰かが近付いたので驚ろいて逃げたのであろう。そう思って居たのである。

その数馬の声に、弱々しくも絡みつくな小夜姫の声音が、切れ切れに囁かれた。

「数馬様、ひ、姫は、此の世の名残りに、いま一度数馬様の胸に抱かれ、お情けを受けてあの世に旅立ちとうございます」

「何を云われる。早う元気な体に戻って、初

めて逢うた夜の様に、美くしい笑顔を見せて呉れい」

「いえいえ、小夜の命はあと半刻。数馬様、まこと姫を愛しいと思召すなら、早う此の身を抱いて下さりませ」

「姫！」

悲しみに満ちた数馬の胸に、その姫の一言は火を点じた。すると、それは堰を切った激流の様に数馬の胸中に荒れ狂い、急速に全身の血をたぎらせたのだった。

「ひ、姫よ」

数馬はついに耐え切れず、姫の体を枯草の上にそっと置いた。

だが、数馬は知らなかった。

姫と思い込んでいたその女が、まことは由利である事を。そして由利はいま、数馬に抱かれている事も、枯草の上におろされた事も知らず、唯こんこんと眠って居た。

かの青年武士に——いや、その実、姫見嶽の牡狐に依って「乙女泣かせ」の狂おしさに悶え抜いたあと、死んだもののように今も眠り続けて居るのである。

そして、小夜姫の声色を使い、由利を巧みに小夜姫と幻覚させながら、数馬と話を交して居るのは、直ぐ近くに隠れたかの青年武士

だったのである。

丁度その時、はるか並木道の方から駆けて来る右馬介の姿が見え、眼敏くそれに気付いた青年武士は、ちッ、と微かに舌打ちし、又もや姫の声色で数馬を急き立てた。

物も言わず、怒れる偉魔羅木がそこにあった。

その少し後、草原に走り込んだ右馬介は、草原の中ほどに、数馬の愛馬が草を喰む姿を見つけ、急ぎその方に近づいて行った。

と、不意にその前に立ち塞がったのは、今の今まで、小夜姫の声色を使い、数馬と対話して居た青年武士であった。

「右馬介——」

陰にこもった声で言うと、蒼光る眼で、じつと右馬介を見据えた。

「もう遅いわ。すべては終わった！」

「貴様は誰だっ」

「金剛丸家の家老として、その名の通った黄金丸——行く行くは、小夜姫の良人と決められた此の身が、命に替えてもと愛しゅう思う姫に、よくも石を打ちつけて呉れたな！その仇、見事に果した黄金丸の手の内、よっく見るがよいわ」

そう叫ぶと、黄金丸は傍の薄の根元を、憎

々しい眼付きで指し示した。何気なくその方に眼をやり、右馬介は愕然となった。

其所には、今は既に半ば気が狂い、己れが抱く女体があくまで姫だと信じ込んだ数馬が果し得ぬ想いに焦ら立ちながら、猛牛の如くに荒れ狂う、あさましい姿があった。

そしてその腕の中にグッタリと、半身を血汐に染めて悶絶した見るも無惨な妹の姿がみとめられたのである。

「ややッ、由利ッ」

驚愕の叫びを上げて走り寄る右馬介の背後に、黄金丸の嘲りの言葉が飛んだ。

「覚えたか、右馬介。もういくら吠えても遅いわ。そなたの妹は、そこな馬鹿化物に刺しまくられて、とっくの昔に息絶えたわ。ふっふっふ。これで愛しい者を失うた者の悲しみが、少しは分かったであろう。泣け、吠えろ、ふっふっふ、喚くがよいわ」

「うぬっ、よくもっ」

右馬介は、怒髪天を衝く勢いで抜刀すると黄金丸に斬りつけた。黄金丸は陽炎のように跳び退くと無気味な笑い声を上げた。

右馬介の右手から、ぼろりと大刀が地面に落ち、彼はそのままがっくりと膝をつくと、うッ、と、喉を鳴らして慟哭し始めた。

彼は身も世も無くむせび上ぐる様に見せながら、その実、袖に隠れた左手で、小刀の鞘から素早やく小束を抜いたのである。そして臉を閉じると心気を澄ませ、不意にさッと小束を投じた。

「ぎゃッ」

とたん、薄の根元に獣の絶叫が上がり、どうとその場に崩れる如くに倒れたのは、全身灰色の狐であった。

「うぬッ、畜生の分際で——思い知れッ」

右馬介は憤怒の形相もの凄く、瀕死の黄金丸に近づくと、さッとはかりに首を刎ねた。

その大刀の血糊を拭いもせず、数馬の方に眼をやると、最早や数馬は完全に発狂して終った様であった。

「姫……小夜姫よ……何故に此の身を受け入れて呉れぬ。は、早ようこの身を、このわしのせつなさを慰めて呉れい」

上ずった声で繰り返しながら、尚も由利の屍をかき抱かんとする有様は、まさに地獄絵の悪鬼さながらであった。

これが、かつては豊後の麒麟児と呼ばれ、藩中並ぶ者の無かった美丈夫であろうか。

元結いの解けたさんばら髪に、焦点の定まらぬ洞ろな眸。血に汚れた寝衣は乱れ、解け

た下帯がだらしく足にからんでいる。

「若君ッ。な、なんたるそのお姿……さりとはいふ余りにもお情け無い」

右馬介の悲痛な声に、数馬がふっとこちらを向いた。

「誰じゃお前は。……おお、右馬介じゃな。」

ふふふ、その方、小夜姫に愀然として、まだうろろとして居たか」

言いつつ右馬介に近づくと、狂人特有の思いがけぬ動作で、不意に右馬介の腰から小刀を引き抜いた。

「何をなさる、若君ッ」

「知れた事よ。その方をぶった斬って呉れるのじゃ。ふふふ、姫を悪し態に言う奴は、ど

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則として取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

いつもこいつも容赦はせぬッ」

言うがいなや、太刀風鋭く斬りつけた。右

馬介はぱつと跳んでそれを避けたが、運悪く草の株に足を取られ、どっと後ろ態に転倒するその喉元を目がけ、数馬は二の太刀を振りおろした。狂ったたりとは言え、数馬の太刀筋は確かであった。

ぴゅッ、と血しぶきを飛ばし、右馬介の首が他愛なく刎ねとんだ。と、

「若君様……数馬様……」

弱々しく聞こえたのは、おお、まさしくそれは、小夜姫の呼び声であった。

「その声は、おお、姫じゃ」

「数馬様。姫は此所でござります」

その声をたどって行くと、とある薄の根元に、髪は乱れ、泥にまみれた裳を引きずる小

夜姫が、此の世の者とも思えぬ蒼い顔で、じっと数馬を見上げた。

「おお、姫よ。何となされた、その姿は？」

「数馬様。既に死期を覚った小夜は、金剛丸家の掟に従い、死後の姿を世人の目に晒さぬため、七曲りの洞穴に一度は姿を隠したものの、数馬様の面影が忘れられず、又もや、此

の世に這い出して参りましたが、ああ、数馬様、もう此の眼が見えませぬ」

「姫よ、もうそなたを離しはせぬ。そなたはこの数馬の妻ぞ！」

「う、うれしい……」

数馬の腕に抱かれると、小夜姫は微かに微笑んだが、それが彼女の最期であった。

と、次第に小夜姫の姿は全身純白の牝狐の死体にと変っていったが、数馬にはそれを見分ける力は残されていなかった。彼も又、死

体となった白狐を強く抱きしめたまま、暗い朦朧とした世界へと、静かに吸い込まれていったのである。

その日の夕方、姫見嶽から降りて来た樵の群が、白狐と抱合ったまま果てて居る数馬を発見し、仰天して稲葉城に注進したが、城中では世間体を憚ってか、その様な畜生道に墜ちた男は、此の稲葉家とは関りはない——と冷やかな返答があっただけで、彼らの死体は打ち捨てられた。

それから間もなく、狐を混じえた五つの死体は、村人によってねんごろに葬られ、その埋め跡に、自然石の塔が建てられたが、人々はそれを、偉魔羅木の塔と呼んで、夫婦和合の祖神として永く信仰を篤くしたと言う。

だが、今その塔がどうなっているかは明らかでない。

(完)

博ちゃん、飲み食べシリーズ

M 的 飲 食 物 考 現 学

津 川 博

(一) キップの味

余り、競輪は好きではないのだが、例の作戦で、例の物がしきりと欲しくなつて、余暇を割いてはよく競輪場へ足を運ぶ。中央本線はT市の競輪場の近くに、T国際トルコセーターがあつて、そのすぐ隣りに「中川」と言う小料理店がある。

この店のマスターが、生れも育ちも浅草と言うことで、誠に小気味よいほど竹を割った様にキップがいい。当年三十七才、ほぼ私と年代が寄っている故かよく気が合つて、いつもじっくり腰を据えて、商売っ気を抜きにし

てお互いに盃をかわす。

ささやかでちつこい店なので、客が十人程も坐つてしまふともう満員御礼。それでも結構流行つているところをみると、マスターのその飾らない明るい性格が、客をひきつけているのかも知れない。

この「中川」には、取立てて変つたメニューはないが、この店の鱈ちり鍋が至極味付けが良い。おまけにこのマスターの奥さんが、また可愛い顔である。頬っぺが赤くつて眼がとっても綺麗。笑うとエクボがちんまり浮いて、白く艶々しい歯並びが清潔で、とりわけ美人ではないけれど、私好みのいい感じ。



ああ、欲しいなあ。もういけねえ、マダム
の顔を見た瞬間からわが歎げかわしき異常な
慾望がムクムクと脳裡を馳けめぐる。とは言
うものの、相手はマスターの奥さんである。
簡単に、「頂戴なもー!」「はいよー!」てな具
合にはゆくものではない。それ、そこには、
潜在的に常識と言うものが働いて、ずばり、
切り込むわけにもいかず、おいそれと、我が
願望が叶えられる筈のものではなかった。

この店のトイレは店内の片隅にあつて、余
り清潔ではないが中は意外と広い。つとマダ
ムがトイレに入った。ドキッとなつて私の視
線がその背後を追う。

透き通るような白い下肢が私の顔を跨ぐ。狙いが定まって、暖かい神酒が勢いよく咽喉をうるおす。

「ついでに、大きい方もしちゃうかな？」

マダムが聞かすともなく呟く。ああ、感激の瞬間。

そんなあさはかな願望が、空想の翼をひろげ、盃をちびりちびりとなめながらもしきりとイメージに浮かんでくる。

今夜は競輪開催日の前日なので、さすがに客は少く、店内はひっそり。今一組出て行って、客は私だけとなった。まさにチャンス到来？

「マスター、ちょっと頼みがあるんだけど」

「頼み？ ってなんです」

「変んなお願いだから、びっくりするかも知れねえけど」

「あっしや江戸っ子だ。びっくりやししゃくりにほたいてえは驚かねえ。なんです、その頼みてえのは。お勘定なら、何時でもよござんすよ」

「いや違うんだ。そのー、ちょっと変わった話なんで云いにくいんだけど、つまりその、あたしってね、ものすごい縁起かつぎなんだ。競輪の前の晩、ある物に触らないと次の日、

勝星が付かないんだ。今までの経験だと、その物に触れた翌日は必ずといって良い程、大きいレースをものになっている。ま、迷信と云えばそれまでだけど」

「へえー、で、その物てえのはなんです。まさかウンチじゃねえでしょうね」

「こりゃおどろき、それぞれ、そのものズバリ。それも女の人でないと駄目なんだ」

「なーる。運が付く、運を掴む、てえわけですかい。へえー」

「女房の奴、今、田舎へ帰ってんで明日のレースに間に合わない。そこで、このマダムのを是非、触らせて欲しいんだ。変んなお願いで本当に悪いんだけど、頼めないかなあ」

「いや、頼めないかなあって言われても、あつしのが役に立つわけじゃねえし。……うちの奴が、いいって言や、別に大したこっちゃねえし、どうってことありませんがね」

「あらあ、いやーよ、そんなこと。第一、汚ないじゃない」

真っ赤な顔して下をうつ向く。ここでそのまま引き下ったんじゃ、津川センサーの男が廢る。それゆけ、ゴーゴー。

「いやマダム。なにも私は、眼の前でやって下さいって頼んでるわけじゃないんで。トイ

レの隅んとこに紙に包んで置いて呉ればいいんですよ」

「だってー、あんなもの。いくらおまじないたって不潔じゃない」

「こっちは、不潔とはちっと思っちゃいない。なにごと縁起と思ってますから、なにも羞かしいことないですよ。その代り、明日がっちり稼いだら、たんまりとお礼させてもらいますから」

「おい、志津、津川さんのおまじないだ、聞いて上げねえな。汚ねえたって、あとでよく洗えばいいじゃねえか。俺っちだって、昔から縁起かつぎにや、ずいぶんと苦労させられたもんだ」

「マダム、頼みます。この通りだ」

「あら、なにも頭を下げなくても。でも今、出るかしら？」

話てえものはしてみるもの、馬には乗ってみるものだ。戴けなくって元々と考えてはいたが、こうも調子よく運ぶとは夢にも思っていなかった次第。

ややしばし待つ程に、マダムがトイレから出て来た。

「どうだ、でたか？」

マスター、なんにも知らねえから、平気な

顔してマダムに尋ねている。マダム、小さく頷いて、羞恥心もあらわに赤い顔をしてカウンターの奥に姿を消した。やっぱり、顔を見られるのがいやなのだろう。

照れ臭い顔付きで私はトイレに向う。背後でマスターの明るい声

「終ったら、湯を用意しますから」

なんとキップのよい男。トイレの中にはあった。便器の脇に、チリ紙の上にチョココンと親指位のものが鎮座ましましていた。まさに憧れのもの、待望のチョコレート。ねっとりとした感じ。まだ温くもりの冷めやらぬ、そのもの。

よく消化されていていい味である。量が少ないのは残念だけど、充分に味わって咽喉へ通す。まさに、キップの味であった。……翌日のレース？ それはそれ、これはこれ。

(二) 俺らあ、

飲んじまっただー

長男の信吾が中学の一年生になった。育つのは早いものだ。その信吾が、友達を連れて帰って来た。友達は女の子である。身体が大きい、一米五十センチはあるだろう。可愛い顔をしている。私好みの顔付きである。真っ

白なセーターが清純で、胸がふっくらとしていた。それがとても可憐で、花も蕾と言ったところか。信吾は学級委員をしている。どうやら話は学級の事らしい。

あどけない可愛い子ちゃんを、眺めていたら、さあ欲しくなってきた。最近はどうもいけない、矢鱈と飲みたくなるのだ。これも氣候のせいかしら？

目的があるからすぐサービスがいい。ジュースを飲ませたり、ミカンを盛ったり、バナナを並べたり。なるべく水分を多量に含む果物を、この可愛い子ちゃんに御馳走する。そこはまだ十三才の女の子、遠慮することなくパクついている。

やがて、ある時間がくればトイレに立つこと間違いなし。その前に、トイレに細工を施す必要があった。うちのトイレは、男用と女用に区別されている。信吾はいつも朝すますから女用に入る気使いはない。トイレの入口の所に柵がある。その柵の奥に私が苦心して作成したビニールの便器覆いが隠してある。便器全体をうまく覆うようになっていて、ちよつと見た感じでは透き通っているから分からない。また、たとえば分かったとしても、便器を清潔に保つ為の覆いだろう位にしか判断

はされない。そのビニールの覆いのずつと下に袋が付いている。長い袋でこれもビニールで出来ている。入ったものが外に洩れないように、セロテープで充分貼り付けてある。これをセットした。われながら心臓はドキリンコ。祈るようにして待つ時間の長さ。ある種の緊張感で身体が震える。

「津川さん、おトイレ貸してえ」

遂に立った。思わず知らず立ち上りかけたのをぐっとこらえ、知らん顔をして私はテレビを見ていた。なにを放送しているのやら、ちよつとも眼に映らないし耳にも入らない。全身これ、トイレに集中する。

二分程で、可愛い子ちゃんは出てきたが、別に不審そうな顔はしていない。なに食わぬ顔付きで、

「どれ、お父さんも……」

間髪を入れず、選手交替。そくそくと飛び込んで、例の、特製の覆いを静かにはずす。ぐつと手中に応える重さ。お目当ての可愛い子ちゃんのものが、たつぷりと袋の中に溜っているらしい。ゆっくり、袋を持ち上げる。黄金色の暖かい神酒が、袋の中で、ほのぼのと湯気をあげてゆれている。

咽喉を鳴らす。塩味が多く、どっちかと言

うと匂いも強い、おせんべの香りがした。でも最高である。まだだいぶ残っている。よっぽど我慢していたとみえる。私にとっては最高のプレゼント。それも、育ち盛りの可愛い子ちゃんのもの。まさに忘れ難き快よい陶醉の一瞬である。

(三) 大柄は、 やっぱし駄目ね

久々に、川崎の「キャロル」へ顔を見せる。彼女のことを書いた奇クを持参した。見せてびっくりさせるつもりだった。ところが相憎、彼女はお休みである。こりやまた残念だ。シャボン玉ホリデーじゃないが、知らない、知らない、知らないと身体を横にゆすりたところである。

でも、折角来たんだからと、なるべく可愛い感じのちっこいトルコ娘を、って支配人に注文をつける。ところが、である。どう間違ったものか、入ってきたトルコ娘の身体の大きいこと。凄いボリュームでは切れんばかりの肉体美だ。胸なんかボイーン。ヒップのそこなんかプリーン。まさに、圧倒されん許りのたくましさ。本当におったまげ。しかしよく見ると仲々の美人である。眼に

張りがあって、それに澄んでいる。おまけに身体が大柄な割には口がすごく小さく、愛くるしい、と言って私好みのタイプではない。仕方がねえ、今夜はノーマルでいくべえ。そう決めて、早々に浴槽に飛び込む。だがこのトルコ嬢、仲々に敏感である。

「なにさ、さっきからへんな顔をしてー。お客さん、勿論初めてじゃないでしょ。誰れかさん御指名でいらしたの」

「うん」

「だあれ？」

「柴田って子だ。いつも、あの子専門」

「あら、そうだったの。相憎だったわね。あらっ、あんた。じゃ、いつも変なことを要求するっていう人じゃあない？」

「ほうー、よく知ってるな」

「やっぱし。あたし聞いちゃった、ふふ。オシッコなんか欲しがるんですって？」

「うん。だけど、誰のでもいいってわけじゃない、あの子だけだ」

「私のお客にも変なことを頼む人いるけど、でも、オシッコは飲まないわー。でもあんたよく病気になるいわね」

「身体の出来が違う。おいおい、それより早く揉んで呉れ」

「はいはい」

大柄だから力もある。しかし、よく壺を心得ていて、実に揉みほぐし方はうまい。決して手抜きはしていない。

私は、今まで、余りこうした大柄な女には乗ってもらったことがない。なにとても経験と考え、仰向けにされた時云い出した。

「えッ、どこへ？」

「お腹の上に馬乗りに跨がって呉れりゃいいんだ」

「重いわよー」

それ位のサービスなればと、やおらどっこいしょと跨がる。ウーン、なるほど重い。腹全体が圧迫されてまことに苦しい。快感どころの騒ぎじゃない。

「重いでしょ。あたし五十七キロあんのよ。」

うふふ、ねえ、もったいいサービスしてあげようか」

「どんなサービスだ？」

「私の彼氏の大好き物。顔乗りよ。よくって」大柄なくせに、動作は機敏である。あっと言う間に顔の上に重点が移った。顔全体が、その偉大なヒップの下敷きにされて、息がつけぬ程苦しい。すごい重さである。あっぱとつぶと言いたところだが、そのあっぱと言

う言葉も出ない程苦しい。やっとこき、彼女が腰をわずかにずらした隙に息を大きく吸い込む。

「どう？私だってすばらしいこと知ってんでしょ。捨てたもんでもないって見直したんだったら、今度から指名してね」

彼女はのぞきこむようにして自慢した。

「テヤンデイー！こんなのがサービステえもんなら、漬物の重しはナンバーワンだ。と云ってやろうと思ったが、腹をたててドスンとこられちゃかなわない。まだ命は惜しい。とにかく危険物は除かねばならない。」

「もういい。君はいったい、何を食ってんだい。重くって苦しくて、てんでお話にならねえ。おりて呉れ」

「そうかなー。うちの彼氏、その苦しいのがいって言うてるけど、やっぱし、あの子じやないと駄目？」

「まあね。好むタイプと、好まないタイプがある」

「あら、じゃあたしは好まれない方？」

「そう言うわけじゃないが、その時のムードによるんだ。今夜は気分が乗らない」

「へえー、へんな人」

服を着ながら、千円札を一枚握らせる。そ

うしたら目を丸くした。

「あら、失礼ね。二枚頂戴よ。こんなにサービスしたんだから」

「けっ、冗談言っちゃいけない。そんなでっけえ尻で鼻を潰されて、苦しい思いをして二枚も出せるかい」

「あきれた！でも、柴ちゃんにはもっとサービス料出してんでしょ」

「そりゃそうだ。だが君とあのコじゃ、テンデサービスが違う。あのは、サービスにもランクがあるんだ、ランクが」

「あら、なにさ、そのランクって？」

「つまりな、細かく言うと、その、サービスされる側の算定基準だ」

「算定基準？　どう言うこと？　教えてよ」

「分かんねえのかな。つまり、かんとんに説明するとな、まず、ワンコースてえのが、君のおとくいさんの好きだという馬乗りに顔乗りコース。このサービ料が千円だ」

「へえー」

「次が、ツーコース。これは、ワンコースのサービスに加えて足指舐めが入る。これが二千円だ」

「おや、まあー」

「その上が陶醉コースと言って、馬乗り、顔

乗り、足指舐め、それと神酒拝受。これがセットで三千円だ」

「あらあら」

「最高はフルコースってえ奴だ」

「なにさ、そのフルハウスって？」

「馬鹿！フルハウスはトランプのポーカーだ。俺の言うのは、フルコース。つまり馬乗りから始まって、鼻汁舐めから、小の方ばかりか大きい物まで。このコースは、マゾヒストにとっては最高のプレイで、甘美の極地って奴だな。このランクだと大体一万円だ」

「へえ、ぎくり」

「どうだ、わかったかい。ほんじゃま、いっちよう、フルコースでいくか？」って凄んでやったら「キヤーツ」とけたたましい悲鳴を残して逃げちゃった。

かのトルコ嬢、意外と純情であつたが、やっぱり大柄はいけません。美人ではあつたけれど、別に神酒を欲しいなんて慾望は起こらなかった。

どう言うわけなのだろう。私のもつ奇癖、性向は、同じマゾヒストの中でも、一種独特の部類に、属する方なのかも知れない。この辺の点について同好者には是非御意見を伺いたいものである。



浄瑠璃と切腹の美学

中 康 弘 通

東圃藤岡作太郎先生の国文学全史によれば希望と現実の背馳は、平安朝では出家、江戸時代では切腹、情死となって現われる、という意味のことが記されている。

室町時代から江戸時代へと発展して行った浄瑠璃のある一面は、たしかに流血の芸術として、殺し場と腹切り場が、多大の意味を持つように構成されている、と云ってよい。

浄瑠璃が主として描き出そうとする世界は義理と人情とが時に交錯し時に平行して、闇漆の虚空に燦爛たる火光を示す世界である。

それは、いずれは亡びの世界であるにしても、亡びのゆえの美しさを現わさずにはおか

ぬ幻想世界にも通じるものがある。そこに、やむを得ぬ現象として、時に華麗があり時に陰惨があり、悲愁あり歓楽あり、誇張きわまっては頹廢となり残酷ともなるのであろう。

しかしそれらの誇張は、詞章の演繹的解釈がもたらすもので、演技としての舞台効果の要求が、かなり高度に発言権を持っているからでもあるか。

詞章として見た浄瑠璃の、腹切り場の表現美は、あくまで哀婉、悲愁、愴美の線を貫ぬこうとしているもののようである。

浄瑠璃の詞章は、源を物語軍記合戦記の類に発し、草双紙と袂を分った幸若舞曲の節調

を加味して、古浄瑠璃から近世浄瑠璃に大成して行くものであったが、では切腹という、凄絶にして惨烈とも云える行為の描写が、軍記ものではどういう表現になっているかを見よう。

室町時代の作と云われる太平記では例えば唯今自害する有様見置きて、汝等が武運忽ちに尽きて、腹を切らんずる時の手本にせよと云ふままに、鎧を脱いで櫓より下へ投落し、錦の鎧直垂の袴ばかりに、練貫の二小袖を押膚脱いで、白く清げなる膚に刀をつき立て、左の脇より右のそば腹まで一文字に搔切って、腸掴んで嚙

の板に投げつけ、大刀を口にくはへて、うつぶしになってぞ伏したりける。この節調と文飾が更に詠嘆を加えて記述されたものに、次のような備中兵乱記の例がある。

畳ノ上ニ座シ。向レ西合レ手。南無西方極楽教主ノ如来。為レ父切ル腹ナレハ。如来モ済度シ給ヘシ。唯今先父源清公ト一ツ蓮台ニ迎ヘ給ヘト高声ニ念仏三返唱ヘ。大脇差中巻シテ。左ノ脇ニ撞立テ。右リノ脇ニ引廻。柄モ拳モ碎ケヨト。真直中ニ押込。十文字ニ切レハ。荒木右京進ト云古老ノ者立寄り頸打落シ。其身モ髻切テ死骸ニ添タリ。実親甘ノ春ノ花初春ノ頃ナレハ。蒼ナカラノ落花コソ。実ニ哀ニソ覚ヘケル。

こうした節調の流麗さを、幸若舞曲では更に押し進めている。まず「かまた」より、

朝長聞しめし御供申たくはさふらへどもいた手うすでに七かしよの手おいごたひやすからねば御供申がたし同さらば平家の者どもにかきくびなんどにせられてはかばねのうへの恥辱たるべし唯々腹を切なんと御返事を申させ給ひやがて鎌田を召れいかに正清弓箭にたづさはりききう

の家といひながらじがいをいまだしらぬなりいかやうにするものぞくはしく申せ鎌田承りさん候それじがいと申は十方じやうどとは申せども先最後の時は西にむかつて手をあわせかうしやうに念仏申腰の刀をするりとぬき弓手の脇にがはとたてめてへきりりと引まわし心もとにさしたてて袴の着きはへをしおろし臍をつかんでくり出しずんずんに切てすてたるをきよき自がいと申なり

「きよしげ」も例外ではない。

次郎がありさまをものによくよくたとふればまつふくかぜにかれ葉をちらし小鳥千ばに鷹一もとはなちあはせたごとくなり いまだときもうつさぬまにくつきやうのつはものを二十七騎きりふせ大勢に手をおふせ東西へはつとをつちらしがうなるものの自がいのやうを見ならへ源太といふままにたちの真中をつ取てはら十文字にかき切て三十八と申にはかたせ河にて討れたる彼駿河次郎きよしげをほめぬ人こそなかりけれ

叙上の引用文例は、切腹の行為をめぐる直接描写の詞章化であって、その背景をなすものは、云わば単純な合戦の勝敗にもとづく決

断のみであるが、浄瑠璃ともなれば、さまざまの物語の設定を伴い、次第に複雑な経緯を辿ることになる。

まず叙上の例文に関連して、合戦を主軸とする筋立てから例を採ると、近松の時代物では、島原の乱に取材し時代を鎌倉に移した異色作、「傾城島原蛙合戦」がある。是は、武辺一徹の葛西清重一族の、七草四郎討滅をめぐる梶原景時との葛藤を経とし、清重の娘琵琶の恋を緯として、端を、四郎を討ちもらした責めに清重が切腹して果てる悲劇に発し、やがて辛苦の末に琵琶が兄ともども仇を討つて恋を遂げるといふ、めでたい結末に終わっている。

問題の個所では、味方の攻め口争いから四郎を逸した申し開きに、男まさりの琵琶が本陣に参上する趣向も面白く、清重の切腹も必然性をもって描かれている。

「女なれども使は琵琶と言ふ清重が子」言ふ事いへサア聞かんと肱を張ったる男勝り、幕打上げて父の群司、ヤア構ふな姫「虫のやうなる下郎めと、諍ひ勝って何面目、武運尽きたる清重が、腹切る様を」君へ申せ梶原と、刀を抜けば景時これとは走り寄り、「一徹千万むざむざと

腹切つては、金の采配取上げられ、武士道長く廃って、葛西の家の破滅笑止々々、ここに一つの了簡かねがね申す此姫の事、右馬の允が先約を交改し、景時が仲人にて富樫の左衛門に配偶されよ、返礼には

金の采配、家に伝はる様に御前は某請取り申す、右馬の允が義理一つ欠けば、和殿が武門の家も立ち、頼まれし景時が身分も立つ「万一足立がこねるとも、上へ申して仕様は様々、景時に任せられよと呟く中より、ぐっと忿の頭の筋、はたと睨んで、やかましい景時「武士と武士との義理を違へ、娘が縁付きのお蔭を蒙り武門を立つる葛西でなし、御辺ななどが取合で、金銀の采配千本持ても蠅払に劣ったり、この采配は忝くも君より拝受」娘に譲ると言捨て、刀を肋にがばと縦横十文字、返す刀の切先を、口に啣へ真逆様、俯伏に成ってぞ死したりける

是は、娘の恋を踏みにじるか、己が命を延べるかの瀬戸ぎわで、名を惜しみ娘の恋を貫かせようとする清重の心情もよく表われているが、何んと云っても武辺一徹の武將らしい決断と、勇壮さが強調されている。

竹田出雲の「仮名手本忠臣蔵」となると、

いささか事情も異なり、筋立ては周知のことゆえ省略するが、まず塩谷判官高定の切腹を見ると、常服で出迎えた上使から、切腹の申しわたしを受けた高定は、莞爾として下に着込んだ覚悟の死装束を示すのである。

地力弥御意を承はり。兼て用意の腹切刀御前に直すれば。心静に肩衣取退座をくつろげ。詞コレコレ御検使。御見届下さるべしと。地三方引寄九寸五分押戴。詞力弥々々。ハア。由良助は。いまだ参上仕りませぬ。フウ。エエ存生に対面せで残念。ハテ残り多やな。是非に及ばぬ是迄と。地刀逆手に取直し。弓手に突立引廻す。御台二目と見もやらず口に称名目に涙。

顔世は終始高定の傍わらにあつたが、上使の立去るのを待って、

地御台はわつと声を上。扱も扱も武士の身の上程悲しい物の有べきか。今夫の御最期に云たい事は山々なれど。未練なと御上使のさげしみが恥しさに。今迄こらへて居たわいの。いとをしの有様やと。亡骸に抱付ッ前後も。わかず泣給ふ。

刃傷の由来が高師直の顔世への横恋慕とあれば、この愁嘆も道理で、こうした悲愁はな

お深まる。

忠臣蔵に今ひとつ、早野勘平の腹切りも、飽きも飽かれもせぬおかるとの仲が描かれていればこそ哀れは一とおまさるのである。

諸肌押ぬぎ脇指を。ぬくより早く腹にぐつと突立。詞アアいづれもの手前面目もなき仕合。拙者が望み叶はぬ時は切腹と兼ての覚悟。我舅を殺せし事亡君の御恥辱とあれば一通り申ひらん。兩人共に聞てたべ。

勘平は三段目、変事を聞くより早く腹切らんとする手を、おかるにとどめられ結句、あらぬ疑いをかけられて切羽詰り、腹に刀を突立て述懐なかばに、与市兵衛の疵口みれば、鉄砲ならぬ刀疵、むしろ勘平は舅の仇を討ったのであった。

母は涙にかきくれながらナフ勘平殿。此事を娘にしらし。せめて死目に逢してやりたい。詞イヤイヤ親のさいごは格別。勘平が死だ事必し下さるな。お主の為に売たる女房。此事聞てご奉公せば。お主に不忠するも同然。只其俚に指置かれよ。サア思ひ置事なしと。地刀の鋒咽にぐつと指貫きッかっぱとふして息絶たり

こうして竹田出雲の巧みは、覚悟定めた高定の、優美なまでに整った切腹の態度と、半ば狂せんばかりに詰め腹切る勘平の姿とを対比的に描き、背景に、顔世、おかるの二女を配して、調べ高く悲愁を奏するのである。

こうした、遂げ切れぬ恋を背景に持つ作品と同じ系列にあるのが、初代竹田出雲の「菅原伝授手習鑑」での桜丸切腹である。

忠心凝ってかえって主家の悲運を招いた桜丸は、父白大夫の賀の祝に、納戸に忍んで申訳の腹を切る。

桜丸殿どうぞいなア。何で死のぢや地腹切のぢや。よサハリ切ねばならぬ訳ならば。未練な根性さぎやしませぬ。

妻の八重にかき口説かれ、

人間の胤ならぬ竹の園の御所奉公。下々の下々たる牛飼舎人。勿体なくも身近く召れ。菅丞相の姫君とわりなき中の御文使。仕負せたが仇と成て讒者の舌に御身の浮名。終には謀叛と言立てられ。菅原の御家没落。是非もなき次第なれば。宮姫君の御安堵を見届。義心を顕す我生害。同けさ早々爰迄来て右の段々。生て居られぬ最期の願。聞届て切腹刀。親の手づから下されたわい女共。

桜丸は由来を述べたのち、

地下郎ながら恥を知り義の為に相果ると。

三方取て戴くにぞ。もうコレ今が別れかと。スエテ泣も泣れぬ夫の覚悟。(中略)

地念仏の声と諸共に襟押くつろげ九寸五分弓手の脇へ突立れば。八重が泣声打鉦も。

拍子乱れて。南無あみだ南無あみだ。

地右のあばらへ。ッ引廻し。調惺りながら御介錯。地ヲヲ介錯と後へ廻り撞木ふり上。南無阿弥陀仏と。打や此世の別れの念仏。九寸五分取直し喉のくさを刳切て。かっぱとふして息絶たり。地八重

が覚悟も此場をさらず夫の血刀取上る。ここにも八重の愁嘆が悲調を高め、桜丸の潔ぎよい散りぎわと相まって劇的效果を盛りあげていることは、何ん人も否めないところである。

こうした悲恋を、背景の切腹には、日本の「ロメオとジュリエット」と云われる「妹背山婦女庭訓」など幾つかの類例を留めている。

「和田合戦女舞鶴」「近江源氏先陣館」などに於ける、市若、小四郎など少年の切腹は、武士道という一種の強制がもたらす悲劇として、是また一つの系列を見せるが、最後に数少ない女性の切腹を描くものとして、「長町

女腹切」「源氏大草紙」を引用しておこう。

前者は先年来しばしば上演されるところ、刀の詮議に絡まる因縁ばなしで、浮世の義理に身が詰まり情死する男女を描く近松の世話ものには珍しく、是は愛人お花を救う金に詰まり、実の叔母の連れあいから預かった刀の中身をすり替えた半七の、叔母が一身に罪を引受けて腹を切り、めでたく若い二人を添わすという筋である。

半七の祖父は買求めた刀自慢から同僚を殺めて身は切腹。今は半七は刀屋の手代になり下がった身。そのあいだの辛苦を物語りながら叔母は、

脇差取って色するりと抜き。詞本のは信国是は下坂。作は替れど焼刃寸尺一対なれば。一家に祟るは同じ事は故に父様が。人を討って其の刀でまつ此の様に押肌脱ぎ。地ハル逆手にとつて左の脇ぐつと立てと云ふ詞。直に突きたて右へさつと引廻す。

男まさりな腹切り沙汰となるので、真相は京西石垣の遊女お花が、半七という男と情死に際し、武士の娘でもあったのか、みごと腹切って死んだのと、大坂長町で女の腹切りあったのを近松が按配したものという。

一方「源氏大草紙」は宝物紛失と謀叛との二つの趣向を鎌倉に移した、福内鬼外の作でははまた珍しく遊女喜瀬川に横恋慕の悪侍在柄の平太から、盗人呼ばわりされた二枚目の朝比奈三郎を救うため、喜瀬川が一旦は平太になびくと云いつつ、腹を切ってみせることによって真心を示す寸法となっている。

さて、是らの切腹描写の詞章がかし出す詞章の効果性は、示うまでもなく舞台の人形遣いの妙技に、俟つところ多いであろうが、ここに思い起すのは、徳島で発行されている「木偶」一号に先年記されていた、中西仁智雄氏のお言葉である。今日に見る人形浄瑠璃

衰退の一因が、物語の暗さにある、という意見はもっともなこと、物語の暗さの意味合いについて考えてみると、いわゆる残酷とか陰惨の持つ異様な美意識の追求というよりも、むしろ舞台で哀愁感によって高められた愴美感を味わうことによって、封建時代の観客は現実的に充足感を呼び起されていたのではあるまいか。

舞台の人物も観客もひとしく封建時代に生きる人間として、大なり小なりそれらに桎梏をめぐらされ、その中で生きて行く上に、人間性と背馳する義理のしがらみに身をせかれている。観客は、いずれ苦界と悟り切れぬ因子を、舞台に演ぜられる悲愁の劇的情景に、

現実より更に深く脱けがたい苦界を見ることによって、己が比較的充足感を味わっていたのではあるまいか。

そこに、あらゆる浄瑠璃は多少の例外はあっても、悲劇の連鎖が要求されたのではあるまいか。そのとき、観客の眼から流れる涙は現実には己が身を絞め木にかけられてこぼす血涙ではなくして、舞台という別世界に苦悩し悲哀する人物への同情の涙である。涙に味があるならば、前者は辛酸な涙であり後者は甘美な涙である。まこと、あわれ、幽玄、おかし、がそれぞれにわが文学を時代区分して代表するセンスであるとすれば、それらをつきまぜて義理人情で和えたのが、浄瑠璃の世界に描かれる、哀愁愴美の感覚と云ってよからう。

結末に至って好転する幾つかの作品に至っては、現実には悲哀する庶民の夢みた、現世の虹のかけ橋とも云えようか。今日、人形浄瑠璃が衰退したということは、何んと云っても現代は、それだけ封建の色が薄れて来たのであろうか。

なお引用文は岩波文庫、雄山閣文庫、春陽堂等の印行複製本による。

女性写真モデル募集

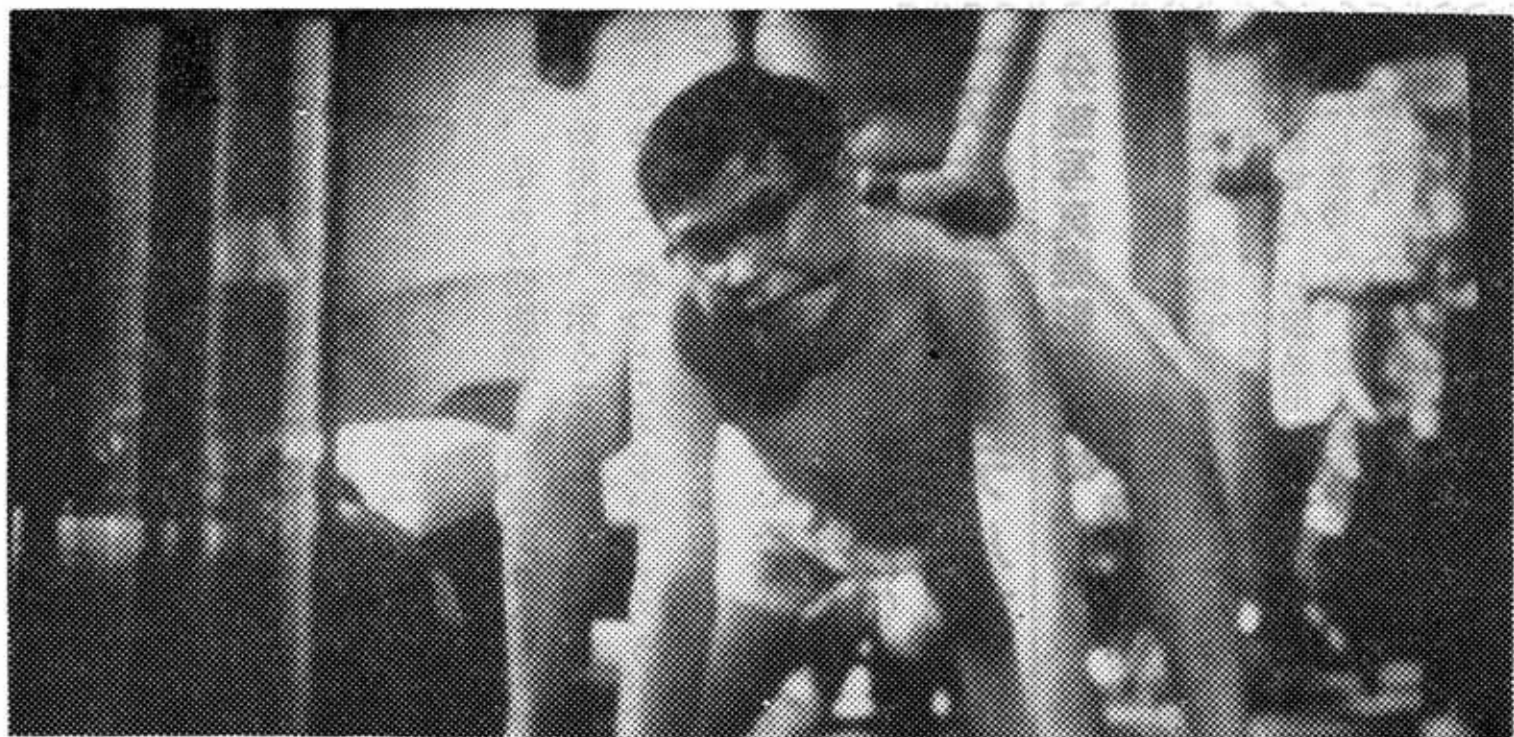
分譲写真撮影のため

奮て御応募下さい

○本誌では、代理部分譲品用の写真を撮影するため、女性モデルを募集しています。
○本誌愛読者の方でしたら、年令、遠近は問いません。分譲品用ですから誌上に発表いたしません。又、誌上発表可能でしたら尚結構です。又、助手介添え或はプレイのみ出演御希望の方は御照会下さい。
○出演又は参加御希望の方は、年令略歴記

載の上編集部宛お申込み下されば、報酬その他詳細につき、お返事いたします。
○応募されました方々の個人的な秘密は固く厳守いたしますから御安心下さい。尚お好みの傾向を附記下されば好都合です。
○本誌の内容充実のため、並に皆様の文献研究資料作成のため、奮って御応募御参加下さるよう、お待ちいたします。余暇を利用しての御参加も大いに歓迎いたします。
○特に妊婦資料の作成に御協力下さる婦人を求めています。撮影可能の方は、遠近に拘らず御一報下さるようお願いいたします。

△奇々編集部▽



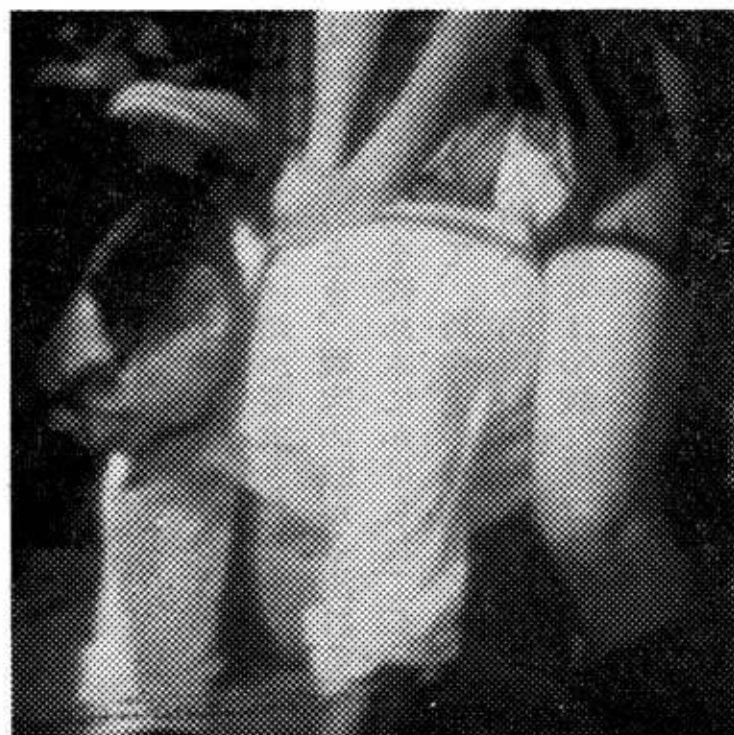
＝＜ 映画 ハント ＞＝

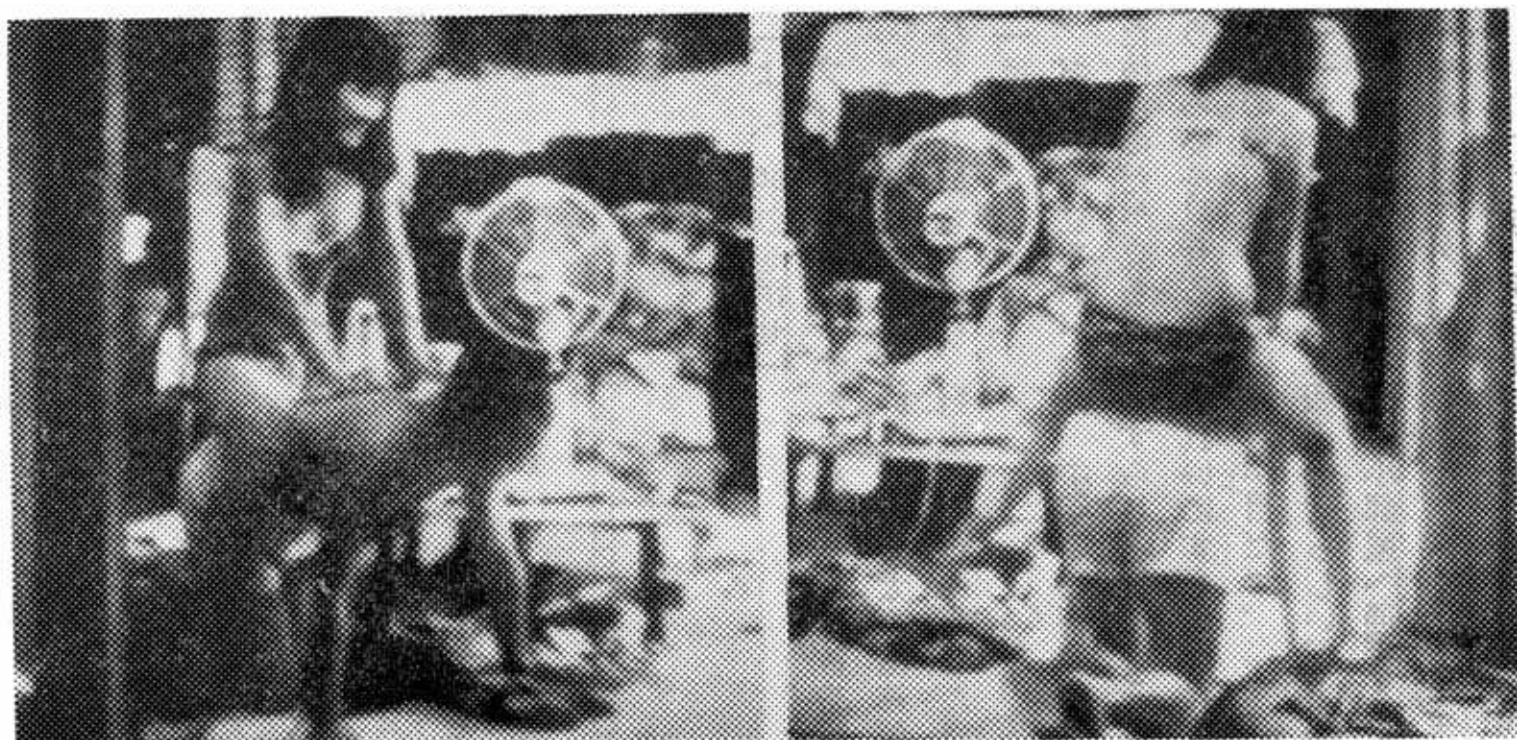
痴人の愛

＝ 久 穂 正 登 志 ＝

スクリーンに写ったSMシーンを、なんとかして残して置きたいという気持ちから、ピンク映画をカメラ・ハントしたという記事が、六月号に載っていましたが、私も昨年の夏、同様の気持ちから、三度映画化された名作「痴人の愛」をなんとかして映画紙に残しておきたいと思い、写真に撮ろうとしたことがありました。二度失敗し、三度目の正直で、ピンボケながらどうにか形に残すことが出来たのですが、山口広さんにならって、私の場合のデーターをお知らせしたいと思います。

◎使用カメラ アサヒペンタックスSP。





◎フィルム コダックトライエックス(X

XX) ASA四〇〇

◎シャッタースピード $\frac{1}{15}$ 秒

◎絞り F 1.4

◎撮影距離 約十米

◎カメラ支持方法 手持

以上の条件で撮影したのですが、結果は、ナオミが譲治に馬乗りになって動いている部分では二重どりや、ピンボケになる可能性が大きい、最後のシーンでナオミが譲治に服従を誓わせるところなどは、動きがほとんどない為か、かなり鮮明なものが撮れました。

このシーンは、私の目につく限り、どの雑誌にもないものです、私にとっては十分な価値のあるものになりました。苦勞して撮ったものだけに余計値打ちを感じます。

又、この「痴人の愛」以上に、女性の人間馬シーンを満喫させてくれたものに「女子大生の禁じられた花園」という映画がありました。これもなんとかして撮りたいと思っていましたが、残念ながらチャンスを失し、記録することが出来ませんでした。今後は準備をして行きたいと思いますので、面白い映画などの紹介や、予告をして戴くようお願いしたいものと思います。



縄につきまといわれる女

ぶるう・すたあ

花 影

叢

「よし、明りを消せ」

フィルムをセットするため映写機に首を突っこむようにかがんでいた飯田の太い猪首がむくっと持ちあがり、野太い声が命令した。

「はい」

おかみが立ちあがった。中年の脂肪ののった体なのだが立ち上るとすらりとしている。うしろ姿を見せると、きれいにすきあげたうなじの艶の光った白い張りが目だつ。

「一の字」のおかみは飯田の妾らしい、と映子は思った。おかみは控の小部屋へ通ずるふすまをあけて外へすべり出た。スイッチの音が小さくした。明りが消えた。がすぐスクリ

ーンが光を浮かべ、薄闇に変わった。

薄闇のなかで映子の胸はキューと痛くしめあげられた。心臓が今にも飛びだしそうに、ゴトゴト音高く鳴った。音を飯田に聞かれまいとするのだが、息ぐるしくなり、口をあけて懸命に胸をしずめて低く喘いだ。

スクリーンはべったりと赤い背景に白地のタイトルが浮いた。

義兄妹（あにいもうと）

と読める。すぐ情景がはじまった。映写機のモーターの音が低くうなりつつける。

家のなかの廊下である。便所の戸であろう板戸があいて女学生服の女が出てくる。うつ

むいて廊下を歩み進んでくる。顔はまだよく見えない。夜なのであろう。廊下は黄色い薄明りだ。私、ではないかもしれない。映子の記憶にその廊下がなかった。

階段にかかる、足をあげかけて、つとまろ。おさげをしたうしろ姿は学生服のあう年ごろの娘に見える。映子も女学生服で何本もとったが、服がすでにはちきれそうに胸や腰がふくらんでいた、ただ服を着ているだけのことで少女にはとても見えないな、と自分では感じていた。

スクリーンの学生服はまだ少女に見える。少し、映子の胸がしずまった。

階段に片足をかけたまま、しばらく動きがとまった。ふいに胸を抱いた。しゃがみこんだ。カットがかわった。

顔を手でおおっている。手の指がふるえている。手がはずれた。眼が光っている。赤くぬめった唇を半開きにして喘いでいる。クロ―ズアップ。

ああ！ 私だ。わたし、だ……

映子は思わず手で顔をおおいかけた。しかし、手は胸のところにとまった。駄目。平静でなくちゃ。あれは私なんかじゃない。

キューンとせきあげる胸を力をこめておさえて映子は耐えた。

あれから三年になる。

「どうや、きれいなもんやろ。男どもがこれ見てどういう気持ちになるかお前に分るか、エエ。お前はありがたい弁天さんや。衆生凡愚の地獄の業火をしずめ、すくってくださる菩薩さん、やで。こないいい方、古くそうておかしいうんなら、スターや。お前はあこがれのスターや。悪い事なんぞあらへんで、大衆をすくったんや。できんことや」

演出もカメラもひとりやる花山のおっちゃん、とったばかりのフィルムのラッシュ

を見せながら映子にいった。

すくっている、善根をほどこしているのだといわれても、そんな気になれない。ただ画面にあらわれる白い肥えた肢態のうごめくさまは、目をおおいたい醜悪なものとも見えるし、また奇妙に美しくもあった。その時の痺れが伝ってきて、いつのまにか口を開けて喘いでいたのだ。よだれがツウと喉を這ってたれてきて襟に入りこみ冷くひやっとして、映子はわれにかえるのだった。

それから相手役のチンピラやくざだった幸次が駄目になってしまい、栄養やら薬やら手当しても役だたず、他の相手役をさがしてもやる気もせず、

「潮時やな」関西人でもないくせに妙なアクセントの関西弁を使う花山のおっちゃんとも別れ、幸次と二人でフィルムの回転音から逃げだすように旅に出た。

「こういう物はな、寿命が短いや。まあ三年もすれば雨が降るし、五年もてば土砂降りであれの顔もわからんくらいのもんや。お前もそのつもりで、まあ初めからなかったもんと思うのやな。それで済む、まあいってみればはかないもんや」

雨が降るといったフィルムに傷もかすれない。新品に見える。三年の歳月が嘘のようだ。しかし、スクリーンの少女はすでに現在の映子ではない。それは映子にもよくわかった。はかないものはフィルムではなく、映子の女の生命だった。そこに写っているのはやはり私ではない、と映子は納得しようとして胸のとどろきを押さえた。

画面には別の情況がうつっていた。

部屋の中央に敷かれた赤い絨氈の上に女が裸身をまるめて縛られて転がされていた。側にドテラ姿の男が立ち、皮のバンドらしいものをふるって女の肌をうつ。蛇のはねくるように鞭が飛び、ぐったりとして見える女のからだにまといつく。女が背をキューンと張ってふるえる。

女は映子ではない。花山といっしょに住んでいた中年の女だ。からだの線もくずれかけている。白いむくむくした肉が、くびれのところでも黒く沈み、かすかなうごめきで線が生きものめいて這って動く。

ふすまの隙間から女学生服が覗いている設定だ。男はうしろ姿に見える。やがて鞭をほうりだした男は、女の傍らにかがみこんで、腰から尻へかけてついている赤い鞭あとをな

ぞっていく。女は痛がって、ころがって逃げる。手が追う。

女学生服が身をひるがえす。顔をおおって階段を駆け登っていく。

部屋では男が動きをとめて天井を見あげるポーズ。男は幸次である。首筋にあらわれた筋肉の動きが精悍だった。幸治は、やがてニヤッと笑うと、女のうしろから襲いかかるように近づく。

女の半眼を開いた、汗まみれの顔。

映子は目まいがして、目をつむった。耳がじんじん鳴る。頭だけに血がのぼって火照り首から下は自分のからだではなく、陶器の置物かのように冷く固く、痺れていた。

闇になると、モーター音が追いついてるようにせまってくる。低く鈍く、執拗に。

花山の女を、妻といってよいか、映子にはわからなかった。全体に鈍重で、肉のかたまりといった感じがある。顔の目鼻立ちが、ふくらんだ輪郭のなかでポツンポツンと申しわけにくっつけたように小さく、意外にあどけない童女の印象がある。しかし、その顔があどけないばかりではないことも映子はたちまち知らされた。

幸次が相手役として花山のスタジオに出入するようになるまで同性のものを二、三本とられたのだが、花山の好みとして縛りや鞭うちがやはり主なストーリーを占める。半裸や全裸の肌にひしひしと縄をかけられ、鞭や棒の小道具で責められる役は、もっぱら映子だった。縄をかけるのは花山自身の場合が多かった。フィルムのなかで縛りの過程が必要に分だけ花山の女が手につけた。花山にくらべるといかにも無器用で、不必要な痛みやすり傷を作る。それに女の手でされるのは、締りが悪かった。縛り終ったあととも力を入れているのに動くときすぐぐずぐずになってしまい、かえって妙なところへ力点がかかり、肩や腰があとで、こったように鈍く痛む。縛り、と一口にいても、色々な縄のかけ方があるものだ。かけるごとに形を変えても、一年では尽きないのではないだろうか、などと感心して花山の縛りに身をまかせていると、それから責められることが期待となって甘酸っぱく喉をのぼってくる。

調子にのると、相手が女の手でもその不快感が消えた。映子は演技としてではなく、喘ぎもだえ、転々とうごめき廻るのだった。

ふいに感情の波がひく時がある。ぼんやり

痛覚に身をまかせながら、スタジオの高い窓からさしてくる陽光にうかんだ埃りなどを見ていると、現在の事が馬鹿げたあやつり人形の芝居のように感じられてくる。痛みも薄もやのミルク色のなかに溶けてしまったように遠のく。それからまたふいに、責め手の童顔が大写しに近づいてくる。鼻の頭に汗をかいている。鼻が小さく赤らんで、汗の粒が異様に大きい。わきに眼がある。細い小さな、肉のひだにうもれかかった眼だ。そのあるかなしかの眼が映子を恐怖させる。

「うう」音をたてさせないためか口にはいつも詰めものがしてある。叫びがぐぐもって、からだの奥へ、逆にもどってくる。

子供のころ、こんな悪夢をよく見たことがあった。逃げようと足をばたつかせるのだが重くて動かない。全身がしびれたようになつて、冷汗がじわっと湧く。眼が覚める。

今は眼が覚めない。アフリカあたりのジャングルで真正面から象に襲われたら、あんな具合だろう。小さな眼が鈍く光りながらせまってくる。白い肉がもりあがり、視角いっぱいにそそりたつ、太い円柱のような、肢のしかかってくる。ギャッと叫んだが、やはり「うう、う」としかならない。

幸次がメンバーになってからは女性だけの場面はなくなった。三人組んでのを二、三本とったがやがて映子、幸次だけの写真になった。後になっても映子には象に踏みつぶされる恐怖は忘れがたかった。幸次や花山にはどんな事をされても恐怖はおこらなかった。縄が首に喰いこんで気を失わせられたこともあるが、息苦しく顔が脹れて破裂しそうな感覚を知っただけで恐怖はなかった。

花山から話を聞いて、映子はそれまで住みこみで勤めていた喫茶店をやめて、わずかな手廻り品をもって花山の家へ住みかえた。スタジオに二段ベッドを置き、ほぼ三カ月、そこに住んだわけだ。

その間、三十本ほどのフィルムを花山は作った。花山は商売そっちのけで、かかり切りだった。幸次は、何故か住みこみを、きらって夜はそれまで住んでいたベッド・ハウスへ帰っていたのだが、後半の一カ月は幸次もスタジオのベッドで寝るようになった。男と女が二段ベッドの上下にいても、ひるまの疲れで丸太ン棒のようにころがってひとりの眠りをむさぼるだけだった。

映子の方は、それでもからだはきついなり

にひと月もすると馴れた。花山が現像にかかり切りになって暇な時などは、映画などを見にいった。幸次をさそっても表へ出ようというので、街をぶらぶらするのも常にひとりだった。

幸次の衰弱がひどくなった。後の一カ月などは撮影以外の時は、ベッドに寝たきりだった。寝ていてもひたいにじわっと汗などをかいている。花山も心配して、精をつける食べ物や飲みものを用意した。まむしの黒焼きや酒、スッポン、やつ目うなぎ。九竜虫は気味悪がって飲みこめなかった。

十五分のフィルムでも、撮影時間は三時間から六時間もかかる。時間に差があるのは花山の性格として凝り性だからだ。支度がそれ以上かかる事は、もちろんだ。一本、三日、一日十時間がペースだった。少なくともその間三時間は勢よくポーズしなければ花山の言葉でいえば「画」にならない。

はじめ花山は、幸次にひどく惚れこんではくほくしていた。花山のはめ言葉を、聞いても映子はそうかなと思ったただだったが、幸次がほめられるのは何か首の横がむずむずして、気持ちよかった。その時は、すでに映子も幸次に惚れていたのかも知れない。

映子は、花山にしをきかれて二十一とこたえたが、実際は十九才の終り近く、処女ではなかったが男の体をまともに見た事などはなかった。幸次がどれほどのものか比較すべきものを持たない。

花山が、女を妙なふうにする趣味をもっているのも、花山自身のコンプレックスによるものだ、などと映子は考えてみるのだが、それでわかったようなつもりになっていても、よく考えるとひとつもわかってなどはいないのだった。

立っていた床がさかさになるほどのショックをはじめ受けた席にいたのも花山だけではない。花山は一見何か変りもののおっさんという感じで、そんな事があっても後で考えれば「がら」だと思えるが、花山以外のメンバーは、等しく中年男で、という事だけで、とりたてて目だったところのある人たちではなかった。花山でさえ、そうひねくれたといったおもむきはなく、服装、風采にかまわないのが目につくほか、いたって気の弱そうなシヨボシヨボした目つきが、ずんぐりした肩とあいまって好人物の印象が強かった。

花山に写真のモデルになってくれ、と頼まれた時も、映子は警戒心をいだかなかったの

は花山の印象が悪いものではなかったからである。喫茶店のホステスというのは退屈な仕事だった。店の中央に水槽があり、金魚や熱帯魚が飼われていたが、ひらひら鮮やかな色彩をふりまいて光りをきらめかせ反転する小さな魚たちを見ていると、自分もこの金魚と同じだと思わずにはいられなくなる。若い男の客のなかには無遠慮に声をかけてきて、外へ誘いだそうとする者もいたが、たいていはこちらの都合も考えない自分本位の約束をとりつけたがるので、相手をする気にもならなかったし、声もかけぬ男たちは、むすっと黙りこくって時々変な目つきでこちらを睨んでいたりして、薄気味が悪いだけだ。男たちに囲まれて何かとからかわれたり、わざとするのであろうか、このスケといった調子で乱暴にあつかわれるのは怖気が走った。それで半年ばかりのホステス稼業で、男ひとり親しくなるものもなかった。花山は、いわば男たちのなかで例外だった。

「休みの日にでも、わたしの店へ寄ってみてくれないかな。店は、知ってるね」

「ええ」

その時は生返事でこたえた。が、もう休みの日に花山のスタジオを訪れる予定は、ここ

ろにきまっていた。花山のさそい方が、ひとつも強引でない事がまず気にいった。

やはり退屈な日常に変化がほしかった。仕事の時間はひどく長い。その間、お客さんがひとりでもいれば椅子へ腰かけることも許されなかった。かかとの高いサンダル靴で一日中立ち尽すのは、それだけで重労働なのである。はじめの一週間は足が痛くてどうしようもなかった。かかとに耐えがたい痒みが固着し、ふくらはぎが棒のように張った。夜、横になってからも、痺れのあとに血が戻っていくように、いつまでも変な痒さがつづいた。

十日ほどで立っていることには馴れたが、足が棒になることに変りはない。長く続けていると、かかとからくるぶしにかけてそがれたようにひきつまり、ふくらはぎが肉づいて見た目の恰好はよくなるそうだが、こんな思いまでして恰好をよくしたいとはとても思えないのだ。姿がよくなっても、それはやはり奇型であろう。支那には纏足という習慣があるが、腰が男の好むように湾曲するということだ。ハイヒールというのも、一種の纏足だろう。足もとがあぶなかしいので、腰でちょうどしをとりながらリズムカルに歩かなければならない。おそい、ゆらゆらしたりリズムだ。

それが男たちの目をひく。金魚のように眺められる。眺められてうれしいのは女だが、ただ眺められてうれしいはずもない。バランスがくずれ変に腰を振り、男にからかわれたりすると、情けなくて、コーヒの盆でも手に持っていればそこへぶちまけてしまいたいほどなのに、無神経な男たちは、それで得意気にげらげら笑ったりする。だいたい、この辺りはやはり田舎町なのだ、と思う。

首都圏とかいって駅前前の街並などはビルも建ち洒落れこんでいるが、喋らせてみれば、だんべえ言葉で「ようよう、そうだんべえ」とくる。

話にもなりはしない。土地ブームでやたらに暇と金のできた若者たちがオートバイやスポーツカーをふっとばしているが、中味は昔ながらのドン百姓なのだ。働くことを忘れただけになお始末に悪い。

と口のなかでののしつても、やはり自分は金魚で、やり切れなく退屈なのだった。

“D・P・E”と、かんばんのさがっている店先を、映子は覗いてみた。店先に、花山を見かけなければ、それで足を返そう、という心づもりだったが、花山がいた。薄茶色のおさらになんぐりと見える背を丸めて、棚の

下あたりをこそそ手さぐって、こちらに気付くまでに大分時間がかかった。

「ヌードでな、ちょっと変ったポーズのもん撮らしてもらおう、思ってたね。どや」

スタジオのソファに腰かけている前へ、紅茶を運んできて置き、自分の腰かけを引き寄せて、うしろすわりに膝をひろげて坐り、花山はそんな事をいった。

しばらく考えてから「いいわ」と映子はこたえた。

そんなにあっさりと承知するつもりではなかったが、こたえる言葉がほかになかった。

ヌードといわれてもそれほどショックではなかった。写真をとる、といってもファッション・モデルではないのだから、衣裳をまわってツンと気どって見せてもしかたがないだろう。とすれば、おめあては裸体なのだ、くらいに見当がついた。考えるふりをしたが承知するのに考えたわけではない。

一時間ほど、あれこれとポーズの変ったヌードを撮られた。それで終りだ、といわれて何だかひどくあっけない気がした。最後の衣裳までとってスタジオのライトを浴びた当初は、ふいに足もとの床が消えて、宙に墜落していく感じで、ただ動作としては、そこにな

ずくまっただけのことだったが、考えてみると特別な羞かしさはなかったようだ。裸になるのは羞かしいと、なる前は思っていたが、そう思いこんでいただけのことだった。

うずくまっっているとフラッシュの青白い光が目射て走った。ひどく寒気がして、鳥肌が立ち、足がふるえた。春の終り頃の、暖い陽のさしていた日で、北むきのスタジオに陽はさしこまなかったが、裸になってもそう肌寒いという気候ではなかったはずだ。やはり緊張していたのだろう。

ポーズを変えるために、花山の手が肌にさわった。さわられたところがムツと脹れたように、あと熱くなってきた。小さな椅子の上にとつていないとぐらついて危なっかしい。尻がうしろへ突きでた妙な恰好になった。映子にはぶざまとしか思えない恰好だが、花山は熱心に周囲をまわり位置をきめて、何回もフラッシュを光らせた。それから腰を高くあげて四ツ這いにされた。変ったポーズといえば、そのくらいであった。

スタジオの奥の居間で、紅茶とケーキをこ馳走になった。その時、初めて紅茶を運んできた花山の女と会ったのだ。細君だと思い、

挨拶しようと思う間もなく、彼女は紅茶をおいただけでひっこんでしまった。童顔の顔は鈍重で小さな目は映子の存在を目にしたとも受けとれない。妙な態度が気になった。スタジオでお茶を貰った時は花山自身が運んできた。その事も妙な気がした。

写真を見せられた。「ただのヌードじゃなく、こういうのをとりたいのや」

そんな変った写真を見るのははじめてだった。ヌードもあるし、衣裳をつけたままの姿もあったが、女たちは例外なく縄で体の自由を奪われていた。首をのけぞらせて苦しそうな表情を顔に刻んでいるものもある。

帰りがけに花山は、映子の手に千円札を押しつけた。

「考えといてや」

縄で縛られるということが、どういう感じで、何を意味するのか映子にはよくわからなかったが、花山がそれに執心している熱っぽさが伝わってきて、写真で見たいろいろなポーズをとった自分の姿を想像していると、胸が急に苦しくなる。不安でもあった。貞操、という事も考えた。例えヌードになっても、あの花山ならいざとなれば突きとばしてでも

逃げることはできそうな気がするが縄でしばられてしまえば抵抗は不可能だろう。しかしそんな事が不安なのだろうか？

映子は処女ではなかった。といって、男を知っている、というほどずれてはいない。

かつて映子にも恋人と呼べた男がふたりいたが、二人ともに云われるまま、簡単にからだを与えてしまった。兄の友達の自衛隊員には、あこがれのような莫然とした恋情を抱いていた。だが、体を与えたら心は逆にさめてしまった。中学を卒えて、食品工場の工員として寮の生活をした。事務所の庶務係をしていた男が二人目の男である。

富士山麓にある小都市が、映子の世界だった。米軍の広大な演習場があり、基地があった街のメインストリートは、小さな街には似合わないケバケバしい、装いの歓楽街があった。西部劇に出てくるような埃っぽい町だった。しかし、そこが故郷を代表したかというところではない。バーやキャバレーにいた多くの女たちはよそ者で、地もとの人間との交渉はなかった。ケバケバしい色彩の影の、動きのない灰色の、屋根屋根に町の実体はあった。結婚といえば親どうしの話しが優先する古くさがさが当り前だった。映子は、男に結婚

というイメージで結びつくことを考えたことは幸か不幸かなかった。自分自身で結婚の相手をさがすというのは、戦後の女の新しい生き方である。それはそうだが、結婚ということのこと自体は、あまりにも古めかしい。

映子が二人の恋人と、いずれも簡単に別れてしまったのも、結婚という事を真剣に考えなかったからかもしれない。結婚はそうして貞操と結びついている。

映子には、家を出たいという欲求がすべてに優先していた。映子の母は、幼いうちに死に、家が戦後偶然にも基地に対する街に近接したことから、表だけをバーに造り替え貸すようになって、父はその家賃でのらくら暮すようになった。何代目かのバーのマダムが、母となって家に住まうようになった。米軍と自衛隊とかわって、バーが飲み屋になった。家が経済的に困っていたのではないので、高校へ進もうと思えば進めた。女子でも高校ぐらいはいておくのが、常識になりつつあるところで、就職するのはよほどの貧しい家の子にきまっていたが、勉強は好きではなかった。それで、それを口実にして、映子は就職を選んだ。

寮へ入れることに魅かれたのが、その工場

へ入った第一の理由だった。しかし、そのことは父にも、むろん義母にもいわなかった。高校を出ると自衛隊に応募してすぐ北海道へ行った兄ならば通じあえたかもしれないが、兄が一度家へ帰ってきたのは一年もあとのことだった。

ひとりで職をきめ、荷物をまとめてさっさと家を出た。異議をたてる者もない。寮生活を二年余りした。男は女工仲間に人気のあつる優型の二枚目型の男だった。自分の容貌を意識していた。やたらに髪型を大切に癖があり、もみあげを長くしていた。映子はそれほど魅かれなかった。いや味な男だと避けていたくらいだった。社員旅行で伊豆へ行き女どうし少し乱れて酒を飲んだ。男は世話役でついてきていた。あやまち、という言葉がそのままではまるようだった。その事は、あやまちではない。相手が彼であったという事がそうだった。

周囲の嫉視で寮にいづらなくなった。嫉妬を受けるそのことは内心快感もあったが、わずらわしくもある。それでも、しばらくは恋人ごっこのように人目を忍んだりをして、楽しんだ。男が冷くなった。もともと映子が望んだ接近でもなし、馬鹿にしているという思い

が立ち、意地のようにこちらからも会わなくなり、やがて工場もやめて家へ戻った。

家で働きもせずにいるのはいづらい。それで洋裁を習うという口実で上京した。口実だけでもなくてあった。中学の同級生の姉が新宿で洋装店をやっている、という事だった。見習いのお針子になったが、住みこみで女中のように台所仕事までさせられるし、先輩の女の子達の意地が悪いのには困った。半年辛抱したが、ついに喧嘩してしまい、新聞広告で喫茶店の女給にくらがえした。

平凡な下らない退屈な人生だ、と思う。十九才の娘がいうにしては生意気かもしれないが、今までのところはそうだった。とりたてた才能が何ひとつあるでもない、若いということだけで磨けば光るといった麗質もあるとは思えない、この自分に未来が輝かしい色で待ちうけているというのは幻想に過ぎない。いくら考えても結論はそうだ。とすれば現在の延長線を見て、下らないという事を生意気などとは、とてもいえないのではないだろうか。しかし、その下らない日常が自分には唯一のものであるゆえに、映子にはたまらなく淋しく、その未来は不安一色だった。

せめて、もう一度東京へ戻って、アパート

の小さな部屋でもよい、ひとりで暮せるところを得、それを維持できる技術なりを身につけたい、と思う。それも今では、贅沢な事なのはわかっていて。しかし、なぜそのくらいの事が贅沢なのか？　と思うと腹が立つ。家に帰って義母に頭を下げて頼めば、そのくらいのお膳立てはしてくれるに違いない。しかし、それはできない。

花山は、話しに乗れば、二、三時間の撮影で五千円あげよう、といった。その後も、週に一度くらいつづけて、いきたい。

月に四度として二万円。三カ月で六万、喫茶店の給料をきっちりためれば、十万円は残せるかも知れない、と映子は計算した。それだけあれば、東京の生活が発給できる。当座はあわてずに職も選べるだろう。

そううまくはいきそうにない、不安のたねはその予感だった。しかし、考えているよりやってみる事だ。貞操など、どうなってもかまいはしない。

映子は震えていた。とめようと思ってもとまらない。歯の根があわないうことが実際にあることがわかった。口のなかで歯が踊り狂って上下がぶつかりカタカタ鳴る。

写真で見た女のように、肌をしばられていた。写真で見た時は縄は女の熟れたからだに對して、むしろだらしない無力に見えた。苦しそうな表情が芝居じみてオーバーにさえ見える。くわしく見たわけではないが、そんな感じをうけた。それから自分の肌に受けるであろう縄を想像して、たいしたことはないとすら思えた。羞かしい、という事ははじめの時で程度がわかっていづつもりだった。

予想を越えていた。どのくらい越えているのか考える余地などはない。手首にざらついた感触がぐいっとしまった時から、戦慄がめちやくちやにからだを貫いて疾りはじめた。二の腕から胸へしぼられる。たちまち自分のものが、自分のものではない重い荷物になったのしかかってきた。ひと巻きひと巻き、喰いこみにかかる縄は生きてしめつけてくる。

引っ張られて立ちあがった。縄のかかっていない下肢までが、棒のように突っ張って動きがとれず、ぎくぎくと紐に操つられた人形のように動いた。腰が折れて倒れかかり、縄にひかれ、痛みが骨を通った。

ライトが近づいた。どこを歩いているのか意識はなかった。

縄尻を引いているのははじめ花山だった。

奥の部屋で裸になり、後手に縄うたれたのだ。ひとすじの花道のようにスタジオのライトにむかって進んだ。歩いたという感覚はない。引かれ、押された。

ライトの中心に据えられた。全身の震えを意識したのはそこだった。目は役に立っていなかった。が、意識は数台のカメラ、その奥にうずくまっている影のような男たちをとらえていた。恐怖していた。震えは、恐怖のせいだった。生まれてはじめて出会うものだった。子供の頃の夜の物影におびたものとはまるで違う。影を作る実体そのものが怖れを伝えた。いわば重みがあり、巾があり、時間があった。

考えていたものとは違う、羞かしさがあった。羞かしさは痛みそのものだった。

気がつくとしきりに呻いていた。うまく声が出ない。口がつまっている。気のせいではなく、ほんとうに口に詰めものをされている事に気づいたのは、声に気づいたかなり後のことだった。

からだが熱くなっていた。肌のいたるところから、ぼつぼつと吐きだされる炎のようなものが飛びだした。崩れて焼きただれた。

眼前が目のくらむほど明るく、そのすぐう

しろは闇だった。闇が棒をつきだし、映子を突く。よけようとする。めったやたらなところから突いてくるのでよけ切れない。痛覚が火花となって体をはぜ、走りまわる。やがて、映子は痺れ、疲れ、屈伏し、甘える猫のように、ほそく、泣いた。

○

女学生服の映子は机の前へすわり、机にひろげた教科書らしいものに見いつていた。実は本などは見てはいない、という放心した表情である。放心に気づき眉をひそめる。机にうつぶせる。

顔をあげて頭を振る。髪が乱れる。

教科書を脇の本棚におさめ、ひきだしをひきだす。ごそごそ手さぐりし、奥の方から写真を一葉とりだす。それに見いる。

はっとしてわれにかえる。あわてて写真を手でおさえ机にしまい、そっと立ちあがる。部屋の障子をあけ、外の廊下を見渡す。机の前へひき返してくる。しばらく、たたずんで考えるふう。思い決して、押入れをあけ、寝具をとりだす。

ふとんの敷かれた室内。

白いシートの上で女学生服のまま、スカ―

トを乱して白い尻を振りたて、喘いでいる、映子の見ている写真。

そのクローズ・アップ。

二組の男女。強盗にでも襲われている母娘といったところ。

彼方に胸の上を縄でくびられた女が白い胴をそらせて投げ出されている。

手前にうつ伏にされ、髪をつかまれたお下げ髪の女は顔はむこうむき。お下げ髪はごく若い娘を連想させる。上半身はセーラー服。後手にねじ上げられて縛られている。下の肌は、あらわである。

映子の姿と変る。

うごめいている臀部。

赤らみ、汗をかきはじめた顔。

ふいに障子がひらく。

男が立っている。

ああ！

といった映子の表情。

しばしの凍結。

男が部屋に踏みこんでくる。

あわてて身づくろいしかかる映子。

男は肩を抱く。

片手で写真をとり、見る。

あごを上向かせ、顔を見る。

視線をそらせ、目をつむる映子。

荒唐しく抱きしめ、唇をむさぼる男。接吻が終って、手荒に映子を突き倒す。

横倒しになった映子の目さきに、写真を突きだし見せつける。

顔をそむける映子。髪をぐいとつかみ、なおも見せつけようとする男。抵抗する映子。

両頬を平手でたたく男。手で顔をおうい、うつ伏せてしまう映子。

手を握っていた。いつのまにか力が入っていた。スクリーンにひき寄せられ、ひきずりこまれ、胸のキューンとひきしまるような痛みは過ぎて、口をあけ喘ぎだしかけては、はっとしておのれの現在にかえた。

音はかわらず、じいっという映写機の音だけである。飯田にようすを伺われている、観察されている、という意識があった。それが映子の切なくなる胸を二重に重しをかけておさえていた。

映写機からもれる光と、スクリーンの反射が飯田の横顔に、複雑な影を作っている。

中国筋の古い港町として聞こえているH市へ、幸次と流れてきて住みついてから六カ月余りたつ。映子はさっそくに口をさがしてキ

ャバレー勤めをはじめた。幸次は借間に一日ごろごろしていて、出かけるといえば喫茶店かパチンコ屋ぐらいのものだった。喫茶店へ行っても黙りこくって、新聞など隅から隅まで一時間もかけて読んでいただけで、店の女の子達の顔もよく見ないようだった。これでは、女のこひとり出来るわけがない、と思った。一度、幸次の入った店へ後から入った事がある。近づいても顔もあげないので、ふっと隣りの席へついてみた。それから三十分近く、とうとう隣りの席にいる映子に気づかず終いだっただけには、そういう男だとは思っていたが、いささか呆れてしまった。

そんな幸次だが、女にそっけないというのはない。幸次の愛は丹念であり、いつもこちらの調子に気を配ってくれる辛抱強いところがあった。彼が花山のところで参ってしまったのは、日頃栄養が悪く、一度に生活が変り、激しい日常に移ったからでもあろうか。

それから幸次の療養もかねて北陸の温泉へ行った。花山からは前約束どうりの三十万円ほどの出演料を得たので、当座の温泉旅館ぐらしにも困らなかった。幸次の分の出演料も他にある。幸次は映子にあっさり手渡した。この人、自分は病人になって、女に金を持ち

逃げされたい、どうするつもりだろうとその時の全財産をあっさり手渡した態度にも呆れた。二十五にもなって、ヤクザといってもどここの組の者といった盃ももらっていないチンピラだったそうだが、妙なチンピラでもあったであろう。姿は、いつも煤けた恰好をしていて一見冴えないが、シルエットは足がスラリと伸び、腰がしまって肩巾も張らずに充分あり、ちょっとそこいらにないバランスなのだ。しかし、とにかく服装がまづ流行おくれで、くたびれているから姿のよさがわからず、ヌウと邪魔な電信柱でも突ったったみたい。とにかくこの人のよさを知っているのはあたしひとりなのだ、と齒がゆくもあるが、時々思いうかべて頬がゆるんでしまう。

北陸の温泉場で、療養の夫につきしたがってきた妻という恰好でいたが、半月もすると青白くかわいた皮膚も張りを取り戻し、もうどこから見ても病人などではなくなっていた。夫婦というより夫婦ごっこ。四畳半のアパートを借り、こまごま世帯道具一式そろえて同棲生活に入ったが、落ちついてみると温泉街は遊蕩客には便利にできているが、暮しには不便で金がかかる。することも、湯屋

に通って、のんびんだらりするぐらいのことだ。そのうち所持金も二人分合わせた分のかばを割って、先行きころぼそい。

アパートの住人は、芸者、通いの番頭と女中の夫婦者、関西ではヤトナと呼ぶ仲居、流れ者のタクシーの運転手など。ひるま暇な芸者やヤトナ達と口をききあうようになり、部屋をいったりきたり、ついにお喋りにせいだしてしまふ仕儀になった。話しのついで、

「あんたも遊んでいるなんて、もったいないじゃない」

とか、同業にスカウトされ、

「それもそうね」

ということになったが、芸者といっても、猿まわしの猿ほどのことも出来ず、いくら、「そんな事へっちゃらよ。だいたい今のお客様なんて団体が大部分。酔えば軍歌なんか喚いでいるだけなんだから、三味線は色気ぬきの先輩にまかせておけばいいし、音痴でもなんでもかまやしない、調子あわせて怒鳴っていればよいのよ。うるさそうな個人の客のところなんかいなくなつて、団体専門で結構やっていけるよ」

といわれても自信がない。女中でもなし芸者でもなし、だから芸はやらなくとも済む仲

居の話しには、ちょっと食指が動いた。

昔は仲居も芸者の置屋のような口入れの看板の下に入り、縄張りその他うるさいこともあったというが、今は組合、口入れ屋も下宿屋と同じだという。むろん通いでも勤まる。衣裳は自前、どうせ汚れるものなので交織化織のべらべら物だから数もったにしてもタカが知れている、などの話し。とにかく、いつまでも遊んではいられない。何か切羽詰った気分になった。

幸次といえば、そのころから喫茶店とパチンコ屋専門。あとは近くの貸し本屋から小説本を手当りしだいに借りてきて寝そべって読み、日に二度も本屋参り。といってそれを映子は不満にも思わなかった。むかしは髪結いの亭主というのがあり、もっぱらのらくらして居て、女房の仕事の終るのを、さも待ちかまえるようにしていたそうだ。女房も、亭主の甲斐性うんぬんする前に、そうしていることが嬉しく、稼ぎを吐きだして亭主にお召などをぞろっと着させ、いそいそまた仕事の場合に戻っていく。そんな心理を早くも映子は理解できた。現代なら、さしずめやくざなヒモというところだろう。しばらくてもいじめられても離れられぬ女たちの、小さなよろこび

と、時たまの悲哀……幸次が今まではとにかく、現在は切った張ったは無縁なだけありがたい。のらくらなどは何でもないのだ。

仲潟トメ方に寄宿した形式で、これもトメの口入れだが、組合の斡旋した旅館へ日参の仲居稼業がはじまってひと月ほどは、追い立てられるようにあわただしく過ぎた。

水商売は元来肌にあわず、気が進まなかったのも生来の引っこみ思案と考えたのだったが、やってみるとさしたる抵抗もなく、結構男ずれした仲居どうしに囲まれても目だったうぶさもなく、酔った男など片手間にさばいた。花山のところで、丸裸で縄かけられていたぶられたり、男の視線に灼かれたことが、どうやら映子の腹底に度胸めいたものを生んでいたらしい。確かに男を見る目が変わった。変わったというより、ぼんやりしていたものはつきり見えだした。といった方がいだろう。男には漠然とした、あこがれを持っていた。父を嫌悪したが、父そのものを見ていやがったのではなく、たぶん養母に焼きついた目が膜のようなものを透かして、父の影を見て一途に憎んだのだ。父自身は怠けものだったが、ひょうひょうとしたところのある感情の淡泊な人間で、およそ憎悪の的になる人で

はなかった。父が大声を出して怒りの表情を浮かべたところなどは一度も見なかった。

映子が覚えている二人の男は凡そあこがれの対象と違っていたし、からだに痛みを与えたことは忘れずにいても、顔とか動作とか後で考えてみると、よく思いだせないくらいに心を残していないのだ。

ではあこがれとは、と考えてみても茫漠としてとらえられない。だから、あこがれだともいえる。男だけではなく未来全体、世のなかのあらゆるものが、そこには含まれていたのかもしれない。現実には無関心でそっけない、少しの被害者意識があり、内心不満にいら立っていた。

目のうろこがぼろりと落ちた。いつ落ちたのかはつきりしない。とにかく幸次と旅に出るようになって世の中が少し違って見えた事はたしかである。映子はじめて自分を世界のなかに見いだしたのだ。自分は女であり白い肉塊であり、腐肉を漁るハイエナのような男たちをひきつける存在であり、喜怒哀楽に人目かまわぬ叫びをあげるものであり、生きてやがて死ぬもののなのだ。それだけなのだ。それしかないのだ。

幸次が回復し、病人から男に還り始めると

そういう感情が映子にせまってきた。

喫茶店にいた時の男達の視線は鈍く痛く感じいらした。水商売に自分がふむきだとはそうした感じから得たものだった。

仲居というのは、座敷では芸者同様、客につとめなければならず、宴会の仕度などでは人手不足で女中の手が足りないせいか、女中同様に、こき使われる。考えてみれば、割にあわない。なりても芸者の古手とか、女中として時間を縛られるのが嫌いでとか、つまり顔かたちで売れる内には馬鹿くさくて勤まらない仕事だ、ということに映子も気づいた。客の目には芸者も仲居も区別がない。まして酔ってしまった女は全部、女だった。

酔った男たちのあしらい方も自然にこころえた。できるだけ親切にはするが、もう一步のところまで身をひるがえすのだ。おたがいに傷つかない余情が残る。男を必要以上にいらだたせるのは危険だ。臆病なものでも逆上すれば手ごめにあわせかねない。

客は団体が多いという事だったが、それもほとんどだった。なるほどこれなら団体専門にやっていけるといふより、客が他にないのだから世話はなかった。個人客はいないことはないのだが、たいがいは馴染みの芸者がつ

いているし、仲居にしても顔のつながりで呼ばれる者はきまっている。そんな座敷ではチップが入り、悪くないのだが、映子としてはうらやましくもなかった。団体客の方が気楽でいいし、可愛気がある。表面に芸者をたて、女客が混じる時はこれも立てて、地味にしゃくなどをしていけばよい。手のかかる面倒な用の時だけは、さっと出る。

酔った男に尻や胸にいたずらされたり、いきなり抱きつかれたりする事などもしょっちゅうだが、喫茶店のころなら頬を張ってやったところでも今は平気だった。特別に嬉しがってもない。つまりそれが日常であり、気にもかけないほどの事なのだった。男たちの好色もだいぶぶん虚勢なのだ。遊びというにはしかし少しみじめだ。芸者を口説いてもものによいとすれば彼らの一週間以上の報酬をあてなければならぬ。意地の悪い芸者にかかったら、外の料理屋へ連れだされずってんにされ、いざこれからという段で軍資金切れ「あらそう。じゃさよなら」で一巻の終だ。人目がなければ暴行もしかねない男もいるにはいるが、大方は遊びのあと青くなってよくよする口だ。そういう男の、それでも女にいい顔をしたい見せたい心情に、映子は哀

れさを見る事ができた。

ついにそういう心情を見せなかったのは幸次だ。たいがいの男なら、女のヒモのようになれば屈辱感をもつ。やくざといえども同じだ。女をいたぶったりするのはその裏返し的情感でもある。すれて完全に商人になつてゐる男もいるが、それこそ男のクズだろう。屈辱に逆上するうちはすくいがあつた。幸次は逆上もしない。商人ふうになつてゐるといふには人が好すぎる。

時折、幸次がわからなくなるのだ。

幸次は映子のものではない。それが少し苛だたく口おしく、結局はよけいに魅かれて結ばれてしまうのだ。天性の女たらしかも知れない、このひとは。と時たま、恐ろしくなるが、その恐しさは甘美でもあつた。

女が水商売に入るといふ事はまぎれもなく墮落だった。男にちやほやされ、それがお金になる。男より稼ぐ。男の貧しさを知らず知らず軽蔑する。男の心情につけこみ、手玉にとり快感を感じる。しかし、いつまでも若くもなく美しくはいられない。男にかえりみられなくなつて、ついに一生のうち何物も生まず男の周辺をばげ鷹のようにあさつて歩くようになるのが、おごつた女の末路であること

は昔も今も変りはない。途中で気がついてもうおそいと映子は思う。色を売るとは麻薬のように常習になるのだ。女がヒモにつきすのは、自然に墮落を途中で喰いとめたい本能が働く事もひとつだろう。男につくす。稼いだ金を自分の身につけない。いじめられてもついで行く。心情において女は墮落から助かるのだ。映子は、貧しいサラリーマン達である団体客を気やすいと思う。悪どく稼ぐ気にはならない。旅館では女中といつしよになつて立ち働く。それらにすくいを感じていた。

幸次は浪費をしない。金をつかう事を知らないのかもしれない。過去を語らないので、余り多くの幸次のことを知らないが、時々ポンポンという話をつぎはぎしてみると、幸治は老人の養父母のもとで育つてゐる。父母の顔も知らない。養父母も貧しい。新聞配達をしながら中学を卒えて織物問屋の住みこみ店員になつた。五年働いて問屋が不景気でつぶれた。それから手に職はなし、日雇いの店員など転々とした。板前やバーテンダーの見習いもしたが、無器用なのと背が高いので長続きしなかつた。生活保護をうけて細々とらしてゐた養父母が相ついて死んだ。六畳と三畳の借家は、父母の死んだ時になかつたの

で、戻つてみると家主にこわされてゐて居処を失つた。新宿A町の、ドヤにくらしはじめた。街でばつたり中学時代の友人に会つた。友はやくざで、売りだしのいい顔だったそうである。パチンコ屋のサクラや景品買など世話してくれた。チンピラになつた訳だ。女を作る甲斐性も、喧嘩沙汰に体を張る気力もなかつた。暇を見てはドヤのふとんにもぐりこんで寝るのが唯一の仕事のようだった。少年のころから十二年働いて、働くのはもううんざりしてゐた。たるたけ体を楽にした。そんなことでいつまでたつてもチンピラだった。幹部になつたダチ公がいるので、仲間に辛うじてひつついてゐられる、という形だった。花山はY写真の関係で友人とつながりがあつた。どういふ訳か幸次をバーにさそつた。新宿に出て来た時はつるんで歩くようになった。五十近い面さげたおっさんと、のそつとした男の変なコンビだった。そして映子がからむ映画の話しがもち上つた。

働くのが嫌いだ、という幸次を映子は勝手だとは思へなかつた。事実、匂いをかぐだけで鼻がひん曲つて頭の痛くなりそうな苦勞をこのひとはして来たのだらう。苦勞は皆もしているという事はできる。しかし中学出で手

職がなければ、普通のサラリーマンにもなれないのが世の中なのだ。

幸次には物事すべてに執着ということがない。これも、ひとつの知恵だった。執着すれば裏切られ苦しむ事になる。苦しみもいとも知れないが、毎日はいられない。映子は今ここで自分が有金いっさい持って幸次の前から消えても、このひとは顔をひとなどして新宿のチンピラに戻って行くだけのことだろう、と思った。そう思えることは淋しかった。その淋しさは、狂おしいばかりの一刻を持つことでしか癒されなかった。捨ててはいかない。このひとはやはり私が必要なのだ。そうでなくとも、そう思いこめばよい。仲居の生活は、馴れてくれば楽だった。短時間に忙しい事は苦にならない。この街について、少しずつでも金をため、安い飲屋の一軒でも持てれば、それが成功というものだろう。金は花山にもらった分のなかばを失ってからまた徐々にたまりはじめた。この分なら一、二年のうちに落ちつけるかも知れないと映子は計算した。それが張りだった。

アパートの隣どうしにコマ子という芸者がいた。雪国の「駒子」をとったらしい。お俠なところは張りつめた美しさに通ずるかもしれないが、ひどく俗っぽいコマ子だった。お座敷に呼んでくれた。客は老人のひとり客で、福井の織元である金持ちだった。呼んでくれたといっても、映子は隅にひかえていだけで、コマ子ひとりが騒ぎまわってふざけ散らす座席だった。多分ひとりでは騒ぐのに何か不足であったのだろう。多額なチップをもらって、あとで映子は胸がキュンとなった。悪どい稼ぎはいやだが金に執着しはじめているのだった。

それから度々呼ばれて、コマ子と同席する機会がふえた。チップが魅力で、せいぜいつとめなければと、意気こんでくる。

何度めかに呼ばれて行ってみると、席は老人がひとりいた。勝手がちがいが硬くなった。映子の手をとって老人が引き寄せる。耳もとで何かささやきながら胸をさぐる。映子はぞっとして思わず飛びのいた。いやらしい感じがした。さわられたくらいでそう感じるのしかし異様だった。相手が老人の、脂切った手だったせいかもしれない。

器用に酒をすすめてくる。戦術を変えたらしい。色がかった話をちくりとし洒脱に笑ったりする。用心しかかった映子も心が解けた。胸をなぶりにかかったのも座興のつもり

だったのだろう。そう思った。いや、思ったかった。一時間ほどいてもコマ子の姿は現われない。また一時間、とするとその夜は映子ひとりが呼ばれたわけだ。いくら鈍くても考えのおちるところはひとつだ。思い切って帰ろうと思い腰を浮かしかけたところへ、女中頭が入ってきた。外へ呼ばれ案の定、云われた。

「いいんでしょうね」

映子は今夜はだめだ、と断った。

「今夜は？　そう。しかたがないわね。いいわ、今度またお呼びしましょう」

とあっさり風がいい、その夜はそれで済んだ。コマ子が後でそれをききこんだらしい。「いやな狒々じい。でも用心しなきゃだよ。女中頭のおきせ、曲者なんだから。いいわ、あんたの貞操はあたいが守ってあげる。まかしといて」

それからひと月ほど呼ばれなかった。立ち消えになったらしいと映子はほっとした。仲居は女中に頭があがらないのだ。気嫌を損じると呼ばれなくなる。女中頭といえはなかなかの権力者だ。一軒ぐらいしくじってもどうという事はないが、おきせは無気味な針をさした。うちを一軒ことわる事はこの町全部の

旅館をことわることだという事を知っているか、というのだ。万更おどしだけでも受けとれない。もうあと二月、せめてひと月、と映子は歯をひきしめた。

呼びだしがあった。迷っていると呼びだしはコマ子を通じてだというので安心した。

「いらっしゃいよ。気にしないでいい。狒々じい、とっちめてやったから」

と明るい電話の声である。

面白いものを見せてやる、という。何だろうと興味は湧かなかったが、これでしくじりはとりかえせる。チップにはもうならないだろうが充分だ、と急ぐ足が転がった。

「待っていたのよう！」とコマ子。

「さあ、飲め」と老人を無視して茶碗に酒をどくどくついださし出すのを、ぐっとひと息に呑んだ。

「さあて、そろそろはじめるか」

部屋が暗くなった。一隅の壁がポツと明るんだ。面白いもの、といったのはこの事か、と映子は思った。変に傾いた映画のタイトルがうつった。

罪と罰

とある。まだ映子は気づかなかった。

ボーと画面一面になま白いものがあらわれ

た。やがてそれが女の腹部であることがわかる。汗を湧かせ伝わらせている肌は毛穴までがあらわれている。へそのくぼみ、胸乳、やがて肩、首、のけぞっている顔は見えない。胸を上へ突きあげている、と見えたが、バックするカメラにつれてあらわれる全身は天井から縄でつられていることが判然とした。

映子は目がくらんだ。吊られている女体。汗を流しているのは、映子自身だった。

血が逆流した。頭がかあつとのぼせた。揃えてすわっている膝ががくがくして坐ってられないほどゆれた。ゆれているのは足ではなく床であり、世界だった。

画面に幸次が現われた。竹の笞を手にしている。ふりかぶり、ふりおろす。

バシッ！

音が聞こえた。聞こえるはずもないが、聞こえた。

バシッ、バシッ。

ぐるっと女体が半回転した。

背にしとど乱れた髪の上にさかさまの映子の顔が、うらみに燃えたような瞳を宙に放って浮かんだ。

それから後はおぼえていない

気がつく、みも知らない居酒屋で空のコ

ップを映子は握りしめていた。

映画はとうに終わった。いつ終ったか憶えがない。老人やコマ子のいる席をどうやって抜け出して来たかわからない。映画がどう進化したかなどもわからない。しかし断片的な場面が、今でも眼前に色あざやかに転回する。眼を喰いいらして映子は見ていた。見ているだけなら考えなくとも済んだ。

椅子にさかさまにくくられた。そのまま宙に張りついた。さかさまの頂天にろうそくが立てられ、ぱっと紅い火がついた。

その姿の前面に幸次が入ってきた。そうだ映画ではない。たしかに入ってきたのだ。

「酒、お酒ちょうだい」

「あいよ、ほれ」

老人だった。しかしこの年よりは枯れている。飲むと水だった。

「酒、お酒よ」

「酒かい。酒ア売り切れだ」

「意地悪しないで、売って」

アパートの二階へあがる階段をあがろうとしていた。足が重い。いつからこんなに重くなってしまったのだろう。よろけた。ふわっと宙が飛んだ。痛い！ 痛い。もう死ぬ。いじめないで。

「いじめて。責めて、幸次！」

叫んでいた。白い獣は尻を突き立てて、むくむくうごめいていた。声はでなかった。猿ぐつわをかまされているのだ。

暗くなった。暗闇にひきずりこまれ、吸いこまれ、転落していった。

宿酔いの眼覚めは喉のかつえからやってきた。すぐ昨夜の記憶の断片がよみがえってきた。断片は時間的にならべる事ができるだけで、それらの間に隙いた空白をうめることはできない。全体的にとらえることができなかった。空白が不安であり、おびえとして映子を震わせた。酒を飲んだ事は苦痛を増し、おびえをひろがらせただけだった。

昨夜がすぐよみがえったのは眠りも無駄であったということだ。空白は完全な空白ではなく、魑魅魍魎のひしめいているような妖しさに満ちている。それだけに追われて、他のことは考えられない故の空白であった。

かたわらに幸次が寝ていた。むこうむきになり首から背が分あつくひろがっていた。涙が出て、ものの形がゆらいで見える目で映子は幸次の肩の線を見つめた。こんなふうには幸次を見たことはなかった。幸次のからだは、

映子の苦痛とは少しもかわりなく、岩か牛のようにそこにもりあがっているに過ぎないものだった。

水を呑みに立ち上がったが、からだは起きない。幸次のからだも邪魔な感じだった。ぼんやりと異和感があり、不快だった。

昨夜のことを思いだすことはやめて、考えようとする。何を考えるのか？ それもはっきりしない。頭が鉄棒をさしこまれたように重く、時折はげしく痛む。

この街にはもういられない。いきなり結論だけが、はっきり痛む頭のなかを占めた。とにかく、いやだ、いやだ、いやだ。死んでしまいたい。死ぬことが一番よい。最善の解決方法だ。しかし結局死ぬことはできない。幸次などおっぼりだして、ひとりどこかへ行ってしまおう。それが次善だ。しかし、死も独りも、同じように淋し過ぎる。現実になんことは耐え切れない。けっきょく映子には幸次しかいないのだった。

やっと立ちあがった。くらくらする。重心が頭に集まって、逆さまに吊られたような気分だった。映画のなかの逆さにぶらさがった自分の顔が目にかんだ。目は充血していたが、恨みに燃えている。燃えているだけでも

今よりはましだ。今の映子は燃えたあとの灰だった。水にかべてみれば、妙な匂いのするアクがうかびあがるだろう。水を呑んで、その後、映子は吐いた。水の量の、倍ほども戻ってくる。アパートのせまい流しにしがみついて、映子は眼尻から涙を流しつづけた。

関西の地方の町を、幸次と転々と移り住む生活がはじまった。バーの女給になった。人には自堕落な女に見られた。どう見られてもかわらない。落ちよ、落ちよ、落ちるだけ落ちよ。が、それほど落ちた訳ではない。からだは売らなかつた。男は幸次ひとり。別に貞操を守っているわけでもないのに、だれも実質の自堕落にしてくれないのだ。笑うべきは現実である。

勤めがいやになるとすぐやめた。また住所も変えて勤める。くり返すうちに金もなくなり、転々とするのにも飽きてきた。

中国筋のこの街へ来て、しもたやの二階を借り、六カ月。もう簡単に動く気はない。考えてみると、折角の、飲み屋ぐらいなら借りられる金を持った二度の機会を、逃がしてしまっている。一度は幸次の療養。二度目は心理的なショックがあったとはいえ、いろいろ

泥水をかぶってみると、やはり自分の甘さに
思っていただけだった。

しかし、そのくらいの金なら、その気にな
れば出来ないことはない。売れる若さを持っ
ているうちに心を引きしめれば、今からでも
おそくはない、と映子は思った。

キャバレーのクチをさっそくさがし出し、
勤めだした。三カ月もすると馴染み客もでき
て来てグッと楽になる。飯田が映子と呼ぶよ
うになったのもそのころだった。将棋の駒の
ような顔の無表情な初老の男だった。唇が上
が薄く下だけが厚くて、あごのあたりを動
物的に見せる。そばに映子を引き寄せて呑ん
でいてもあまり口もきかず、どこを見ている
のか、その細い目はわからなかった。大陸か
半島の人だろうか、映子は思った。この街
のメインストリートに大きなパチンコ屋を持
っている。戦後のしてきた人間だという。そ
のうち、このキャバレーの経営者も飯田自身
だということがわかった。直接の経営はマネ
ージャーの中西があたっている。飯田は客の
様子をして時折飲みに寄るだけだった。飯田
についてはそのくらいの事しか知らない。
席へ呼ばれても話をすることは無いし、
ブランドをひとりでなめている相手にしゃ

くする事もない。経営者と聞いても特別には
思えないが、客としては気づまりで、映子は
肩が凝った。

帰りがけに中西に呼びとめられた。

「君は社長を知っているね、飯田社長だ」

「ええ」

「君に話があるそう。明日三時ごろ一の
字という料理屋へ行ってくれないかな」

来た、と思った。何が来たか、考えるまで
もない。男が女を呼んだのだ。経営者と使用
人といったところでその関係に交りはない。
男と女なら相手がだれであろうと、平面上の
点と点、一対一だ。

気負ったわけではない。もしかすると、こ
れでまたこの街から出て行かなければならな
いことになるかもしれない。予感が教える。
だるく痺れてくるような疲れが、映子の足先
から這いあがってきた。

「小さいバーが手に入ったのだがね」

飯田は座をしめるなり、面倒くさそうな調
子で、そういった。話しの内容と調子があわ
ない。

「あんたに引きうけてもらおうと思う」

押しつけがましい事を、暗くものうげな口
調で無雑作にいう。それが飯田の持ち前のや

り方らしかった。

「いやいい、返事はすぐ聞かんでも。一日考
えてくれ。明日、またこの時間にここで聞こ
う。条件だけいっておくと、現在までのとこ
ろ月売上げ平均百万円。売り上げ歩合で二割
五分出そう。むろん出だしは今までより落ち
るだろう。最低になっても月十万の保証はし
よう。バーテンひとり女の子三人。小さな店
だ。人間はこちらで用意する。品物の仕入れ
もルートがある。あんたはママとしてからだ
ひとつ用意するだけだ。今日は忙しい。これ
で失礼する」

いう事だけいうと、さっさと自分が先に立
ってしまった。映子には女中が茶を持って来
たが、飯田はひとりでぬっと入ってきて去っ
ただけだった。

辻褄があっているようでどこかおかしい話
しだ、と映子は思った。キャバレーには三十
人ほどの女がいる。映子は新参で、勤めぶり
も目だつはずがない。顔かたちも中ほど、愛
嬌も普通。バーのママといえさあ勤まるか
ねと十人が九人、首を傾げるところだろう。
冷静に考えて一時の弄み物ならともかく、女
に不自由するはずもない飯田らが、特別な餌
を用意してかかるほどのタマでは、映子はな

い。映子は首を振った。考えても仕方がない飯田のいう明日、出たところ勝負で行くほかはなかった。

その明日。

女学生服がはがれていく。こういう映画で女の制服姿は多い。女学生、バスガール、百貨店の売り子、食堂の給仕、尼僧衣、割烹着、帽子とか白い手袋、などの小道具もそうだろう。異を好むというより制服で装う事によって禁忌となり内面に隠されただけ本能の炎も熾烈になる、それが男をひくのではないか。一見して水商売の風俗などしていれば露われた肌もあたり前のように感じるものだ。現実にはしかしタブーはタブーであり、それを破り得ない思いが想像力を求めるのだ。制服の濃紺からあらわれた肌は、映子自身ほっとため息の出るほど、なまなましく白かった。

乱れたシートと上げけの間から赤いしごきが尻尾を出している。男はそれに気づき、少時、映子の丸くうずくまったからだを見くらべているが、思いきったように紐を手にし、映子の手をとってうしろにねじあげ、手首にからめていく。

映子は画面に引きずりこまれ、握ったこぶ

しに力が入った。

それに気づきため息ひとつして肩の力をおとした。飯田のようすを見た。横顔の影に動きは見られない。動かないことが、かえって充実した力を感じさせる。正面から見ると大陸系の平板な顔をしている飯田だが、横からは影がいかつい直線を作っている。男の精気が匂うようななまぐさを映子は嗅いだ。

考えてみれば、よくも映子は、こう落ちついて飯田などを見ていられるものだった。コマ子と織元の老人の席では同席の人間の顔などはとても見てはいられなかった。カアッと血がのぼって目がくらみ、それが長い間つづいただけであった。三年の月日がやはり映子のなかに何物かを積もらせたのだろう。

しかし、やはり平静ではいられない。おさえている胸の苦しさは変りない。

すっかりしばられてしまった映子の縄尻をとって男が引く。赤い紐がぴんと張り、肉のひだに喰いこむ。

男の手がゆるみ、片手で机のひきだしをあけ、かき廻す。竹の物差しをとりだす。物差しをふりかぶり尻めがけて打ちおろす。

肌がびくっと震える。つづいて攻撃がやってくる。尻がごろんところがり、からだは逃

げにかかる。縄尻がそれを赦さない。今度は突いてくる。ぐりぐりこじる。

あっ！ あ。

見ている映子のほうが痛みを感じた。痛みは鈍いうずきになって胸底から湧く。

バックするカメラ。

四肢を蛙のようにひろげて這いずる女体。

男の手と足が踏みつけ、おさえ、ひろげる。

目をかたくつぶり、歯を喰いしばった映子のふくらんだ顔。口をあき、うわっと赤い咽喉が覗く。

はじめに出て来た階下の部屋。

柱にくくりつけられている中年女。

その前で、後ろから責めつけられている映子。

引きずりこまれまいとしても目は画面に吸いつけられていく。

一度冷静にかえったつもりだったが、心臓の脈うちが痛いほどはつきり聞きとれた。

画面の映子はわれを忘れて喘いでいる。縄尻を引きながら前へ進もうとのけぞる。少し動く。腰が傾く。肉塊がもりあがる。

あくなき困難な動きをつづける。

ゆれる画面。走る画面。

叫ぶ色。もだえる色彩。
虫。

けもの。

陽光。

空。

○

「どうだね。バーのマダムにおさまる決心はついたかね」

部屋には明りがついていた。映子は腕時計を見た。四時を少しまわったところだ。夜だと錯覚していた。雨戸をしめ切った部屋なのでそう思ったのだ。障子の外にうす暗い廊下があった。藤椅子がうずくまっているようにぼんやりと見える。

「おことわりします。帰らせて貰います」

ハンドバッグをさがした。ふと見失ったように少し周章てた。立ちあがった。うしろにそれがある。

「断るかね。まあそれもいいだろう」

抑揚のない、いやな声だった。飯田は煙草をふかして、静かに煙の輪を口にただよわせている。おちつきはらっている。キャバレーへ来た時も昨日も背広姿だったが、今は和服をまとっている。

出口のところにいつ来たのか一の字のおかみがひかえている。三十五、六。肉おきの豊かな大女だ。皺のない顔を能面のように無表情にしている。映画のはじめには部屋にいなかったはずだ、と思うと変な気がした。

「このおかみのように小料理屋でもするかね。それとも、犬になって檻のなかでも飼われたいかね」

犬？

おかみのかたわらをすり抜けた。返事をする必要はない。一刻も早く、この家を出て行く事だ。小部屋から廊下へでるふすまを引いた。と、あらわれるはずの廊下はなく、板の壁のようになっていて戸が目の前を閉ざしている。映子ははっとした。戸らしいものに手にかけてが冷たい固い手ざわりで手がかりもなく押しても、てのひらですって左右に動かさうとしても、びくともしない。

「あけて下さい。あけて！」

悲鳴に近い声を映子はたてた。

「無駄だな。お前の出て行くところはもうないのだ」

悪夢を見ている気がした。飯田やおかみの能面も現実とはとれない。夢だ、夢ならいいかげんに醒めて欲しい。映子は混乱した。

部屋にとって返した。飯田は相変らず落ちつきはらって、煙草をふかし続けている。

「妙なことをしないで下さい。わたしは帰ります」

「帰るといえば止めはせん。しかしここから出られるかな」

縁側へ出た。昨日来た時と同じ部屋だ。外は庭になっている。石灯籠などが築山の手前にあった。築山のむこむは塀のようだった。重いガラス戸を引いた。それは動きだすとすすると動いた。雨戸、と見たがそれも普通ではない、一枚板の平板な、やはり壁のように立ちふさがっている。厚い板の感じがするだけだ。こぶしで叩いた。鈍い音がする。夢中で叩きつづけた。場所を変えようとした。藤椅子にけつまずいた。はっと思うまもなく、足もとをすくわれた。部屋にまた、倒れこんだ。

「往生際の悪い奴だ。よね。この女を始末しなさい」

飯田の声が、天井裏から響くように降ってきた。

「はい」

衣ずれの音が伝って、よねと呼ばれたおかみが立ち上って近づいてきた。倒れた時、頭

を打って目のくらんだ映子は、くらくらしながら跳ねおきて、めくら滅法縁側へ飛び出した。ガラス戸をたたいた。少し激しい音がした。よねがするりと寄ってきた。映子は逃げた。が、それは逃げにかかっただけだった。片手をとられると、どういう術にかかったのか、ふわっとからだは宙に浮いて、たたきつけられた。

部屋に戻っていた。からだをぐるぐるまわされた。ブラウスがはがれた。ブラジャーが弾ねてとんだ。うしろ手にねじ上げられ、骨がきしんだ。

声をだそう、と思う。やはり悪夢のように口がぱくぱく動くだけで声がでない。痛い。顔が畳にこすれて火のように焼けた。夢ではない。乳房の上に縄が喰いこんできた。息苦しく、喘いだ。

三年の時間が一瞬に逆回転した。

映子は花山に縄尻をとられよろめきながら歩き、スタジオの中央のライトの中心に立った。下肢はしばらくいられていないのに、棒のように突っ張って自由がきかない。わざとよろめいて歩いたのでもないのに、引きたてられて足をもつれさせたのだ。

ライトに目がくらんで、周囲はよく見えな

かったが、しばらく立っていると暗い四囲に男たちがうずくまったり立ったりして四、五人いる事が見えてきた。とたんにカットからだが火照った。が、それ以上どうしようもない。周囲の男が動きはじめた。薄暗がりのなかから手が伸びて来て、縄尻を引いた。不恰好に前のめりになった。あわてて体を起こそうとすると、違う手に肩をおさえられ、動けなくなった。

瞳を上げて花山をさがそうとした。男の影が動いていた。それが花山だか区別はつかない男の手の感覚に鳥肌が立って、からだ中がびくびく痙攣した。

花山と同年配の男たちの撮影会はふた月近く続いた。一回に五千円になった。五万円になったら喫茶店をやめて東京へ戻ろう、と思った。その前に中止になった。

なぜだか事情はわからない。はじめの苦しさを恥ずかしさは薄れていた。止めると聞いた時、不満だった。花山は少し日をおいて、別な企画で映子を使いたいという。別な企画というの何が何をさすものか見当がつかない。

期待しないことにして、月なかのその月末までは、とにかくこの町にしよう、と心をきめた。

月末まぎわ、花山がやってきた。そこで映画を撮る話を聞かされたのだ。少し考えて喫茶店をやめると同時に、花山の家に住み変えた。

ライトを浴びてカメラの前に立った。はじめて答で臀をたたかれた。

泣き叫んで、ころげ廻っていた。

「どうなんだよ、返事は」

花山の声ではない声が降って来た。映子は顔をうごかそうとしてうごめいた。髪をつかまれて畳におしつけられている。

「やめて。やめてえ！ あたしには夫がいる」

「夫？ 男のことか。そうだと幸次とかいったな。心配はいらない。あの男には話しをつけてある。金を呉れてやった。あの男はお前を売ったんだぞ。買ったのは、このわしだ。お前はこれからわしの奴隷として暮すのだ」

売った？ あたしが買われた？ そんな馬鹿なこと。そんなはずはない。

「幸次は、幸次が……」

口に棒のようなものが入ってきて、唇が切れそうにこじあけられ、映子は言葉をうしなした。

かずひこのノート

甘美にして醜悪――

醜悪にして魅力溢れるもの

とやま かずひこ

十年一とむかし――。

早いものだ。私が、この形式で、KK誌に連載させてもらいだしたのが、三十三年の四月号かであったから、完全に十年はたった。書くやつも書くやつだが、十年一貫して、ボツにせず、エンエンと載せてくださった編集部のご好意は、ただ感謝の二字につきる。では十年のキャリアにモノを云わせて、今月号もハッスルしよう。

フランクフルト・ソーセージ

うれしいことに近頃は新聞・雑誌に、しばしば、わがあこがれのモノをテーマにした作

品が登場する。つぎもその一例。

『漫画読本』誌5月号70ページ。

杉浦幸雄作『銀座スパーマーケット・銀座高級ホステスふん戦記』の一とコマ。

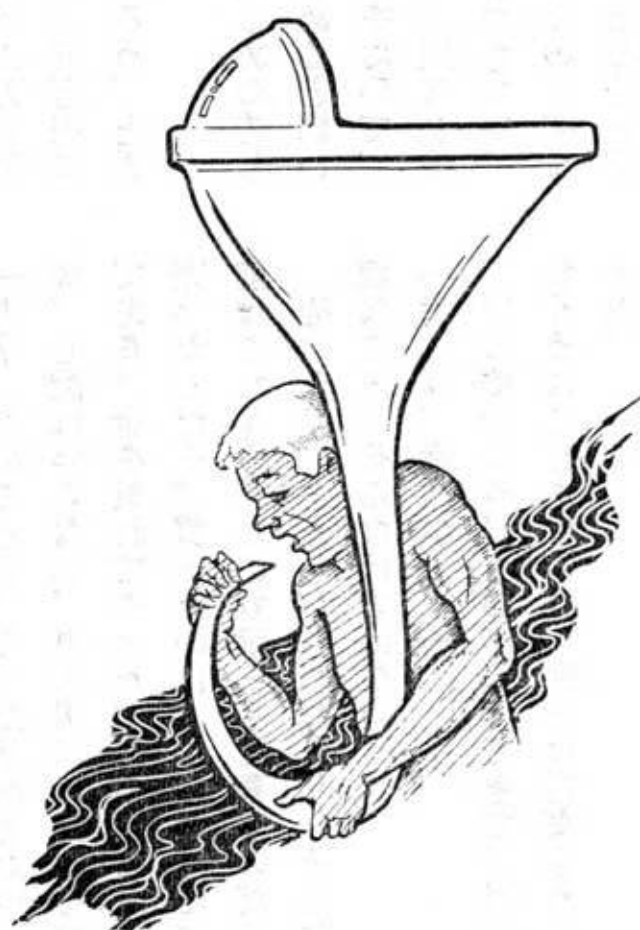
パトロンと、ホステスの会話。ダンナが、

『オマエ、午前十時に何をしてた?』

と訊くと、その答がたまらなく良い。(以下原文のママ)

“あれはトイレよ。丁度フランクフルト・ソーセージみたいなのが出なかったのですね”

ご丁ねいにも、そのフランクフルトの絵まです描かれ、そのうえ、そのホステスがマンガとはいえ、仲々の美人。



かなり前に、清水正二郎の文庫本でも、同様、ソレを、フランクフルト・ソーセージとたとえ、このほうは、男性がわが掌にうけたのを、おのれのカラダにぬりたくるというスゴい描写があったが、まったくフランクフルトは、アレを想像させるにじゅうぶんの大きさと、形なのだ。

そのソーセージをサカナにビールをグーッとやったら、サゾ、なんて、かずひこ好みの勝手な連想が飛ぶ。

おまけに、そのビールも、酒屋で売っているヤツじゃないほうがいい、なんてゼイタクな空想は、つきないのである。このごろ、と

でも大きいほうに欲望がでてきた私だから。

錠剤の苦さ

たのめば、ムリをきいてフンダンにのませ
てくれる人妻のY子。ただし大きいほうは、
どうしてもダメと、タイミングにめぐまれず
いまだにのぞみは達してないが、小さいほう
は、たびたび、めぐんで頂いている。

そのY子が貧血症とかで、ここ三カ月ほど
病院通い。

『先生が、当分このクスリをのみなさいって
いうの』

無邪気という手のうえには、トキいろの平
たい錠剤と、あざやかなグリーンの錠剤が、
おのおの二個。

これを三度々々、食前に服用しているのだ
そう。

ひさしぶりに、タンブラーにたっぷりとっ
て、こっそり渡してくれた。そのの、いや、
ニガいのなんの。

ニガいだけでなく、ヤケに渋く、なんとも
形容できないイヤな酸味が舌にのこり、何回
ウガイしても消えない。

投薬された、その成分が、ストレートに、
こちらにうつったわけ。

さすがのボクも、残念ながら服薬中は敬遠
したいような、マズい味！

『どお、お気に召して？』

何にもしらぬ彼女は、いつものとおり、私
に感想を訊ねる。

『マズイから服薬中は休む』といえば、せつ
かくの好意をキズつけるだろうし、さりとて
たやすくノドを落下しそうにない。その妖し
いまでの奇怪な味に、返事に困るのだった。

オートマチック

週刊誌の広告をみたら『伊奈製陶』という
会社から、いよいよ、れいの、オートマチッ
クの便器が発売されたという由が、実物と使
用中のシャシンいりです。

ただいま、この原稿は、さるティールーム
の一隅で書いているので、原文の紹介ができ
ないのはざんねんだが、要するに用便後、ペ
ダルを踏むと、下から適温の湯がふきあが
てその部分を洗い、さらに温風で乾燥するので
ご本人はいいさい、わが手を使わずに用がた
せるという便利なモノ。

ナンダイ！ そんなことに、何十万円の高
をかけなくとも、ボクが、トイレットペー
パーのかわりなら喜んでしてあげますよ。

……ただし、ドナタにも、というわけには
いきませんがね。特定のお方なら、献身的
に、いつでも奉仕いたします。

といたいたいところ。ボクは、寝てもさめて
も、そうした奉仕を強要されることをユメに
えがいているのだ。

図解の楽しさ

街で、パンフレットを手わたされた。

『三宝製薬』という会社の痔のクスリの解説
なんだが、そのなかの図がすばらしいんだ。
文中、P8にある脱肛の図などは見方によっ
ては動的でグッと胸にせまるムードがある。
ここで図を紹介できないのは、ざんねんだ
が、私は、これに、リアルに着色して、じぶ
んの「Mスクラップ」に貼った。
そのクスリの名は『エフレチン』吾々とし
ては、こうして医薬の分野まで、目をはなす
ことができない。という一例としてノートし
ておく。

捨て水

東京の神楽坂。

ここは旧東京の高級住宅地で、明治時代か
ら有名なところ。

ここに、私の固いほうのしごとの恩師がさいきん、お住いを新築された。

ある春の日の昼さがり、お祝いに参上。

その道すがら、すばらしいことに出くわしたのである。

新築の、ハイカラな名のマンションの前にさしかかったとき、いきなり二階のマドがあらいて、パーツとブルーのプラスチックの洗面器から、したたかに水が降って来て、マトモに私の顔から、からだをぬらしたのである。道からスグ上の窓だから逃げようもない。

下手人？ のすがたはみえないが、かすかに洗面器をもつ手の、ピンクいろのセーターらしいのが眼にうつる。

何たる無礼。

思わず私は、その窓を見上げ、位置を確認すると、一階入り口の管理人室のドアをノックしたのである。だんぜん抗議を申しこむつもりで。

案の定、水のぬしは女性だった。

管理人立会いで、私はナゼ、知人でもないのに訪問したかを、ぬれたセビロの上衣をみせながら、抗議かたがた説明した。

話の途中で、だんだん私の立腹はおさまりました。ひとつには、その女性（メイドらし

い感じのひと）が素直にあやまったことと、小柄の、美ぼうな人だったから。

その女性がきれいな花模様のタオルで、私のからだを拭く。そのタオルからは、高級なオーデコロンらしい、香りがただようのだった。なんの水だったのだろうか。

彼女は「窓の花に水をやろうとしてツイ手がすべって……」

と、きたない水でないことを、しきりに強調するんだが、こちらは、むしろ、きたない水のほうがうれしいのである。

神の酒を呑むのも、もちろん好ましいことにちがいないが、面上にかけられるのも、それに劣らず楽しいことなのは私は経験済み。顔だけではない、手にかけられても、すばらしいのだ。

いいですよ、あなたのなら、どんなキタナイ水でもおどろきませんよ。それどころか、ヒツカケてもらいたくてウズウズしてんだ。はじめの怒りはドコへやら、いぶかる管理人氏をそのままに、なにかウキウキしながらマンションの階段をおりたことだった。

お茶の味

都心の神田に、友人のAと共同で借りてる

足がかりが目的の事務所がある。

事務所とは名ばかり、一つ室内に、数社がツイタテでおのおのの領分を仕切り、同居する身分。

デスク一台、共用の事務員つきで、月の家賃が八千円。一日一回は、ここを足がかりに得意まわりをするのが私の日課だ。

さて、その共用の事務員というのが、K子という新婚ホヤホヤの人妻である。

おまけに、なかなかの美人。色白長身、気だてのやさしい二十七才の女性。

「ヤア」

と一言。これも共用の応接セットに腰をおろすと、きまって、お茶をいれてくれる。

話は、これからだ。

応接イスにかけると、ちょうど、彼女の横顔が、私の正面からおがめる。

私は軽く目をとじ、お茶を味わう。

私の眼前に坐る彼女の全身が一と目に眺められるのがすばらしい。

口にふくんだお茶を、『ドビンからついでくれた』と思っではつまらない。

つまりですね。

K子サンには絶対ナイショだが、私流のみかたは、そんな平凡なものでない。

……ああ、あのあたりから流れだした泉がいまこちらへ流れてきたのだ。それは、イヤでも、豊饒な流れとなって、まっすぐ私の口にそそがれるのだ……

……そんな妄想とともに、のどに流しこむと出がらしの日本茶が天与の神酒と化すのだから、幸福なんだ。

ストロー

どういうワケか、東京の喫茶店は客席はデラックスになる一方だが、トイレだけは相変わらず、男女共用が多い。(そのほうがこちらにゃ好都合)

新橋駅前の「オリエント」という美人喫茶もご多聞に洩れず、お粗末そのもの。

美人喫茶の名に恥じず、二十人ちかいホステスが粒よりのすばらしいコばかり。

『いらっしやませ』

と、オシトヤカに深々とアタマをさげる育ちのよさそうなのが、この、うすくらい、せまい密室で、どんなスガタで用をたすのだらうか。

いまも一人、キレイなコが、はげしくドアをバターンとやってでてきた。

すかさず、いれかわりにはいる。

用もたさずに、しろい便器の底をのぞくのは、私の多年の習慣。

その底には色の濃い、おいしそうな、ビールのような、アワをうかせたのが、ふんだんにイキイキとたたえられている。

あんなカワイコちゃんが、水も流さずにでていくんだから、うれしくなる。

なんとも表現しようもない、美しい黄金色の水！

ストローがあり、そして、まちがいないくいま出ていった、あのコの置きみやげというところが証明されていたら、おそらく私は、ためらわず、その底の神秘的な水にストローをさし入れ、ハラいっぱいのみこんだことだろう。

いま眼前のその神酒が、九九パーセントはそのコのものだとは思われるのだけれど、万一、その前にはいった、ケツタクソのわるい男客のそれだったら、ブチコワシになってしまう。男女共用はそこがナヤミなんだ。

それにつけても、ティールームのトイレだけは、なるべくいまのままの、男女共用にしてほしいものだ。

特訓

胸のわるくなりそうな話だが、あえてノー

トしておく。

私の知人の弟くんが、ある研究所に就職、その保証人をたのまれた。

入社式も無事終り、保証人さまに敬意を表したい、と夕めしにまねかれた。

その席上での話。

研究所といえばキコエはよいが、微生物研究所といって、各所の病院から送られてくる患者の大、小のハイセツ物を、分析し、菌の有無を調べるのがそのしごと。

三百六十五日、朝から晩まで、ハイセツ物とニラメッコというわけだが、わずかな救いは、そのハイセツ物の、ぬし、つまり、患者の性別、年令が、かならず容器につけられ、若い女性などのそれが、顔の美しいか否かは別として、想像される仕組。考えようでは、私などには、買ってでたい気もする職業でもあるわけ。

その弟くんが、入社早々、上司から命ぜられたのが、そんなキタナイモノに、一日も早くなれるため、進んで、それにふれ、舐め、嗅ぎ、いうなれば、扱って平気になるどころかスキになれ、指についても不快を感じないように、習練せよということなのだそう。

同期生が三名。イチ、ニイ、サン！ ある

ハイセツブツを、鼻先につきつけられたときは、嘔吐をもよおしたという。

あるハイセツブツとは何か？ 知ってて、とぼけて訊ねてみたが、弟くんは、なにか、プライドをきずつけられるとでも思ったのだろうか、わらって答えない。

『無菌は証明済みだから試験管のなかへ指をつっ込んで舐めてみよ』

といわれたという。

ばあいによつては、患者の吐瀉物までいじることもあるそうだ。

どういうわけか、大きいほうでも、小さいほうでも、口にいれられても平気な私だが、いかなる美女のものと、ハッキリしていてもいわゆるゲロにやよわい。

みるからに吐き気をおこさせるグロテスクな吐瀉物のなかに手をつつこめ、と命ぜられたときは、三名とも蒼白になったというが、皮肉にも、そんなことをきいているうちに、少年時代から四十年ちかくも、コプロ趣味にとりつかれてきたこのオレが、吐瀉物くらいにヘキエキするとは何事。いっぺん、それを口いっぱい、ほうばってみよ。それで嘔吐をもよおさなかったら、オマエこそ、本格的なコプロ党といえるんだ。と、心のなかで悪魔

の声がささやくのだ。

あえて、胸がわるくなるかどうか、近日常に大酔した女性のそれを、試食してみようかなんて考えてしまふのだった。

白い花びら

はなしが少々グロすぎた。

では、ややロマンティックな方向にもってゆこう。

ヨコハマの関内（かんない）という町は、市内でもやや高級なティールームやスナックスタンドがあり、メリケン波止場もちかくでなかなかよい町だ。

この関内駅のちかくに一軒、私は得意先をもっているの、週に二回は往復二時間をつぶして出かけるのである。

ヨコハマは、戦前から外人が多く、町をちよつと歩けば、家族連れの姿をみかける。

ミナトの入口の（マリントワー）にのぼれば、ミナトがいちめんにながめられ、すばらしい。

いつものように、仕事を終った私はそこまです足をのばした。

土曜日の午後となれば、ミナトは、たいへんな賑わいだ。

と、金髪の美少女。

アメリカ人らしい母子づれが目についた。母親のほうは、さっぱりうつくしくない平凡な中年のおんなでしかないが、連れの少女の美しさが、すばらしいのだ。

としは、十才ぐらいか。外人だから、ハッキリはわからないが、さながらスクリーンからぬけだした、人形のようなコなのである。

母子は、なにやらむつまじく話しあっている。と、とつぜん、子どものほうが、手にさげたたまっ赤なバッグから、ティッシュペーパーをとりだし、
「クシュン！」

と、クシャミをして、そのペーパーで、たかい声をたててハナをかんだのである。

ご多聞にもれず、私も白人崇拜症である。こうなると、そのコが手のなかに丸めた、その白いハナビラに全神経が集まり、胸はドキドキしてしまう。

ごていねいに、そのコは、それまでかんでいたガムを、「ペッ！」と、その白い紙のなかへ吐きすて、クルクルと丸めた。

だが、一向に捨てようもしない。

ジリジリしてしまう。

このまま、ポケットか、バッグのなかへ放

S.C.R.〔性問題相談室〕開設

担当……弓削性科学研究所長 医学博士 弓削達人先生

他人に打ちあけ難い悩みなどについて

編集部の長年の懸案であり、近時急速にその必要に迫られていました性問題相談室 (Sex Counselling Room 略称 S.C.R.) を開設致しました。

この欄は無料相談であり、結婚生活一般から夫婦問題、さらにホモ、フェチ、サド、マゾなど性的倒錯に関する悩みの打ちあけ、巾広いカウンセリングに応じます。また誌上公開をはばかれる方には、転送先を明記すれば仮名で解答して差支えないとの御好意あるお申出をいただいております。担当の医学博士、弓削達人先生については、公的な身分はさしひかえますが、某民間病院附属の性科学研究所々長であります。

○ 本誌の愛読者の方で、医学博士弓削達人先生に性問題に関しての解答をお求めの方は、御遠慮なくお便りをお寄せ下さい。

○ 個人の秘密については絶対御迷惑はお掛けいたしません故、御安心の上、何んなりとお尋ね下さい。

○ 誌上に掲載するものについてはすべて匿名とし、御希望によっては先生の御都合のつく限り、直接の解答も致して貰います。

○ 御相談についての診断及び回答についての費用は一切不要です。

○ 宛先は編集部気付、弓削達人先生として下さい。

御遠慮なく相談をお寄せ下さい

りこまれたら、どうしようもない。

おいしいエサが目玉のまえにありながら、それをどうすることもできないもどかしさ。

しかし、やっと、チャンスがきた。

少女は、さらにその紙をまるめると、じぶんのかわいらしいブーツを磨きはじめた。

(しめた!) 私の胸のつぶやき。

ふつう誰でも、(とくに女性は) ハナをかんだり、ガムを吐きすてた紙は、そのままですずに、ポケットなり、バッグのなかへ、そっともどすものだが、クツを拭いたときは、絶対に、その場にすててゆくものだ。

これは、永年の経験で、よく知っているところ。案の定、少女は、なにげなく、ポイとその紙を、ベンチの下に投げ捨て、母親と共にむこうへ消えた。

すかさず、私はベンチに移り、足もとの白い花びらに手をのばす。

口にふくめば、ふくいくとした移り香といっしょに、塩ビスキットののような味わい。それが、ガムの香りのフロクつきとくるのだから、うれしいかぎり。

グツと、のみこんで、眼をつぶり、先程この紙を捨てていった少女のおもかげを、くりかえし思い浮かべるのだった。

鬼 六 談 義

残酷な話

団 鬼 六



先月号に載った「肉の飼育」は、上州川原湯温泉でロケをした。

もう御覧になった方もあると思うが、映画のタイトルには「花と蛇より」と書かれてある。こんな事をつけ足される事は、こっちと

してはむしろ不愉快なのだが、この映画を配給する会社の部長さんが実はこの珍小説のファンであって、私の事を見る毎、また、ああしたものとしきりに、すすめていたのである。配給会社の方では、映倫とゴタゴタもめ

る必要はないのだから、今度は少し原作に近いものをと勝手な事を注文出来るわけだが、とうていそれは無理なことで、しかし、今度は私としても、少しは、原作のニュアンスを盛ってみようと考え、今までの花と蛇シリーズの中では、相も変わらず安手だが、そのムードに近いものを出したつもりである。それで案の定、奇譚クラブ所載、花と蛇より、などとポスターなんか書かれてしまったが、いくら、最近のKK誌の売れ行きがのびているかは知らないが、まさかその読者を当てにしているわけでもあるまいし、大した効果はないんじゃないですか、と配給会社の部長にいうと、いや、それがそうじゃなくて、大した宣伝効果になる、と配給会社の部長はいうのだった。今までの花と蛇シリーズは、配給ルートがどこであれ、皆、かなり当たっていると部長は、そのデータまで教えてくれる。私としては、これは以前にもいった事だが、作者が原作を冒瀆するような脚本を書いているわけだから、KK誌の愛読者をペテンにかけているようなもので、花と蛇よりなどとうたわれると良心の苛責といつてはおかしいが、そんなものを感じる、と不平をもらすと、まあ水くさい事おっしゃらず、と配給側は、色々

御馳走してくれるわけだ。それで私としては封切の前に、KK誌に脚本を掲載し、宣伝文句にひっかからないようにと、愛読者に忠告し、脚本を読んで、それでも物好きにのぞいて見ようという気になった読者にお越し願えば幸いだ、と書いてあるわけだが、こうした花と蛇シリーズ（私の仕事しているプロダクションがつけた）が、他の映画よりもかなりの興業収入をあげているというのは、実は自分でも、不思議に思っているのである。そこで時々思うのだが、あのピンク映画を御覧になるお客様というのは、大半はあの道のけがあるんじゃないだろうか。大して、きれいでもない男と女がベッドの上でからみ合っているのを見るのが目的で、これだけ観客があとを断たないというのも不思議である。それに前にもいった事だが、現在は、ピンク女優難。その数が減少して、毎回毎回同じ顔ぶれの女優ばかり使い、試写を見る毎、こっちはうんざりするばかり。よくまあ、懲りもせず、同じ顔ぶればかりで、と思うのだが、そんな映画ばかり作る方も作る方だが、見る方も見る方だと苦笑するのだ。だが、それにしても、もうブームは去ったかと思ったのに、依然として縛り映画は、相当な興業収入を上

げ、その根強い人気には驚くばかりだ。

私は、最近、強引に依頼されて、銀座と渋谷の映画館で興業されているピンク芝居の脚本を月三本も書かされているが、その映画館の支配人が、どうして縛りものを書いてくれないんですか、と私に苦情をいう時がある。実演に縛りとか残酷ものをやれば、客の入りが大分違うというのである。別に、ひねくれているわけじゃないけれど、私は、こうした舞台脚本に縛りのあるのは、一つも書かなかった。ところが驚いた事に、時々、実演の看板に、縛られた女優のスクリーンが張られてあって、芝居の中にそうしたシーンがあるようにインチキしている。こうした看板用のスクリーンは大変な効果があるそうで、その偽看板に吸い寄せられ、フラフラ入場してしまう客がかなりあるという事だ。つまり、劇場側は、羊頭をかかげて、狗肉を売っているようなもので、看板と中身の違うのは常識みたいなものだ。劇場側は、すましこんでるわけだが、しかし、あまり、そうもしておられないので、残酷ムードのある脚本を書いてくれ、と私に依頼する事になる。

こうした種のもものは必ず当るといえるのは、今やこの業界の常識みたいになっていて、残

酷映画を作らないエロダクシオンはエロダクシオンにあらずという位だ。けったいなピンクメロドラマばかり作っているプロダクションは配給会社の受けが悪い。おかしい話だが結局、問題は観客にあるわけで、ピンク映画の観客の大半は、そのけがあるのじゃないかと、私の思うのもこうしたわけなのだ。だが、よき時代になったもので、一昔前なればこの種のマニヤ達は、娯楽雑誌の挿絵や怪奇小説などの一節に自分の性情にマッチしたものはないかと折ある毎に漁りつづけ、発見すれば、それはもう鬼の首でもとったような嬉しさで、そわそわしながら切抜帳にはりつけるといったような女学生めいた純情さも發揮したものなのだが、現在は、一山いくらといったような按配で、それ専門の雑誌を買う事も出来るし、ピンク映画館へ行けば三本立て見る事も出来るのである。

とにかく昨今の本物偽物つき混ぜての緊縛映画の氾濫を見ると、私は私なりに嬉しくもあるが、ふと浅ましくなったりする。私がこの仕事に手を染めてから、この種の業者と随分と知合いになったけれど、実に不思議に思う事は、観客にそれ程そのけがあるのが多いのに、制作者側に、そのけのあるのは皆無で

あるという事だ。少くとも私の知っている限りは、であるけれど、たとえば、残酷、拷問ものの大御所といわれる小森白なんかにしても、自分にはそのけは全くなく、企画が大当りをとったから、次から次と手を染めるようになったのであり、残酷拷問ものに殺到する観客を見て、世の中には、不思議な人種が多いものよと自分でも驚いているのだ。やはり彼のその種の残酷映画で、今、題は失念したが、私の書いた色道仁義というやくざ映画と併映されていたもので、それに主演した谷直美が、「私、途中で何度も気を失いかけた」といったものがある。とにかく一度見て下さいよ、と云うので、私は谷直美と一諸に、場末の映画館へ行き、二人でセンベイをポリポリ噛みながら見たのだが、彼女のいう通り、次から次と拷問の連続で、見ていて息苦しくなってきた。小森白の映画を見たのは私にとってそれが始めてだが、谷直美が木馬に乘せられたり、逆さ吊りにされたり、水に漬けたり、いやはや無茶苦茶なまでに責められている。全体に陰惨で私好みのものではないけれど、辻村氏なら眼をむき鼻をむいて喜ぶだろうと思われるすさまじい逆さ吊り責めの値打ちのある映画であった。谷直美の恋人役にな

っている男が、これも彼女と一緒に吊り上げられ水漬けにされていたが、この役者は途中で本当に気を失ってしまったそうである。あんなのにくらべると、私の脚本による責め場面なんかは、まるで子供だましみたいで、よく出演する女優なんかに、折檻場面があるというので、相当ひどい目にあわされると覚悟してたけれど拍子抜けがした、なんて事を云われる時がある。「僕は残酷なのは嫌いで、狙いはエロシズムだ」などと、こっちでは云ってるが、他のプロダクションで、責められる修業をつんで来た女優達は、こんな生々ぬるい責め映画でいいのかしら、といったような表情だ。それだけに仕事場としては私の所に出演するのが一番楽だ、と喜こんでいる。谷直美は、小森白のその残酷映画に出た直後は、長時間吊られたり、逆さに顔を水槽の中へ漬けられたりした故か、さすがに体の調子がおかしくなり、医者通いをしたそうだが、撮影途中で失神者を出す程の、大げさに云えば仕事の鬼になっている小森監督を、ピンク女優の、マネジャーの中には誤解して、ありや、変質者だといってるのもいるが、そのけは全くない人なのだ。逆さに吊ったり、菱縄をかけたり、首縄をかけたり、そうした縄の

かけ方は、かなり熟練を要するものだと思うがそんな縄を、女優にひしひしかけるのは、彼の助監督で、私もよく知ってる男だが、これまた、そのけが全くないときている。KK誌なんて読んだ事もなく、ただ持前の器用さで女体をキリキリ縛り上げているのだ。私は、そのけは大いにあるのに、女体を縛るのは苦手という、これもまたおかしい話で、小森監督の映画に出演している縛られた女優達を見ていると、つくづく、こっちが情なくなってきた、撮影に立合ったりした時、以後は、でしゃばって女優を縛ったりはするまいと思っ

た。辻村氏が東京在住の人なら、撮影の度に緊縛指導という形で応援が頼めるんだが。自分の書いた映画の撮影に立あっていて、よく思う事だが、KK誌なんかで、マニヤでない者が如何に器用に上手な文章で責め小説を書いて、どこか一本肝心な見落しがあった、官能のうずきが起らないものだが、それは、この種の映画にもいえる事であって、ストーリーなんかはどうでもいいとして、問題は、その責めシーンであるが、監督の演出ぶりを横でばんやり見つめていると、やはり、どこか肝心のものを、取りこぼしているようだ。だが、別に、マニヤばかりを対象にして

いるわけではないんだから、私もそう横から細かい事をごちゃごちゃいわないけれど、あんまり、監督が手を抜き始めると、私はそのシーンの演出を自分が買って出る時がある。

ところが、やはり、素人のかなしさ、その上不器用でカメラ嫌い、カメラマンが位置を相談し始めて来ると、うろたえるばかりで、頭に描いている構図が、どうしても表現出来ない。やっぱり、餅屋は餅屋の領分を守っていた方が無難のようだ。

さっきいったように肉の飼育、のロケ先は上州、川原湯温泉。私がこの業界の仕事をやっていて、最も楽しく感じる時は、ロケ隊に随行して始めての土地へ行き、温泉に入ったり、その地の地酒を飲んだりして、無邪気な女優連とはしゃいだり、くつろいだりする時である。仕事が忙しくて、そう毎回、ロケ隊にくっついて行くわけにはいかないが、訪れてみたいと思っている土地へロケ隊が出動する時は、なるだけ、ついて行く事にしていく。何しろ、旅費がいらないのが魅力でもある。上州は一度行ってみたいと思っていた土地で、私はYプロよりマイクロバスで夜十二時出発する前まで、スタッフ・キャストの何人かと近くの酒場で飲みながら、時間を待

ち、「閑があったら、国定忠次の竈った赤城山に、行ってみたい」というと、「そりゃ先生、川原湯とは方角違いですよ。一口に上州といっても広うござんすからね」と助監督に笑われた。ウイスキー瓶を鞆につめこんで、集合場所まで行くと、もうマイクロバスは待っていて、谷直美も祝マリもすでに車中であり、携帯ラジオのジャズを鳴らして、楽しそうに話し合っている。

東京から、上州、川原湯まで、バスに揺られて五時間——いや、その間の退屈だったこと。最初、一時間あまりは、女優も男優も、私の酒の相手をしてくれて、修学旅行の車中のように賑やかで楽しかったのだが、午前二時も過ぎると、皆、椅子にもたれて眠ってしまい、こっちは原稿の仕事の関係で、昼と夜とを逆にして暮しているようなものなので夜が更ければよけいに体がしゃんとして眼が冴え、窓外を眺めてもどこを走ってるのかわけがわからず、電気が暗くて本も読めず、仕方がなく目的地に着くまでの間、ずっと一人で飲みつづけた。河原湯へ着くまでには一人で角瓶一本あけてしまい、足もとをフラフラさせて、旅館の門をくぐる有様だった。早速、一風呂浴びて一寝入りしたが、スタッフ、キ

ャストは休む間もなく、朝食をすますと、屋外ロケに出かけて行く。私は、こうしたロケに参加する毎、次の映画台本を書く必要のため、プロダクションの社長の好意で、スタッフキャスト達の部屋よりかなり離れた静かな別室をとってもらう事になっているが、個室を与えられているおかげで、出番を待つ女優や仕事を終えた女優を呼んで、コレクション用の写真を撮こっそり取る事が出来るのだ。最近では、辻村氏に感化された故か、いささかカメラがいじれるようになり、薄暗い部屋の中で、ストロボもつけずに写真をとるというような阿呆な真似はしなくなり、まだはつきりとは操作に自信はないけれど、ミノルタSRセブンにナショナルのミニトップというやつを購入して、ロケの旅の宿で手ぐすねひいているのである。

こうしたロケ地で女優のカメラハントをする時に一番警戒を要するのは、他のキャストやスタッフ連に私の部屋の所在を嗅ぎつけられないようにする事だ。私があ部屋にいと知った連中は、自分の仕事が一段落すると、ウイスキーや一升瓶をぶら下げ、ぞろぞろ乗りこんできて、仕事を開始しているこっちをうろたえさせる事がある。

何時であつたか、ロケ先で、林美樹を口説いて、ようやく床の間の柱に立縛り、やっと股間縄をかけた時に、いきなり襖が開いて、ああ、先生の部屋はここだったのですか、と一杯気嫌の男優達が一升瓶をぶら下げて、ぞろぞろ入って来た時には驚いた。私より、美樹の方がびっくりした事だろう。あわてて、そこに落ちていた手拭で、彼女の腰を覆い隠し、「今、宣伝用のスチールを撮っているんだ」と彼等を睨むようにして云ったが、「ああ、そうですか、それじゃ僕達、ここで待っています」と、厚釜しくも彼等はその辺にどこか坐りこみ、酒の肴に買って来た缶詰などを畳の上に並べ出して、私の仕事が終わるのを待ち始めたのである。彼等に見れば、女優のそうしたスチール撮影を見るのは馴れっこになっているので、別におかしくも何ともないわけだが、そうかといつてもまさか彼等の眼の前に彼女の股間縛りを開張して見せるわけにはいかず、糞面白くもない手拭を腰に巻きつけた写真は何枚か撮って、はい、おしまいという事になってしまった。

トする事に成功した。うまい具合に彼女は、映画の中でセーラ服を着るシーンがあつたので、そのセーラ服を持参するように告げ、彼女を女子学生という設定にして、つまり、女子学生悦図ってやつをフィルム一本分撮ったわけだが、読者も御承知の通り、私の好みは実に単調なもので、コテコテしたのが大嫌い、ほとんどが坐位と立位の緊縛図である。女子学生が笥の皮を剥ぐように一枚一枚剥ぎ取られていく過程を頭に描きながら、セーラ服から、スリッパ姿、それからブラジャーとパンティ、パンティのみ、そして、オールゼロ、最後に床の間の柱に立縛り、股間縛をかけたわけだが、この股間縛りというのは、その骨折らずにかけさせてくれる女優と絶対に拒否する女優とがいる。やはり、縄をかける方にもコツというものがあって、紳士的に、「肢と肢との間に縄を通すけど、決して痛くないようにするからごめんね」などとあらかじめ、断わったりしない方がいい。そんなエッチな事、嫌よ、とか何とかぐずり出すと面倒だ。お天気の話でもしながら立縛りにした彼女に近づき、いきなり有無を云わせず、さつと縄をひっかけるのである。犬殺しがさつと犬に近づいて、ぱつと犬の首に針金を巻き

つける要領だ。彼女は、声を立てる間もなく眼をパチクリし、しばらくはあいた口が塞がらぬというような顔つきになるが、それでいいのである。

そうした要領で私はその夜、見事にマリをひっかけたのだが、何日かたって現像出来た写真を見ると、どうもパツとしない。こっちが余程あせていたらしく、マト外れな部分に縄がひっかかっているようで、地震で歪んだ立木みたいに縄は臍の下あたりから、右の方へそれ、何とも喜劇的でみっともなく、それに相も交らず下手くそな縛り方、我ながらうんざりしてしまった。私がカメラハントしたピンク女優の中で、出来のいいのがあればKK誌の誌上へ出し、読者の批評を聞こうと思ったが、いずれも**失笑**を買いそうなものばかり、もう少し腕を磨く事にしよう。

ロケの二日目の昼間に、谷直美の股間縛りを予定していたが、独立俳優協会の幹事でもあり、私とは基敵のE君が、陣中見舞に來たと、東京からやって來たので、この方はお流れになってしまった。その夜、E君と私は夜八時からの出番を待っている祝マリ、乱孝寿谷直美達と一緒に旅館の喫茶店でコーヒーを飲みながら、最近のピンク業界の珍妙な出来

事について語り合ったのだが、それは一寸ピンク映画ファンにとっては興味のある事なので、少し、ここに書いてみる。

（秘）なんとかという、腰元が相撲をとる映画を作って、かなりの興業収入を上げた東映はそれに気をよくして、更にピンク女優を起用して、第二第三の（秘）企画を立てているそうだが、E君の話によると、現在、あちこちのピンク映画会社は、五社にピンク女優の貸出しを一切封じようとして、女優やそのマネ

ージャーなどに働きかけているそうだが、その理由は色々あるが最も大きな理由は、ピンク女優の数が減少して、彼女達のスケジュールに合わせるのにプロダクションは仲間同志ふう云々云々云々のに、五社へ持っていかれて身柄を拘束されてしまえば、いよいよ商売はお手上げになってしまおうというのだ。何もピンク映画界の女優を使わず、てめえところの大部屋なんぞにいる女優を裸にすりゃいいじゃないかとこっちの業者は口をとがらすわけ

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。

一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、体験／原稿募集

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。

だが、五社で働いている助監督なんか聞いてみると、錦之助とベッドシーンでもやるというなら話は別だが、見世物的に裸にするのは口説くのには相当、骨が折れるそうだが。そこへいくとピンク女優は実に脱ぎっぷりがいい。まして、禪をしめさせるっていう役ともなれば、どうしたってピンク女優でなければ駄目だというのである。それはとにかく、一つ、ピンク業者が頭にきたのは、あの（秘）に出演したピンク女優を東映のプロジェクターが個人的に口説き始め、ピンク界よりの引抜き作戦を開始したという事だ。という事は今後もしどしエログロ映画を作る方針でそのための持駒を揃えておくという胆なのだろうけれど、何だかんだと、うまい話を並べられ、出演料もかなりのものだという事を聞かされると、ピンク女優だって、ふと自惚れてやはり食指が動くのは当然だ。ピンク業者はうろたえるわけである。これは（秘）を作った映画会社にいる友人から聞いたわけだが、秋頃には本格的な縛り映画をそれこそ（秘）のうちで企画しているのだという。それで、丸裸のまま、逆さ吊りに耐えるような谷直美や辰見典子のような強靱な肉体の女優が欲しいわけなのだろう。いや、ま、それは、ここだけ

の話だが——。つまり、五社は、エログロものを制作するために、ピンク界の女優を奪うだけではなく、ピンク界の専売特許になっているような残酷拷問ものの分野を侵略しようとしている。見世物的に残酷ものを制作している方にとっては正に脅威である。いくら大資本家がそうした残酷ものを映画的に制作し始めたとしても、やはり、観客層が違うからとすましこんでばかりはいられない。谷直美や辰見典子などまでひったくられてしまっは、全く、とりつく島がなくなってしまうと、エロダクションの方は歎くわけなのだ。ピンク映画界が、猫も杓子も縛りものを製作するとは浅ましい、とさっきいったが、五社の一つが一丁嚙んで来たとなると、そんなケチな事はいつてられないが、しかし、全く世智辛い世の中になったものである。

ふと、気がつくと、谷直美が助監督に出席だと呼ばれ、階下へ降りて行つてから、かなり時間がたつ。女中部屋へ監禁された静江が耕次や朱美達にいたぶられているシーンであり、私が協力する事になっていて、助監督に呼出しを受けたのだが、E君と話に夢中になっていたのですっかり忘れてしまっていた。一寸現場をのぞいてみるか、とE君と一緒に

階下の女中部屋をのぞきに行くと、かなり場面は進行し、谷直美は、ビキニパンティ姿で一本のロープに支えられて、立縛りにされ、耕次に扮した宮瀬健二にナイフで、「ここを剃り上げてやろうか」などとおどされている所であった。谷直美の髪を洗い髪のようにして、肩まで垂らさせるようにと私が注文をつけた通り監督は直美の長髪をゆさゆさ揺すらせて芝居させ、それが仲々色っぽくて私は満足だったが、ふと気がつくと、彼女の豊かな胸に巻きついたロープはその乳房の上を隠している。松原という監督は、こういう時にはこうするものだ、と、映倫を恐れて以前のように乳首を隠してしまつたらしい。

「もうこんな事する必要ないだろ」

と、私は、乳首を覆った縄を上と下へずらせたが、するとカメラをのぞいていたカメラマンがあわてて、

「でも、隠したままもう何かカットも撮ってしまつたんですよ。そこでむき出しやつなぎがおかしいんじゃないでしょうか」

というのであった。それもそうだと私が舌打ちすると、もう初老の域に達している松原監督が私が気分をこわしたのではないかと、気を使いながら、

「僕は乳首を出しちゃいけないんだと思ったもんで」

と気弱な声をあげる。彼は久しぶりに監督をする事になったので、映倫が最近、譲歩的になってきたのを知らないようだ。

「まあ、いいでしょ」

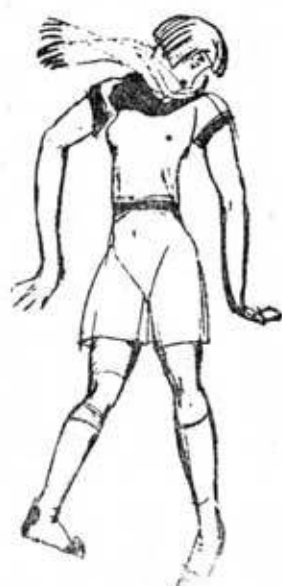
と私は、今度は直美の方を向き、「ここは皆、紳士ばかりだから、いいね。なめられちゃ困るから、一度そのうち、逆さに吊るぜ」

と冗談をいうと、彼女は微笑して、「いいわよ。でも私、重いから吊るのに皆さん苦勞すると思うわ」

というのであった。

再び、撮影は開始される。

谷直美と宮瀬健二は、明日の夜、他社のフレコがあるので、どうしても今夜中に二人の場面は撮上げてもらいたい、と制作主任が監督と話し合い、よし、徹夜でいこう、という事になった。考えれば、縛られたり、吊られたりする女優よりも、息のつく間もなくこうした調子で仕事を続けさせられるスタッフ達の方が余程残酷である。私は見るに耐えられない気分になって、E君をうながし、部屋の方へ退散した。



あぶ らぶす こんと

水 沢 登

理性の力を信じ、自分の性格を熟知している
と自惚れて、自分の行為の行末を予見でき
る。絶対に感情で行動をしない。衝動は押さ
え得ると錯覚を起こしている人達は可成り多
いようだ。確かに表面上はそうかも知れない
が、意識下の世界から要求してくるものを、
はつきりと拒絶できるか、どうかという点に
なると、至極あやうい。

私のヴィタ・セクスリスの初期、他の男の
子達がやっていたドクターごっこを、私もや
った。ただ、他と異なるところは、私の患者
はいつも後手に自由を奪われ、目かくしや猿
轡で顔を掩われて、俎上にのぼったというこ
とである。猿轡は口中に詰物をしなければそ
の目的を達しないということを知ったのも、
この頃であった。

患者のM子は良きパートナーであったが初
潮を見る頃には自然と私から離れていった。
それに私自身も悪徳の影におびえて、こんな
遊びから手を引いたのである。

その後、たまたまM子が女の子同志の遊び
で、自分からお姫様になり、縛られる役を買
って出ているのを目撃した。止むを得ず縛ら
れるのではなく、緊縛、猿轡の場面を挿入する
ことを要求しているのである。その眼は輝い

ているようだった。奇異の眼をみはりながら
も、M子をマゾヒスト化したのは私ではなか
ったかと自問したものである。縛られた彼女
を見たかったが何かいたたまれず、後髪を引
かれる思いでその場を通り過ぎた。

○

二DKに住むTを訪ねて、さよならをする
時に、深いキスを交わすのが習慣のように続
いていた。ある日、後から抱いて彼女の顔を
上向かせると、私の唇は彼女の唇を襲った。
窒息するような長いキスに彼女が喘ぎ出し、
突然、彼女の膝が力を失ったように折れ、私
達は折り重なって、その場に倒れた。そんな
姿勢にTは私の意図を誤解したのだろう。身
をもがいて私を跳ね返そうとした。タイト・
スカートから白い腿がこぼれ、足は空を蹴っ
た。唇は絶叫するかのように開きかけた。予
期しない彼女の反応に、私の理性は遠く天涯
にとび去ったに違いない。右の掌でその口を
塞ぎ、左手は敏速に動いて、ブラウスのホッ
クを引きちぎり、彼女の肌を求めて襲いかか
っていた。おぞましくも私の右手は、か細い
ウナジをつかんでいたのだ。もし、この時私
の理性が舞い戻ってこなかったら、私は犯罪
者になっていたかも知れない。最初から犯す

目的であったなら、もっと手際よくやっただろう。また逆に、その喉を締め上げていたかも知れない。おそろしいことだった。恐怖におびえ、涙にむせぶ彼女を慰め、腕時計の竜頭でつけた傷を手当して、本当に紳士的なキスでさよならしたのはそれから一時間も後のことだった。

この時ほど、衝動のおそろしさを体験したことはない。犯罪者が逆上のおそろしさと、殺すつもりではなくて、と弁明する気持ちがわかるような気がする。今でもこの時のことを想い出すと肌に粟を生ずるのである。

ただ一つの救いは、今でも彼女は悪意はもっていない様子であることだ。

○

私はフェチでもなく、コレクターでもないと思っていた。S子が結婚したので、私は別れなければならないと思った。その意志を伝えるためにスイス製のハンカチーフ・セットを携えていった。調度の新しい新婚家庭はねたましい。お互いにアデュウと口に出すまでには言葉も途切れがちになるものである。ハイトライトを一本吸いつけて、窓外を所在なく眺めると、ベランダの片隅に彼女のパンティが、ひっそりと干してあるではないか。私は

視線をそらした。しかし、その影は簡単に消えなかった。そして、それを自分のものにしたという欲求が体内に湧き上ってくるのを押さえるのは難しかった。彼女と別れてポケットにそれを入れて歩いている自分。吾家に戻って独りそれを抱きしめ顔を埋める姿を想像した。いやらしいというよりは、それが至極当然の様な気がした。だが、私は紳士の体面を保たねばならなかった。かかる衝動を押さえようと私の超自我は闘っていた。立関先でこれが最後となる抱擁をかわした時も私はその欲求を告白することは、とうとうできなかった。

ここでも、突如として起こる私のかくされた性の衝動の一面に、ぶちあたったのであった。

○

私の意識下にどんな性の衝動が眠っているのか自分でもわからなくなっている。ある局面に突然遭遇した時、私がどんな行動をとるか予測できない。

私のつくるコントの一つ一つに私の衝動がかくされているように思えて仕方がない。

○

入社条件

卒業期の女子大生。

「あなた、グッド・パンチャーなのに、何故あの一流会社ふっちゃったの」

「面接試験でとつてもいやらしいの。あなたは経験ありますが、それとも未経験ですか。不潔だからよしちゃったのよ」

○

確認

会社の慰安バス旅行。途中恒例の喉自慢を開くことになって、ガイドが後のマイクのテストを依頼すると、受けて立った若いO・Lの一人、マイクのふちをトントんと叩いて、おもむろに云った。

「入ってます」

○

春色

テレビの名士訪問で、

ホスト「大分春めいて参りましたが、先生はどんなことに春を感じられますか」

老財界名士、悠揚迫らぬ態度で、

「そうねえ、街を行く娘達のスカートのパンティ・ラインが浮き出てくると、水もぬるんでくるようだね。それにつれてチンアゲ闘争も活気づくんだな」

○

総選挙

発音を誤ると、とんでもないことになるという一例。

アメリカのテレビ・ニュース・キャスター「本日は全国市町村の統一投票日です。皆さん。こぞって自分たちの立派な首長^{ヘッド}を選挙^{エレクト}致しましょう」

生体解剖

医大の人体解剖実験室で、

教授「諸君は解剖実習は初めてだろうと思うが、経験のある学生はおらんじゃろうね」

学生「私があります。男も女も」

教授「これは驚いた。では君、手本に執刀してみたまえ」

学生「でも……」

教授「デモもストもない。やりたまえ」

学生「でも、そのう、死んでいるのは経験がないんです」

ベテラン

独り寝の若妻を襲った強盗。枕元のストッキング、ブラジャー、ショーツなどで手足を縛り、猿轡、目かくしをして、いざという時酔眼もうろうとして帰宅した夫、

「君、だめだなあ、そんなことじゃ。うちの女房はそれじゃあちっとも喜ばないよ。……こうして、……こうして、……こうしてとね、さ、わかったら、ためしてごらん」

猿ぐつわ

真夜中に、就寝中の夫、妻にむりやり起こされると抗議をうけた。

「まあ、あなたって。私のでするなんてひどいわ」

「それは悪かったね。じゃあ、今度から僕のでするよ」

「第一、眠っているのに、卑怯よ」

「そうかい。あやまるよ。明日から君の起きているうちにすることにするよ」

花嫁は突然に

新婚旅行四日目の朝、夫は、夜半から手足を縛りあげておいた新妻の猿轡の顔が上気しているばかりか、その眼が今までになくうるんでいるのに気がついた。その眼は何か言いたそうだった。憔悴している彼が、仕方がないという態度で、猿轡の詰物を引き出してやると、彼女は喘ぎ喘ぎ言った。

「あなた、何時から私のこんな趣味を知って

いたの。驚いたわ。ありがとう」

この若い妻は嬉しそうに、縄目の体を切なそうによじる。夫、うんざりしたように、「驚いたのはこっちだよ。寝相が悪くて蹴とばされるし、歯ぎしりはするし、おまけにゆうべは、ねぼけて歩き出すんだもの」

虚報の真相

記者「この頃の大本営発表は真実を伝えていない、という風聞が広がっているようです……」

係官「バカモン。今は戦争中だ。我が方のフネが次々とゴウチンしているなんて、そんなみだらなことが、国民に伝えられると思っているのか」

サンドイッチ

夜おそく帰宅途上、暴漢に襲われた令嬢。保護された警察の一室で、パニックから立ち直ると、

「いきなり、はさみうちにあったんです。口をふさがれて、前門の虎、後門の狼とはほんとにあのことですね。私がどんなにおそろしい目にあったか、おわかりになるでしょう」